

言語記述論集 第12号

言語記述論集 第12号

目次

ミャンマーの人虎伝：ジンポー語による民話テキスト	倉部 慶太	1
在独彝語文献調査報告	岩佐 一枝	21
カムチベット語塔公 [Lhagang] 方言における間投詞と談話標識	鈴木 博之・四郎翁姆	31
[書評] 仁増旺姆（著）《迭部藏語研究》北京：中央民族大學出版 社、2013年、3+245pp. + 1 地図	鈴木 博之	43
民和土族語における帯気性の対立の音声的特徴	植田 尚樹	51
[書評] 海老原志穂（著）『アムド・チベット語文法』 東京：ひつじ書房、2019年、xxiv+374pp.	鈴木 博之	71
モンゴル語ホルチン方言の談話テキスト (1)	外賀 葵	81
スワヒリ語トゥンバトゥ方言の談話資料—炒められたマカメの冒険—	古本 真	99
台湾華語における助動詞「yǒu(有)」をもつ文の時間的解釈	鄭 雅云	141
モーラン・カドゥー語の民話「金持ちと貧乏人の息子」	藤原 敬介	161
ドム語の「一」を表はす形式とその用法について —同一性、唯一性、非現実性、個々別々性、不定性、特定性—	千田 俊太郎	175
ハイスラ語の語彙的接尾辞について —身体部位接尾辞の使用に関する諸観察—	ワットウクンプ テロ	205
西日本諸方言におけるアスペクト体系のバリエーション —YORU・TORU・TERUの記述を中心に—	鴨井 修平	223

ミャンマーの人虎伝：ジンポー語による民話テキスト*

倉部 慶太

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

キーワード：人虎伝, ジンポー語, カチン人, ビルマ, ミャンマー

1 はじめに

人が獣に化ける俗信や変身譚は世界各地に流布している。変身する獣は地域により異なるが、その地域で重要視される肉食獣が選ばれる傾向があるとされる。欧州の狼男をはじめとして、欧州北部ではクマが、南アメリカではジャガーが、アフリカではヒョウ・ハイエナ・ライオンなどが、日本ではキツネがモチーフとして選ばれることが知られている (Thomas 1911: 149, Hamel 1915)。一方、中国・東南アジア・インドに広く流布する類話は、人がトラにまたはトラが人に変身する類のものである (Thomas 1911: 149-50, Wessing 1986, Rose 2001: 390-1, Newman 2012, etc.)。例えば、『唐人説薈』収録の人虎伝は、中島敦の『山月記』の典拠として知られる (上尾 1974)。中国では唐代以前にも数々の化虎譚がすでに存在しており、もっとも古いものは前漢までさかのぼるとされる (王 2015)。

東南アジア島嶼部に伝わる類話として、例えば、槍でさされたトラの血痕を追うと、独り身の男の家にとどり着き、そこで男の死体を見つけたという話がスマトラのフォート・デ・コックに伝わる (Bradley 1929: 115-6, Newman 2012: 106)。また、ある晩、人の姿をした人虎がやってきて一晩泊めてやると、家の者が血をすすられたという話が北スマトラに伝わる (Wessing 1986: 85, Newman 2012: 96-7)。ジャワ島では、人虎は「マガン・ガドゥンガン」と呼ばれ、トラ柄の腰布をまとうことでトラとなり、不用心な旅人を襲う。犠牲者の魂は次の犠牲者を見つけるまで解放されないという (Rose 2001: 390-1)。同様に、東南アジア大陸部に伝わる類話として、例えば、雲南・タイ・ミャンマーなどに居住するラフ人には、人や動物を襲い、その血や腐肉を食し、人虎に化ける悪霊が知られる (Matisoff 1988: 667)。ミャンマー北部のタマン人は、現地ではトラに変身できる民族として知られ、彼らが居住するタマンティは「トラが楽しく暮らす洞窟」という意味とされる (Brown 1911: 306, 藤原 2016: 3)。カンボジアでは、魔術的な軟膏によりトラに変身した女性を助けるために、同じ軟膏を塗った男がトラになった女性をこん棒で殴って人間に戻した話が伝えられる (Aylesworth 1970: 62-3, Newman 2012: 109-10)。

* 筆者による現地調査は、日本学術振興会科学研究費補助金 (特別研究員奨励費) 「ジンポー語の記述言語学的研究」 (課題番号: JP12J02938), 日本学術振興会科学研究費補助金 (特別研究員奨励費) 「北部ビルマにおけるジンポー語危機方言の調査とドキュメンテーション」 (課題番号: JP14J02254), 日本学術振興会基盤研究 (B) 「ビルマの危機言語に関する緊急調査研究」 (課題番号: JP17H04523) の助成を受けている。

また、北東インドに伝わる俗信として、例えば、セマ・ナガ人の間では、物理的に人がトラに化けるのではなく、睡眠中に人の魂が野生のトラの体に入り、日光を浴びると魂が再び元の体に戻ると信じられている。トラの状態を負傷すると睡眠中の人体も傷を負い、トラの状態で殺害されると人体も死亡するという (Hutton 1920: 43-4)。ガロ人には、昼間に人の姿をし、夜にトラに化ける人虎の種族などが伝わる (Brighenti 2017)。カシ人の人虎には食の禁忌があり、カニや黒かぼちゃが忌避され、また、彼らの食事はほかの人の手で触れてはならない (Lyngdoh 2016: 653)。ほかにも、周辺地域では、チベット・ビルマ系言語を話すカチャリ人、クキ・チン系の人々、セマ・アンガミ・サンタム・チャン・コニャックなどのナガ系の人々、オーストロアジア系言語を話すムンダ人、ドラヴィダ系言語を話すコンド人などにも関連する話が流布している (Hutton 1920, Kharmawphlang 2001, Newman 2012, Lyngdoh 2016, Brighenti 2017)。

これらの地域の人虎に見られる特徴として、例えば、次のようなものが知られている。通常のトラと異なり前後の足に人と同じように 5 本の指または鉤爪を持つ (スマトラ島のアチェ地域、ミャンマーのカチン人、北東インドのセマとアンガミ・ナガ人、メガラヤ州のカシ人)¹、人の歯を持つ (北スマトラの南タパヌリ地域)、人のように尻尾を持たない (同上)²。トラに化ける方法として、トラの皮を被る (中国)、トラ柄の腰布を身にまとう (ジャワ島)、身にまとった衣類を脱ぐ (ガロ人やカチン人)、水で濡らした地面のうえを裸で転がる (タマン人)、ライムやライムジュースのにおいをかぐ (アチェ)、川や湖を泳いで渡る (マレー半島)、魔術的な軟膏を塗る (カンボジア)、特別な泉の水を飲む (アンガミ・ナガ人)、人虎の食べ残しを食べる (セマ・ナガ人)、人虎と寝食をともにする (同上)、人虎から鶏肉と生姜を特定の方法でごちそうされる (同上)、呪文を唱える (ガロ人)、などが知られている³。トラから人間に戻る際にはトラに化ける際に行ったことと逆のこと、例えば、同じ川や湖を再び渡る、トラに化ける際に脱いだ服をぶつける、などを行う必要がある。ほかに、名前を呼ぶ (アチェ)、唾と水をふきかける (ジャワ島西部)、牛肉や人肉を食べる (ジャワ島)、などが信じられている⁴。多く場合、人虎は男性として語られる。女性の人虎が関与する場合、それはたいてい夫の没落をもたらす妻の役割を担うとされている (Newman 2012: 110-1)。

¹ カシ語で「人虎」は *sansaram* と呼ばれ、字義どおりには「5 本の鉤爪」という意味とされる (Lyngdoh 2016: 651)。

² アチェ (Wessing 1986: 67-70)、カチン (Enriquez 1916: 143, Bennison 1931: 270, Girsham 1971: 101-2, Dunlop 1979: 295)、セマとアンガミ (Hutton 1920: 42-3)、カシ (Lyngdoh 2016: 651)、南タパヌリ地域 (Wessing 1986: 84)

³ 中国 (Ashley 2001: 150, Newman 2012: 99)、ジャワ島 (Skeat 1900: 161, Wessing 1986: 82-3, Rose 2001: 390-1, Newman 2012: 99)、ガロ (Brighenti 2017: 106)、カチン (Girsham 1971: 101-2, Dunlop 1979: 295)、タマン (Brown 1911: 306)、アチェ (Wessing 1986: 69, Newman 2012: 95)、マレー (Skeat 1900: 157-8, Locke 1954: 158-9, Wessing 1986: 97-8, Newman 2012: 53)、カンボジア (Aylesworth 1970: 62-3, Newman 2012: 109-10)、アンガミ・ナガ人 (Hutton 1920: 42)、セマ・ナガ人 (*ibid.*, p.43)、ガロ人 (Brighenti 2017: 106)

⁴ アチェ (Wessing 1986: 69)、ジャワ島西部 (Wessing 1986: 56, Newman 2012: 100)、ジャワ (Wessing 1986: 69)

本資料の目的は、筆者らがミャンマー北部におけるフィールドワークで蒐集したカチン民話のうち、「人虎コントン」と題するジンポー語によるカチンの人虎伝の本文を語釈と和訳をつけて提示することにある。カチン人はミャンマー北部を中心に、東は西南中国の雲南省、西は北東インドのアッサム州などに居住する。カチン人は山地民であり、低地と比べて、人口がまばらで、文化・言語的により多様であり、国家による強い影響を必ずしも受けていない山地に居住する (Enfield and Comrie, eds. 2015: 4-5)。ただし、20 世紀以降は低地化が進んでいる。カチン人は言語的に多様であり、(1) に示すようなシナ・チベット語族チベット・ビルマ語派に属する様々な言語が通用している⁵。そのなかで、ジンポー語はカチン人の共通語として通用しており、言語的に多様なカチンの人々を結びつける 1 つの重要な紐帯の役割を果たす。言語類型論的に、ジンポー語は、音節声調言語であり、弱強型のリズムを持ち、基本的な音節構造は C1(C2)V(C3)/T である。形態的に分析的・膠着的である。動詞末尾型の言語であり、格標示の体系は主格・対格型である。アスペクト・ムード卓立型の言語であり、テンスを持たない。文法的体言化を持ち、いわゆる動詞補文、名詞補文、関係節、内在節、無主部節、副詞節など幅広い機能領域が体言化により形成される (詳しくは Kurabe 2016, 2017, 倉部 2020 などを参照)。

(1) カチンの主要言語

ジンポー語	チベット・ビルマ語派	サル語支	ジンポー・ルイ語群
ツアイワ語	チベット・ビルマ語派	ロロ・ビルマ語支	ビルマ語群
ロンウォー語	チベット・ビルマ語派	ロロ・ビルマ語支	ビルマ語群
ラチッ語	チベット・ビルマ語派	ロロ・ビルマ語支	ビルマ語群
ラワン語	チベット・ビルマ語派	ルン語支	ヌン語群
リス語	チベット・ビルマ語派	ロロ・ビルマ語支	ロロ語群

ミャンマーはトラが生息する 14 のアジア大陸国家の 1 つであり、ベンガルトラ (*Panthera tigris tigris*) とインドシナトラ (*Panthera tigris corbetti*) の 2 つの亜種が生息している (Lynam 2003: 343)。そのなかで、カチン地域は特に豊富なトラの個体数を擁する地域であった。ミャンマー北部のフーコン渓谷鳥獣保護区は現在でも世界最大のトラ保護区である。20 世紀はじめには同国で多くのトラの生息が確認されており (Pollok and Thom 1900), 19 世紀末から 20 世紀初頭にカチン地域に滞在した宣教師オーラ・ハンソンもこの地域のトラの豊富さに言及している (Hanson 1913: 36)。しかしながら、乱獲と人の居住区拡大は、過去 1 世紀のうちに急激なトラの個体数の減少を引き起こし、現代のミャンマーにおけるトラの個体数は 150 頭以下と推測されている (Lynam 2003: 344)。

本資料に例示されるように、カチン民話にはしばしばトラが登場する。(2) にいくつか例示するように、筆者らがミャンマー北部で蒐集したカチン民話の資料のうち、37 話のタイトルに sharaw 「トラ、ヒョウ」が含まれる。これらの資料は、筆者が現地協力者とともにミャンマー北

⁵ ルイ語支については LaPolla (2003) を参照。リス語の話者は、特にミャンマーのカチン州以外では、カチンに含まれないことが多い。

部において行ったフィールドワークにより得られたものである。そのうち、1,805 話分の音声および 1,589 話分の書き起こしは、オーストラリアの危機文化アーカイブである PARADISEC で公開している (Kurabe 2013)。KK1 から始まる ID はこのアーカイブにおける ID である。

(2) 筆者らが蒐集した「トラ、ヒョウ」をタイトルに含む民話

- KK1-0234 「ナンビャとトラ」 (DOI: 10.4225/72/5988922de4f71)
- KK1-0236 「トラとシカ」 (DOI: 10.4225/72/59889236a9891)
- KK1-0558 「ウサギとトラ」 (DOI: 10.4225/72/5989e0e7d1bd5)
- KK1-0856 「トラとカタツムリ」 (DOI: 10.4225/72/5989e5ba48c34)
- KK1-1217 「トラとゾウ」 (DOI: 10.4225/72/598b34ab93390)
- KK1-1227 「イヌの王とトラ」 (DOI: 10.4225/72/598b34d747045)
- KK1-1243 「トラと嘘つき」 (DOI: 10.4225/72/598b35178a7c5)
- KK1-1713 「ヒツジとトラ」 (DOI: 10.4225/72/598c8629c24ce)
- KK1-1515 「ライオンとオオカミとトラ」 (DOI: 10.4225/72/598b39ab5bb45)
- KK1-0778 「嘘つきのトラ」 (DOI: 10.4225/72/5989e46d50b88)
- KK1-1477 「恩知らずなトラ」 (DOI: 10.4225/72/598b39088f449)
- KK1-1277 「トラを殺した村」 (DOI: 10.4225/72/598b35aa7ffd6)
- KK1-1624 「火を点けられたトラ」 (DOI: 10.4225/72/598c849e4791e)
- KK1-0030 「ヒョウが斑点になったわけ」 (DOI: 10.4225/72/59888f2e5e615)
- KK1-1301 「母の言葉を聞かないトラの兄弟」 (DOI: 10.4225/72/598b36127a9d1)
- KK1-1793 「ウシを盗んだトラとナンビャ」 (DOI: 10.4225/72/598c878545742)

本資料 (KK1-1276) のように、筆者らのコレクションには人虎の話も含まれる。例えば、KK1-1009 (DOI: 10.4225/72/5989e84086c46) は次のような話である。

これは、1985 年頃、カチン州パッカ市付近のナムブル川の近くで実際に起きた話である。ある軍営の近くの村で水牛がトラに襲われた。トラは現場に足跡を残した。大将がトラを探したところ、1 人の兵士のカバンのなかにトラの鉤爪を発見した。大将がどこでそれを見つけたか訊ねると、兵士は、空腹のためトラに化けるためにそれを用いたことを認めた。村人の水牛であるため、彼は水牛を殺さず、その血だけをすすったと説明した。大将はこれ以上トラに化けないようにその兵士に命じた。

ミャンマー北部の人虎について言及する文献には (3) などがある⁶。各文献で言及されるミャンマー北部の人虎の特徴を (3) に示す。このうち、KK1-1276 は本資料である。異なる文献で 2 度以上言及される人虎の特徴として、普通のトラと異なり 5 本の指 (指球・趾球) を持つこと (以下の「5 本指」)、変身時にトラの鉤爪を使用すること (「鉤爪」)、変身時に特定の呪文を用いること (「呪文」)、変身時に衣類を脱ぐこと (「脱衣」)、人間に戻る条件として脱いで畳んでおい

⁶ これらの文献の存在は Francesco Brighenti 氏 (p.c., 2019) のご教示による。

た衣類を再び身に着けること(「着衣」), 人肉を食べること(「人肉」), などがある。

(3) ミャンマー北部の人虎

	5本指	鉤爪	呪文	脱衣	着衣	人肉	性別	地域
Brown (1911)				○				タマン
Hanson (1906)		○				○		カチン
Enriquez (1916)	○						男	カチン
Bennison (1931)	○							カチン, ナガ
Girsham (1971)	○		○	○	○		男	タマン
Dunlop (1979)	○		○	○	○	○	男	カチン
KK1-1009		○					男	カチン
KK1-1276				○			女	カチン

現代ジンポー語の標準方言においてトラを表す一般的な語は *sharaw* である。この語は軟口蓋鼻音末子音をともなった形で再構できる (Kurabe 2018)。例えば、いくつかの変種では *sharawng* (ガウリ方言) や *sərooŋ*¹ (ヌンプク方言) のごとく軟口蓋鼻音をともなう。また、標準方言でも *ràwng-tèng* 「ヒョウ」, *ràwng-chyang* 「黒ヒョウ」, *ràwng-mùt* 「ウンピョウ」など複合語で鼻音が残存している。さらに、この語はビルマ文語 *kroñ* 「ネコ」と同源語である。ジンポー語の *sha-* およびビルマ文語の *k-* は祖語の動物接頭辞を反映している (Matisoff 2003: 138–9)。これらの語の語源は、チベット・ビルマ祖語 **m/s-rwaŋ* 「ネコ, ヤマネコ, トラ」である (ibid., p.138, 611)。以下に、チベット・ビルマ諸語におけるこの語の祖語と反映形を系統とともに示す⁷。

(4) 祖語と反映形

チベット・ビルマ祖語	<i>*m/s-rwaŋ</i>	ネコ, ヤマネコ, トラ	
タカリ語	¹¹ <i>maŋ</i>	トラ	タマン語群
プミ語	<i>yo</i> ¹³	トラ	チャン語支
標準ジンポー語	<i>sharaw</i>	トラ, ヒョウ	サル語支
ジンポー語ガウリ方言	<i>sharawng</i>	トラ, ヒョウ	サル語支
ロンウオー語	<i>rauŋ</i>	ヤマネコ	ロロ・ビルマ語支
ラフ語	<i>ǰò</i>	ヤマネコ	ロロ・ビルマ語支
ビルマ文語	<i>kroñ</i>	ネコ	ロロ・ビルマ語支
ガロ語	<i>meng-gong</i>	ネコ	サル語支
ノクテ語	<i>miang</i>	ネコ	サル語支

⁷ タカリ語 (Mazaudon 1994), プミ語 (黄編 1992), ロンウオー語 (Matisoff 2003: 294), ラフ語 (Matisoff 1988: 1137), ガロ語 (Burling 2003: 164), ノクテ語 (Marrison 1967), 標準ジンポー語・ガウリ方言・ビルマ文語 (フィールドノート)。なお、ミャンマーのタマン語 (Taman) と (4) のネパールのタマン (Tamang) 語群は別の言語である。

2 本文

本節では本民話の本文を語釈と和訳とともに提示する。本民話のオリジナルデータは、2017年2月17日にカチン州ミッチーナ市のカチンズ地区において行った対面調査により得られた。話者はバモー出身の女性(1950年生)である。調査では、まず、リニアPCMレコーダー(ZOOM H4n)にショットガンコンデンサーマイク(RØDE NTG2)を接続し、音声(44.1kHz/16bit)を取り込んだ。後日、筆者の調査協力者がELANを用いて本文を書き起こし、合わせて筆者が確認を行った。オリジナルデータのPARADISECにおけるIDはKK1-1276である(DOI: 10.4225/72/598b35a630be0)。

ジンポー語はローマ字による正書法を持つ。母語話者と研究者の両方の利用に供すべく、本稿の表記には正書法を用いる。正書法は基本的に音素表記である。ただし、声調と声門閉鎖音は表記されない。本稿では、声調および声門閉鎖音(qで表記)を合わせて明示する。その他、注意を要する点として、aw [o], wi [ui], chy [tɕ], hp [p^h], ht [t^h], hk [k^h]がある。より詳しくは倉部(2020)を参照されたい。

なお、本民話はその場で自然に語られたものであるため、言いよどみや繰り返し、言い誤りなども認められる。本稿ではこれらの修正を最小限にとどめ、できるだけ原文に近い形で提示する。言語学研究の利用に供すべく、和訳はできるかぎり直訳を用いた。そのため、日本語としてやや不自然な部分がある。

(1) **Yáq hkài=na màumwì-àq gà-baw=gàw “Sharaw-nlàwng Hkàwn-Tawng”**

now tell=IRR story=GEN word-head=TOP tiger-weretiger PSN-PSN

ngú=ai rê.

say=NMLZ COP

いま語る物語の題目は「人虎コントン」というものだ。

(2) **Mòi-shawng=dèq hkàq-nu gabà=ná lahtáq=dèq=dàq,**

long.ago-before=ALL river-mother big=GEN upper=ALL=HS

昔、大河の上流にだそうだ、

(3) **sharaw-alàwng tai=ai gahtàwng langâi ngà=ai=dàq.**

tiger-superior become=NMLZ village one exist=DECL=HS

(人が)トラになる1つの村があったそうだ。

(4) **Dai=káwq=ná mashà=ni=gàw shanáq ré=jang=gàw,**

that=LOC=GEN people=PL=TOP night COP=when=TOP

そこの人々は夜になると、深夜になると、

- (5) **sharaw tai chye=ai bàwq, amyú-anoi ngú nga=màq=ai=dàq.**
tiger become know=NMLZ kind lineage-lineage QUOT say=PL=DECL=HS
トラになることができる種類, 血統といわれていたそうだ。
- (6) **Dai ré=yàng=gàw=dàq, sara langâi-mi=gàw,**
that COP=when=TOP=HS teacher one-one=TOP
そうするとだそうだ, ある 1 人の先生が…
- (7) **shíq mying=gàw=dàq, Bràng-Sàn ngú=ai sara rê=dàq.**
3sg.GEN name=TOP=HS PSN-PSN say=NMLZ teacher COP=HS
彼の名前はだそうだ, ブラン・サンという先生だったそうだ。
- (8) **Shi=gàw jàwng-làika qlòì-mi chye=ai majàw,**
3sg=TOP school-writing a.little-one know=NMLZ because
彼は勉強が少しできたので,
- (9) **“Mà=ni=hpéq làika sharín=ya=na” ngú=ná,**
child=PL=ACC writing teach=BEN=IRR say=SEQ
「子どもたちに勉強を教えてあげよう」といって,
- (10) **shi=hkrai shi myìt dù=ná,**
3sg=alone 3sg mind arrive=SEQ
自分で思い至って,
- (11) **dai gahtàwng=dèq lùng=màt=wà=ai=dàq.**
that village=ALL ascend=COMPL=VEN=DECL=HS
その (上流の) 村にのぼってきたそうだ。
- (12) **Lùng=màt=wà ré=ná, jàwng-gìnsùm-gashà galù-láwq gáp=lá=ná,**
ascend=COMPL=VEN LV=SEQ school-shed-DIM be.long-INTNS build=take=SEQ
(村に) のぼってきて, とても長い学校小屋を建てて,
- (13) **jàwng-mà=ni=hpéq làika sharín ré=ná,**
school-child=PL=ACC writing teach LV=SEQ
学生に勉強を教えて,
- (14) **shi dai=káwq ngà, jàwng=káwq ngà,**
3sg that=LOC live school=LOC live
彼はそこに住んで, 学校に住んで,

- (15) **dai=hku=ná, dai=káwq qyúp, dai=káwq shá=ná ngà=ai=dàq.**
 that=like=SEQ that=LOC sleep that=LOC eat=SEQ live=DECL=HS
 そのように, そこで寝て, そこで食べて暮らしていたそう。
- (16) **Marè-mashà=ni=mùng grài tsáwq-ràq=ai=dàq.**
 village-people=PL=also very love-like=DECL=HS
 村人たちも (彼を) とても慕ったそう。
- (17) **Dai=hku ngà=ngà ré=yàng=shèq,**
 that=like live=CONT LV=when=then
 そのように暮らしていると,
- (18) **dai gahtàwng=káwq=ná Hkàwn-Tawng ngú=ai amyú-shayi-shà**
 that village=LOC=GEN PSN-PSN say=NMLZ race-girl-child
langâi-mi=mùng sa=ná,
 one-one=also come=SEQ
 その村の「コントン」という 1 人の少女も来て,
- (19) **shaní=shagù sara=ná matu shàt-simái=ni grài mu=ná,**
 day=every teacher=GEN for food-food=PL very be.delicious=SEQ
sa jàwq shá=ai=dàq.
 come give eat=DECL=HS
 毎日, 先生のためにご飯を美味しく, 来て食べさせたそう。
- (20) **Sara=má Hkàwn-Tawng=hpéq grài tsáwq-ràq=màt=s-ai=dàq.**
 teacher=also PSN-PSN=ACC very love-like=COMPL=CSM-DECL=HS
 先生もコントンのことがとても好きになってしまったそう。
- (21) **Shi=hpéq rái=ni hkrùt=ya, shàt-lùq-shá=ni lajàng jàwq rê majàw,**
 3sg=ACC things=PL wash=BEN rice-eat-drink=PL prepare give LV because
 彼のために洗濯ものをして, ご飯を作ってくれたので,
- (22) **Hkàwn-Tawng=hpéq tsáwq-ràq=s-ai=dàq.**
 PSN-PSN=ACC love-like=CSM-DECL=HS
 コントンのことが好きになったそう。
- (23) **Tsáwq-ràq=ná, shán lahkâwng=gàw “Hkùngrán-pói galaw=na” ngú=ná,**
 love-like=SEQ 2du 2=TOP marry-festival do=IRR say=SEQ
 好きになって, 彼ら 2 人は「結婚式をしよう」といって,

- (24) **mare-salang=ni, tsun=ai shalói=gàw, “Mai=ai” ngú=ná,**
 village-elder=PL say=NMLZ when=TOP be.OK=DECL say=SEQ
 村の年配者たちは、(彼ら 2 人がそう) いったとき、「(結婚しても) よい」といって、
- (25) **hkùngrán-pói=má galaw=ya ré=ná,**
 marry-festival=also do=BEN LV=SEQ
 結婚式もしてくれて、
- (26) **jàwng makau=káwq nítâ gáp=dá=ya=ai=dàq.**
 school beside=LOC house build=RES=BEN=DECL=HS
 学校の近くに家を建ててくれたそうだ。
- (27) **Gáp=dá=ya rê shalói=gàw, dai=hku ngà=ngà ré yàng=shèq,**
 build=RES=BEN LV when=TOP that=like live=CONT LV when=then
 建ててやったとき、そのように住んでいると、
- (28) **dai Hkàwn-Tawng=gàw=dàq, shanáq=dèq qyùp-tung lài=ai hpang ré yàng,**
 that PSN-PSN=TOP=HS night=ALL sleep-rise pass=NMLZ after COP when
 そのコントンはだそうだ、真夜中を過ぎたあとになると、
- (29) **shi=gàw hkawm=màt-màt rê=dàq.**
 3sg=TOP walk=COMPL-RED COP=HS
 彼女はいつも出かけてしまっていたそうだ。
- (30) **Garà=dèq hkawm=ai rê=mùng n-chye, hkawm=màt-màt rê=shèq,**
 where=ALL walk=NMLZ COP=also NEG-know walk=COMPL-RED LV=then
 どこへ出かけたのかも知れず、いつも出かけてしまって、
- (31) **dai sara-wa=gàw shi=hkrai=shà qyúp=ná,**
 that teacher-man=TOP 3sg=alone=only sleep=SEQ
 その先生は 1 人だけで寝て、
- (32) **mau dung=ngà, mau=ngà rái,**
 be.surprised sit=CONT be.surprised=CONT LV
 驚いて座っていると、驚いていると、
- (33) **dai Hkàwn-Tawng=gàw jahpàwt ré yàng=gàw,**
 that PSN-PSN=TOP morning COP when=TOP
 そのコントンは朝になると、

- (34) **shàn=ni, jahkyi-shàn=ni, hpa=ni, gát=káwq báí sa dung dùt=ngà=ai=dàq.**
 flesh=PL deer-flesh=PL what=PL market=LOC again go sit sell=CONT=DECL=HS
 肉など, 鹿肉など, 何だのを市場で, また帰って座って売っていたそうだ。
- (35) **Dai=shèq shi=gàw, sara=gàw la-náq mi=gàw ní-nyúp=ai=shà,**
 that=then 3sg=TOP teacher=TOP one-night one=TOP NEG-sleep=NMLZ=only
 そして, 彼は, 先生はある晩, 寝ずに,
- (36) **“Ndai num ndai=gàw ngai náwq yu=na.”**
 this woman this=TOP 1sg still see=IRR
 「この女性, この人を私はもう少し見てみよう。」
- (37) **“Shanáq garà=dèq sa=ai=kún” ngú=ná,**
 night where=ALL go=DECL=Q say=SEQ
 「夜どこに行くのだろうか」といって,
- (38) **“Ní-hkrít=ai=shà ngai hkán-nang=na rê” ngú=ná,**
 NEG-fear=NMLZ=only 1sg follow-follow=IRR COP say=SEQ
 「怖がらずに私はついて行ってみよう」といって,
- (39) **la-náq mi=gàw=dàq, shi=gàw myít=hpéq myít=dá, tin=dá=ná,**
 one-night one=TOP=HS 3sg=TOP mind=ACC think=RES be.urgent=RES=SEQ
 ある晩だそうだ, 彼は心に決めて,
- (40) **“Num ndai=àq lam dài-ná ngai chye=hkrà galaw=na” ngú=ná=shèq,**
 woman this=GEN road this-night 1sg know=until do=IRR say=SEQ=then
 「今夜この女性が行く道を私は突き止めよう」といって,
- (41) **shi dai=hku myít=ngà=yàng,**
 3sg that=like think=CONT=when
 彼はそのように考えていると,
- (42) **gaja-wa, hkying shi-lahkâwng=ján, hkying langâi, lahkâwng=káwq=gàw**
 be.good-ADV hour 10-2=over hour one two=LOC=TOP
ní-ngâ=s-ai=dàq.
 NEG-exist=CSM-DECL=HS
 本当に, 12 時過ぎ, 1 時, 2 時になると (コントンは) いなくなっていたそうだ。
- (43) **Ní-ngâ=ai majàw, shi=má hkán-nang=màt=wà, hkán-nang=màt=wà,**
 NEG-exist=NMLZ because 3sg=also follow-follow=COMPL=VEN follow-follow=COMPL=VEN
 いなくなっていたので, 彼もついて行って, ついて行って,

- (44) **hkán lagú yu ré=yàng=gàw, sharà mi dù=jang=gàw,**
 follow steal see LV=when=TOP place one arrive=when=TOP
 ついて行ってこっそり見ると, ある場所に着くと,
- (45) **shi=gàw hpún langâi-mi=káwq shíq=àq labù-palawng=ni**
 3sg=TOP tree one-one=LOC 3sg.GEN=GEN longyi-clothes=PL
ràwq=taw-ngà=ai=dàq.
 take.off=CONT-CONT=DECL=HS
 彼女は1本の木のところで自分の衣類を脱いでいたそう。
- (46) **Palawng=ni labù=ni ràwq=káu-dàt=ai=htèq=gàw,**
 clothes=PL longyi=PL take.off=away-away=NMLZ=COM=TOP
 服やロンジーなどを脱ぐと,
- (47) **nìngmài galù-láwq=ná sharaw-alàwng tai=màt=s-ai=dàq.**
 tail be.long-INTNS=SEQ tiger-superior become=COMPL=CSM-DECL=HS
 尻尾がとても長く, トラになってしまったそう。
- (48) **Sharaw tai=ná, shi=gàw nàm=ná rái=ni=hpéq gyam hkawm=ngà=ai=dàq.**
 tiger become=SEQ 3sg=TOP forest=GEN things=PL=ACC hunt walk=CONT=DECL=HS
 トラになって, 彼女は森のものたちを捕まえてまわっていたそう。
- (49) **Shalói=gàw shi dai mù=ai=htèq=gàw,**
 then=TOP 3sg that see=NMLZ=COM=TOP
 そして, 彼がそれを見ると,
- (50) **sara dai=gàw hkrit=ná ntâ=dèq wà=màt=s-ai=dàq.**
 teacher that=TOP fear=SEQ house=ALL return=COMPL=CSM-DECL=HS
 その先生は怖くなって家に帰ってしまったそう。
- (51) **Wà=màt=ná rái=ni=hpéq lajàng=ná,**
 return=COMPL=SEQ things=PL=ACC prepare=SEQ
 家に帰って荷物を整理して,
- (52) **shi=gàw “Num ndai=gàw sharaw=shèq rê.”**
 3sg=TOP woman this=TOP tiger=CONTR COP
 彼は「この女性はトラだ。」
- (53) **“Ngai n-chye=ná hkùngrán=lá-káu=s-ai rê.”**
 1sg NEG-know=SEQ marry=take-away=CSM-NMLZ COP
 「私は知らずに結婚してしまったのだ。」

- (54) “**Yáq án lahkâwng jàwng=káwq ngà=wà,**”
 now 2du 2 school=LOC live=VEN
 「いま私たち 2 人は学校で暮らしてきたけれども」
- (55) “**shi sharaw tai=yàng=gàw ngai=gàw hkrit=s-ai” ngú=ná,**
 3sg tiger become=when=TOP 1sg=TOP fear=CSM-DECL say=SEQ
 「彼女がトラになるのが私は怖くなった」といって、
- (56) **shi=gàw hprawng=ná rái=ni máq sha-chyíp=káu=ai=dàq.**
 3sg=TOP escape=SEQ things=PL be.exhausted CAUS-be.arranged=away=DECL=HS
 彼は逃げるために荷物もすべて整えたそう。
- (57) **Sha-chyíp=lá=ná jahpàwt qyúp ràwt=ai=htèq=gàw,**
 CAUS-be.arranged=take=SEQ morning sleep wake.up=NMLZ=COM=TOP
 整えて、朝、起きるやいなや、
- (58) **shi=gàw Maliq-hkàq makau=ná,**
 3sg=TOP PLN-river beside=ABL
 彼はマリ川から、
- (59) **Maliq-hkàq-nu zàwn rê hkàq-nu gabà makau=káwq=ná**
 PLN-river-mother like COP river-mother big beside=LOC=ABL
 マリの大河のような大きな川の近くから、
- (60) “**Hkàq-li=htèq kalàngtáq lawúq-gá=dèq, garà=dèq dù=yàng dù,**”
 water-boat=COM at.once lower-land=ALL where=ALL arrive=if arrive
 「舟で直ちに平地へ、どこへ着こうが着こう」
- (61) “**ndai gahtàwng=káwq=ná=gàw ngai=gàw wà=màt=sa-na” ngú=na**
 this village=LOC=ABL=TOP 1sg=TOP return=COMPL=CSM-IRR say=SEQ
 「この村からは私は帰ってしまおう」といって
- (62) **wà=màt=ai=dàq.**
 return=COMPL=DECL=HS
 帰ってしまったそう。
- (63) **Wà=màt rê shalói=gàw,**
 return=COMPL LV when=TOP
 帰ってしまったとき、

- (64) **Hkàwn-Tawng=káwq=gàw mà-hkùm rái=taw-ngà=ai=dàq.**
 PSN-PSN=LOC=TOP child-body COP=CONT-CONT=DECL=HS
 コントンは身重になっていたそうだ。
- (65) **Mà-hkùm rái=shèq, gashà=hpéq=mùng chyúq á-tsâwm=shà jàwq=ai=dàq.**
 child-body COP=then child=ACC=also breasts ADV-be.well=only give=DECL=HS
 身重になっていて, 子どもにもしっかりと乳を与えたそうだ。
- (66) **Mà shangài=ai=htèq, á-tsâwm=shà ré=ná lajàng=ai.**
 child bear=NMLZ=COM ADV-be.well=only COP=SEQ care.for=DECL
 子どもを産んで, しっかりと面倒をみたそうだ。
- (67) **Rái=tîm shi=gàw shanáq-ahkying dù=jang,**
 COP=but 3sg=TOP night-time arrive=when
 しかし, 彼女は夜になると,
- (68) **shi=gàw nàm=dèq hkawm=màt-màt rê.**
 3sg=TOP forest=ALL walk=COMPL-RED COP
 彼女はいつも森へ出かけてしまった。
- (69) **Ndai, sharaw-alàwng n-tai-n-mai,**
 well tiger-superior NEG-become-NEG-be.OK
 その, トラにならずにはいられず,
- (70) **shi tai=mayu=wà-wà ré=ai=dàq.**
 3sg become=DESID=VEN-RED COP=DECL=HS
 彼女はいつも (トラに) なりたくなかったそうだ。
- (71) **Dai majàw, mà=gàw qlòì gabà=wà=jang=gàw tsun=ai=dàq.**
 that because child=TOP a.little grow=VEN=when=TOP say=DECL=HS
 だから, 子どもは少し成長するといったそうだ。
- (72) **“Áqnû, nang garà=dèq sa=na ngú=na=lâw.”**
 mother 2sg where=ALL go=IRR say=IRR=Q
 「お母さん, あなたはどこへ行こうというのですか。」
- (73) **“Qnû, nang shanáq ré=yàng í-ngâ=màt-màt rê=lè.”**
 mother 2sg night COP=when NEG-exist=COMPL-RED COP=SFP
 「お母さん, あなたは夜になるといつもいなくなってしまうよ。」

- (74) “È, qnû nang shá=na matu lùq-shá tam hkawm=ai ngú.”
 INTJ mother 2sg eat=IRR for drink-eat look.for walk=DECL say
 「はい、お母さんはあなたが食べるために食べ物を探し歩いているのだと。」
- (75) “Dài-náq=gàw ngai=má hkán-nang=na” ngú=ná,
 this-night=TOP 1sg=also follow-follow=IRR say=SEQ
 (子どもは)「今夜は私もついて行きます」といって、
- (76) shi manga-ning ré=yàng=gàw,
 3sg 5-year COP=when=TOP
 彼が5歳になると、
- (77) dai shalói=gàw “Hkán-nang=na” ngú=s-ai=dàq.
 that when=TOP follow-follow=IRR say=CSM-DECL=HS
 そのとき「ついて行く」といったそうだ。
- (78) “Hkán-nang=na” ngú=jang=gàw,
 follow-follow=IRR say=when=TOP
 「ついて行く」というと、
- (79) shíq ganù=gàw “Nang hkrit=na rê=lâw” nga=yàng,
 3sg.GEN mother=TOP 2sg fear=IRR COP=SFP say=when
 彼の母は「あなたは怖がるでしょうよ」というと、
- (80) “Ngai í-hkrit=ai.”
 1sg NEG-fear=DECL
 (子どもは)「私は怖くありません。」
- (81) “Nang hpún òtsa=káwq qyúp=ngà=ùq=qyâw” nga=yàng,
 2sg tree upper=LOC sleep=CONT=IMP=SFP say=when
 (コントンが)「あなたは木の上で寝ていなさいよ」というと、
- (82) “Mai=ai” ngú=shèq, qyúp=taw-ngà=ai.
 be.OK=DECL say=then sleep=CONT-CONT=DECL
 (子どもは)「分かりました」といって、寝ていた。
- (83) Hpún òtsa=káwq shi pinra ra=ná, shíq gashà sha-qyúp=dá ré=ná,
 tree upper=LOC 3sg platform make=SEQ 3sg.GEN child CAUS-sleep=RES LV=SEQ
 木の上に彼女は足場を作って、彼女の子どもを寝かせておいて、

- (84) **shi=gàw dai=hku=ná labù-palawng=ni=éq báì ràwq ré=shèq,**
 3sg=TOP that=like=SEQ longyi-clothes=PL=ACC again take.off LV=then
 彼女はそのように衣類をまた脱いで、
- (85) **shíq gashà=gàw yu=taw-ngà=ai=dàq.**
 3sg.GEN child=TOP see=CONT-CONT=DECL=HS
 彼女の子どもは見ていたそうだ。
- (86) **Yu=taw-ngà=yàng, gaja-wa, shíq ganù-wa labù-palawng=ni máq=hkrà**
 see=CONT-CONT=when be.good-ADV 3sg.GEN mother-man longyi-clothes=PL be.exhausted=until
 見ていると、本当に、母が衣類をすべて
- (87) **ràwq ngút=ai=htèq=gàw, sharaw gabà tai=màt=shèq,**
 take.off finish=NMLZ=COM=TOP tiger big become=COMPL=then
 脱ぎ終わると、本当に大きなトラになってしまい、
- (88) **“Áqnû, áqnû, htó, sharaw sa=wà=ràq=ai” ngú=yàng,**
 mother mother over.there tiger come=VEN=VEN=DECL say=when
 (子どもは母がトラになったことが理解できなかったので)「お母さん、お母さん、あそこ
 にトラがやってきました」というと、
- (89) **gadai=mùng n-sa jèq=lá=ai=dàq.**
 who=also NEG-come stop=take=DECL=HS
 誰も止めに来なかったそうだ。
- (90) **Dai shalói mà-gashà dai=gàw “Ĭ, ngai grài hkrit=s-ai” ngú=ná=shèq,**
 that when child-child that=TOP INTJ 1sg very fear=CSM-DECL say=SEQ=then
 そのとき、その子どもは「うわあ、私はとても怖い」といって、
- (91) **kalàngtáq myì=ná sa=wà=ai lam=káwq,**
 at.once ago=GEN come=VEN=NMLZ road=LOC
 直ちに先ほど来た道を、
- (92) **shíq ganù sharaw tai=màt=wà=ai hpang,**
 3sg.GEN mother tiger become=COMPL=VEN=NMLZ after
 彼の母がトラになってしまったあと、
- (93) **shi=gàw dai=hku gát=ná, mare=dèq wà=ná=shèq,**
 3sg=TOP that=like run=SEQ village=ALL return=SEQ=then
 彼はそのように走って、村に帰って、

- (94) **hpung-sara langâi=àq ñtâ=káwq wà ngà=s-ai=dàq.**
 Christian-teacher one=GEN house=LOC return live=CSM-DECL=HS
 そのこの 1 人の牧師の家に帰って暮らし始めたそうだ。
- (95) “**Ngai sara=káwq=shà ngà=sa-na.**”
 1sg teacher=LOC=only live=SCM-IRR
 「私は先生のところでだけ暮らします。」
- (96) “**Nánhte=káwq=shèq ngà=sa-na.**”
 2pl=LOC=CONTR live=CSM-IRR
 「あなたたちのところでだけ暮らします。」
- (97) “**Ngai qnû=htèq ñ-ngâ=s-ai.**”
 1sg mother=COM NEG-live=CSM-DECL
 「私はお母さんともう暮らしません。」
- (98) “**Hkrit=ai**” **ngú=ná, ngà=ngà=ai=dàq.**
 fear=DECL say=SEQ live=CONT=DECL=HS
 「怖いです」といって、(そこで) 暮らしていたそうだ。
- (99) **Ngà=ngà rê shalói=gàw, shíq gashà=gàw dai=káwq,**
 live=CONT LV when=TOP 3sg.GEN child=TOP that=LOC
 住んでいると、彼女の子どもがそこに、
- (100) **hpung-sara-gabà-ñtâ=káwq=shà ngà=màt=jang=gàw,**
 Christian-teacher-big-house=LOC=only live=COMPL=when=TOP
 牧師の家にだけ住んでいると、
- (101) **qlòì-mi tsan=ai=dàq, shánhte ngà=ai ñtâ=htèq.**
 a.little-one be.far=DECL=HS 3pl live=NMLZ house=COM
 (牧師の家は) 少し遠かったそうだ、彼ら (コントンたち) が住んでいた家からは。
- (102) **Shalói Hkàwn-Tawng=gàw shíq gashà=éq tam hkawm rê hpang=è,**
 then PSN-PSN=TOP 3sg.GEN child=ACC look.for walk COP after=LOC
 そして、コントンは彼女の子どもを探したあと、
- (103) **dai=káwq qyúp=ngà=ai lam=hpéq shi chye ré=jang=shèq,**
 that=LOC sleep=CONT=NMLZ way=ACC 3sg know LV=when=then
 (子供が) その家で寝泊まりしていることを彼女は知ると、

- (104) **shi=gàw shíq gashà=hpéq sa woi=ai=dàq.**
 3sg=TOP 3sg.GEN child=ACC come take=DECL=HS
 彼女は子どもを迎えにきたそうだ。
- (105) **Rái=tîm hpung-sara-wa=gàw tsun=ai=dàq.**
 COP=but Christian-teacher-man=TOP say=DECL=HS
 しかし、牧師はいったそうだ。
- (106) **“Nang=ná pràt=káwq nánhte=ná amyú dai bàwq rê majàw,”**
 2sg=GEN life=LOC 2pl=GEN lineage that kind COP because
 「あなたの人生で、あなたたちの種族はそのような種類なので」
- (107) **“nang sharaw tai=ai=pyi ram=s-ai.”**
 2sg tiger become=NMLZ=even be.enough=CSM-DECL
 「あなたはトラになっただけまだまだ (ほかのもっとひどい獣にならなっただけま
 した)。」
- (108) **“Náq gashà=gàw á-tsâwm=shà galù-gabà=wà=ùqgàq.”**
 2sg.GEN child=TOP ADV-be.well=only be.long-be.big=VEN=OPT
 「あなたの子どもはしっかりと成長しますように。」
- (109) **“Nang tàwn=dá=ùq=qyâw” ngú=ná tsun=ai=dàq.**
 2sg put=RES=IMP=SFP QUOT=SEQ say=DECL=HS
 「あなたは (ここに子どもを) 置いておきなさいよ」といったそうだ。
- (110) **“Htó nàm=dèq sharaw tai=yàng tai=màt=wà=sa-núq” ngú,**
 over.there forest=ALL tiger become=when become=COMPL=VEN=CSM-IMP QUOT
 「あの森へトラになるならなって帰きなさい」と
- (111) **sara-wa=gàw kyú hpyí=ya=ai=htèq marên, sharaw tai=ná,**
 teacher-man=TOP favor pray=BEN=NMLZ=COM same tiger become=SEQ
 牧師が祈るやいなや、(コントンは) トラになって、
- (112) **dai mare=káwq=ná galói=mùng sharaw-ñlàwng Hkàwn-Tawng=éq**
 that village=LOC=ABL when=also tiger-weretiger PSN-PSN=ACC
ń-mû=màt=s-ai=dàq.
 NEG-see=COMPL=CSM-DECL=HS
 その村では決して人虎のコントンを見なくなってしまったそうだ。

記号・略号

-	morpheme boundary	DESID	desiderative
=	clitic boundary	DIM	diminutive
1	first person	GEN	genitive
2	second person	HS	hearsay
3	third person	IMP	imperative
sg	singular	INTJ	interjection
du	dual	INTNS	intensifier
pl	plural	IRR	irrealis
C	consonant	LOC	locative
T	tone	LV	light verb
V	vowel	NEG	negative
ABL	ablative	NMLZ	nominalizer
ACC	accusative	OPT	optative
ADV	adverbializer	PL	plural
ALL	allative	PLN	place name
BEN	benefactive	PSN	person name
COMPL	completive	QUOT	quotative
COM	comitative	Q	question
CONT	continuous	RED	reduplicant
CONTR	contrastive	RES	resultative
COP	copula verb	SEQ	sequential
CSM	change-of-state marker	SFP	sentence-final particle
DECL	declarative	TOP	topic
DESID	desiderative	VEN	venitive

参考文献

- Ashley, Leonard R. N. 2001. *The complete book of werewolves*. New York: Barricade Books.
- Aylesworth, Thomas G. 1970. *Werewolves and other monsters*. Reading, MA: Addison-Wesley.
- Bennison, J. J. 1931. *Census of India, 1931, Vol.11 (Burma), Pt.1 Report*. Rangoon: Office of the Supdt., Govt. Printing and Stationery.
- Bradley, Mary H. 1929. *Trailing the tiger*. New York and London: D. Appleton.
- Brighenti, Francesco. 2017. Traditional beliefs about weretigers among the Garos of Meghalaya (India). *eTropic* 16.1: 69–111.

- Brown, R. Grant. 1911. The Tamans of the Upper Chindwin, Burma. *The Journal of the Royal Anthropological Institute* 41: 305–317.
- Burling, Robbins. 2003. *The language of the Modhupur Mandi (Garo), Vol. II: Lexicon* Ann Arbor, MI: University of Michigan.
- Dunlop, Richard. 1979. *Behind Japanese lines: With the OSS in Burma*. Chicago: Rand McNally.
- Enfield, N. J. and Bernard Comrie (2015) Mainland Southeast Asian languages: State of the art and new directions. In N. J. Enfield and Bernard Comrie (eds.) *Languages of Mainland Southeast Asia: The state of the art*, 1–27. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Enriquez, C. M. 1916. *A Burmese enchantment*. Calcutta : Thacker, Spink.
- Girsham, Jack with Lowell Thomas. 1971. *Burma Jack*. New York: Norton.
- Hamel, Frank. 1915. *Human animals*. New York: Frederick A. Stokes.
- Hanson, Ola. 1906. *A dictionary of the Kachin language*. Rangoon: American Baptist Mission Press.
- Hanson, Ola. 1913. *The Kachins: Their customs and traditions*. Rangoon: American Baptist Mission Press.
- 黄布凡 (編) 1992. 『藏緬語語音和詞匯』北京：中央民族学院出版社. Accessed via STEDT database <http://stedt.berkeley.edu/search/> on 2020-02-29.
- Hutton, John H. 1920. Leopard-men in the Naga hills. *The Journal of the Royal Anthropological Institute of Great Britain and Ireland* 50: 41–51.
- 藤原敬介. 2016. 「タマン語の系統再考」『京都大学言語学研究』 35: 1–34.
- 上尾龍介. 1974. 「人虎伝と山月記」『中国文学論集』 4: 91–104.
- Kharmawphlang, Desmond. 2001. In search of tigermen: The were-tiger tradition of the Khasis. *India International Centre Quarterly* 27/28: 160–176.
- Kurabe, Keita. 2013. *Recordings of Jinghpaw folktales*. Digital collection managed by PARADISEC. [Open Access] DOI: 10.4225/72/59888e8ab2122
- Kurabe, Keita. 2016. A grammar of Jinghpaw. Ph.D. dissertation, Kyoto University.
- Kurabe, Keita. 2017. Jinghpaw. In Graham Thurgood and Randy J. LaPolla (eds.) *The Sino-Tibetan Languages*, Second edition, 993–1010. London and New York: Routledge.
- Kurabe, Keita. 2018. The loss of the proto-velar finals in Standard Jinghpaw. *Journal of the Southeast Asian Linguistics Society* 11.1: 1–12.
- 倉部慶太. 2020. 『ジンポー語文法入門』東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- LaPolla, Randy J. 2003. An overview of Sino-Tibetan morphosyntax. In Graham Thurgood and Randy J. LaPolla (eds.) *The Sino-Tibetan Languages*, 22–42. London and New York: Routledge.
- Locke, Arthur. 1954. *The tigers of Trengganu*. London: Museum Press.
- Lynam, Antony J. 2003. *A national tiger action plan for the Union of Myanmar*. Yangon: Myanmar Forest Department, Ministry of Forestry, Myanmar.

- Lyngdoh, Margaret. 2016. Tiger transformation among the Khasis of Northeastern India: Belief worlds and shifting realities. *Anthropos* 111: 649–658.
- Marrison, Geoffrey E. 1967. The classification of the Naga languages of north-east India. Ph.D. Dissertation, School of Oriental and African Studies, University of London. Accessed via STEDT database <http://stedt.berkeley.edu/search/> on 2020-02-29.
- Matisoff, James A. 1988. *The dictionary of Lahu*. Berkeley: University of California Press.
- Matisoff, James A. 2003. *Handbook of Proto-Tibeto-Burman: System and philosophy of Sino-Tibetan reconstruction*. Berkeley, Los Angeles and London: University of California Press.
- Mazaudon, Martine. 1994. Problèmes de comparatisme et de reconstruction dans quelques langues de la famille tibéto-birmane. Thèse d'Etat, Université de la Sorbonne Nouvelle. Accessed via STEDT database <http://stedt.berkeley.edu/search/> on 2020-02-29.
- Newman, Patrick. 2012. *Tracking the weretiger: Supernatural man-eaters of India, China and Southeast Asia*. Jefferson: McFarland.
- Pollok, Fitz William Thomas and W. S. Thom. 1900. *Wild sports of Burma and Assam*. London: Hurst and Blackett, limited.
- Rose, Carol. 2001. *Giants, monsters, and dragons: An encyclopedia of folklore, legend, and myth*. New York: W. W. Norton.
- Skeat, Walter W. 1900. *Malay magic*. London: MacMillan.
- Thomas, Northcote Whitridge. 1911. Lycanthropy. In Hugh Chisholm (ed.) *Encyclopædia Britannica*, 17, 11th edition, 149–150. Cambridge: Cambridge University Press.
- 王貝. 2015. 「山月記」および「人虎伝」における唐以前の虎の変身語要素の伝承『言語文化共同研究プロジェクト』2014: 47–56.
- Wessing, Robert. 1986. *The soul of ambiguity: The tiger in Southeast Asia*. DeKalb: Center for Southeast Asian Studies, Northern Illinois University.

受理日 2020 年 4 月 6 日

在独彝語文献調査報告¹

岩佐一枝

名古屋外国語大学

キーワード：彝語文献、撒尼彝語方言、彝文字

1 はじめに

彝語（イゴ；別名ロロ語。Yi, Lolo とも）は、チベット・ビルマ語派ロロ・ビルマ語支を構成する主要言語の一つであり、中国西南部の四川省、雲南省、貴州省及び広西壮族自治区、並びにベトナム、ラオスの北部一帯で現在も使用されている。彝語は、独自の文字体系と豊富な文献を持つことでもよく知られている。

中国国内の彝語は、北部、南部、東部、西部、中部、東南部の 6 方言に、ベトナム国内の彝語は花ロロと黒ロロの 2 方言に分類されている一方、ラオスには 1 方言のみが分布している。現代方言の多くは漢語やベトナム語の影響を受け、消滅の危機に瀕しているが、文献に関しても、これを扱う祭司の高齢化と後継者問題を含め、解決すべき多くの問題を抱えている。

上記の彝語方言のうち、文字と文献を有するのは、中国国内の彝語 4 方言—北部、南部、東部、東南部—のみである。なお、本報告は、彝族の使用言語の言語学的分類について議論するのが目的ではないため、便宜上、中国国内の公的な分類に従い、各文献に書かれている彝語の同定結果、つまり所属方言を示す。

彝語は、元・明代にはすでに成立していたと推察される彝文（イブン）あるいは爨文（サンブン）と呼ばれる独自の文字体系と、それによって書かれた多数の文献を持つ。文献の内容は、経典、歴史、暦、占ト、神話、医学など多岐にわたるが、これらの文献と彝文字は「ピモ」と呼ばれる祭司が代々受け継いできた。

彝文字は方言毎にはもちろん、同一方言区域内においても各村毎に、文字数や字体に大きな差異が存在し²、文献のフォーマットもまた文字同様、地域によって様々な形式を呈する。このような多彩な様相を示す彝語文献は、中国国内のみならず、イギリス、フランス、

¹ 特に注記がない場合、本稿で示すベルリン州立図書館の彝語文献に関するデータは、筆者自身が収集した内容に基づいている。なお、ドイツでの彝語文献調査は、日本学術振興会（特別研究員奨励費）「言語変化メカニズム解明の試み—彝語文献言語と現代方言のコーパス作成をもとに—」（課題番号：15J40040）の助成を受けている。

² 方言区域ごとの彝文字及びその異体字の分布と分析については、Iwasa (2018a)を参照されたい。

ドイツといったヨーロッパ諸国の図書館や博物館などにも所蔵されており、その総数は 100 巻以上にも上る。

本稿は、これら在欧の彝語文献のうち、筆者が 2015 年 12 月から翌年 1 月にかけてドイツ・ベルリンのベルリン州立図書館で行った調査内容に基づき、これまでほとんど報告がなされてこなかった在独彝語文献についてその概要を示すことを主目的とする。

2 在独文献に関する基本情報

2.1 文献調査について

文献所蔵先：ドイツ、ベルリン：ベルリン州立図書館 (Staatsbibliothek zu Berlin) ,
Collection of Francis Rock³

2.2 先行研究

1977 年及び 1980 年に Klaus Janert によって、ベルリン州立図書館所蔵のマイクロフィルムの画像をもとに、納西や仲家⁴文献とともに 3 巻の彝語文献全頁が掲載されたカタログが刊行されている。

Janert, Klaus. 1977. *Hachi-Handschriften nebst Lolo- und Chungchia-Handschriften*. Teil 4. *Verzeichnis der Orientalischen Handschriften in Deutschland*. Wiesbaden. Franz Steiner Verlag GmbH.

Janert, Klaus Ludwig. 1980. *Nachi-Handschriften nebst Lolo-Handschriften*. Teil 5. *Verzeichnis der Orientalischen Handschriften in Deutschland*. Wiesbaden. Franz Steiner Verlag GmbH.

³ Janert (1977, 1980)に掲載されている 3 文献は、彼の記述からも Collection of Rock に含まれるのは間違いない。しかし一方、筆者の調査で新たにその存在が確認された文献については、当図書館では“Collection of Rock”の括りで扱われてはいたものの、その登録時期を考慮すると、元々 Rock (Rock, Joseph F., 1884-1962)が持ち込んだものとは考えにくい。なお、Rock はナシ語の研究とその文献の収集でよく知られる。

⁴ 従来、仲家 (独 Chungchia, 仏 Choung-chia) 族と呼ばれていた民族 (現在の中国における布依 (ブイ) 族; なお「布依」は自称) は文字や文献を持たないと言われていたことから、筆者は、Janert (1977)において仲家と分類されている文献 Hs. Or. 687 は、文字や文献の体裁から、少なくとも仲家文献ではなく、実際のところ水書ではないかと推測していた。しかしながら、近年仲家族 (布依族) も文字を持っていた (る) との情報を得たことから、その同定に関しては専門家による検証結果を待ちたい。なお、フランス国立図書館で Choung-chia に分類されていた文献は、彝語東部方言の文献であると筆者は考える。これについては、稿を改めて検証したい。また、布依族とその言語については以下のサイト内のブイ語の記事に詳しい。 <http://www.e-surugadai.com/surugadai-selection/>

これらは世界的にも比較的早い段階で公刊された彝語文献のオリジナル資料であり、特にヨーロッパ所蔵の彝語文献に関しては初めてのものである。その点で、本資料は極めて貴重な資料といえるのだが、ここに収録されている画像には少なからず問題がある。単に文献の天地が逆である程度なら良いのだが、掲載されている多くの頁が文献の裏側であり、鏡文字の状態なのである。まさにこの一点のみ悔やまれる。

3 所蔵文献詳細

先の Janert の資料をもとに、筆者が 2015 年 12 月から翌年 1 月にかけてベルリン州立図書館で彝語文献の調査をした結果、カタログに掲載されている 3 点に加え、カタログ未収録の彝語文献 1 点、計 4 点の彝語文献が存在することが明らかになった。ベルリン州立図書館での Shelfmark は以下の通り。なお、Lolo1-3 は Janert (1977, 1980)における表記である。

Hs. Or. 688 : Lolo1, Janert (1977)に収録。

Hs. Or. 689 : Lolo2, Janert (1980)に収録。

Hs. or. 10695 : Lolo3, Janert (1980)に収録⁵。

Hs. Or. 13458, Janert の資料には未収録。筆者調査時にその存在が明らかとなった。

以下、それぞれの書誌情報を提示する。

3.1 Hs. Or. 688

筆者調査時には、Hs. Or. 688 は損傷が激しい⁶とのことで、現物を見る事が出来なかった。そういった意味でも、Janert が先述のカタログを早い段階で刊行した功績は計り知れない。ここでは Janert (1977: 825)に基づき、本文献の書誌情報⁷を記す。

なお、Janert (1977)は、本文献に書かれている彝語がどの方言に属すものか言及していないが、筆者は、その文字や文献の形式から、中国国内の北部方言（ノス彝語、Nuosu Yi とも。本稿では以下ノス彝語とする。）であると判断した。

⁵ Janert (1980)では、Hs. or. XXX と記載されているが、筆者が調査した際、その Shelfmark は Hs. or. 10695 であった。また、Janert (1980)では、なぜかこの彝語文献だけ Hs. or.のように、他の文献に置いている“Or”と書かれているところが、“or”のように“o”も小文字で書かれている。

⁶ 実際に Janert (1980: 1187)において、Hs. Or. 688 は「Hs. Or. 689 よりも保存状態が悪い。」との記述がある。

⁷ 損傷についても「亀裂がある」あるいは「擦り切れている。おそらく使用による摩耗。」等の詳細な記述があり、その具体的な場所や修復の状態も含め詳細に記録されているが、紙面の関係上ここでは割愛する。

Shelfmark: Hs. Or. 688

方言：北部方言（ノス彝語）

体裁：目の粗いボール紙製の約 30cm の長さの紙筒の中に、棒に巻き付けられた巻物が入っている。各ページの画像は Janert (1977:767-774) に掲載されている。

18 枚。紙の左上に 6cm ほど突き出した約 28.5cm の竹の棒が、青色の糸で約 4cm 間隔で 6 箇所しっかりと紙に縫い付けられている。

なお、テキストは 17 枚目の 10 行目で終了し、18 枚目は白紙。

文献の素材は、柔らかく、極めて薄い紙。一部フェルト状になった部分有り。片面にのみ文字が書かれている。

文献サイズは、幅 22.5cm、用紙の最下部が存在していないため、元々の長さは不明だが、最短箇所 6cm、最長箇所 33cm。

3.2 Hs. Or. 689

本文献に関する書誌情報は、Janert (1980) 並びに筆者の調査データに基づいている。

Shelfmark: Hs. Or. 689

方言：北部方言（ノス彝語）

体裁：Hs. Or. 688 同様、約 30cm のボール紙製の紙筒に入っている。紙筒の体裁は Janert (1977) における Hs. Or. 688 とほぼ同じであるが、筆者が調査した際には、筒の底は黒い布テープで、蓋の方はベージュの紙テープで貼り付けてあった。

文献サイズは、縦 25cm, 横 28cm。紙は透ける程薄く、黄色い。

21 枚、21 頁。片面にのみ文字が書かれている。紙を撚り合わせて作った紐で左側は大きく 2 ステッチで綴じられている。また、この紙紐は左上部で玉結びされている。ところどころ、四角で囲んだ章のタイトルらしきものが散見される。

一枚目の右上にロックコレクション内の番号“2”が黒インクで書かれている。ちなみに、本文献の損傷については、Janert (1980: 1187) に詳しい。

なお、Janert (1980: 1157-1167) で文献の各ページを確認できるが、文献の偶数ページ⁸はすべて裏側が掲載されているので、注意が必要である。そもそもこの大きな

⁸ つまり Blatt 2, 4, 6, ...20 まで。

ミスは、おそらくこの文献の綴じ方に起因すると思われる。この文献は、長い紙を二つ折りにしたものを複数組、先述の紙紐で綴じ合わせたと推測するが、長年の使用による摩耗で、その袋状の部分が切れてバラバラになったと考えられる⁹。これにより、文献のページの表同士、裏同士が向かい合わせになるという、変則的な形式となってしまった。更には、文献の紙自体極めて薄いこともこのミスに拍車をかけたに相違なからう。特に彝文字が読めない場合、よほど注意深く見ていなければ、どちらがページの表側なのか判別が難しかったと思われる。その結果、Janert (1980)に収録されている文献画像は、本文献及び Hs. or. 10695)共に、1 ページごとに裏側が掲載されており、鏡文字状態となっている。

3.3 Hs. or. 10695¹⁰

本文献に関する書誌情報は、Janert (1980)並びに筆者の調査データに基づいている。

Shelfmark: Hs. Or. 10695

方言：北部方言（ノス彝語）

体裁：ロックコレクションの一つ。

Janert (1980: 1188)によれば、この文献は、Rock によって“Lolo Ms.”と書かれた白い紙に包まれており、その紙の裏側には「1923 年、Weihsi から Salwin の Atuntzu への旅」と書かれていたという¹¹。

なお、Janert (1980: 1169-1183)における文献のページ順序は誤りで、本来、1 ページ目 (Blatt 1)とされているものが最終ページであると筆者は推察する。それは、ノス彝語の文献の大半においては、文字は通常左から書かれることによる。ただし、最終的判断には、更なる解読と内容の精査が不可欠であることは言うまでもない。

⁹ 彝語文献には、実際このような体裁のものが少なからず存在する。筆者は当初、このような文献について、なぜこのような風変わりな綴じ方をする必要があったのかと疑問を抱いていた。ところがある時、同様のページの並び方をした文献のうち、数ページの端が袋とじ状になっており、またその部分が擦り切れかけている状態にあるものを発見した。このことから、このタイプの文献は、本来二つ折りにした紙を綴じて作られたものであり、長年の使用によって袋状の端が摩耗し、切れてバラバラになってしまった結果であるとの結論に至った。

¹⁰ 注 5 参照のこと。

¹¹ 筆者は未見。筆者調査時には Hs. Or. 688, 689 同様、約 30cm のボール紙製の紙筒に入っており、特に紙で包まれてはいなかった。なお、鈴木博之氏より「Weihsi は維西、Atuntzu は阿墩子であろう。そうであるならば、Salwin は Mekong の誤りである可能性が高い。」とのコメントを頂いた。ここに感謝申し上げます。

文献サイズは縦 24.5cm、横 25.5cm。34 枚、34 ページ。紙は淡いベージュで、非常に薄い。

一方の端に細い紐がついた縦 21cm、横 29cm の濃紺の目の粗い綿布で包まれている¹²。よって、綿布よりも文献の方が縦に若干長いため、巻くと文献の上下が少しはみ出した状態になる。

本文献は、火箸状に先を二つに裂いた、長さ 28cm、幅 0.5cm の竹の棒に、二つ折りにした紙をその真中部分で挟み込んだのち、糸でかがって綴じてある。

1 枚目及び 3 枚目は空白。4 枚目以降は、8 枚目、17 枚目及び 34 枚目を除き、4 枚目と 5 枚目以後 32 枚目と 33 枚目まで、それぞれ文字の書かれた面同士が向かい合わせになっている。紙が極めて薄いことに加え、このような変則的なページ配列によってか、Hs. Or. 689 同様、Janert (1980:1168-1183)において、全ての偶数ページ¹³が文献裏側の画像となっている。

ところどころ、四角で囲んだ章のタイトルらしきものが散見される。

3.4 Hs. Or. 13458

本文献は、Janert (1977, 1980)においても、またそれ以外の先行研究においても、全く言及されておらず、筆者の調査で初めてその存在が明らかとなった。よって、本文献に関する記述は、全て筆者の調査データに基づいている。

文献 2 ページ目の中央部分には、“or. 1999 - 13458”との記述があり、ベルリン州立図書館の印が押されている。この記述から、本文献が当該図書館へ登録されたのは、1999 年であると推測される。

本文献は、彝語東南部方言の下位方言の一つである宜良下位方言（本稿では以下サニ彝語と呼ぶ。）で書かれている。在欧彝語文献において、サニ彝語文献は極めて珍しく、筆者の知る限りでは、現在これ以外には大英図書館に一巻所蔵されているのみである¹⁴。

Shelfmark: Hs. Or. 13458

方言：東南部方言・宜良下位方言（サニ彝語）

体裁：文献サイズは縦 26cm、横 20cm。40 枚 44 頁。

ページ左側を紐でかがって綴じてある。

紙質は粗く、比較的薄いものである。

¹² こちらの綿布は、筆者調査時に確認。

¹³ Blatt 2, 4, 6, ...30 及び 33。

¹⁴ 詳細については Iwasa (2004)を参照されたい。

文字は左から右へ、上から下へ書かれている。文字は基本的に墨で書かれているが、赤色で書かれている箇所もある。筆記具は、筆或いは竹ペンのようなものと推測されるが、詳細は不明。

序文以外は、一句が全て 5 文字からなる詩の形式で書かれている。句読点はない。

1 ページ目と 2 ページ目は、2 枚の紙が糊付けされているため、他のページよりもかなり厚みがあり、丈夫である。1 ページ目には、約 1.5cm x 1.5cm のマスが赤線で書かれている。横 11 マス x 縦 16 マス。それ以降は赤色で罫線が引いてあり、各ページ平均 10 行程度。同様に赤線で以て、1 ページ 3 段に分けられているが、文字はしばしばその区切りを無視して書かれている。

また、36 ページ目は、一枚の紙の両面に別の紙が貼り付けられており、裏側には赤色でマス目が書かれている。

39 ページには 3 行、40 ページには 4 行、筆で漢語が墨書きされている。39 ページのみ、他のページとは天地が逆になっている。

作成年代：最初のページの内容から、1934 年 1 月 12 日に書かれたことが判明¹⁵。

出所：この文献は、現在の中国雲南省昆明市石林彝族自治县圭山镇维则村のピモによって書かれた可能性が極めて高いことが判明した。

Iwasa (2018)によれば、39 及び 40 ページの漢語の文章中に登場する「徐」という姓が本文献の出所を明らかにする上で、大きな鍵となった。撒尼の人々の間にこの「徐」姓を持つ家系は存在せず、漢族に特有の姓であった。そして、この姓を持つ漢族が居住していたのは維則村に限られていたことから、本文献はこの地で書かれたと強く推定される。

内容：筆者は、Iwasa (2018)の中で当該文献が文芸作品である可能性を指摘したものの、その後更なる解読・分析の結果、Iwasa (2020)では、安定した土地を見つけ、理想的な家を建てるための指針及び方法を説いた経典の一種であろうとの見解を示した。

4 まとめと今後の課題

本稿では、これまでほとんど取り上げられることのなかった在独彝語文献について、その基本的情報を提供した。

ドイツにおける彝語文献は、同様にこれを有する他のヨーロッパ諸国¹⁶に比べ、数の上では圧倒的に少数であるものの、Hs. Or. 13458 を除く 3 巻について、Janert により詳細な記録

¹⁵ 詳細は Iwasa (2020)を参照されたい。

と文献の全ページが公開されている点で、彝語文献並びに彝語文語研究への貢献度は群を抜いている。

しかしながら、残念なことに、こうして文献の全ページが公開されているにも関わらず、その解読作業、並びに言語学的分析は殆どなされてこなかった。そこで、筆者は 2015 年から在独彝語文献の調査及び解読作業に着手した。その結果、筆者は 2015 年のベルリン州立図書館における初めての調査で、これまでその存在を知られていなかった彝語文献 Hs. Or. 13458 を確認し、文献のフォーマットや語彙、字体などから、当文献に書かれている言語がサニ彝語であると結論づけた。

この調査以降現在まで、ピモを含めたサニ彝語のインフォーマントとともに継続的に解読に取り組んでいるが、極めて個人的な文字体系である彝文字の特性に加え、現代ではすでに使用されなくなってしまった道具や語彙が多く含まれていることから、その作業は難航を極めている。現在、解読は半分程度まで進んでおり、その成果については稿を改めて提示したい。

ピモの高齢化と後継者不足は深刻であり、それ故、知識豊富なピモを見つけ、彼らと強固な協力体制を構築していくことは決して容易なことではないが、今後も在独サニ彝語文献だけでなく、ノス彝語文献の解読作業も進め、彝語研究にデータを提供していくことを今後の重要課題の一つとしたい。

参考文献

- Iwasa, Kazue (2004) “Axi and Azha - Descriptive, Comparative, and Sociolinguistic Analysis of Two Lolo Dialects in China-”. PhD Dissertation. Kobe City University of Foreign Studies.
- (2018a) “Current studies and future perspectives on the Yi manuscripts preserved in Europe – the case of Hs. Or. 13458 of Staatsbibliothek zu Berlin -”. Paper presented at the International Symposium of Ancient Texts and Languages of the Ethnic Groups along the Silk Road. 7th November 2018. Georg-August-Universität Göttingen. Göttingen, Germany.
- (2018b) *Remarks on Maps of the Yi Script Based on the Swadesh 100 Wordlist. Studies in Asian Geolinguistics, Monograph Series No.5.* Report of ILCAA Joint Research Project 2016-2017 “Studies in Asian Geolinguistics”. Tokyo. Research Institute for Asia and Africa (ILCAA), Tokyo University of Foreign Studies.

¹⁶ 現在までに彝語文献を所蔵していることが明らかになっているのは、イギリス並びにフランスで、両国合わせて、100 巻以上の文献が複数の機関に所蔵されている。なお、ロシアにも彝語文献が所蔵されているといった情報もあるが、現在までのところ未確認である。

———— (2020) “Geolinguistic Approach to the Analysis of Yi characters and its current findings”. Paper presented at the Recent Advances in Yi Studies. 11th February 2020. SOAS, University of London. London, United Kingdom.

Janert, Klaus Ludwig (1977) *Nachi-Handschriften nebst Lolo- und Chungchia-Handschriften*. Teil 4. *Verzeichnis der Orientalischen Handschriften in Deutschland*. Wiesbaden. Franz Steiner Verlag GmBH.

———— (1980) *Nachi-Handschriften nebst Lolo-Handschriften*. Teil 5. *Verzeichnis der Orientalischen Handschriften in Deutschland*. Wiesbaden. Franz Steiner Verlag GmBH.

受理日 2020 年 4 月 6 日

カムチベット語塔公 [Lhagang] 方言における間投詞と談話標識

鈴木 博之

四郎翁姆

国立民族学博物館

キーワード：カムチベット語、Minyag Rabgang 方言群、間投詞、あいづち、フィラー

1 はじめに

本稿では、カムチベット語 Minyag Rabgang (木雅熱崗) 方言群 Lhagang (塔公) 方言¹の間投詞を記述し、加えて、まとまった言語資料を転写するときにおける間投詞の記述上の問題点を検討する。あわせて、あいづちやフィラーなどの談話標識も記述の対象とする。擬音語・擬態語は含めない。

間投詞は、記述言語学では言語によって「閉じた語類」をなす1つのカテゴリーとなる (Aikhenvald 2015:200)。その機能は話者の感情を表現すると言える (Aikhenvald 2015:98)。チベット系諸言語に関する最近のまとまった記述研究には、間投詞の記述がある。たとえば、邵明園 (2018:162-163) や海老原 (2019:96-97) などが挙げられる。この主題に関する記述は少ないが、記述文法を構成する一部分であることには変わりがない。また、記述の分量からも、チベット系諸言語において間投詞は閉じた語類であると認められる。

筆者は Lhagang 方言の自然発話や長編資料を書き起こす際に間投詞を取り扱う必要に迫られたが、特に統一した基準で取り扱ってきたとは言えなかった²。統一的な基準を設けるか否かという問題のほか、記述すべき内容は何であるのかも判断に迷う場合があった。このため、間投詞の語形と音声学的な特徴、またその機能をまとめて参照できる形で提供しておくのが有用であると考えた。

間投詞は、その品詞の性質上、音韻表記が困難である。Aikhenvald (2015:200) は「間投詞は一般的ではない音声と音節構造を含む傾向にある」と述べている。そのため、抑揚など韻律特徴も含めて記述しなければ正確を期す記述にはならないが、そこまでの説明がないのが通例である。本稿では、著者が物語収集とその発話構造の分析を通して気がついた間投詞の用法をもとに、また Lhagang 方言母語話者である第2著者による内省に基づく資料を加え、簡にして要を得た間投詞の記述を目指す。Lhagang 方言の長編資料のうち筆者が公開しているものには、鈴木ほか (2015) の『菩薩の愛する地・塔公』、Suzuki & Sonam Wangmo (2017bc, 2018) の『王

¹ Lhagang 方言の社会言語学的特徴の概観については、Suzuki & Sonam Wangmo (2015ab, 2017a) を参照。文法特徴の概観については、鈴木、四郎翁姆 (2016) を参照。

² すでに出版した論文・資料の中には、本来擬音語である動物の鳴き声を語釈において間投詞として記述したものがある。

様のぶた』(2017b)、『雲雀になった王子の妻』(2017c)、『3羽の鳥』『雲雀とシャコ』(2018)がある。これらに加え、未公開のものに『羊と狼』『白いゾモ』『うさぎと虎』の資料を用いる。

なお、本稿で記述する形式には、Lhagang 方言の音体系(付録参照)に認められない特徴、たとえば音節核となる鼻音などが含まれる。間投詞の音形は、原則音声表記であることを断っておく。また、見出し語部分には声調符号を付さない。

2 独立した発話における間投詞と談話標識

独立した発話における間投詞とは、発話の文脈がなく、間投詞単独で機能を果たすものを指す。物語などに現れる例で出版されているものについては、当該箇所を指示する。用例の文脈については、当該文献を参照されたい。

2.1 間投詞

?a

意外であることに遭遇したときや突然思い出した時に発する。

?e

意外であると認識した場合に発する。

?o

驚いたときに発する。

『3羽の鳥』の(2.10, 2.13)や『雲雀とシャコ』の(2.5)に実例がある(Suzuki & Sonam Wangmo 2018)。最後の例について、語釈に変更を加えて以下に掲げる。

- (1) 'te k^ho-ro ^ma: la ?o 'hse?-jo? s^ha re?
 それから 3-自身 下へ INTJ 殺す-CONT.INFR
 それから、(雲雀は) 下へ・・・あっ、(シャコの子を) 殺してしまったんじゃないかな。

なお、(1)の発話における間投詞は、語り手の感情を表出している。

fio

驚いたとき、何かを突然思い出したときに発する。

『王様のぶた』の(7.10, 7.12)に実例がある(Suzuki & Sonam Wangmo 2017b)。後者について、語釈に変更を加えて以下に掲げる。

- (2) 'fio ʔp^huʔ ŋgo 'lo^hte ʔja la ʔ^hidzuʔ-t^he: 'ta
 INTJ [儀式の名称] 上へ 走る-PFT.SEN そのとき
 'k^ho-la ʔ^hiduuʔ ʔjaʔ k^hã mba 'zei-nə ʔ^hido: su 'ɕaʔ h^hteiʔ ʔ^hidzaʔ-t^he:
 3-DAT [ヤクの呼称] 言う-CONJ 絶対に 一回蹴る-PFT.SEN
 「ああっ、『ぶたの頭を回す儀式』が行われたとき、あいつ（和尚）は俺を『悪魔の茶色いヤク』と言って、一回蹴っ飛ばしやがったんだ」（と、茶色の野生ヤクは言いました）。

(2)に現れる間投詞は、物語の中の「茶色の野生ヤク」の感情を表出している。

ʔa ma

意外であることに驚いたときに現れる。

ʔa ts^ha

熱いものに触れてしまった時に発する。

ʔa tsi:

驚いたときに発する。

『うさぎと虎』に以下のような実例がある。

- (3) ʔa tsi: ʔɕ^hoʔ-la-nə 'zĩ mbo-tɕiʔ ʔza-ʔ^hdzu ʔjoʔ-k^he:
 INTJ 2-DAT-TOP おいしい-NDEF 食べる-NML EXV-PFT.NSEN
 わあ、おいしそうな食べ物をもっているね！

(3)に現れる間投詞は、物語の中の「虎」の感情を表出している。

ʔa ha / ʔo ho

疲れたときに発する。2度繰り返して用いられることがある。

『白いゾモ』に以下のような実例がある。この状況は、老いた鬼女が水を遠くから汲んで運んできたところを描写している。

- (4) ʔa ha ʔa ha-tu ʔo ho ʔo ho ʔzei-nə ʔkɛ: t^hoʔ ʔja la 'fio: k^ha-nə
 INTJ.RDP-COM INTJ.RDP 言う-CONJ 階段の上 上へ 来る-とき-CONJ
 (老いた鬼女が) はあはあ、ふうふうと言いながら階段の上へ上がってきたとき、

ʔa ra ra / ʔa tsi tsi

疲れたときに発する。通常の語形式と同様に、第3音節は弁別的声調が認められず、低平で実現される。

『白いゾモ』に以下のような実例がある。直前の例(4)と同様に、この状況もまた老いた鬼女が水を遠くから汲んで運んできたところを描写している。

- (5) ʔa ra ra-tu ʔa tsi tsi `ze:nə `nõ `fiə:k^ha
 INTJ-COM INTJ 言う-CONJ 家の中 来る-とき
 (老いた鬼女が) ああ、よいしょと言いながら家の中へ入ってきたとき、

^htu fia

掛け声の一種である。「さて、さあ」と訳しうる。全体で下降の声調をとる。

『雲雀になった王子の妻』の (6.2) に実例がある (Suzuki & Sonam Wangmo 2017c)。語釈に変更を加えて以下に掲げる。

- (6) ^htu fia `tə ⁿdzə: mo-tə ⁿdzə-^{fi}go tu ^hsã-k^he:
 INTJ そのとき 雲雀-DEF 捕まえる-FUT.SEN 思う-PFT.NSEN
 「さあて、雲雀を捕まえてやる」と (父王は) 思いました。

2.2 談話標識

談話標識については、例をあげないことにする。

te

発話を続けていくときに、続きがあることを示す。また、続くべき語句を探している場合に、フィラーとして2~3回繰り返すこともある。日常会話でも語りでも頻繁に用いられる。「それで」、「で (ね)」、「で、で、で、」などと訳しうる。

語釈には「間投詞」ではなく、「接続詞」または直接「それから」とすることもできる³。複数の語類をまたぐ性質がある。

ʔə jɪ:

発話途中でポーズをはさむときに現れる、フィラーの一種である。咳払いに近いと言える。

音形を見ると、チベット文語形式の *e yin* と対応するように見えるが、「そうだろうか」という文字通りの意味で用いているわけではない。

『雲雀になった王子の妻』の (1.2) に具体例がある (Suzuki & Sonam Wangmo 2017c)。

tə tə reʔ

会話や語りにおいて、発話したい語が出てこない場合にフィラーとして用いられる。「あれだよ、あれ」と訳せる。通常2つの声調領域をもち、音韻表記で /tə 'tə reʔ/ となる。

語源としては、チベット文語形式の *de de red* と対応すると見られ、直訳では「あれはあれだ」となる。

『雲雀になった王子の妻』の (3.7) に具体例がある (Suzuki & Sonam Wangmo 2017c)。

³ これまで筆者は「それから」と語釈を与えてきた。

tə ri ^hdə re?

特に語りにおいて、続きの発話が出てこない場合にフィラーとして用いられる。「ええっと」と訳して問題ない。

語源としては、チベット文語形式の *de red 'di red* と対応すると見られ、直訳では「あれだ、これだ」となる。時によって、語りに現れるこの形式を、より語源に近く「何と云えばいいのか」や「ああでもこうでもない」というように訳することも可能である。

複数の物語に現れる。この中で、『王様のぶた』(Suzuki & Sonam Wangmo 2017b) では本文中に書き入れたが、他のものでは原則省略した。

te: ze: ^hdzɯ rə la / ze: ^hdzɯ tə

特に語りにおいて、ある事柄を言葉でうまく表現できないときにフィラーとして用いられる。「どう言ったらいいのか」というニュアンスがある。

3 応答に現れる間投詞

応答に現れる間投詞とは、間投詞単独で機能を果たすものの、何らかの発話を受けて、それに反応して現れる場合を指す。談話標識としての機能を兼ねるが、一律間投詞と呼ぶ。

ja

対話相手の発話に同意するときに用いられる。2度繰り返されることが多い。

音調はほぼ上昇調である。

fio ja

上記の ja にほぼ共通する。相手の発話に対し、十分納得して肯定の返事をするときに用いる。

音調は各音節が上昇調をとる。各音節は単独で間投詞として用いられる形式と共通するが、2つの音節を分離して解釈するのは適当でない。実際の記述にあたっては、[fio jaʌ] と記述することができる。

te

対話相手に続きの発話を促すときに用いる。単独で発話が完成する。

(7) te

INTJ

それで?/それから?

音調は上昇調をとる。

ŋ

対話相手の発話にはい、いいえの応答を表すときに現れる。単独で発話が完成する。音表記はいずれもŋで受け入れられるが、音調が異なる。

(8) a ŋ↘
INTJ
はい。

b ŋ↗
INTJ
いいえ。

便宜的に「はい」「いいえ」と訳すが、実際の会話では「うん (肯定)」「ううん (否定)」と訳すほうが現実的である。

「はい」のŋは常に短く発音されると言える。しかしながら、「いいえ」については、ŋが長く発音される [ŋ:] という現れがある。また、その音調が場合によっては [ŋ²² ŋ⁵⁵] のように、あたかも独立した声調を担う2つの音節核が存在するかのような現れをとる。全体としては上昇の音調をとっているため、音声転写では [ŋ↗] としておいて問題ない。

m

対話相手の発話にあいづちをうつ場合に現れる。同一の音節が2度または3度繰り返されることが多い。通常は各音節とも下降の音調になる。単独で発話が完成する。

(9) a m↘
INTJ
うん。

b m↘ m↘
INTJ
うんうん。

あいづちには両唇を閉じないŋ [ŋ↘] も用いられる。これは「はい」の意味で用いている、つまり改まったあいづちとして現れているのか、単にmの変異として許容される範囲であるのかは不明である。さらに多くの事例の収集と検証が必要である。

4 まとめ

本稿では、Lhagang 方言の間投詞および談話標識を記述した。間投詞は音調とともに意味が異なる場合があることを明らかにし、それを記述することで、実際に音転写が必要な時に参考になるように配慮した。ただし、間投詞は往々にして感情を反映する抑揚を伴うため、本稿の記述ではなお不十分な部分もある。事例の収集と必要な記述がこれからの課題である。

補遺：Lhagang 方言の「感嘆語」

『羊と狼』には、次のような例がある。

- (10) 'te ^hduʔ-k^he: ^hgõ:
 それで つらい-PFT.NSEN EXCLM

それで、(母羊と子羊は) 悲しくなりました。かわいそうに！

この/^hgõ:/は完了アスペクトとともに、かつ動詞句に続いて現れる形式であり、明らかに本稿で記述した間投詞とは異なるが、「かわいそうに」という、感嘆を表現する音節である。品詞上、間投詞に非常に近いが、「感嘆語」(exclamative) という品詞を立てておく。現在のところ、/^hgõ:/しか見つかっていない。

付録：Lhagang 方言の音体系とその表記（物語の語り手の音体系に従った拡張版）

・音節構造

最大の音節構造（分節音の配列）は次のようである。

${}^c C_i GVC$

このうち C_i （初頭主子音）と V （音節核の母音）が必須であり、 $C_i V$ を音節の最小構成とする。 c には前気音及び前鼻音が現れ、 G には w, j が現れる。

・子音

主子音 (C_i) 位置に現れる要素の一覧は以下のようである。口蓋垂音系列をもつ話者もいる。

		両唇	歯茎	そり舌	硬口蓋 前 後	軟口蓋	口蓋垂	声門
閉鎖音	無声有気	p^h	t^h	t^h		k^h	(q^h)	
	無声無気	p	t	t		k	(q)	ʔ
	有声	b	d	d		g	(g)	
破擦音	無声有気		ts^h		$tʃ^h$			
	無声無気		ts		$tʃ$			
	有声		dz		$dʒ$			
摩擦音	無声有気		s^h		$ʃ^h$			
	無声無気	ϕ	s	$\ʃ$	$ʃ$	x		h
	有声		z		$ʒ$	γ	(β)	fi
鼻音	有声	m	n		η	η		
	無声	$\underset{\cdot}{m}$	$\underset{\cdot}{n}$		$\underset{\cdot}{\eta}$	$\underset{\cdot}{\eta}$		
流音	有声		l	r				
	無声		$l̥$					
半母音	有声	w			j			

・母音

舌位置による一覧は次のようである。

	i	$ɯ$	$ɯ$	u
	e	$ə$		o
	$ɛ$			$ɔ$
	a			$ɑ$

母音には長短および鼻母音/非鼻母音が弁別的である。母音の長短と鼻母音/非鼻母音は互いに独立している。

・超分節音素

語単位として、次のピッチパターンが認められる。

ˉ: 高平

ˊ: 上昇

ˋ: 下降

ˊˋ: 上昇下降

略号一覧

2	2 人称	EXCLM	感嘆語	NSEN	非感知
3	3 人称	EXV	存在動詞	PFT	完了
COM	共格	FUT	意思未来	RDP	重複
CONJ	接続詞	INFR	推測	SEN	感知
CONT	継続	INTJ	間投詞	TOP	主題
DAT	与格	NDEF	不定標識		
DEF	定標識	NML	名詞化		

参考文献

海老原志穂 (2019) 『アムド・チベット語文法』 ひつじ書房

鈴木博之、四郎翁姆 (2016) 「カムチベット語塔公 [Lhagang] 方言の文法スケッチ」『言語記述論集』 8, 21-90 電子版：<http://id.nii.ac.jp/1422/00000897/>

鈴木博之、四郎翁姆、拉姆吉 (2015) 「チベット語塔公 [Lhagang] 方言の物語『菩薩の愛する地・塔公』 訳注—塔公方言の多層構造と物語の異同に関する考察を添えて—」大西正幸・千田俊太郎・伊藤雄馬編『地球研言語記述論集』 7, 111-140
電子版：<http://id.nii.ac.jp/1422/00000874/>

Aikhenvald, Alexandra Y. (2015) *The art of grammar: A practical guide*. Oxford University Press.

Suzuki, Hiroyuki & Sonam Wangmo (2015a) Quelques remarques linguistiques sur le tibétain de Lhagang, «l'endroit préféré par le Bodhisattva». *Revue d'études tibétaines* Vol. 32, 153-175.
Online: http://himalaya.socanth.cam.ac.uk/collections/journals/ret/pdf/ret_32_05.pdf

—— (2015b) Lhagang Tibetan of Minyag Rabgang Khams: Vocabulary of two sociolinguistic varieties. *Asian and African Languages and Linguistics (AALL)* 10, 245-286.
Online: <http://hdl.handle.net/10108/85072>

—— (2017a) Language evolution and vitality of Lhagang Tibetan: a Tibetic language as a minority in Minyag Rabgang. *International Journal of the Sociology of Language* 245, 63-90. doi: 10.1515/ijsl-2017-0003

—— (2017b) *King's pig*: A story in Lhagang Tibetan with a grammatical analysis in a narrative mode. *Himalayan Linguistics* 16.2, 129-163. Online: <https://doi.org/10.5070/H916233598>

—— (2017c) *Prince's wife become a lark* in Lhagang Tibetan of Khams. *Kyoto University Linguistic Research* 36, 71-91. Online: <https://doi.org/10.14989/230688>

—— (2018) Two folktales in Lhagang Tibetan (Minyag Rabgang Khams): *Three Birds and Lark and Partridge*. *Asian and African Languages and Linguistics (AALL)* 13, 131-150. Online: <https://doi.org/10.15026/92954>

邵明園 (2018) 《河西走廊瀕危藏語東納話研究》 中山大學出版社

[付記]

本研究に際しては、平成 28-30 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (A) 「チベット・ビルマ語族の繋聯言語の記述とその古態析出に関する国際共同調査研究」 (研究代表者: 長野泰彦、課題番号 16H02722)、平成 29-令和元年度日本学術振興会科学研究費補助金若手研究 (A) 「チベット文化圏東部の未記述言語の解明と地理言語学的研究」 (研究代表者: 鈴木博之、課題番号 17H04774) および平成 29-令和元年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (B) 「高精細度広域地図による中国および隣接する多言語地域の地理言語学的研究」 (研究代表者: 遠藤光暁、課題番号 18H00670) の援助を受けている。

Interjections and discourse markers in Lhagang Tibetan

Hiroyuki SUZUKI

Sonam Wangmo

abstract

This article provides a list of interjections and discourse markers attested in Lhagang Tibetan. The data has been collected from everyday conversations as well as storytelling. It consists of two main parts: the use of interjection alone and in response.

Examples are described with prosodic forms if necessary. This practice can help readers recognise the function of a given interjection.

A supplement on ‘exclamative’ is added at the end of the article. The example suggests that Lhagang Tibetan distinguishes interjections from exclamatives.

受理日 2020 年 4 月 11 日

[書評] 仁増旺姆 (著) 《迭部藏語研究》

北京：中央民族大學出版社、2013 年、3+245pp. + 1 地図

鈴木 博之

国立民族学博物館

キーワード：チベット系諸言語、方言学、音声学、歴史言語学

1 本書の構成

本書は中国甘肅省迭部県で話される3つの方言に関する音声、音韻、語彙および文法の概要を記述し、これら3つの方言の比較研究を加えたものである。付録に3方言それぞれの約2100語の語彙集が付属する。本書で言及される方言資料は著者が現地調査を行い記述したものである。全5章および付録2編に分かれ、これに黄布凡による序文、ならびに目次、参考文献、あとがき加わる。全5章の内容は次のようである。

- | | |
|------------|------------|
| 1. 序論 | 4. 洛大方言の概況 |
| 2. 電尕方言の概況 | 5. 比較研究 |
| 3. 旺藏方言の概況 | |

本書の基本的な方法論はチベット語方言の記述的研究に重点を置いているけれども、研究の動機と目的は、序論に示されるように (pp. 11-12)、方言の帰属を確定するという点が含まれていることから、歴史的、通時的研究を念頭に行われている。これはチベット言語学 (西田 1970:xv の記述を参照) では通常のことである。チベット語の方言記述においては、共時的記述とともに、方言形式とチベット文語形式 (以下「藏文」) との対照を通じて通時的な音対応を明らかにする作業が付属する。本書は共時的な記述研究に重点を置いているため、藏文との対照は全面的には行われておらず、必要な個所を述べるにとどめているが、付録1の語彙集 (pp. 143-234) にそれぞれの口語形式に対応する藏文が添えられており、資料的価値がある。

本書評では、著者によって明らかにされた迭部県のチベット語の特徴について簡潔に検討を加えるとともに、本書がもつ全般的な問題点を提起し、評者の考えを合わせて述べていく。

2 本書の問題提起および方法論の検討

本書の問題提起および方法論ならびに提起された問題に対する考察の結果は第1章 (序論) で表明されている。《迭部県誌》(1998) の記述によると、同県内には6つの異なる方言群があるとされ、本書はその中からそれぞれ異なる方言群に属する電尕方言、旺藏方言、洛大方言の記述を提供している。これら3つの方言の記述を同時に提供することで、迭部県チベット語の多

様性について共時的側面から一定の具体的な特徴をつかむことができる。

一方で著者が迭部県の方言を研究するようになった経緯には、通時的な関心もまた認められる。それは、同地域の方言がアムド地域にありながらアムド方言とは異なる言語特徴を持っているという、先行研究でも述べられていることがあるほか、これらがチベット語の中で方言所属が未確定である点も指摘できる。また、特に後者の問題点にこそ研究の意義があると強調する (pp. 4-12)。第1章の言語学的な記述はほぼ通時的考察によって占められているとよい。ここで述べられる通時的考察の結果と主張は第5章(比較研究)を踏まえている。ただし、参照ページや具体例が付されていないため、結論に至った経緯が不明瞭に見える点は不親切であろう。

評者は以上の問題意識については妥当であると考えている。しかしながら、本書の記述と考察を見ると、この疑問を解決するための方法論が適切であるとはいえない。このように判断するのは、本書の通時的考察に対する姿勢がこれまでの中国で行われてきた「3大方言(ユー・ツァン、カム、アムド)」を主軸とするチベット語方言研究と同様の考察過程を踏襲しているためである。具体的には、方言所属を考えるにあたって最も重要な役割を果たすであろう「共通の改新」に関する認識が歴史言語学的な取り扱いとは異なっている点が指摘できる。たとえば、迭部県の諸方言に認められる音体系が別の方言(群)と類似しているからといって、両者の類似性が必ずしも「共通の改新」を経て成立したとは断定できないはずであるが、本書を含め多くの中国のチベット語方言研究がそれをめぐる議論を欠いている。したがって、評者は著者の「迭部県の諸方言はカム方言に属する独立した下位方言群に分類すべき」(p. 11)という見解には同意できない。本書には黄布凡による序文が付されているが、そこでは著者の資料が豊富で分析が詳細で合理的であると評している点も、やはり理解しがたい。こういった問題意識は中国国内の研究者にはほぼ認められないため、仕方のないことであるかもしれないが、読者は十分に気をつけておく必要がある¹。

以下に、書評読者の理解のため、2つの問題を提起しておきたい。

(1) 方言区分に関する問題

カム方言は内部分岐が激しく、Tournadre (2014)の主張に見られるように、「カム方言」が方言レベルで1つのまとまりをなすとは考えるのは合理的ではない。Tournadre (2014)において言及されるカム方言の変種数は中国で知られているものより詳細で、さまざまなチベット言語学上の新事実が含まれている。また、Sun (2003)、Tournadre (2008)、鈴木 (2009)などの先行研究は、中国大陸部のチベット語方言研究の枠組みに対してさまざまな視点から問題を提起している。評者は、これらの研究の意見を踏まえ、中国大陸部で行われているチベット語方言研究の枠組みから早急に脱却すべきであると考えている(鈴木 2014, 2016a; Tournadre 2014 もあわせて参照)。確かに、これらの研究および主張は中国大陸部では主流ではないため、著者の枠組みには沿わないものである。しかしながら、本書の読者はより客観的な立場にたって、著者

¹ なお、評者の迭部県を含む地域のチベット系諸言語をめぐる分類に関する見解は、鈴木 (2015, 2016a) および Tournadre & Suzuki (forthcoming) で示してある。

の、ひいては中国大陸の研究者による研究の枠組みそのものが有効であるかどうかをよく検討すべきである。

評者が著者の「迭部県の諸方言はカム方言に属する独立した下位方言群に分類すべき」という主張に同意できない具体的な理由として、次の点を指摘したい。それは著者のカム方言についての理解が不十分だと考えられる点である。本書 p. 5 の記述に従うならば、カム方言の特徴は格桑居冕、格桑央京 (2002) の記述に基づいていると読める。この文献の記述は確かに他の文献よりはカム方言の多様性を反映しているが、これをもってカム方言の全容を理解することはできない。また、この問題点は、著者の本書に先行する論文 (仁増旺姆 2012) にも見て取ることができる。この論文において、著者は存在動詞 *snang* の分布について地名を列挙しているが、カム地域に分布する方言の中で著者は巴塘方言のみを挙げている²。しかしながら、*snang* を用いる方言は、巴塘方言をはじめ、甘孜州南部および木里県ならびに迪慶州などで話される諸方言ほぼすべてが該当し (鈴木 2014, 2016b)、またチベット自治区昌都市南部、林芝市東部一帯の諸方言にも認められる³。評者は、著者のこのような記述に見られる問題を根拠に、著者のカム地域のカム方言に対する理解が十分ではないと判断する。これが本書の考察にも流用されている点 (p. 10) を見ても、この批判的を射ているといえるだろう。

本書において著者は迭部県の方言がカム方言と類似する具体的な例として、次のようなものを挙げている：子音の総数、前鼻音の有無、有気/無気の対立、摩擦音音素、無声鼻音、蔵文 *my* の音変化⁴、蔵文 *zl, sl* の音変化、母音の総数、二重母音、音節末子音、声調の有無、音節の縮約、蔵文足字を含む形式の音変化、母音+末子音の豊富な対応関係、音節末子音の変化、母音調和、声調発生の構造 (pp. 5-11)。加えていくつかの語彙の特徴も挙げている。評者はこの中で、声調発生の構造について特に注目したい。本書における声調の記述については本書評第3節で検討したいが、具体的にどのような現象がカム方言と共通するのか、実際の例を欠いているため、本書の範囲内では判断がつかない。また、「声調」という用語が厳密にどのような音声現象を表しているのか記述がないのも問題である (朱曉農 2010 参照)。加えて、蔵文足字を含む形式の音変化が多様で複雑である点がカム方言と共通するという論理は、理解に苦しむ。鈴木 (2009) などは「音変化が複雑であるがゆえにカム方言の内部分岐を明らかにしなければならない」と考えている。「複雑である」ことをそのまま「共通の改新」ととらえるのは無理であるだろう。また、これらの指標の多くは瞿靄堂、金效静 (1981) や西 (1986) などの先行研究でも述べられているが、これらの基準は方言の類型的特徴に基づく分類であるという点に注意が必要である。

² チベットの伝統的地理区分としての「カム」を指す。四川省甘孜州、雲南省迪慶州、チベット自治区昌都市に相当する地域のことである。著者は当論文において、巴塘方言に続いて「その東に位置する方言所属が未定の方言群」も挙げている (仁増旺姆 2012:111) が、これらは本書が扱う甘肅省南端に分布する、中国のチベット語方言分類でいうところの「カム方言」を指しており、カム地域に分布するその他の方言への言及はない。

³ 評者の未発表調査資料による。

⁴ 著者は蔵文と口語の対応関係を「音変化」としているが、厳密には「音対応」と呼ぶべきであろう。

(2) 音変化の理解に関する問題

以上のような方言研究の大枠に関する問題のほかに、本書の通時的考察にもまた重大な問題点が認められる。著者は、上に述べた蔵文足字を含む形式に関する言及において、「『漢族』『鳥』… (中略) … は迭部チベット語上迭方言の中で歯-歯茎音になるが、これらの語において足字 *y* が上迭方言では *r* に転化したことを物語っている」(p. 8)⁵ と述べている。説明の際に音声形式など具体例を添えていない点は不親切であるが、ここで言いたいことは、たとえば電尕方言における /dza¹²/「漢族」(蔵文 *rgya*) や /sa¹²/「鳥」(蔵文 *bya*) のような音対応のことである。これについて参照点とすべき現象に、蔵文足字 *r* を含む例が挙げられる。たとえば、/tsha⁵¹/「血」(蔵文 *khra*) や /sa⁵⁴/「髪」(蔵文 *skra*) のような例がある。著者は (p. 8) の説明において、足字 *r* を伴う例が歯-歯茎音と対応する例を参照しつつ、足字 *y* を伴う形式に対応する口語が成立する前に、*rgya* > *rgra* > /dza/ および *bya* > *bra* > /sa/ という音変化を経たと主張したいようであるが、江荻 (2002) や張濟川 (2009) などを参考にすれば、このように音変化を仮定するのは極めて異例であると理解できる。特に *bra* と /sa/ が対応する事例は他の方言には認められず、一方 *bya* と直接に対応する例は、たとえば九寨溝風景区の方言 (鈴木 2008b) や郷城県の方言 (鈴木 2007) などに散見される。それでは以上の例についてどのように解釈を与えることができるだろうか。以上の事例は足字 *y* をもつものの音対応が足字 *r* をもつものの音対応に合流したというのが著者の解釈であるが、おそらくは王雙成 (2012) も指摘するように、蔵文でそもそも足字 *r* をもっている例のいくつかは足字 *y* をもつ形式に対応するものであった可能性がある。すなわち、蔵文 *skra*「頭髮」の *r* 部分が *y* になった *skya* という形式を経て、/sa⁵⁴/ (p. 157) というように、上に掲げた歯-歯茎音との音対応になるという過程を経ているものと考えられる。これは多くのアムド方言で認められる現象である (王雙成 2012) が、これと並行する現象が迭部県の方言にも見られると解釈するのが妥当であるだろう。この意味で、カム方言にのみ注目するのではなく、アムド方言も参照する必要性があることも指摘できる。

さて、著者は一方でチベット語の方言研究を地理上の分布関係に基づいて行う姿勢をとっている。そして、それが先行研究でも言語系統が問題になっているペマ (白馬) 語 (西田・孫 (1990)、張濟川 (1994)、黄布凡、張明慧 (1995)、孫宏開等 (2007) などを参照) の言語学上の位置を確定することにつながるという見通しを述べている (p. 11)。同様の問題意識と研究の方向性については鈴木 (2008b) がすでに述べている。四川・甘肅両省の境界に分布する、いわゆるアムドチベット語とは異なるチベット語方言群の中で、迭部県の諸方言がその地域の中心位置を占めるという地理的条件もまた、著者が迭部県を研究対象にした理由に数えられる。このような視点は、これまでの中国のチベット語方言研究に見られないものである。評者は本書がこのような問題意識を表明している点を高く評価したい。

⁵ 一部用語に関しては書評読者のことを考えて、直訳ではなく同義の用語に置き換えた。

3 本書の記述研究の検討

本書の主たる記述の対象は、迭部県で話される電尢、旺藏、洛大各方言の音声、音韻、語彙であるが、個別の方言の記述においては、簡単な文法スケッチが付属しており、形態統語の方面についても一定の情報を提供している点で、非常に興味をそそられるものとなっている。ただし文法スケッチはやや簡略すぎる感があり、記述にもう少しページを割いてもよかったかと考える。また、各方言の記述の分量はバランスを欠いており、第2章で扱われる電尢方言の記述が最も多く (pp. 13-50; 計 38 ページ)、次いで第3章の旺藏方言 (pp. 51-77; 計 27 ページ)、第4章の洛大各方言 (pp. 78-102; 計 25 ページ) と続く。少なくともこれら3種の方言は、第1章で紹介されるように異なる方言群に属しているのであるから、それぞれの記述の分量を平均的に行うほうが公平であると考ええる。特に声調をめぐる記述については、電尢方言が最も詳細で、残りの2種は簡潔にとどまっている。研究書としての形態から考えれば繰り返しを避けたものと考えられるが、資料性の高い書物においては、それぞれの変種の記述は独立して行われるべきであろう。

付録1の3方言の語彙集についてみると、資料的価値は確かに高いものの、1つの重大な欠陥が認められる。それは動詞の形態変化に関して何の情報も記載されていない点である。先行する文法スケッチには、すべての方言について動詞の形態変化が認められるという記述がある (pp. 41, 72-73, 100)。語彙表に書き込むのが困難であれば、別に独立した表を設け、動詞の形態変化を丁寧に記述すべきであったろう。

具体的に見ると、本書の音声記述は整然としているが、記述方法や音韻分析に関して、疑問が残る点も少なくない。

まず指摘すべき点は、音声学の用語である。本書の用語は中国大陸部で広く通用しているもの (《方言調査字表 (修訂本)》1981:81 など参照) に従っているため、中国の音声学の用語に慣れていない場合、読解に労を要する。特に第1章では解説中に現れる用語に対し音標文字が付されているわけではないため、中国の独自の用語体系を理解するのに時間がかかるかもしれない。第1章には著者にとって重要な主張が含まれているため、音標文字を添えておくほうが理解しやすかったと考える。また、読者はこの種の用語を踏襲する必要はなく、朱曉農 (2010) などを参照して適切な用語に置き換えて理解するほうが読みやすいだろう。

次に第2～4章で行われる3種の方言の音声記述について見ていく。分節音の表記に関して特に指摘しておくべきものは、電尢方言の /ɬ/ (p. 13)、/ə, (ɿ, ɨ)/ (p. 15) と旺藏方言の /a, (e)/、/ə, (ɿ)/ (p. 53) という記述であろう⁶。著者は実際の音声実現をできる限り記述に反映しようとする姿勢で記述しているが、/ɬ/は実際に摩擦音であるかは問題があるため、解説が必要になる点である。この問題は張濟川 (2009:278-282) に記述がある。次に表記の上で () に入っている [e, ɿ, ɨ] は音声学的な変異であると明記されているものの、語を表記する際には実際の音声に近いよ

⁶ 本書の記述では / / が記述されていないが、これらの記述を音素表記と理解し、本書評の文中では // を付加して掲げている。

うに記述されている。この措置が必要であるかといえば、音韻表記を重んじる読者は簡素化した記述を望むだろうが、チベット語方言学上の資料的価値という面から見れば必要であると評者は評価する⁷。本書は方言比較が最終的な考察になっているため、細かい方言差異も省かずに示しておく必要がある⁸。しかしながら、p. 28 などに見られる [rɿ] という表記については疑問が残る。/r/は本書の記述 (pp.14, 52, 79) にあるように、「実際の音価は [z]」というようにそり舌音であるから、後続の子音性母音はそり舌性を伴う [ɿ] を用いるほうが適切ではないかと考える⁹。

著者は記述対象の3つの方言について、すべてに5つの声調対立を認める一方、母音には長短を認めていない。このうち電尕方言については、長短と声調の調類を絡めて記述している (pp. 17-20)。このような記述の仕方は珍しいものではない (格桑居冕 1985、黄布凡等 1994 など) が、方言比較という面から見ると、母音の長短と声調 (ピッチ) は分けて記述するほうが現象の多様性を直接的に記述に反映できるという利点がある。また、ピッチを5度制で記述することによって、著者は電尕方言の記述について大量の変調パターンを記述することになっている (p. 20-22)。そもそもこれは超分節音の弁別特徴をピッチととらえるがゆえに起こった複雑さではないか。そして、ピッチのみが超分節音の対立を形成しているのか。代替する記述・分析方法はなかったか検討が必要とされる。もちろん、この問いは、中国におけるチベット言語学の研究においては、依然として主流にはなっていない。朱曉農 (2010) の声調と発声類型を組み合わせた理論的枠組みをチベット言語学にも適用していくことが求められる¹⁰。超分節音をいかに分析するかという問題は、少なくとも本書の記述の範囲で解決できる性格のものではない。ピッチによる分析では、著者が第5章で行っている調値と調類の対照 (pp. 127-133) など有効に機能しているのも事実である。以上に指摘した問題点は、これからの記述研究においてさらに議論していくべきものである。

4 まとめ

本書の記述を総合して考えても、著者は中国、特に大陸のチベット語研究における伝統的な方法論と視点は一般に認知される方言研究とは異なっている、ということに気づいていないと評者は見る。本書の最大の問題点はそこにある。しかし評者は、それでもなお、本書が迭部県というチベット語分布地域の周縁部を取りあげ、かつ地域を単位にとらえるというチベット言語学以外では当然とされる方言研究を実践して成果を提出した点を高く評価するものである。

言語学的記述研究としては、チベット語方言研究の伝統的な手法を踏まえつつ、共時的記述と蔵文を利用した通時的分析を行う点に異論はない。しかしながら、通時的分析を踏まえて、

⁷ 評者の音韻表記における [ɿ] と [ɿ] の書き分けについては、鈴木 (2018) をあわせて参照。

⁸ このような措置の必要性については、Suzuki (2016) を参照。

⁹ たとえば電尕方言に /rɿ³³lɔ³¹/ 「球状のもの」という例があがっている (p. 28)。もちろん、実際の音価が [rɿ] であるならば、それ自体興味深いものではある。

¹⁰ 本書の扱う迭部県を取り巻く地域に分布するチベット系諸言語には、ピッチ以外の超分節音特徴を見せると分析されるものが多く存在する (孫天心 2003; 鈴木 2007b, 2008ab; Suzuki 2008, 2015)。

個別方言の研究から議論の対象となる方言の方言所属を解決しようとするのは無理がある。音変化の「類型的な類似」と「特徴的な刷新の共有」とは意味が異なる。方言所属の問題は単に言語学の問題にとどまらない。特に相当離れた地域に分布する複数の方言群が1つの方言に属することを示すためには、歴史や文化の共有といった側面からの「傍証」も検討する必要がある。少なくとも言語学研究においてできることは、音変化の類型的な類似が共通の刷新を経て成立したものであることを示すことであろう。方言所属を議論するならば、相当な地点数の方言から資料をとったり、ある言語の方言とされるすべての変種を鳥瞰するような資料を参照する必要がある。個別研究の深みも重要であるが、俯瞰的な立場から各方言を眺める立場を忘れるべきではないということを喚起して、本書評をしめくくる。

参考文献

- 鈴木博之 (2007a) 「甘孜州郷城県カムチベット語の方言特徴」『ニダバ』第36号 17-26 電子版：<http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045548>
- (2007b) 「チベット語包座 [Babzo] 方言の音声分析とその方言特徴」『アジア・アフリカ言語文化研究』第74号 101-120 電子版：<http://hdl.handle.net/10108/42695>
- (2008a) 「ヒャルチベット語九寨溝・玉瓦 [gZhungwa] 方言の音声分析」『アジア・アフリカの言語と言語学』第3号 135-168 電子版：<http://hdl.handle.net/10108/51104>
- (2008b) 「九寨溝風景区のチベット語とペマ語をめぐる若干の問題」『アジア言語論叢』7, 91-107 電子版：<http://id.nii.ac.jp/1085/00000593/>
- (2009) 〈川西地区“九香線”上の藏語方言：分布與分類〉《漢藏語學報》第3期 17-29
- (2014) 《藏語方言學研究的基礎問題：以木雅熱崗地區為例》中国社会科学院民族學與人類學研究所人類學論壇第五十六講論文（北京）[改訂版：〈藏語方言學研究的基礎問題〉《東方藏區諸語言研究》3-18、2015年、四川民族出版社]
- (2015) 「甘南州卓尼・迭部・舟曲3県のチベット系諸言語とその下位分類試論」『ニダバ』第44号 1-9 電子版：<http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045560>
- (2016a) 〈藏語方言學研究與語言地圖：如何看待“康方言”〉《民族學刊》第2期 1-13+92-94
- (2016b) 〈試論東方藏區藏語土話的語法地圖：以判斷動詞與存在動詞為例〉甘于恩主編《從北方到南方：第三届中国地理語言學國際學術研討會論文集》111-122 科學出版社
- (2018) 「香格里拉市北部のカムチベット語諸方言の方言特徴とその形成」『アジア・アフリカ言語文化研究』第95号 5-63 電子版：<http://doi.org/10.15026/92458>
- 西義郎 (1986) 「現代チベット語方言の分類」『国立民族学博物館研究報告』11巻4号 837-900+1 地図 電子版：<http://doi.org/10.15021/00004359>
- 西田龍雄 (1970) 『西番館譯語の研究—チベット言語學序説—』松香堂
- (1987) 「チベット語の変遷と文字」長野泰彦・立川武蔵編『チベットの言語と文化』108-169 冬樹社
- 西田龍雄、孫宏開 (1990) 『白馬譯語の研究 白馬語の構造と系統』松香堂

- Suzuki, Hiroyuki (2008) Nouveau regard sur les dialectes tibétains à l'est d'Aba : phonétique et classification du dialecte de Sharkhog [Songpan-Jiuzhaigou]. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 31.1, 85-108. doi: 10.15144/LTBA-31.1.85
- (2015) Esquisse phonétique du tibétain de dGonpa : un dialecte parlé à mBrugchu. *Revue d'études tibétaines* 33, 231-249.
Online: http://himalaya.socanth.cam.ac.uk/collections/journals/ret/pdf/ret_33_07.pdf
- (2016) In defense of prepalatal non-fricative sounds and symbols: towards the Tibetan dialectology. *Researches in Asian Languages* 10, 99-125 Online: <http://id.nii.ac.jp/1085/00002195/>
- Tournadre, Nicolas (2005) L'aire linguistique tibétaine et ses divers dialectes. *Lalies* 25, 7-56.
- (2014) The Tibetic languages and their classification. In Thomas Owen-Smith & Nathan W. Hill (eds.) *Trans-Himalayan Linguistics: Historical and Descriptive Linguistics of the Himalayan Area*, 105-129. Berlin: Walter de Gruyter.
- Tournadre, Nicolas & Hiroyuki Suzuki (forthcoming) *The Tibetic languages: An introduction to the family of languages derived from Old Tibetan* (with the collaboration of Xavier Becker and Alain Brucelles for the cartography). Paris: CNRS Éditions.
- 迭部県誌編纂委員會 編 (1998) 《迭部県誌》蘭州：蘭州大學出版社
- 黃布凡、索南江才 [bSod-nams rGyal-mtshan]、張明惠 (1994) 〈玉樹藏語的語音特點和歷史演變規律〉《中國藏學》第 2 期 111-134
- 黃布凡、張明慧 (1995) 〈白馬話支屬問題研究〉《中國藏學》第 2 期 79-118
- 格桑居冕 [sKal-bzang 'Gyur-med]、格桑央京 [sKal-bzang dByangs-can] (2002) 《藏語方言概論》民族出版社
- 瞿靄堂、金效靜 (1981) 〈藏語方言的研究方法〉《西南民族學院學報》第 3 期 76-84
- 仁增旺姆 [Rig-'dzin dBang-mo] (2010) 〈迭部藏語音節合併現象及其聯動效應—兼述周邊土語的類似音變〉《西北民族大學學報（哲學社會科學版）》第 6 期 83-89
- (2012) 〈藏語存在動詞的地理分布調查〉《中央民族大學學報（哲學社會科學版）》第 6 期 110-113
- 孫宏開、齊卡佳、劉光坤 (2007) 《白馬語研究》民族出版社
- 孫天心 (2007) 〈求吉藏語的語音特徵〉《民族語文》第 6 期 1-6
- 王雙成 (2012) 《藏語安多方言語音研究》中西書局
- 張濟川 (1994) 〈白馬話和藏語（上·下）〉《民族語文》第 2 期 11-24、第 3 期 53-67
- (2009) 《藏語詞族研究—古代藏族如何豐富發展他們的詞匯》社會科學文獻出版社
- 中國社會科學院語言研究所 (1981) 《方言調查字表（修訂本）》商務印書館
- 朱曉農 (2010) 《語音學》商務印書館

受理日 2020 年 4 月 13 日

民和土族語における帯気性の対立の音声的特徴

植田 尚樹

京都大学 (非常勤講師) ・ ueta.naoki.82x@gmail.com

キーワード : VOT、調音位置、前気音、二言語併用

1 はじめに

1.1 民和土族語の概要

民和土族語は、中華人民共和国青海省海東市民和回族土族自治州で話されているモンゴル系の言語である。従来この言語は土族語民和方言と呼ばれ、青海省海東市互助土族自治州で話される土族語互助方言とともに土族語 (モンゴル語) の下位方言とされていた (栗林 1992a)。しかし、両者は相互理解ができないほど言語的に大きく異なっていることから、近年では両者を別の言語とみなす解釈が主流となりつつある。言語名については、話者の自称を基に、土族語民和方言は *Mangghuer* (または *Minhe Mangghuer*)、土族語互助方言は *Mongghul* (または *Huzhu Mongghul*) と呼ばれる (Georg 2003, Slater 2003a, b)。何 (2019) や塩谷 (2020) は、*Mangghuer* を「民和土族語」と呼んでいる。この名称は、*Mangghuer* と *Mongghul* がそれぞれ別の言語であるとみなしつつ、日本語での名称として定着している「土族語」を用いたものであり、指す対象がわかりやすいという利点があるため、本稿でも「民和土族語」 (および「互助土族語」) の名称を用いる。

民和土族語は、互助土族語、達斡爾 (ダグル) 語、東部裕固 (シラ・ユグル) 語、保安 (バオアン) 語、東郷 (ドゥンシャン) 語、モゴール語とともに、他のモンゴル系諸言語とかけ離れた言語的特徴を持つ「孤立的諸言語」に属する。このうち、民和土族語と互助土族語は、保安語および東郷語と比較的近い関係にあると言われている (栗林 1992b)¹。

民和土族語の話者数は、Slater (2003b: 307) によると約 2 万 5 千人、何 (2019: 1) によると推定 1 万人余りとされている。また Slater (2003b: 307) によると、民和土族語の話者はほとんどが漢語 (現地の方言である *Qinghai Mandarin*) とのバイリンガルであり、教育や商業は漢語で行われるなど、バイリンガルの程度は高い。

民和土族語に関する研究はいくつかあり、代表的なものとして照那斯图、李克郁 (1982) 「土族語民和方言概述」、Slater (2003a) “*A Grammar of Mangghuer*”、塩谷・何 (2019) 『土族語文法』が挙げられる。これらは民和土族語についての概説であり、音韻、形態、統語などについて包括的な記述が行われている。そのほか、フフバートル (1992) や角道 (2006,

¹ 中華人民共和国青海省および甘肅省で話される民和土族語、互助土族語、東部裕固語、保安語、康家語、東郷語は、河湟 (*Xiranghul*) 語と総称されることがある。これらもやはり、他のモンゴル系の諸言語とは著しく異なる特徴を持つ言語群として特徴づけられる (角道 2008a: 3)。

2008b, 2010) など、モンゴル文語やモンゴル系諸言語との比較言語学的な研究も行われている。

1.2 民和土族語の音声・音韻

上述した照那斯图、李克郁 (1982) や Slater (2003a) では、民和土族語の音韻体系が示され、それぞれの音声実現や異音についても詳しく述べられている。しかし、音響音声学的な手法に基づく客観的な記述はなく、各音声がどのような音響的特徴を持っているか、詳細にはわからない。

本稿では、民和土族語の音声・音韻の中から閉鎖音・破擦音の帯気性の対立を取り上げ、母語話者から得た音声データを基に音響分析を行い、有気音と無気音の音声特徴を記述する。そして、同じくモンゴル系の言語であるモンゴル語や、民和土族語に大きな影響を与えている漢語の帯気性の対立における音声的特徴と対照することにより、民和土族語の帯気性の対立における特徴をより広い視野から考察する。

2 民和土族語の音韻体系と音声特徴

2.1 音韻体系

本節では Slater (2003a) に基づき、民和土族語の音韻体系について概観する。

子音体系は表 1 の通りである。なお、原典にはピンインをもとにしたローマ字表記が付されているが²、本稿では省略する。

表 1 : 民和土族語の子音体系 (Slater 2003a: 26, Table 2.1)

		<i>Labial</i>	<i>Alveolar</i>	<i>Palatal</i> ³	<i>Retroflex</i>	<i>Velar</i>	<i>Uvular</i>
-Vc	stop +asp	p ^h	t ^h			k ^h	q ^h
	stop -asp	p	t			k	q
	affr. +asp		ts ^h	te ^h	tʂ ^h		
	affr. -asp		ts	te	tʂ		
	Fricative	f	s	ɕ	ʂ		χ
+Vc	Nasal	m	n			ŋ	
	Liquid		l		ɭ		
	Glide	w		j			

² 民和土族語は文字を持たないが、研究者はピンインをもとにしたローマ字で表記することが多い。

³ 原典にもこの位置に注釈が振られており、次のような説明がある。“*Palatal* obstruents are more properly post-alveolar laminal in articulation, while *retroflex* obstruents are post-alveolar apical, with slight retroflexion. I use the term *palatal* and *retroflex* in order to make my discussion more accessible to those familiar with Chinese linguistic literature...” (Slater 2003a: 351) ここでは本文中の呼称に従う。

母音体系は、/i, e, a, o, u/ の5母音体系である。それぞれ、[i~ɪ], [ə~ɛ], [a~ɑ~æ~ɛ~ɐ], [o~ø], [u~ʊ~u] として現れる。それぞれの異音の詳しい出現条件については、Slater (2003a: 32-36) を参照されたい。なお、母音の長短の対立はなく、二重母音も認められない。また母音調和もない。

音節構造は (C₁) (C₂) V (C₃) であり、C₂ には /j, w/ のみが現れる。また、C₃ には /ɭ, ŋ, n, j, w/ のみが許される (Slater 2003a: 55)。強勢 (ストレス) は最終音節に置かれ、他の音節よりも高く、強く実現する (Slater 2003a: 72-73)。

2.2 帯気性の対立における音声的特徴

表 1 より、民和土族語には閉鎖音と破擦音に帯気性の対立 (有気音と無気音の対立) があることがわかる。この点は、概ねモンゴル語と同様である (Svantesson et al. 2005, Karlsson and Svantesson 2011, 2012, Svantesson and Karlsson 2012)。しかしながら、民和土族語の帯気性の対立における音声的特徴は必ずしも明らかではない。

モンゴル語の多くの方言 (モンゴル国で話されるハルハ方言、中国で話されるホルチン、バーリン、シリンゴルの各方言など) において、有気音は音声的に、語頭においては後気音 (postaspiration) として現れ、語中や語末においては前気音 (preaspiration) として現れることが知られている (Karlsson and Svantesson 2011)。また、Fried (2010) によると、民和土族語と同じく河湟語に属する保安語同仁方言にも前気音が現れる。翻って、民和土族語の有気音についての音声的記述は十分でなく、有気音がどのように実現するのか、とりわけ語中や語末において前気音として実現するのか後気音として実現するのか (その両方なのか) は、明らかではない。

また、一般に有気音と無気音は VOT (voice onset time) の違いによって区別され、有気音では VOT が長く、無気音では VOT が短い (Lisker and Abramson 1964)。しかし、異なる言語の間で比べた場合、同じカテゴリーの音 (例えば有気音どうし) であっても、VOT の値そのものは言語によって異なることが知られている (Cho and Ladefoged 1999)。植田 (2018) は、モンゴル語ハルハ方言、モンゴル語の内蒙古方言、漢語の語頭閉鎖音の VOT の値を比較し、内蒙古方言の VOT の値はハルハ方言と漢語の中間的な値を取ることを報告しており⁴、その理由について、内蒙古方言と漢語の言語接触および二言語併用の影響により、内蒙古方言の VOT が漢語の VOT に近づいた結果ではないかと指摘している。ここで民和土族語について考えると、1.1 節で述べたように、民和土族語の話者は漢語とのバイリンガルであるため、VOT にも漢語の影響が見られる可能性がある。民和土族語の VOT についても、モンゴル語内蒙古方言と同様に、VOT が長い (漢語の VOT に近い) という特徴が見られるかどうかを観察することにより、音声特徴における言語接触の影響について新たな知見が得られることが期待される。

⁴ 詳しくは 4.1 節で述べる。

さらに、調音位置と VOT およびその他の音声的特徴との関係についても記述する必要がある。一般に、軟口蓋音や口蓋垂音では、両唇音や歯茎音に比べて VOT が長い傾向にあることが知られている (Kent and Read 1992: 114, Cho and Ladefoged 1999: 218)。民和土族語の閉鎖音の場合、表 1 に示した通り、有気音・無気音ともに両唇 - 歯茎 - 軟口蓋 - 口蓋垂の 4 つの調音位置の対立があることから、調音位置と VOT の関係に関して、民和土族語が 1 つの有用なデータを与えることが期待される。また、軟口蓋音や口蓋垂音では無気音であっても VOT が比較的長いことが予想されるが、その場合でも有気音との対立が VOT のみで十分に保たれているのか、それとも無気音の摩擦音化などの現象によって対立が強化されているのか、不明である。例えばモンゴル語ハルハ方言の語中位置の場合、歯閉鎖音、歯茎破擦音、後部歯茎破擦音では [ʰt]-[t], [ʰts]-[ts], [ʰtʃ]-[tʃ] のように音声的に前気音の有無のみで対立しているのに対し、軟口蓋音では音声的に [kʰ]-[χ] (または異音 [ɣ]) として現れるのが一般的であり、帯気性の有無の他に有声性と調音方法も異なっていることが指摘されている (植田 in press)。このように、モンゴル語ハルハ方言では調音位置によって音声的な実現が異なっているが、民和土族語の軟口蓋音・口蓋垂音でもこのような現象がみられるか、観察する必要がある⁵。

3 音声産出実験

3.1 調査語彙

民和土族語の有気音・無気音の音声的特徴を明らかにするために、語頭または語中に閉鎖音もしくは破擦音を持つ語を調査語彙とし、音声産出実験および音響分析を行った。

まず、調査語彙の選定基準について述べる。Slater (2003a: 36-37) によると、民和土族語の母音 /i, e, u/ は、無声子音が先行する場合に、随意的に無声化する (/pʰiteiqe/ [pʰitei̥'qə] 「豆」)。一方で、/a/ と /o/ は無声化しない。また、/i, e, u/ でも、強勢音節 (すなわち最終音節) に位置する場合や、音節末子音がある場合には、無声化が起こりにくいとされる。閉鎖音または破擦音に母音が後続するとき、母音が無声化すると、VOT が測定できず、本調査においては不都合が生じる。また、一般に、VOT は後続母音の種類の影響を受け、特に狭母音が後続する時に VOT が長い傾向にあることが知られている (Klatt 1975, Rochet and Fei 1991, Chen et al. 2007, Chao and Chen 2008)。VOT の比較のためには、後続母音の影響をできるだけ取り除いておくことが望ましい。以上を踏まえ、本調査の調査語彙は、以下の条件に当てはまるもののみとした。

- (i) 対象となる子音の直後の分節音が、母音 /a, e, o/ のいずれかである (すなわち狭母音や子音ではない)。
- (ii) 対象となる子音の直後の分節音が /e/ である場合、強勢音節に位置するか、音節末子音がある (言い換えると、後続母音が無声化しにくい)。

⁵ ただし、民和土族語では語中に /qʰ/ は現れない。詳しくは 3.1 節で述べる。

また、VOT は後続母音の種類のほか、強勢パターンや語内での位置、直前の音の特徴によっても異なることが指摘されている (Klatt 1975)。そこで本調査では、語頭を対象とする調査語彙については、1 音節語 (すなわち語頭子音が強勢音節内にある) と 2 音節語 (すなわち語頭子音が無強勢音節内にある) の両方を用意し、そのうえで、例えば /p^haw/ 「泡」と /paw/ 「降りる」のようなミニマルペア、もしくは /p^he.iqan/ 「神様」と /pe.iqe/ 「蚤」のように、対象となる子音の前後の分節音や、語の音節構造が近いペアを調査語彙とした。ただし、/ts^h/-/ts/ については十分なペアが用意できなかったため、完全なペアにはなっていない。また、語中については、ミニマルペアあるいは疑似ミニマルペアを多数用意するのは難しい。そこで、/təaw^han/ 「餅」と /maw^han/ 「ボール」のような音韻構造が近いペアだけでなく、例えば上に挙げた /p^he.iqan/ 「神様」と /pe.iqe/ 「蚤」など、語頭を対象とする調査語彙の中で、語中にも閉鎖音もしくは破擦音があるもの (かつ、その直後の分節音が /a, e, o/ のいずれかであるもの) は、語中の閉鎖音・破擦音も分析対象とした。なお、語中を対象とする調査語彙は全て 2 音節語とした。そのため必然的に、調査対象となる語中子音は、強勢音節の初頭に位置することになる。

いくつかの子音は、出現位置に制限がある。無声有気口蓋垂閉鎖音 /q^h/ は、語中には現れない (Slater 2003a: 26)。また、無声有気歯茎破擦音 /ts^h/ は、感嘆詞以外には語中に現れない (Slater 2003a: 27)。したがって、語中の /q^h/ と /ts^h/ は調査対象外となる。

なお、音韻構造を優先して調査語彙を選定したため、調査語彙の中には漢語由来の語彙も含まれる。漢語由来の語とそうでない語で VOT の特徴が異なる可能性もあるため、両者の VOT に違いがあるかどうかを検討する。なお、漢語由来ではない語の中に、モンゴル系以外の言語に起源を持つ語 (例えば古い時代にチベット語から借用された語など) が含まれている可能性があるが、全ての調査語彙の起源を正確に特定するのは容易ではないため、本調査においては漢語由来以外の語をまとめて「本来語」とみなす。

調査語彙は表 2 および表 3 の通りである。表中の[†]は漢語由来の語彙である (またはその可能性が非常に高い) ことを示している⁶。なお、表 2 と表 3 の語彙を合計すると延べ 84 語となるが、表 2 と表 3 の両方に含まれる語が 19 語あるため、調査語彙数は計 65 語となる。これらの 19 語については、1 つの録音データにつき 2 か所 (語頭および語中) が分析対象となる。

⁶ 漢語由来か否かの判定は、インフォーマントの内省、角道 (編) (2012) の記述に加えて、鈴木博之氏、外賀葵氏からのコメントを参考にした。

表 2 : 調査語彙 (語頭)

	強勢音節 (1 音節語)	無強勢音節 (2 音節以上の語)
/p ^h /	p ^h aw [†] 泡	p ^h ajan [†] ポプラ p ^h awla [†] 濡れる p ^h e:ɟaŋ 神様
/p/	paw 降りる	patea 準備する pawku 玉蜀黍 pe:ɟke 蚤
/t ^h /	t ^h aw 家畜を追う	t ^h aʃi 石 t ^h ata 近い t ^h awla 繫ぐ t ^h e:ɟaj 頭
/t/	taw 歌	tasi 糸 tama 顔 tawla 歌う tenk ^h e 引く
/k ^h /	k ^h aj 風 k ^h oŋ 人	k ^h ak ^h e:ɟ ケーキ k ^h awla [†] もたれる
/k/	kaŋ 虹 koŋ 深い	kaka [†] 兄 kawhu 知らせ
/q ^h /	q ^h a 閉める	q ^h amu 全ての q ^h ape:ɟ 鼻 q ^h e:ɟa 傍
/q/	qa お椀	qatʃa 噛む qata 外 qe:ɟa 出す
/ts ^h /	ts ^h aj [†] 野菜	ts ^h ajtʃwe:ɟ 肉饅頭 ts ^h oŋje:ɟ [†] ネギ
/ts/		tsajtse:ɟ 小さい木 tsawha [†] 厨房
/te ^h /	te ^h aw [†] 橋 te ^h e:ɟ [†] お金	te ^h ak ^h e つねる te ^h e:ɟa ハサミで切る
/te/	tea 時間 tee 自分	tea:ɟi 使う tee:ɟa 混ぜる
/tʃ ^h /	tʃ ^h a [†] 茶	tʃ ^h ak ^h u [†] パンツ tʃ ^h ala 人見知りする tʃ ^h enli 聞く ⁷
/tʃ/	tʃaw 針	tʃaqa 上 tʃapaŋ 灰色 tʃenli [†] 蒸す

表 3 : 調査語彙 (語中)

/p ^h /	tʃwop ^h e:ɟ 餌箱
/p/	tʃapaŋ 灰色 q ^h ape:ɟ 鼻 tʃwopo 仕事する
/t ^h /	teawt ^h an 餅
/t/	mawtan ボール qata 外 t ^h ata 近い
/k ^h /	ak ^h a 僧侶 ⁸ tenk ^h e 引く te ^h ak ^h e つねる k ^h ak ^h e:ɟ ケーキ
/k/	kaka [†] 兄 pe:ɟke 蚤
/q ^h /	–
/q/	q ^h e:ɟa 傍 qe:ɟa 出す te ^h e:ɟa ハサミで切る tee:ɟa 混ぜる tʃaqa 上 p ^h e:ɟaŋ 神様 t ^h e:ɟaj 頭
/ts ^h /	–
/ts/	ketsaj 良い tsajtse:ɟ 小さい木
/te ^h /	pajt ^h a 作る te ^h awte ^h e:ɟ [†] 静かに
/te/	patea 準備する lawtee:ɟ [†] 故郷
/tʃ ^h /	eats ^h a 頑張る
/tʃ/	qatʃa 噛む

3.2 インフォーマント

インフォーマントは、青海省出身の民和土族語母語話者の女性 1 名 (調査時は 20 代で日本在住) である。インフォーマントが 1 名であることから、本調査で得られたデータが民和土族語の一般的な特徴であるか、話者個人の特徴であるかは判定できない。分析の際は、その点に留意する。

⁷ tʃ^henli 「聞く」は漢語由来である可能性がある。

⁸ ak^ha 「僧侶」はアムドチベット語からの借用語である (鈴木博之氏のご指摘による)。

3.3 調査方法

インフォーマントはピンインをもとにしたローマ字表記を自由に読み書きできる話者であるので、調査はこの表記で書かれた調査語彙を読み上げる形で行った。調査語彙はランダムに並べられ、1つの調査語彙ごとに単独での読み上げ、およびキャリア文 (1a, b) に入れた読み上げが行われた。

- (1) a. ketɕ jaŋ paŋ 「..... とは何ですか」
 QUOT 何 COP
- b. pi ketɕ k^heli-pa 「私は.....と言った」
 1SG.NOM QUOT 言う -PST

全ての調査語彙の読み上げが終わると、今度は別の順序で並べられたリストを用い、同様に調査語彙の読み上げが行われた。結果として、1つの調査語彙につき6つのトークン(単独・キャリア文 (1a)・キャリア文 (1b) それぞれにつき2回ずつ) が得られる。読み上げられた音声は、デジタルレコーダー (ZOOM H4n [WAV, 44.1kHz / 16bit]) およびヘッドセットコンデンサーマイク (AKG C520) を用いて録音された。

音響分析は、Praat (ver. 5.4.13; Boersma and Weenink 2015) を用いて行った。すべてのトークンに対して、音声波形およびスペクトログラムを目視し、閉鎖音および破擦音の閉鎖の開放と声帯振動開始の時点と同定、その間の時間 (すなわち VOT) を測定した。

4 結果

4.1 語頭の VOT

本節では、語頭の VOT の特徴について述べる。まずは、語頭閉鎖音および語頭破擦音の全てのトークンにおける VOT の平均値を図 1 および図 2 に示す。

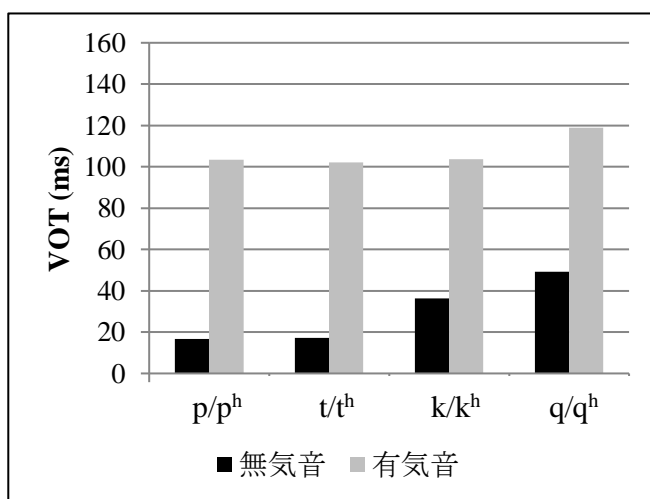


図 1 : 語頭閉鎖音の VOT

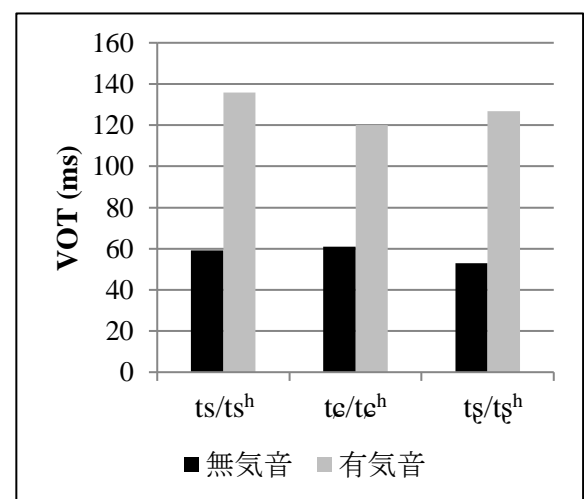


図 2 : 語頭破擦音の VOT

図 1 および図 2 より、語頭閉鎖音・破擦音において、無気音は短い VOT、有気音は長い VOT を持っており、両者の VOT の値が明確に異なることがわかる。調査語彙の全てのペアにおいて、有気音は無気音よりも長い VOT で発音された。さらに、無気音は VOT がマイナスの値をとる（つまり有声音となる）ことがなく、常に無声無気音として実現していた。つまり、音韻的な無気音・有気音は、音声的にも安定して無声無気音、無声有気音として現れている。なお、破擦音では閉鎖音に比べて VOT が長くなっているが、これは破擦音では閉鎖の開放の直後に摩擦を伴うためである。

次に、調音位置による VOT の違いに注目する。まず閉鎖音に関して述べると、図 1 から、無気音では両唇音 /p/ および歯茎音 /t/ に比べて軟口蓋音 /k/ では VOT が長く、口蓋垂音 /q/ ではさらに VOT が長いことがわかる。これは、2.2 節で述べた「軟口蓋音や口蓋垂音では両唇音や歯茎音に比べて VOT が長い」という傾向に一致する。一方、有気音に目を向けると、軟口蓋音 /kʰ/ の VOT は両唇音 /pʰ/ および歯茎音 /tʰ/ の VOT とほぼ変わらず、口蓋垂音 /qʰ/ の VOT だけが他と比べて長い。言い換えると、軟口蓋音では、無気音 /k/ の方が有気音 /kʰ/ よりも、調音位置による VOT の変動が顕著に現れている。この結果、軟口蓋音 /k-kʰ/ では、無気音と有気音の間の VOT の差がやや小さくなっている（その要因については 4.2.1 節で考察する）。とは言え、その差は平均で 60ms 以上あるため、軟口蓋音においても、音韻的な無気音と有気音の対立は VOT のみで十分に区別されていると言える。

破擦音に関しては、無気音では /tʂ/ の VOT が /ts, tɕ/ に比べてやや短く、有気音では /tʂʰ/ の VOT が /tɕʰ, tʂʰ/ に比べてやや長い。しかし、これらの差異に対して、妥当性のある説明を与えることは難しい。差が概して小さいことも併せて考えると、本調査で見られた破擦音の調音位置による VOT の差異は偶然のものであり、有意な差ではないと捉えるのが妥当であろう。

続いて VOT の値に注目すると、無気音では閉鎖音で 17ms~49ms、破擦音で 53ms~61ms であり、有気音では閉鎖音で 102ms~119ms、破擦音で 120ms~136ms となっている。この VOT の値をモンゴル語および漢語と比較するため、以下に 3 つの図表を示す。表 4 は漢語（普通話）の VOT に関する先行研究の結果をまとめたもの（出典は植田 2018）である⁹。図 3 は Ueta (2018) に挙げられた、モンゴル語ハルハ方言の無気音および有気音の VOT の平均値である。なお、図 3 の有声音 (voiced)、無声音 (voiceless) はそれぞれ本稿の無気音と有気音に対応する。また図 4 は、植田 (2018) に挙げられた、漢語¹⁰・モンゴル語内蒙古方

⁹ 漢語の VOT にも方言差があり、西北官話では有気音の VOT が普通話より長い可能性がある（鈴木博之氏のご指摘による）。本来であれば、民和土族語が話される地域の漢語と民和土族語の VOT を比較し、民和土族語に対する漢語の影響を考察すべきであるが、現段階では現地の漢語に関するデータがないため、普通話を扱った先行研究を引用する。

¹⁰ 植田 (2018) における漢語は、モンゴル語内蒙古方言と漢語のバイリンガルが話す漢語である。内蒙古自治区は漢語のうち北方語・北方官話が話される地域であるとされ（橋本 1989: 902-903）、植田 (2018) のインフォーマントも北方官話を話していると考えられる。

言¹¹・モンゴル語ハルハ方言の語頭有気閉鎖音の VOT の平均値である。なお、植田 (2018) では漢語、モンゴル語内蒙古方言、モンゴル語ハルハ方言をそれぞれ中国語、内蒙古語、モンゴル語と呼んでおり、図 4 もその表記となっている。

表 4 : 漢語の VOT (植田 2018: 173 表 1)

	/pa/	/p ^h a/	/ta/	/t ^h a/	/ka/	/k ^h a/
吴 (主編) (1986)	7.5ms	92.5ms	6ms	102ms	14.5ms	96.5ms
Shimizu (1996)	3ms	105ms	3ms	101ms	19ms	112ms
Chao and Chen (2008)	12ms	70ms	14ms	81ms	22ms	86ms
朱 (2010)	13ms	59ms	11ms	63ms	32ms	74ms

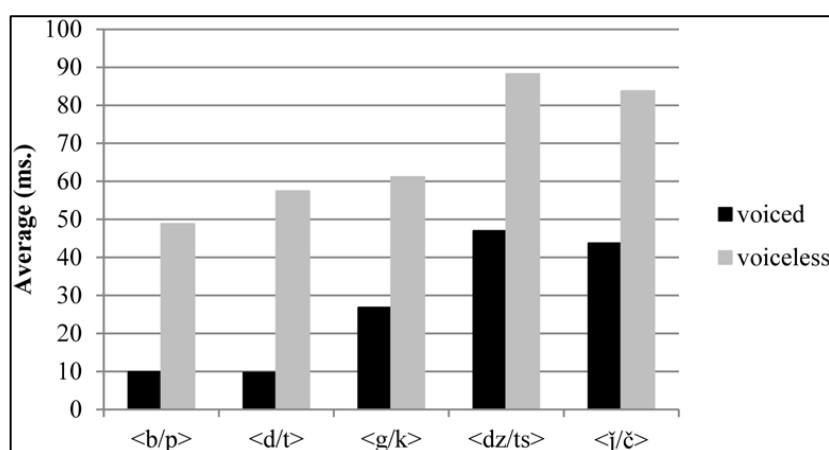


図 3 : モンゴル語ハルハ方言の語頭閉鎖音・破擦音の VOT (Ueta 2018: 138 Figure 8)

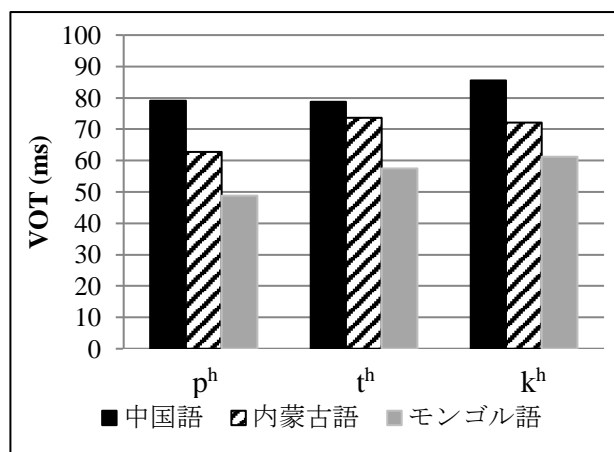


図 4 : 中国語、内蒙古語、モンゴル語の VOT (植田 2018: 175 図 2)

¹¹ 植田 (2018) におけるモンゴル語内蒙古方言 (内蒙古語) は、具体的にはチャハル方言とホルチン方言であるが、インフォーマントが少なく下位方言の差まで分析できないという理由から、内蒙古方言としてまとめて扱っている。

図 1～図 4 および表 4 を見ると、今回の調査によって得られた民和土族語の VOT の値は、モンゴル語（ハルハ方言、内蒙古方言）や漢語に比べて大きいことがわかる。特に民和土族語の有気音では、最も VOT が短いものでさえ平均 100ms を超えており、モンゴル語ハルハ方言の 2 倍近い値となっている。Cho and Ladefoged (1999: 223) は無声閉鎖音を 4 つの音声カテゴリーに分け、VOT が 30ms 程度のものを“unaspirated”、50ms ほどのものを“slightly aspirated”、90ms ほどのものを“aspirated”、そして（具体的な数値は挙げていないが）さらに長いものを“highly aspirated”としている。この基準に当てはめると、モンゴル語ハルハ方言は“slightly aspirated”、漢語は“aspirated”のカテゴリーに入るのに対し、民和土族語は“aspirated”もしくは“highly aspirated”のカテゴリーに入ると推定される。

ただし、3.2 節でも述べたように、本調査ではインフォーマントが 1 名であることから、VOT が長いという特徴も、インフォーマントの個人的な音声特徴である可能性もある。事実、今回の読み上げ調査において、インフォーマントはかなりゆっくり丁寧に読み上げを行っており、発話速度は遅かった。発話速度が遅ければ当然 VOT も長くなるため、今回の結果は発話速度の遅さに起因するものである可能性が高い。しかしながら、発話速度の影響を差し引いても、民和土族語の VOT がモンゴル語の VOT よりも長く、漢語の VOT に近いことは確かであろう。

次に、強勢の有無と VOT の関係について述べる。調査語彙を 1 音節語（初頭子音が強勢音節内にある語）と 2 音節語（初頭子音が無強勢音節内にある語）に場合分けし、それぞれ調音位置ごとに VOT の平均値を算出した。図 5 は閉鎖音、図 6 は破擦音の VOT の平均値を表したものである。なお、/ts/ は 1 音節語が調査語彙にないので、「無気音・強勢」が空欄になっている。

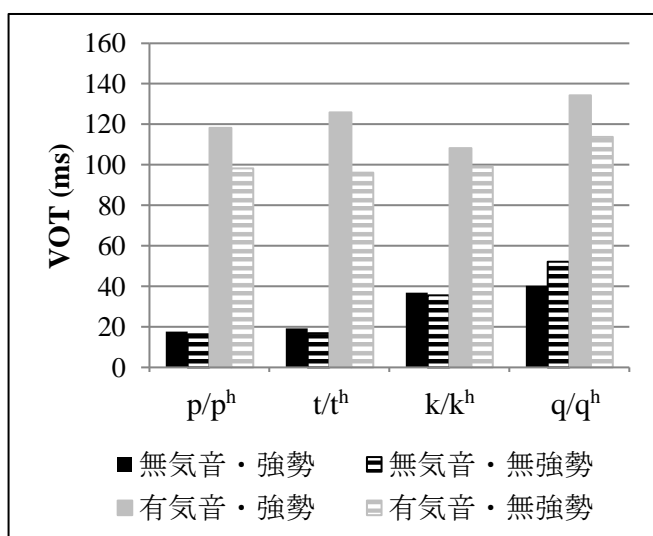


図 5：強勢の有無と語頭閉鎖音の VOT

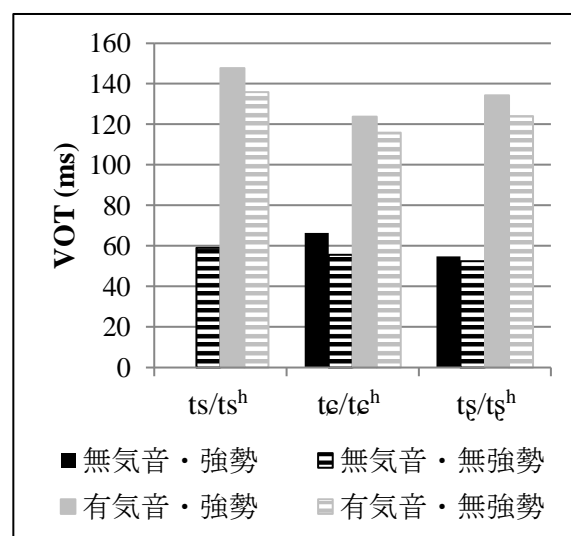


図 6：強勢の有無と語頭破擦音の VOT

図 5 および図 6 から、強勢音節における VOT は、無強勢音節における VOT よりも長い傾向にあることが見て取れ、その傾向は有気音で顕著である。その傾向に反しているのは、/q/ のみである。強勢音節という「強い」音節において VOT が長くなるのは、自然な現象であると思われる。

最後に、語種（本来語であるか漢語由来であるか）による VOT の差異について述べる。調査語彙を本来語と漢語に場合分けし¹²、それぞれ調音位置ごとに VOT の平均値を算出した。図 7 は閉鎖音、図 8 は破擦音の VOT の平均値を表したものである。なお、/p, t, t^h, q, q^h/ および /tɕ/ は漢語が調査語彙にないので、「漢語」が空欄になっている。

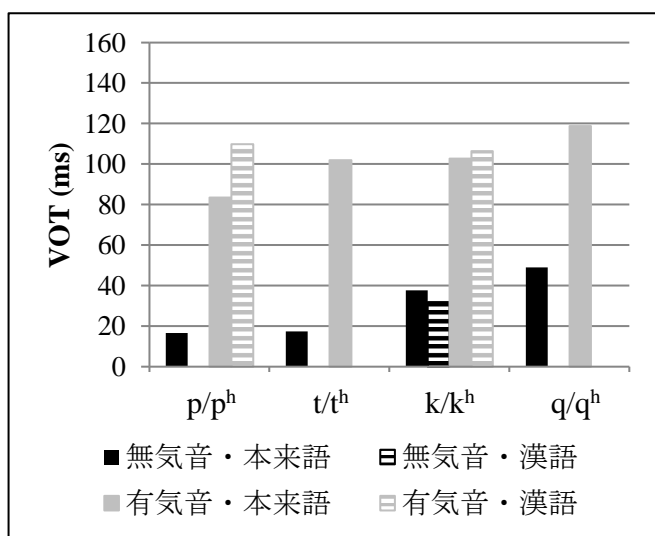


図 7: 語種と語頭閉鎖音の VOT

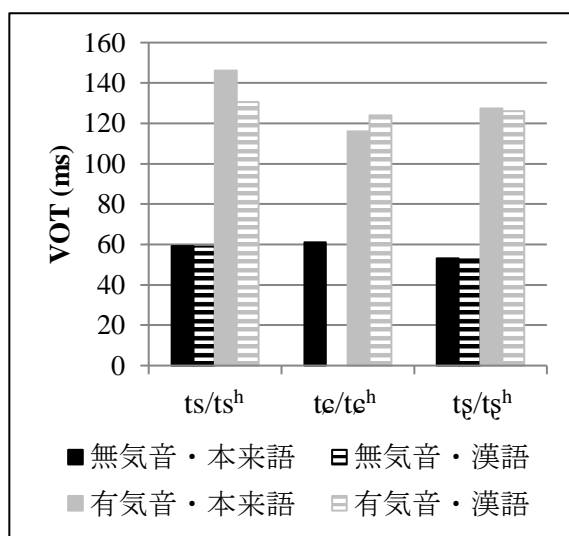


図 8: 語種と語頭破擦音の VOT

図 7 および図 8 から、本来語と漢語の VOT に関して一定の傾向は読み取れない。確かに、/p^h/ では本来語よりも漢語由来の調査語彙で VOT が著しく長いのが、/tʂ^h/ ではほぼ差がなく、/ts^h/ では漢語由来よりも本来語で VOT が長いなど、同じ有気音でも VOT の傾向が異なる。このことから、本来語と漢語由来の語で VOT に大きな差はないと考えられる。/p^h/ の本来語で VOT が短いのは、本来語の調査語彙が p^he:qɑŋ 「神様」1 語であり、/p^h/ に後続する母音がこの調査語彙だけ /e/ (他の調査語彙は後続母音が /a/) であることが関係している可能性がある。また、/tɕ^h/ の漢語で VOT がやや長いのは、漢語の調査語彙が 1 音節語 (tɕ^haw 「橋」、tɕ^he:ɕ 「お金」) で初頭音節に強勢を持つものに対し、本来語の調査語彙が 2 音節語 (tɕ^hak^he 「つねる」、tɕ^he:ɕɑ 「ハサミで切る」) で初頭音節に強勢を持たないことに起因しており、語種の違いが影響しているわけではない。

¹² 注 7 で述べたように、調査語彙 tʂ^he:ŋli 「聞く」は漢語由来である可能性があるが、ここでは本来語として扱っている。なお、この調査語彙を漢語とみなしたとしても、結果に大差はない。

4.2 語中の VOT と前気音

4.2.1 語中の VOT

次に、語中閉鎖音および語中破擦音の音声特徴について述べる。まずは、両者の VOT の平均値を図 9 および図 10 に示す。なお、語中の /qʰ/ および /tsʰ/ は該当語彙がないので、空欄となっている。また、/ts/ では 1 例、破擦音の閉鎖の開放が明確ではないものがあった。この場合、VOT が正確に測定できないので、データから除外している。

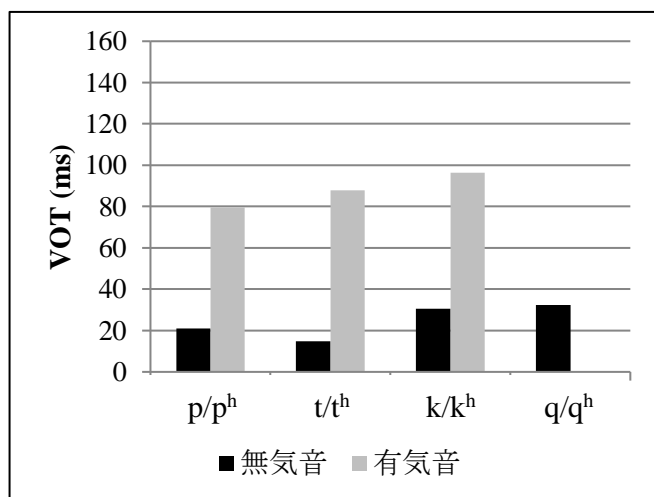


図 9 : 語中閉鎖音の VOT

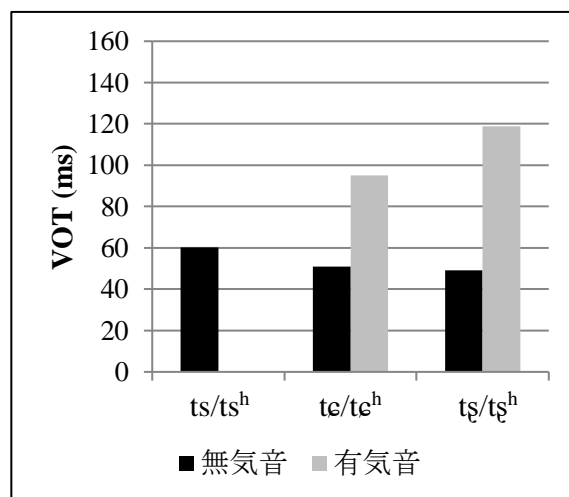


図 10 : 語中破擦音の VOT

図 9 および図 10 から、語中においても語頭と同様、無気音と有気音では VOT が明確に異なることがわかる。なお、漢語では語中の無気音が有声化することがある (朱 2010: 24)。また、モンゴル語ハルハ方言では、正書法上 β (b), γ (g) で書かれる音は、語頭では無声無気音 [p], [k~q] で現れるのに対し、語中の母音間では有声摩擦音 [β], [ɣ~ɣ] で現れることがある (植田 in press)。それに対し、民和土族語では、無気音は有声化が全く起こらず、全て無声無気音 (短いプラスの VOT を持つ音声) で現れた。また、有気音は、全て無声有気音 (長いプラスの VOT を持つ音声) で現れた。このことから、民和土族語では語頭のみならず語中でも、音韻的な無気音と有気音の対立は、音声的にも安定して無気音と有気音の対立として現れると言える。

VOT の値を語頭の場合と比較すると、特に有気音で、語頭に比べて語中の方が VOT が短い傾向にある (図 1、図 2 と図 9、図 10 を比較されたい)。本調査において、語中の子音は全て強勢音節に位置する。前節で、語頭の子音については、強勢音節における VOT は無強勢音節における VOT よりも長い傾向にあることを指摘したが、語頭 (強勢音節も無強勢音節もある) と語中 (全て強勢音節) では、語頭の方が VOT が長い。この結果から、民和土族語では、強勢の有無よりも語内での位置の方が、VOT に大きな影響を与えているということが示唆される。第 1 音節が音韻的に特殊 (privileged) であることを示す現象はいくつか知られており (Walker 2011: 18-19)、民和土族語の VOT もそのうちの 1 つであると推察

される。他方、民和土族語では強勢の有無も VOT にわずかに影響を与えており、他の条件が同じであれば、強勢がある方が VOT が長いという結果が得られると推定される¹³。

次に、調音位置による VOT の差に注目すると、無気閉鎖音では /k, q/ の VOT が /p, t/ の VOT よりも長い。これは、語頭の傾向、および通言語的な傾向と一致する。ただし、/p, t/ と /k, q/ の VOT の差は、語頭の場合よりも小さい。有気閉鎖音 /p^h, t^h, k^h/ については逆に、語頭では /p^h, t^h, k^h/ の VOT の平均値はほぼ同じであったが、語中では /p^h, t^h/ に比べて /k^h/ の VOT が長い。

これらの違いを生み出す要因を明らかにするのは難しいが、1 つの仮説として、語内での位置（語頭／語中）による VOT の差異と調音位置による VOT の差異が互いに干渉した結果である、という可能性が考えられる。まず、無気音・有気音とも、VOT の長さは本来、両唇音≒歯茎音<軟口蓋音<口蓋垂音となると考えられる。これは、生理的・空気力学的要因による、通言語的特徴である。ここに、民和土族語の（あるいは本調査のインフォーマントの）特徴として、語頭の有気音の VOT が長いという特徴が被さる。しかし、VOT の長さには限界点があり、軟口蓋音や口蓋垂音のようにもともと VOT が長い場合には、さらに長くはなりにくい。その結果、語頭の有気音では、/p^h, t^h, k^h/ の VOT が近づいているのではないかと考えられる。同様に、民和土族語の特徴として、語中の無気音の VOT が（語頭に比べて）短いという特徴がある。しかし、VOT の短さにも限界点があり、両唇音や歯茎音のようにもともと VOT が短い場合には、さらに短くはなりにくい。その結果、語中の無気音では、/p, t/ と /k, q/ の差が縮まっているのではないかと考えられる。以上の仮説を概念的に表すと、**図 11** のようになる。図中の灰色は調音位置の効果が実現した場合の推定値、白の部分は今回の調査で得られた結果、矢印は語内での位置による効果を表す。点線は、他に比べて効果が小さいことを表す。

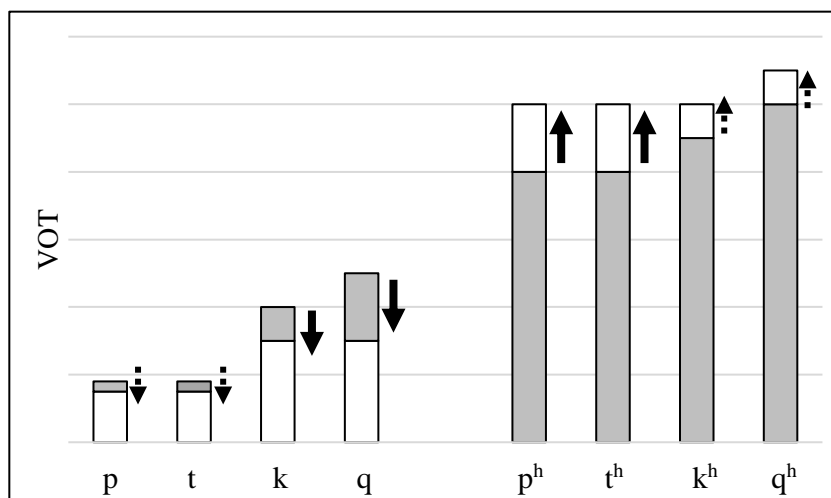


図 11：語内での位置と調音位置による VOT の差異の概念図

¹³ この推定が正しいか否かは、語中かつ無強勢音節での VOT を調べれば判定できるが、本調査ではこのような調査語彙がない。今後の研究が俟たれる。

ただし、この仮説は現段階では実証することができず、推測の域を出ない。語内での位置と調音位置と VOT との関係について、民和土族語のみならず、多くの言語で検証する必要がある。

なお、破擦音では、無気音では /ts/ の、有気音では /tʂʰ/ の VOT が他と比べて長い、語頭の場合と同様、この結果に説明を加えることは難しい。

最後に、語種（本来語であるか漢語由来であるか）による VOT の差異について述べる。語頭の場合と同様、調査語彙を本来語と漢語に場合分けし、それぞれ調音位置ごとに VOT の平均値を算出した。図 12 は閉鎖音、図 13 は破擦音の VOT の平均値を表したものである。ただし、語中を対象とした調査語彙の中に漢語由来の語が 3 語（kaka 「兄」、patca 「準備する」、pajtʂʰa 「作る」）しかないため、図中の「漢語」は多くが空欄になっている。

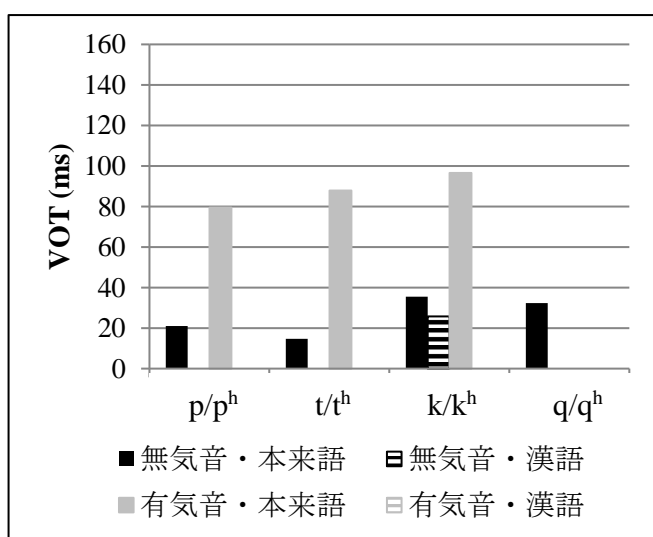


図 12 : 語種と語中閉鎖音の VOT

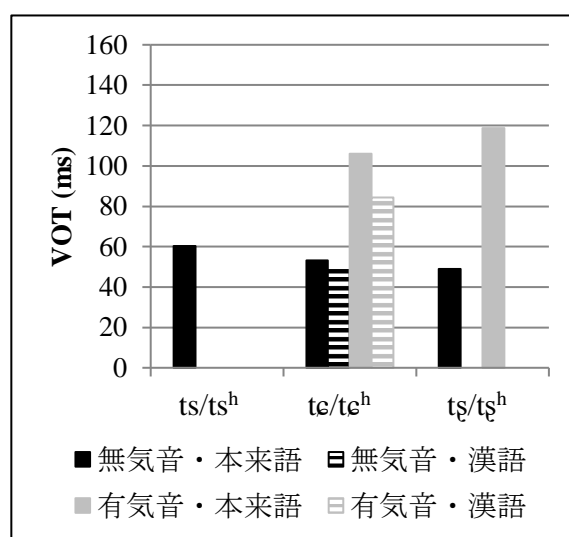


図 13 : 語種と語中破擦音の VOT

図 12 および図 13 からは、本来語に比べ漢語由来の調査語彙で VOT がやや短いという結果が見て取れる。しかし、漢語由来の調査語彙の数が極めて少ないことから、この結果が語種の違いによるものであるとは言い切れない。4.1 節で述べたように、語頭では本来語と漢語由来の語の VOT に関して一定の傾向は見られない。このことと併せて考えると、語中の場合も、本来語と漢語由来の語で VOT に有意な差はないと考えるのが妥当であろう。

4.2.2 前気音の有無

続いて、語中子音における前気音 (preaspiration) の有無について述べる。本調査では、無気音はもちろん、有気音でも前気音はほとんど観察されなかった¹⁴。図 14 と図 15 はそれ

¹⁴ 全データのうち 2 例（いずれも akʰa 「僧侶」）のみ、第 1 音節の母音がやや息漏れ音化しており、前気音の現れであると言えなくもない。しかし、これは民和土族語の有気音一般に見られる特徴ではない。

ぞれ、語中の /t/ (調査語彙 mawtan 「ボール」) と語中の /tʰ/ (調査語彙 tcawtʰan 「餅」) の音声波形とスペクトログラムである。

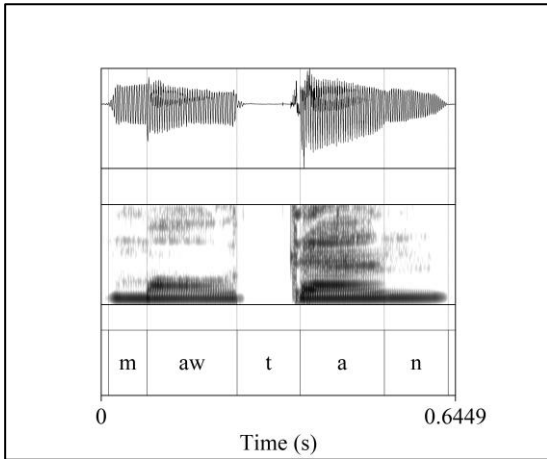


図 14 : 民和土族語の語中の /t/

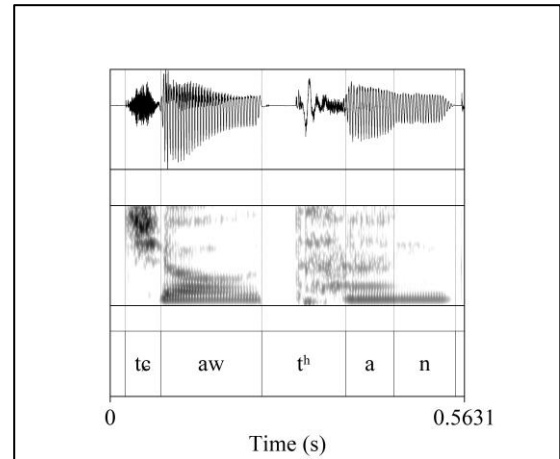


図 15 : 民和土族語の語中の /tʰ/

図 14 においても図 15 においても、/t/ および /tʰ/ の閉鎖の前 (すなわち /aw/ の部分) には、帯気成分にあたる高周波域のノイズは確認されない。つまり、/t/ はもちろん /tʰ/ でも前気音は確認されない。一方で、閉鎖の開放から後続母音 /a/ の声帯振動開始までの時間 (すなわち VOT) は、/t/ と /tʰ/ で大きく異なっていることがわかる。言い換えると、有気音と無気音は語中においても、VOT の違いのみで明確に区別できる。

以上の特徴は、モンゴル語の特徴とは大きく異なる。2.2 節で述べたように、モンゴル語では語中の有気音は前気音として現れ、語中の有気音と無気音は前気音の有無によって区別される。一方で、語中の VOT は有気音と無気音でほぼ同じであるとされる。図 16 および図 17 は、植田 (in press) に挙げられた、モンゴル語 (ハルハ方言) の語中の /t/ と /tʰ/ の音声波形とスペクトログラムである (なお、図中の d, t はそれぞれ /t/, /tʰ/ を表す)。

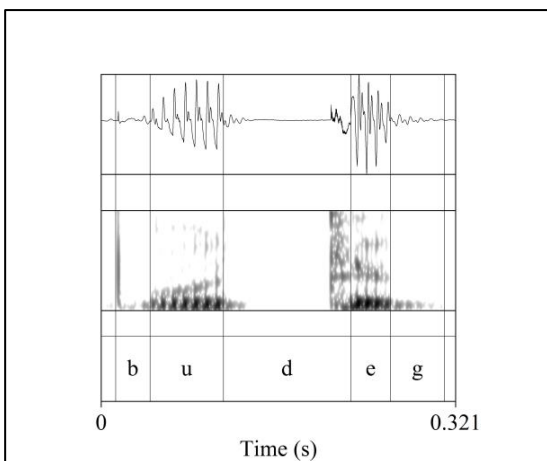


図 16 : モンゴル語の語中の /t/

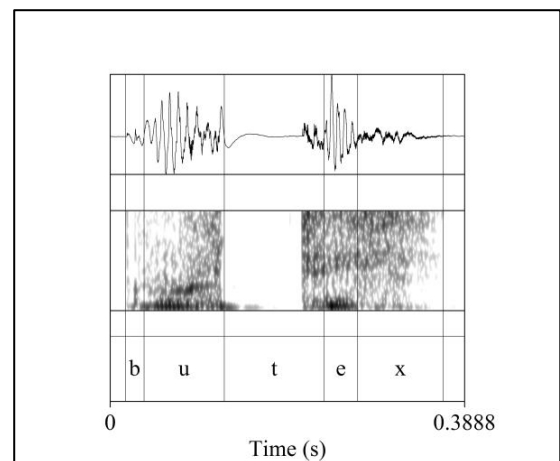


図 17 : モンゴル語の語中の /tʰ/

モンゴル語では /t/ と /tʰ/ では閉鎖前の音声実現に大きな違いがあり、/t/ では帯気成分が観察されないのに対し、/tʰ/ では母音 /u/ の部分に明確な帯気成分が観察される。一方で、閉鎖の開放から母音 /e/ までの長さ（すなわち VOT）には、両者にそれほど大きな違いはないことがわかる。

Svantesson and Karlsson (2012: 456) は、モンゴル語（ハルハ方言）の語中の /t-tʰ/, /ts-tsʰ/, /tʃ-tʃʰ/ について、VOT のデータ（3名のインフォーマントそれぞれの平均値）を示している。そのデータをまとめると、表 5 のようになる。なお、数値の単位は ms であり、*test* は統計的有意水準（n.s. は $p \geq 0.05$ 、* は $p < 0.05$ 、** は $p < 0.01$ 、*** は $p < 0.001$ ）を表している。

表 5：モンゴル語の語中の VOT（Svantesson and Karlsson 2012: 456 より）

speaker	/-t-/	/-tʰ-/	<i>test</i>	/-ts-/	/-tsʰ-/	<i>test</i>	/-tʃ-/	/-tʃʰ-/	<i>test</i>
BB	16	20	n.s.	70	102	*	53	78	*
DD	13	15	n.s.	73	93	n.s.	53	74	*
XB	14	19	n.s.	54	64	n.s.	45	66	**

表 5 から、モンゴル語では語中閉鎖音 /t-tʰ/ では VOT の差はほぼなく、語中破擦音 /ts-tsʰ/ と /tʃ-tʃʰ/ では VOT にやや差があるものの、その差はそれほど大きくないことがわかる¹⁵。表 5 の数値と図 9 および図 10 を比較すると、図 9 および図 10 の方が無気音と有気音の VOT の差が大きいことが読み取れる。つまり、モンゴル語に比べ、民和土族語では語中の無気音と有気音の VOT の差が大きく、両者を区別する重要な音響の手掛かりとなっていることがわかる。

5 まとめと考察

前節で見た民和土族語の音声的特徴をまとめると、以下のようになる。

- (2) a. 語頭でも語中でも、どの調音位置においても、無気音と有気音は VOT で明確に区別される。有気音であっても前気音は観察されず、無気音であっても有声化は起こらない。
- b. VOT は調音位置によって違いがあり、軟口蓋音・口蓋垂音で長い。
- c. 語頭の VOT は、特に有気音において、モンゴル語に比べて長い傾向にある。
- d. 語頭の VOT は、無強勢音節内よりも強勢音節内で長い。
- e. 語中の VOT は、語頭に比べて短い。

¹⁵ 表 5 からわかるように、モンゴル語ハルハ方言では、語中の /tʃ/ と /tʃʰ/ の間には VOT の値に統計的有意差があるが、この差が /tʃ/ と /tʃʰ/ の弁別に関与しているか否かは定かでない。

(2a) からわかるように、民和土族語の帯気性の対立は、音声的にも安定して無気音（短い VOT）と有気音（長い VOT）の違いとして現れている。語中においても有気音が前気音ではなく後気音として現れる点が、モンゴル語とは大きく異なる特徴である。また、調音位置にかかわらず、音韻的な対立は一貫して VOT の違いとして実現し、無気音の有声化などで対立が強化されるということはない。この点もモンゴル語や漢語とは異なる。

VOT の値については、特に語頭でかなり長いという結果が出た。今回得られたデータと植田 (2018) の結果を照らし合わせると、VOT の長さはモンゴル語 < 漢語 < 民和土族語となる。この結果は、今回のインフォーマントの個人的な特徴である可能性もあるが、民和土族語の特徴である可能性が十分に考えられる。1.1 節で述べたように、民和土族語の話者は漢語とのバイリンガルである。二言語併用の状況においては、第 2 言語 (L2) が第 1 言語 (L1) の VOT に影響を与えることが知られている (Chao and Chen 2008, Ringen and Kulikov 2012)。また、2.2 節で述べたように、モンゴル語内蒙古方言は漢語との二言語併用の影響により、VOT の特徴が漢語の VOT に近づいているという可能性が指摘されている (植田 2018)。本調査の民和土族語の結果は、モンゴル語内蒙古方言の状況と並行的である。つまり、民和土族語はモンゴル語内蒙古方言と同様に、モンゴル系の言語であるにもかかわらず、漢語との二言語併用が行われていることにより、VOT の特徴に関してもモンゴル語よりも漢語に近いのではないかと考えられる。

調音位置と VOT の関係については、軟口蓋音や口蓋垂音で VOT が長いという結果が出た。これは通言語的な傾向に一致し、生理的・空気力学的な要因によるものであると考えられる。しかし、民和土族語では、語頭の有気音では VOT が長いという特徴によって、語中の無気音では VOT が短いという特徴によって、調音位置による VOT の違いの一部が覆い隠されている可能性がある。

以上、本稿では、民和土族語の閉鎖音・破擦音の帯気性の対立について、VOT を中心とする音声特徴を記述した。そして、モンゴル語や漢語の帯気性の対立における音声的特徴と対照することにより、民和土族語に見られる二言語併用の影響について考察した。しかし、VOT に対する語内での位置と調音位置の影響や、二言語併用の影響について、本稿で述べた推定が正しいかどうかを明らかにするには、さらなるデータと考察が必要である。民和土族語および他言語を対象としたさらなる研究が俟たれる。

謝辞

本研究は「東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 平成 30 年度言語研修 土族語」の受講に端を発したものである。言語研修の関係者、特に資料を提供して下さった講師の塩谷茂樹氏、調査に協力して下さったネイティブ講師の何菊紅氏に深く感謝申し上げます。また、本稿の執筆にあたり、鈴木博之氏、外賀葵氏より有益なコメントを頂戴した。なお、本研究は JSPS 科研費 JP17J06051 (研究課題名: 「東部ユーラシア諸言語の動態的音韻研究—音声産出・知覚実験を軸に—」) の助成を受けている。

略号一覧

1: 1人称 COP: コピュラ NOM: 主格 PST: 過去 QUOT: 引用 SG: 単数

参考文献

- Boersma, Paul and David Weenink (2015) Praat: Doing phonetics by computer (Version 5.4.13).
<http://www.praat.org/>
- Chao, Kuan-Yi and Li-mei Chen (2008) A cross-linguistic study of voice onset time in stop consonant productions. *Computational Linguistics and Chinese Language Processing* 13 (2): 215–232.
- Chen, Li-Mei, Kuan-Yi Chao and Jui-Feng Peng (2007) VOT productions of word-initial stops in Mandarin and English: A cross-language study. *ROCLING 2007 Poster Papers*: 303–317. (Taipei: The Association for Computational Linguistics and Chinese Language Processing [ACLCLP])
- Cho, Taehong and Peter Ladefoged (1999) Variation and universals in VOT: Evidence from 18 languages. *Journal of Phonetics* 27: 207–229.
- Fried, Robert W. (2010) *A Grammar of Bao'an Tu, A Mongolic Language of Northwest China*. Ph. D. dissertation, the University of Buffalo, State University of New York.
- Georg, Stefan (2003) Mongghul. In: Juha Janhunen (ed.) *The Mongolic Languages*, 286–306. London: Routledge.
- 橋本萬太郎 (1989) 「中国語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編著) 『言語学大辞典 第2巻 世界言語編 (中)』 892-906. 東京: 三省堂.
- 何菊紅 (2019) 『民和土族語における述語文形式に関する研究—特に主観・客観形式に着目して—』 修士論文、大阪大学言語文化研究科.
- フフバートル (1992) 「モンゴル語族諸言語における語頭子音の軟音化」 『一橋研究』 17 (3): 141–166.
- 角道正佳 (2006) 「Mangghuer (土族語民和方言) の音節変化は漢語の影響と言えるか—東郷語との比較の観点から—」 城生佰太郎博士還暦記念論文集編集委員会 (編) 『実験音声学と一般言語学 城生佰太郎博士還暦記念論文集』 181–186. 東京: 東京堂出版.
- (2008a) 『土族語互助方言の研究』 京都: 松香堂.
- (2008b) 「土族語民和方言メモ—『中国民和土族民間故事』、『土族民間故事』の分析より—」 In: Setsu Fujishiro and Masahiro Shōgaito (eds.) *Dynamics in Eurasian Languages*, 137–175. Kobe: Dept. of Human Science Studies, Kobe City College of Nursing.
- (2010) 「河湟語の子音の有声化と無声化」 『大阪大学世界言語研究センター論集』 4: 1–29.
- (編) (2012) 『土族語語彙集』 大阪: 大阪大学日本語日本文化教育センター.

- Karlsson, Anastasia and Jan-Olof Svantesson (2011) Preaspiration in Mongolian dialects: Acoustic properties of contrastive stops. *Paper Presented at The 10th Seoul International Altaistic Conference*: 125–140.
- (2012) Aspiration of stops in Altaic languages: An acoustic study. *Altai Hakpo* 22: 205–222.
- Kent, Ray D. and Charles Read (1992) *The Acoustic Analysis of Speech*. San Diego: Singular Publishing Group.
- Klatt, Dennis H. (1975) Voice onset time, frication, and aspiration in word-initial consonant clusters. *Journal of Speech and Hearing Research* 18: 686–706.
- 栗林均 (1992a) 「モンゴール語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編著) 『言語学大辞典 第4巻 世界言語編 (下 - 2)』 492–498. 東京: 三省堂.
- (1992b) 「モンゴル諸語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編著) 『言語学大辞典 第4巻 世界言語編 (下 - 2)』 517–526. 東京: 三省堂.
- Lisker, Leigh and Arthur S. Abramson (1964) A cross-language study of voicing in initial stops: Acoustical measurements. *Word* 20: 384–422.
- Ringen, Catherine and Vladimir Kulikov (2012) Voicing in Russian stops: Cross-linguistic implications. *Journal of Slavic Linguistics* 20 (2): 269–286.
- Rochet, Bernard L. and Yanmei Fei (1991) Effect of consonant and vowel context on Mandarin Chinese VOT: Production and perception. *Canadian Acoustics* 19 (4): 105–106.
- Shimizu, Katsumasa (1996) *A Cross-language Study of Voicing Contrasts of Stop Consonants in Asian Languages*. Tokyo: Seibido.
- 塩谷茂樹 (2020) 「民和土族語における主観・客観形式について」 モンゴル諸語の言語変容: 内的要因と外的要因 2019 年度第 2 回 (通算第 4 回) 研究会 ハンドアウト. 東京外国語大学, 2020 年 2 月 1 日.
- 塩谷茂樹・何菊紅 (2019) 『土族語文法 平成 30 年度言語研修「土族語」研修テキスト』 東京: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- Slater, Keith W. (2003a) *A Grammar of Mangghuer: A Mongolic Language of China's Qinghai-Gansu Sprachbund*. London: RoutledgeCurzon.
- (2003b) Mangghuer. In: Juha Janhunen (ed.) *The Mongolic Languages*, 307–324. London: Routledge.
- Svantesson, Jan-Olof and Anastasia Karlsson (2012) Preaspiration in modern and old Mongolian. *Suomalais-Ugrilaisen Seuran Toimituksia* 264: 453–464.
- Svantesson, Jan-Olof, Anna Tsendina, Anastasia Karlsson, and Vivian Franzén (2005) *The phonology of Mongolian*. Oxford: Oxford University Press.
- Ueta, Naoki (2018) Voice onset time of word-initial stops and affricates in Khalkha Mongolian. *Journal of the Phonetic Society of Japan* 22 (2): 131–140.

植田尚樹 (2018) 「中国語・内蒙古語・モンゴル語の語頭閉鎖音における VOT の差異」 『日本言語学会第 157 回大会 予稿集』 172-177. (京都: 日本言語学会)
—— (in press) 「モンゴル語ハルハ方言の語中閉鎖音の音声的バリエーションと音韻解釈」 『日本モンゴル学会紀要』 50.

Walker, Rachel (2011) *Vowel Patterns in Language*. Cambridge: Cambridge University Press.

吴宗济 (主編) (1986) 『汉语普通话单音节语图册』 北京: 中国社会科学出版社.

照那斯图、李克郁 (1982) 「土族语民和方言概述」 《民族语文》编辑部 (编) 『民族语文研究文集』 458-487. 西宁: 青海民族出版社.

朱春躍 (2010) 『中国語・日本語音声の実験的研究』 東京: くろしお出版.

受理日 2020年4月14日

[書評] 海老原志穂 (著) 『アムド・チベット語文法』

東京：ひつじ書房、2019年、xxiv+374pp.

鈴木 博之

国立民族学博物館

キーワード：チベット系諸言語、アムド、記述言語学、文法範疇

1 本書の概観

本書は日本語による初めてのまとまったアムドチベット語（以下「アムド語¹」）の文法記述である。従前出版された日本語によるチベット系諸言語の記述文法を見渡せば、星 (2016) による記述言語学の方法論を応用した古典チベット文語文法があるものの、口語変種に関して見れば、本書が初の本格的な記述文法といえる²。

本書の内容を概観すれば、先行研究を批判的に検討して文法現象を議論するタイプの学術専門書とは異なることに気づく。計 976 の例文³ によって現象を的確に記述し、平易な解説で言語の構造を説いている。本書の例文はすべて母語話者による再度のチェックを経ることで (p. iii)、記述の精度を高めている。第 1 章はアムド語の概況を簡潔にまとめて提示し、第 2 章は音韻およびその関連現象を述べ、第 3 章から第 8 章まで、語から句、句から文へと、記述の単位を徐々に大きくする配列としている。第 9 章は敬語の記述であり、そののち 3 篇の付録と文献・索引が続く。詳細な目次と図表一覧 (pp. vii-xvii) は検索にも役立つ。

以上のような構成をとる本書であるが、同時に専門家には物足りないと感じられる部分もある。特に気になったのは、国外で出版されたチベット系諸言語の文法や博士論文にはたいてい存在する、口語音形式とチベット文語形式の体系的な対応関係に触れた部分が、本書には含まれていない点である。Häsler (1999) は、記述研究における音声・音韻の記述には口語形式の体系化とともにチベット文語形式との対比も整理すると述べ、また多くの研究もこの方法に従っている。もちろん、これは共時的な記述研究と直接的にはかかわらない。それゆえ、記述がないこと自体は単に「不親切」であるという印象を抱かせるだけであって、文法記述の質を下げたものではないことは注意しておきたい。むしろ、文語形式を頼らずに共時的現象を記述した著者の方針を肯定的に評価できる。しかし、Aikhenvald (2015:286) が述べるように、歴史的な観点を共時的分析において参考にすることも時として必要となる。

¹ 著者は「アムド・チベット語」と中黒を用いているが、評者は中黒を一貫して用いない主義である。以下、冗長になる点も考慮の上、「アムド語」と記す。

² アムド語のまとまった記述研究としては、ドイツ語で書かれた Haller (2004)、漢語で書かれた周毛草 (2003) や邵明園 (2018) がある。

³ ただし、p. 24 の (5) は音節構造を述べているため、正確には 975 の例文となる。

上述のように、本書は文法現象を例示することで著者の分析を支えている。このため、文章による言語現象の検討と分析が簡潔に済まされており、その結果、手軽に言語現象を把握できる一方で、先行研究との立場の異なりや議論すべき問題をめぐり、著者の立場を支持する議論に不足がある。もちろん、簡潔を旨とする著者の論述方針に照らせば、議論の不足自体を否定的にとらえては問題点を見誤ってしまう。

「序」にあるように、著者は博士論文に含まれている一部の内容を割愛して本書を出版した。語彙集とテキスト集を欠くのは、記述文法としては大変惜しい。しかし、著者は本書を「記述文法」や「記述的研究」とは呼ばず、より一般的に「文法」と名づけている。しかし著者は多く文化語彙を収集した経験もあり（海老原 2016, 2017、星 主編 2018）、手元には数多くの資料があるだろう。CD-ROM などによるデータの添付で出版することはできなかったのだろうか。星 主編 (2018) のように、民俗語彙、特に色が問題となる家畜の語彙にあっては、カラー写真をデータ化して提示することが視覚的に有効である⁴。電子出版も盛んにおこなわれている昨今、伝統的な紙媒体の出版にも応用できる範囲での工夫があれば、本書の価値をぐっと高めることができたかもしれない。

本書評では、特に著者が重要視する文法現象や、先行研究に言及しつつ議論を展開している点について、読者のために適宜補足し、議論したい。以下、概要、音韻、形態統語に分けて、特に重要な点に絞って評する。

2 概況

本書第1章の記述は、コンパクトなチベット系諸言語とアムド語に関する案内である。著者は最新の研究に注意を払ってはいるものの、博士論文を提出して以降の10年間の研究成果を正確に跡づけているとは言えない。概況部分は、本体の記述と異なり比較的容易に増補改訂を加えることができる部分であり、学界の最新の研究成果を盛り込めるのではないかと考えると、惜しいことである。

アムド語の分布域として提示された図 (p. 2 図1) は、研究史に照らして次のような問題がある。それはアムド語の定義にかかわる重要な方言学上の問題である。まず、甘肅省甘南州の東側と、そこから南に続く四川省阿壩州の東端は、アムド語の分布域から除くべきである。この一帯の言語は、分類に論争があるものの、アムド語ではないチベット系言語であるという見解が主流である（瞿霽堂 1962, 1996；共確加措 1987；華侃、尕藏他 1997；Suzuki 2005, 2008, 2015；鈴木 2007, 2012, 2013b, 2015, 2016a；王雙成 2012；仁増旺姆 2013:4-12；Tournadre 2014；Powell & Suzuki 2017）。確かに、アムド語がリンガ・フランカとして部分的に機能しているのは事実であるが、それは地図に反映させるべきではないだろう。加えて、最新の研究成果に基づいて、書評読者のために補足しておきたい点がある。具体的には、四川省甘孜州中部の部分的な地域がアムド語の分布域として認められる（Suzuki & Sonam Wangmo 2016, 2019；Suzuki 2018）こ

⁴ たとえば、Tsering Samdrup & Suzuki (2019:239) は色が問題となる家畜の語彙を挙げているが、やはり写真が添えてあるほうが分かりやすい。

とである。要するに、アムド語の分布域は、「アムド」というチベットの伝統的地理区分が東西に広いのとは逆に、南北に長くなる⁵。

証拠性とウチ/ソトの関係に関して、第1章でこの両者を分けて記述するのが著者の立場であることが表明されている (p. 10)。これをめぐる問題点は、4節で指摘したい。

言語状況について、著者は牧区方言は農区方言と比べて威信が高いと述べているが (p. 3)、それは音韻においてのみ認められているのが現状である。彼らの言語使用全般については、教育の進んだ昨今、威信が高いどころか批判される傾向にある。それは、教育機関における牧畜民の教師が少なく、規範的 (normative) 言語使用⁶において、牧畜民独自の言語表現が往々にして批判されるからである (Tsering Samdrup & Suzuki 2017)。また、昨今流行している「母語純化運動 (pha skad gtsang ma)」も少なからず日常の言語使用に影響を与えている (Thurston 2018)。これからの研究においては、これらの点にも目を向けていく必要がある。

3 音韻

第2章は、本書の記述対象の音韻体系の記述と形態音韻論的現象の記述である。本書の言語形式の記述は、音標文字を含む文字セットを用いた音韻表記である。それは国際音声字母 (IPA) を踏襲しているように見えるが、そうではない。本文中に明言されていないが、主に中国で使用される音標文字体系を参照したと見える。たとえば、「齒茎/硬口蓋鼻音」(p.18 表1) に $[\eta]$ $[n]$ を用いている。これは IPA に含まれておらず、中国で通用する表記であることに注意が必要である⁷。評者は、しかしながら、著者のこの音標文字の選択を高く評価する。チベット系諸言語の記述には IPA には定義されない音標文字が必要となることがある。その際には、朱曉農 (2010) などを参考に、厳密に定義された非 IPA の使用をためらうべきではない。

一方、中国の記述を参照するあまり、誤解を招く表記を用いているものもある。それは $[\text{ʌ}]$ である。これが実際に無声齒茎側面摩擦音であれば正確な音標文字であるが、評者の手元にある複数のチベット系言語のデータ⁸から判断すると、無声側面音 $[\text{ʌ}]$ である可能性が大いにある。ところが、中国では、 $[\text{ʌ}]$ を用いない「習慣」となっている。この裏事情は張濟川 (2009:278-281) が述べているように、「製版上の都合」に過ぎない。我々に $[\text{ʌ}]$ を用いない理由は存在しない。

著者はアムド語に特徴的な摩擦音を $[\text{ɕ}]$ $[\text{ɕ}ʰ]$ と、先行研究がなしえなかった本質をついた音声記述をしている (p. 20)。ところが、残念なことに、音韻表記に $[\text{ɕ}]$ を選んでしまった。これは誤解を招く⁹ 恐れがあるため、今後は $[\text{ɕ}ʰ]$ の使用が推奨される (Suzuki et al. 2019)。 $[\text{u}]$ $[\text{uβ} \sim \text{uu}]$ について (p. 22) も、著者の記述から推察するに、鈴木 (2013a) のいう $[\text{ɣ}]$ の変種である可能性が

⁵ 詳細な言語分布については、Tournadre & Suzuki (forthcoming) に詳細な地図を付した解説がある。

⁶ 「規範的アムド語」を表題にした教科書 (Dpal ldan bkra shis 2017) が出版されていることは特筆に値する。

⁷ 中国で一般に通用する音標文字については、《方言調査字表 (修訂本)》(1981:81) などを参照。

⁸ 評者の手元には 400 地点を超えるチベット系諸言語のデータがあり、そのうちアムド語にかかわるものは 50 種類程度ある。なお、評者が音声記述を行った言語の中には、 $[\text{t}]$ と $[\text{ʌ}]$ が対立するものもある (鈴木 2012)。

⁹ チベット系諸言語において、 $[\text{ɕ}]$ は $[\text{ɕ}]$ を表す音標文字として用いられている (鈴木 2016b)。

ある。著者が扱う方言と地理的に近い地域で話される牧民方言を記述する Tsering Samdrup & Suzuki (2019) は、/ɥ/を用いている。音韻表記における音標文字の選択は、近縁言語の事例を参照するほうが望ましい。また、著者は一貫して声たてを記述していない。母音から始まる音節は [ʔ] を伴うのであろうか。音素として認定するしないにかかわらず、これに関する記述は必要であろう。

音韻分析において、C_j という分析 (pp. 27-28) は再考の余地がある。このわたり音/j/は、実際は後続母音と一体化して、朱曉農 (2010:17-21) にある「摩擦化母音」という単一の音素ではないか。この現象については、王雙成 (2010) の報告もある。著者の表記する音声の自由変異 (p. 28) や制限の多い C_j の出現環境という事実を考えれば、単一音素としての記述が適切であろう。また、この前舌高母音の音特徴について、体系上は著者が後舌高母音の1つとして記述する/u/ (評者のいう/ɥ/または/ɥ/) と共通する点があるのではないだろうか。この点については、今後の研究課題となるであろう。

著者は音調、吸気音、長母音といった周辺的な音声現象にも言及している (pp. 30-32)。いずれの記述も的確であり、こういった記述を含めたことは高い評価に値する。ただし、音調については、Caplow (2016) の記述と異なり、名詞と動詞の音調を区別していない (pp. 30-31)。この点については、著者による究明を期待したい。

4 形態統語

本書第3章以降は、文法の中核となる形態統語の記述である。本書評では、特に重要な問題点のみを指摘しておきたい。

著者は代名詞に双数を記述している (p. 57) が、ギャロン語 (長野 2018) などと違い、形態統語的に動詞との人称・数の一致を行わないアムド語の場合、双数が特別な形式だと示すには、たとえば「3」という数詞との組み合わせがないことを記述し、双数のみが異質であることを示す必要がある。チベット系諸言語では、特定の数を明示する形式について双数だけが特別の形式をもつ言語¹⁰のほか、「不特定の複数」と「数詞と共起して特定数を表す複数」の2系列をもつ言語¹¹もあるからである。

著者は動詞の範疇で「コピュラ」という用語を使用している (pp. 75-76)。本書では、コピュラ動詞と存在動詞が対立項をなすように記述されている (pp. 75-77)。しかし、特に欧米言語による文献 (Tournadre & Sangda Dorje 2003; Zeisler 2004 など) では、著者の言うコピュラ動詞も存在動詞も「コピュラ」として扱われる。Caplow (2000) は、これら2者をまとめて ELPA (equative-locative-possessive-attributive) と呼び、一体的に取り扱っている。本書の言うコピュラ動詞は、星 (2003, 2016) のように「判断動詞」と呼ぶほうが適切であると、評者の目に映る。

著者は「意思性」という用語を用いて (p. 79) 動詞を分類しているが、それに対応する概念に制御可能性 (controllability) があることを注記しておくべきであっただろう。「意志/volitional」

¹⁰ たとえば、Lhasa 方言 (Tournadre & Sangda Dorje 2003) など。

¹¹ たとえば、Sharkhog 方言 (評者の調査資料による) など。

という概念を用いている研究には DeLancey (1986) や星 (2003, 2016) があり、「制御可能性/controllability」という概念を用いている研究には、Tournadre (2004) や Zeisler (2004) などがある。たとえば、*dga*「愛する」や *rnyed*「見つける」という動詞は意志のある行為を表すが、行為そのものは「制御不可能」である。これらに対する動詞接辞は「非意志動詞」のものが選択される。ここに矛盾が出ることを読者が注意しつつ、本書の記述を読む必要があるだろう。

語彙動詞の項数による分類は、チベット系諸言語で非常に重要である (pp. 81-85)。特に被動者の標示に必要とされる格標識が何であるのかは、記述の上でも重要になる。この項目の執筆には、たとえ 1 変種の記述においても、若干の歴史的観点からの配慮があれば当該言語群の専門家に疑問を抱かせずに済む。たとえば、チベット文語にはアムド語にはおそらく対応がないであろう共格 (comitative, associative とも; Tournadre 2010 参照; 文語では *dang*) があり、文語 *'dra*「似ている」など特定の動詞は、被動者の項に対してこの格標示を要請する。これに対応するアムド語の例が知りたくなくても、本書の記述方法では分からないのが難である。

アムド語の動作動詞は語幹の形態変化を伴い、著者もページを割いて記述・分類している (pp.87-91)。しかし、文法書として期待したいのは、付録でもよいから、存在する動作動詞の語幹すべての形態変化を網羅した表である。本書には語彙集が含まれていないため、調べる手段がなく、網羅的な形態変化表を欠くのは大変惜しい。

先に触れた証拠性とウチ/ソトの関係について、著者はこの両者を分けて記述しているが (pp. 10, 241-270)、そうではない立場があることにも配慮し、注で解説している (pp. 15, 291)。しかしその記述が釈然としておらず、研究史を正しく把握していないと受け取られる。特に複数の用語の単に並べて言及するだけでは、情報量として不足が多いし誤解も招く。著者は証拠性について Aikhenvald (2004) の立場を追認する形をとっている (p. 259) が、議論されるべきは複数ある立場そのものであろう。どの立場をとるかについての説得力のある議論が本書のどこにも見当たらないのは、立場の違いありきでの記述であり、残念である。ただし、著者が博士論文を提出した時期の研究状況を反映していると考えれば、本書の問題は単に注のつけかたにあると判断できる。その当時は証拠性に関する議論が発展途上であり、最近の 10 年間に活発な議論が行われてきたという背景がある。そこで、本書評では、以下にこの点を特に補足して説明を加えておきたい。

チベット系諸言語における証拠性の体系については、*source* とともに *access* も証拠性の一部であるというように、Aikhenvald (2004) のいう証拠性の定義そのものを変えるべきだと提案した Tournadre & LaPolla (2014) を参照するのが望ましい。そのうえで、それを採用するかしないか、そして採用できるかできないかを議論しなければならない。著者は *source* として定義するか *access* として定義するかでウチ/ソトを証拠性の一部として認めるかどうかによると述べているが (p. 259)、両者は二者択一ではなく共存するため、誤りである。加えて、Vokurková (2008) は、形態統語上の特徴から、認識性 (epistemicity) と証拠性 (evidentiality) は不可分であるとし、Oisel (2017) は Vokurková (2008) と Tournadre & LaPolla (2014) の考えを反映させたラサ方言の証拠性の体系を表形式で提示している。確かに、そこに *source* と扱われる伝聞の

証拠性を加えていない。それは伝聞標識が形態統語的に異なるふるまいをするからである。著者は Tournadre & LaPolla (2014) のいう sensory access (感知；知覚によるアクセス) を「観察知」という用語で証拠性の一部と認定する (p. 24) 一方で、source に直結する「伝聞」については、言及はある (pp. 250-251) が項目を立ててもいないなど、証拠性の枠組みから見れば記述が非常に分かりづらいのは事実である¹²。過去にはウチ/ソトを表す用語について論争があり (Tournadre 2008)、用語の適不適はある程度議論する必要があるだろう。現段階の研究では、証拠性とウチ/ソトの取り扱いをめぐる、複数の立場が林立した状態にある。そのことは Gawne & Hill eds. (2017) に収録されている論文を通読すれば容易に理解できる。加えて、最近でも Zeisler (2018) のような新しい見解が出てきている。いずれの研究についても、どの立場が記述言語学的によりすぐれているかといった議論はない。しかし、一方が他方を正確に理解できていない現状は憂うべきであり、今後より一層の研究が求められる分野である¹³。

敬語に関する記述が本書の最終章となる。本章の記述は語形成に関する内容が大部分であるため、第3、第4章に含めるか、それに続く章に配置するほうが配列として適切なように見える。ところが、婉曲表現 (p. 334) が含まれているため、単に語の問題ではないことが分かる。なお、アムド語の牧畜民の変種には、大量の謙讓表現があることが最近の研究から明らかとなった (Tsering Samdrup & Suzuki 2019)。今後アムド語の研究にあたっては、この特徴にも留意する必要がある。

5 まとめ

著者は研究開始から本書を上梓するまで 15 年以上の年月を費やしている。博士論文の提出から数えても 10 年を要している。記述文法を形にするというのは、時間を要する仕事である。著者が本書執筆のために収集した言語資料は膨大な量になるだろう。その資料に基づいて 1 冊の書物にまとめるのも大変な労力が必要である。その結果として出版された本書は、本書評で述べたような問題点があるとはいえ、アムド語のまとまった文法研究として価値ある 1 冊であることは疑いない。

著者はまた本書に含まれないデータ集も個別に出版している (Ebihara 2010)。本書評で指摘した問題についても、著者が別途公開すれば、読者はあわせて参照できるようになり、本書の記述を補うものとなるだろう。

¹² 証拠性を文法体系に組み込むチベット系諸言語にあっては、伝聞というカテゴリーについても慎重にかつ丁寧に記述をする必要がある。また、日常会話と語りにおいては、伝聞標識の現れが異なる、といった研究結果 (鈴木、四郎翁姆 2019 など) にも今後は注意を払うことが必要であろう。

¹³ なお、評者は、自身の記述研究を通して、Oisel (2017) の解釈に基づく理解がチベット系諸言語のうち中国に分布する複数の言語の「体系としての証拠性」をもっともよく体現していると考えている。つまり、文法上の体系として機能しているのは、Tournadre & LaPolla (2014) の考えに従った、本書の言う「ウチ/ソト」と「証拠性」、さらには「認識性」までもが不可分のものであるという考えに傾倒している。評者の立場から整理したアムド語 (Mabzhi 牧民方言) に関する証拠性の体系は、Tsering Samdrup & Suzuki (2018) で提示している。また、Suzuki et al. (2018) において、評者の立場がアムド語のほかにもカムチベット語にも適用できることを示している。

参考文献

- 海老原志穂 (2016) 「チベット人はどのようにヤクを認識しているのか？」 *Sernya* 3: 12-18.
- (2017) 「ヤクの名は。」『Field+ : フィールドプラス』17: 6-7 電子版：
<http://hdl.handle.net/10108/89784>
- 鈴木博之 (2007) 「川西民族走廊・チベット語方言研究」京都大学博士論文 電子版：
<https://doi.org/10.14989/doctor.k12734>
- (2012) 「甘肅省甘南州卓尼県のチベット語方言について—蔵文対応形式から見た扎古録 [Bragkhoglung] 方言の方言特徴—」『京都大学言語学研究』第 31 号 1-23 電子版：
<https://doi.org/10.14989/182195>
- (2013a) 「y—チベット・ビルマ系諸言語における“唇歯母音”」『地球研言語記述論集』5: 17-26 電子版：<http://id.nii.ac.jp/1422/00000855/>
- (2013b) 「蔵文対応形式から見た舟曲県チベット語拱壩 [dGonpa] 方言の特徴—舟曲県チベット語の概説を添えて—」『京都大学言語学研究』第 32 号 1-35 電子版：
<https://doi.org/10.14989/182202>
- (2015) 「甘南州卓尼・迭部・舟曲 3 県のチベット系諸言語とその下位分類試論」『ニダバ』第 44 号 1-9 電子版：<http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045560>
- (2016a) 「<藏語方言學研究與語言地圖：如何看待“康方言”>《民族學刊》第 2 期 1-13+92-94
- (2016b) 「/j/が語る音変化史—カムチベット語香格里拉方言群における硬口蓋系列音素についての覚え書き—」『言語記述論集』8, 91-103 電子版：<http://id.nii.ac.jp/1422/00000898/>
- 鈴木博之、四郎翁姆 (2019) 「カムチベット語塔公 [Lhagang] 方言における口承文芸の記録と言語分析」『言語記述論集』11, 17-38 電子版：<http://id.nii.ac.jp/1422/00003018/>
- 長野泰彦 (2018) 『嘉戎語文法研究』汲古書院
- 星泉 (2003) 『現代チベット語動詞辞典 (ラサ方言)』アジア・アフリカ言語文化研究所
- (2016) 『古典チベット語文法 『王統明鏡史』(14 世紀) に基づいて』アジア・アフリカ言語文化研究所
- 星泉 主編 (2018) 『チベット牧畜文化辞典 (パイロット版)』Version 1.0 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所星研究室 電子版：<https://nomadic.aa-ken.jp/>
- Aikhenvald, Alexandra Y. (2004) *Evidentiality*. Oxford: Oxford University Press.
- (2015) *The art of grammar: A practical guide*. Oxford: Oxford University Press.
- Caplow, Nancy J. (2000) *The epistemic marking system of émigré in Dokpa Tibetan*. Unpublished manuscript.
- (2016) Reconstructing stress in Proto-Tibetan: Evidence from Balti and Rebkong Amdo. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 39.2, 180-221. doi: 10.1075/ltba.39.2.01cap
- DeLancey, Scott (1986) Evidentiality and volitionality in Tibetan. In Wallace Chafe & Johanna

- Nichols (eds.) *Evidentiality: The linguistic coding of epistemology*, 203-213. Norwood: Ablex.
- Ebihara, Shiho (2010) Text from Amdo Tibetan “Little Frog as God’s Son (zarək łasi)”. *Asian and African Languages and Linguistics* 4, 149-168. Online: <http://hdl.handle.net/10108/61390>
- Gawne, Lauren & Nathan W. Hill (2017) *Evidential systems of Tibetan languages*. Berlin: De Gruyter.
- Haller, Felix (2004) *Dialekt und Erzählungen von Themchen : sprachwissenschaftliche Beschreibung eines Nomadendialektes aus Nord-Amdo*. Bonn: VGH Wissenschaftsverlag.
- Häsler, Katrin (1999) *A Grammar of the Tibetan Dege ཇེ་དགེ་ (Sde dge) Dialect*. Zürich: Selbstverlag.
- Oisel, Guillaume (2017) Re-evaluation of the evidential system of Lhasa Tibetan and its atypical functions. *Himalayan Linguistics* 16.2, 90-128. doi: 10.5070/H916229119
- Dpal ldan bkra shis (2017) Amdo Tibetan language: An introduction to normative oral Amdo. *Asian Highlands Perspectives* 43, 1-668. Online: http://himalaya.socanth.cam.ac.uk/collections/journals/ahp/pdf/AHP_43.pdf
- Powell, Abe & Hiroyuki Suzuki (2017) Phonetic distance and dialect clustering on the Qinghai-Tibet Plateau. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 40.2, 161-178. doi: 10.1075/ltba.17004.pow
- Suzuki, Hiroyuki (2005) Einige Bemerkungen über den Ursprung des creaky Tons im Tibetischen von Sharkhog [Songpan-Jiuzhaigou]. *Kyoto University Linguistic Research* 24, 45-57. doi: 10.14989/87857
- (2008) Nouveau regard sur les dialectes tibétains à l’est d’Aba : phonétique et classification du dialecte de Sharkhog [Songpan-Jiuzhaigou]. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 31.1, 85-108. doi: 10.15144/LTBA-31.1.85
- (2015) New perspective on the suprasegmentals in mBrugchu Tibetan : an introduction to the tonogenesis triggered by breathy voice. *Bulletin of Chinese Linguistics* 8.1, 117-139. doi: 10.1163/2405478X-00801007
- (2018) Remarks on ‘rain’ in Tibetans’ languages in Lithang County. *Studies in Asian Geolinguistics* VIII, 56-61. Online: https://publication.aa-ken.jp/sag8_rain_2018.pdf
- Suzuki, Hiroyuki & Sonam Wangmo (2016) Vocabulary of Shingnyag Tibetan: A dialect of Amdo Tibetan spoken in Lhagang, Khams Minyag. *Asian and African Languages and Linguistics (AALL)* 11, 101-127. Online: <http://hdl.handle.net/10108/89211>
- (2019) Migration history of Amdo-speaking pastoralists in Lhagang, Khams Minyag, based on narratives and linguistic evidence. *Archiv Orientalní Supplementa XI / Ute Wallenböck, Bianca Horlemann, & Jarmila Ptáčková (eds.) Mapping Amdo: Dynamics of Power*, 241-260.
- Suzuki, Hiroyuki, Sonam Wangmo & Tsering Samdrup (2018) *Essential evidential framework of*

Tibetic languages—Data from Khams and Amdo. Unpublished manuscript presented at the 46th meeting of Tibeto-Burman Linguistic Circle (Kobe)

- Suzuki, Hiroyuki, Tsering Samdrup, Niangwujia (Nyingbo-Gyal), Jixiancairang (Chaksham Tsering) & Sonam Wangmo (2019) /fj/ in Amdo Tibetan: Descriptive and historical approaches. *Journal of the Phonetic Society of Japan* 23, 76-82. doi: 10.24467/onseikenkyu.23.0_76
- Thurston, Timothy (2018) The purist campaign as metadiscursive regime in China's Tibet. *Inner Asia* 20.2, 199-218. doi: 10.1163/22105018-12340107
- Tournadre, Nicolas (2004) Typologie des aspects verbaux et intégration à une théorie du TAM. *Bulletin de la société de linguistique de Paris* XCIX (1), 7-68.
- (2008) Arguments against the concept of 'conjunct/disjunct' in Tibetan. In Brigitte Huber, Marianne Volkart & Paul Widmer (hrbg.) *Chomolangma, Demawend und Kasbek: Festschrift für Roland Bielmeier zu seinem 65. Geburtstag*, 281-308. Bonn: Wissenschaftsverlag.
- (2010) The Classical Tibetan cases and their transcategoriality: From sacred grammar to modern linguistics. *Himalayan Linguistics* 9.2, 87-125. doi: 10.5070/H99223480
- (2014) The Tibetic languages and their classification. In Thomas Owen-Smith & Nathan W. Hill (eds.) *Trans-Himalayan linguistics: Historical and descriptive linguistics of the Himalayan area*, 105-129. Berlin: Walter de Gruyter.
- Tournadre, Nicolas & Randy J. LaPolla (2014) Towards a new approach to evidentiality: Issues and directions to research. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 37.2, 240-263. doi: 10.1075/ltba.37.2.04tou
- Tournadre, Nicolas & Sangda Dorje (2003) *Manuel de tibétain standard : langue et civilisation*. Deuxième édition. Paris: L'Asiathèque.
- Tournadre, Nicolas & Hiroyuki Suzuki (forthcoming) *The Tibetic languages: An introduction to the family of languages derived from Old Tibetan* (with the collaboration of Xavier Becker and Alain Brucelles for the cartography). Paris: CNRS Éditions.
- Tsering Samdrup & Hiroyuki Suzuki (2017) *Humilific expressions in Amdo Tibetan and local intellectuals' attitudes towards them*. Unpublished manuscript presented at the workshop of Language Standardisation and Linguistic Variation in Asia from Sociolinguistic Perspectives (University of Nottingham at Ningbo)
- (2018) Evidential system in Mabzhi Tibetan of Amdo. *Proceedings of the 51st International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics*, 913-925. Online: <http://hdl.handle.net/2433/235311>
- (2019) Humilifics in Mabzhi pastoralist speech of Amdo Tibetan. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 42.2, 222-259. doi: 10.1075/ltba.17008.sam
- Vokurková, Zuzana (2008) *Epistemic modalities in Spoken Standard Tibetan*. PhD dissertation, Karel University and University of Paris 8.

- Zeisler, Bettina (2004) *Relative tense and aspectual values in Tibetan languages*. Berlin: De Gruyter.
- (2018) Don't believe in a paradigm that you haven't manipulated yourself!— Evidentiality, speaker attitude, and admirativity in Ladakhi. *Himalayan Linguistics* 17.1, 67-130. doi: 10.5070/H917136797
- 周毛草 [’Brug-mo-mtsho] (2003) 《瑪曲藏語研究》民族出版社
- 華侃、尕藏他 [sKal-bzang-thar] (1997) 〈藏語松潘話的音系和語音的歷史演變〉《中國藏學》第2期 131-150
- 共確加措 [dKon-mchog rGya-mtsho] (1987) 〈色繞龍哇藏語初探〉《西藏研究》第2期 53-69
- 瞿靄堂 (1962) 〈卓尼藏語的聲調與聲韻母的關係〉《中國語文》 331-339
- (1996) 《藏族的語言和文字》中國藏學出版社
- 仁增旺姆 [Rig-’dzin dBang-mo] (2013) 《迭部藏語研究》中央民族大學出版社
- 邵明園 (2018) 《河西走廊瀕危藏語東納話研究》中山大學出版社
- 王雙成 (2010) 〈安多藏語 i 的舌尖化及其類型學意義〉《語言研究》第2期 122-127
- (2012) 《藏語安多方言語音研究》中西書局
- 張濟川 (2009) 《藏語詞族研究—古代藏族如何豐富發展他們的詞匯》社會科學文獻出版社
- 中國社會科學院語言研究所 (1981) 《方言調查字表 (修訂本)》商務印書館
- 朱曉農 (2010) 《語音學》商務印書館

受理日 2020 年 4 月 14 日

モンゴル語ホルチン方言の談話テキスト(1)

外賀 葵

京都大学大学院 (日本学術振興会特別研究員 DC) ・ takenoko2451@gmail.com

キーワード：ホルチン方言、自然談話

1 はじめに

本稿で取り扱うモンゴル語ホルチン方言のテキストは、2020年1月20日に、中華人民共和国内モンゴル自治区通遼市ホルチン(科尔沁)左旗のダリジ(代力吉)において、筆者が収録したものである¹。モンゴル語ホルチン方言は、主に内モンゴル自治区通遼市などに居住するモンゴル族によって話される、モンゴル語の一種の方言であり、内モンゴルにおいて話者数最多の方言とされる(査干哈达 1996:1)。モンゴル語の方言研究においては、他の方言と比べると話者数が多いということもあり、査干哈达(1996)や白音朝克图(2002)などをはじめとして、比較的研究が進められている方言の一つである。ホルチン方言は、長期間の漢語との接触により、語彙だけでなく統語構造においても漢語の影響を受けていることが特徴の一つとして挙げられ、言語接触の観点からの研究もしばしば見られる。しかしながら、ホルチン方言にはいまだ一定の統一された下位分類があるわけではなく、各地域ごとに詳細な記述がなされているという段階には達していない。地域差や世代差などに注目する社会言語学的研究をさらに進めていくためにも、各地域の自然談話資料を記述・保存しておくことには一定の価値が認められるが、むしろモンゴル語ホルチン方言についてもその例外ではない。ホルチン方言の下位方言に着目し記述を試みている研究の一つに山越(2015)が挙げられる。山越(2015)は先行記述とは異なる音素目録を有するとするマンハン下位方言について基本文例の収集を行っている。本稿では、収録した方言をホルチン方言の下位方言と位置づけ、調査地の地名に基づき「ダリジ下位方言」と呼ぶこととする。

本テキストの発話者は、表1にあるように、いずれも内モンゴル自治区通遼市ホルチン(科尔沁)左旗のダリジ(代力吉)出身の4名で、ダリジ下位方言の母語話者であると同時に漢語も流暢に話すことができる。発話者Aと発話者Bは幼少期から近くに住んでいた幼馴染であり、今回のテキストを収録するにあたり、発話者Aの祖父(発話者C)と祖母(発話者D)の住む家へ赴き、昔のことを尋ねている。

¹ 本稿で取り上げているテキストは、今回の調査で収録したデータの一部(収録時間約20分)を書き起こしたものである。収録した談話は約90分であるが、紙幅の都合上、そのすべてを取り上げることが難しいため、複数回に分けて取り上げるつもりである。

表 1: 発話者の基本情報

発話者	性別	生年	居住歴
A	男性	1992年	幼少時から2014年までダリジ、2014年以降はフフホト。
B	女性	1995年	幼少時から2013年までダリジ、2013年以降はフフホト。
C	男性	1935年	幼少時から現在までダリジに居住。
D	女性	1942年	幼少時から現在までダリジに居住。

2 テキスト²

- (1) [C] *manə ugsaa xjatad xun bæ-dzee. xjatad xun məŋgəl gadzar-ii*
 1PL:EXC:GEN 血統 漢 人 である-PST 漢 人 モンゴル 場所-ACC
ug-lee. ɔdɔɔ dalan xɔjɔr xaŋ-ii daguola-dʒ
 与える-MDL FIL 七十の二 ハン(業種)-ACC 従える-CVB.IPFV
ug-dzee. dalan xɔjɔr xaŋ =n dʒuandzia bæ-na,
 与える-PST 七十の二 ハン(業種)=3:POSS 農民 いる-PRS
sidziaŋ bæ-na, ɔdɔɔ wadziaŋ bæ-na. ənə=n dalan xɔjɔr
 石工 いる-PRS FIL 左官 いる-PRS これ=3:POSS 七十の二
xaŋ-ii daguola-dʒ, ug-dzee. ɔdɔɔ goŋdzi-gən
 ハン(業種)-ACC 従える-CVB.IPFV 与える-PST FIL 給料-REFL
ugə-x=ʈfin ɔdɔɔ [...] ɔdaan məŋgəl bəl-dzee. iiməldi.
 与える-VN.NPST=2SG:POSS FIL [...] 段々 モンゴル なる-PST このようだ
 「私たちの血統は漢人だった。漢人がモンゴルの土地を与えたんだ。えー、72ハ
 ン³を従えて与えた。72ハンには、農民がいる、石工がいる、えー、左官がい
 る。この72ハンを従えて与えた。えー、給料を与えて、えー[...] だんだんとモ
 ンゴルになっていった。こういうわけだよ。」

- (2) [B] *jeje bas ənə-əəs umnə-əə ʊʈfir-d-aan mədə-n=ʊʊ? ɔdɔɔ,*
 おじいさん また これ/それ-ABL前-REFL こと-PL-REFL わかる-PRS=QUE FIL
 「おじいさん、またそれより前のこと、わかりますか？あの一」

² テキストの表記方法は、できる限り発話音声の詳細に記述することを目指し、音声表記を採った。例えば属格には、本稿に現れる形式として -iin, -nii, -in, -ii, -n, -nə の6つが挙げられるが、これらは音声的なバリエーションを反映したものである。

³ 漢語の「七十二行」。工業、農業、商業などあらゆる業種のことを指している。

- (3) [A] *ənə-əəs umnə ʊʃir gə-nə.*
 これ/それ-ABL 前 こと いう-PRS
 「それより前のことって言っているよ。」
- (4) [C] *umnə-əə ʊʃir aa!*
 前-REFL こと INTJ
 「(さっき話したことは) 昔のことさ!」
- (5) [B] *tiim, ənə-əəs umnə-əə ʊʃir-d-aan, бага-n-əə ʊjə-s xuodzəʃi,*
 そう これ-ABL 前-REFL こと-PL-REFL 小さい-GEN-REFL 時代-PL あるいは
jeje-nii jeje ʊjə-s-iin ʊʃir-d-aan bur mədə-n=ʊʊ?
 おじいさん-GEN おじいさん 時代-PL-GEN こと-PL-REFL すべて わかる-PRS=QUE
 「そうです、以前のこと、小さい時のこと、あるいは、おじいさんのおじいさんの
 時代のことをよく知っていますか?」
- (6) [C] *mədə-x-ui jaa-na, mədə-x-ui.*
 わかる-VN.NPST-NEG どうする-PRS わかる-VN.NPST-NEG
 「わからないでどうするのだよ、わからないで。」
- (7) [B] *ənə-əəs asʊʊ-g-aad, tongala-aas asʊʊ-g-aad*
 これ-ABL 尋ねる-E-CVB.PFV トンガラ(人名)-ABL 尋ねる-E-CVB.PFV
nigə jum bas mədə-x-ui.
 一 もの また わかる-VN.NPST-NEG
 「(いままさに) そのことを聞いていて、トンガラに聞いてもひとつもわからない。」
- (8) [B] *jeje, tərə ʊjə-s-d mantʃin-nii ʊjə-s-nii tərə ʊʃir-mətʃir⁴-ii*
 おじいさん あれ 時代-PL-DAT 満清-GEN 時代-PL-GEN あれ こと-COPY-ACC

⁴ *ʊʃir* 「こと」の後ろに *mətʃir* という独立した意味を持たない語が接続することで、「…など」の意を表している一種の複写表現である。この表現はモンゴル語に広く見られるものであり、「(i) 母音で始まる単語の場合は、元の単語の語頭に *m* を付加した語を続ける。(ii) *m* 以外の子音で始まる単語の場合は、元の単語の語頭子音を *m* に変えた語を続ける。(iii) *m* で始まる単語の場合は、元の単語の語頭子音を *s* に変えた語を続ける。」という規則を持つ。しかし、ダリジ下位方言母語話者によれば、「(iii) の規則に則った表現は会話では用いない。後続する語の語頭母音は、複写される語の如何に関わらず *ə* である」ということであった。言い換えれば、後続する語の語頭音節は必ず *mə*-になるということである。つまり、複写する語の語頭音節を *mə*-に変えた語を後続させることで「…など」の意を表すということになる。

sajin mādā-n=oo?

よい わかる-PRS=QUE

「おじいさん、あの時代に、満州国や清朝の時代のそういうことなどをよく知っていますか？」

(9) [C] *tərə ujā-nii ofir=n mādā-x-ui bii.*

あれ 時代-GEN こと=3:POSS わかる-VN.NPST-NEG PCL

taije=ʈfin namaix arban nigā-tee uguā-lee bəl-dʒee. [...]

ひいおじいさん=2SG:POSS 1SG:ACC 十の 一-PROP ない-MDL なる-PST [...]

munuu saramandaj-iin oxin=n tərə oxin ənā dʒil arban gərəb.

いま サラマンデイ(人名)-GEN 娘=3:POSS あれ 娘 これ 年 十の 三

bidā dʒjɔrgaan ujā bəl-dʒ bæ-n, ɔdɔ ənā ujā dər.

1PL:INC:NOM 快適な 時代 なる-CVB.IPFV いる-PRS いま これ 時代 上

「その時代のことはわからないなあ。ひいおじいさんはわしが十一歳の時に亡くなったんだ。[...]今、サラマンデイの娘は、あの娘は今年十三歳だ。私たちは快適な時代になっているなあ、今この時代は。」

(10) [B] *ɔɔ! dʒjɔrgaan ujā.*

INTJ 快適な 時代

「ええ、快適な時代です。」

(11) [C] *turuu uruu, ɔdɔ dʒaanxuu-nii ujā-in dər dʒjɔrgaan*

一番目の 隣家 FIL ジャーン・フー(人名)-GEN 時代-GEN 上 快適な

ujā-əə udʒə-dʒ bæ-na.

時代-REFL 見る-CVB.IPFV いる-PRS

「ひとつ隣の、あの、ジャーン・フーの時には（もう）暮らしやすい時代を経験している。」

(12) [A] *ənā ajil dər dʒjɔrgaan ujā bəl-dʒ-nə gə-nə. turuu*

これ 村 上 快適な 時代 なる-CVB.IPFV-PRS 言う-PRS 一番目の

uruu bæ-dʒ gə-nə.

隣家 ある-CVB.IPFV 言う-PRS

「この村では暮らしやすい時代になっていると言っているよ。ひとつ隣にあったと言っている。」

(13) [B] *ənā ujā-s-də manməŋ dʒəŋdʒi liən'jin bæ-x-də, tərə*

これ 時代-PL-DAT 満蒙 政治 提携 である-VN.NPST-DAT あれ

ujə-s-də tʃiŋ ʊləs-iin ujə-s=tʃidee. tərə ʃoudu-gən beidziŋ-ii
 時代-PL-DAT 清 国-GEN 時代-PL=PCL あれ 首都-REFL 北京-GEN
dzidzintʃəŋ guɡoŋ ɔdɔ munuu guɡoŋ tərə ɔrtʃim=fidee. umnə tal-iin
 紫禁城 故宮 FIL 今 故宮 あれ 近く PCL 前/南 方-GEN
məŋɡɔl-tʃəd-ii ɔdɔ uur-iin xarioləl-d-aan xulee-dʒ
 モンゴル-PL-ACC FIL 自分-GEN 所属-DAT-REFL 認める-CVB.IPFV
ab-nə gə-nə.
 取る-PRS 言う-PRS

「その時代は満州人とモンゴル人が提携して政治を行っていた時で、その時代は清朝でしたよね。その首都は北京の紫禁城、故宮、あの、今の故宮、そんな感じですよ。南方のモンゴル人を、あの、自分の所属下に受け入れるという…。」

(14) [C] *tʃiŋɡis xaan-ii ujə-s-də, tʃiŋɡis xaan=tʃin məŋɡɔl-iin*
 チンギス ハン-GEN 時代-PL-DAT チンギス ハン=2SG:POSS モンゴル-GEN
xaan.

ハン

「チンギス・ハンの時代、チンギス・ハンはモンゴルのハン（王）だ。」

(15) [B] *bif ee, tʃiŋ ʊləs.*

いいえ INTJ 清 国

「いいえ、清朝のことです。」

(16) [C] *lao⁵ bai dzie, lao xan dzie, lao bao dzie, lao wu dzie, dɔlɔɔn ɔbɔɡ⁶-tee,*
 ラオ バイ 家 ラオ ハン 家 ラオ バオ 家 ラオ ウ 家 七つの 姓-PROP
iŋɡə-əəl lao tɕi dzie, lao dʒou dzie, dɔlɔɔn ɔbɔɡ-əə,
 こうする-CVB.COND ラオ チー 家 ラオ ジョウ 家 七つの 姓-REFL
ɔdɔ man=tʃin ɔdɔ xukou ɡae-əəd ənə xan dzie
 FIL 1PL:EXC:NOM=2SG:POSS FIL 戸籍 変更する-CVB.PFV これ ハン 家
bəl xarnɔs ɔbɔɡ gə-nə, man=tʃin
 FIL ハルノス(姓名) 姓 言う-PRS 1PL:EXC:NOM=2SG:POSS
xukouxua ujə-le xarnɔs-ii bitʃi-dʒ tʃadə-n=dee,
 戸籍改革 時代-ASS ハルノス-ACC 書く-CVB.IPFV できる-PRS=PCL

⁵ 漢語の「老」。一字姓の前に付けて呼称としている。

⁶ 七種類の姓があったと言っているが、ここで出てきているのは「百（バイ）、韓（ハン）、包（バオ）、吳（ウ）、齊（チー）、周（ジョウ）」の六種である。

xjatad-aar xan-əər xali-dʒee, iim ʊtʃir.

漢-INS ハン-INS 変わる-PST このような こと

「バイ家、ハン家、バオ家、ウ家、七つの姓があつて、このように、チ一家、ジョウ家といった七つの姓 (があつた) 。で、わしらは、あの、戸籍が変わつて、このハン家というのは、ハルノスという姓だったんだ。わしらは戸籍改革の時にハルノスという姓を書くことができるかね (いや、できるはずがない) 、漢語でハン (韓) に取って代わつた、こういうわけなんだよ。」

(17) [A] *jamar ʊbɔg gə-nə?*

どのような姓 言う-PRS

「何という姓だつて？」

(18) [C] *xarnəs ʊbɔg. bitʃi-dʒ tʃadə-n=dee. [...] xan dzia gə-əəd*

ハルノス 姓 書く-CVB.IPFV できる-PRS=PCL[...] ハン 家 いう-CVB.PFV

bitʃix-əəl amarxan guə=dee. jagə ʊtʃir=n munuu-n

書いてしまう-CVB.COND 簡単 NEG=PCL まさに こと=3:POSS 今-GEN

lao⁷ wəŋ dzia, lao dʒəŋ dzia, xov xjatad ʊləs dətər gadzar-iin xun-ii

ラオワン家 ラオジャン家 全て 漢 国 中 場所-GEN 人-ACC

daga-g-aad gartʃir-sən. ənə gadzar ʊdaan sov-g-aad

逃げる-E-CVB.PFV 出て来る-VN.PFV これ 場所 ゆっくり 住む-E-VN.PFV

ʊdɔɔ ʊjə ʊjə-əər-əə ʊdaan sov-g-aad ʊdɔɔ aadzimər

FIL 時代 時代-INS-REFL ゆっくり 住む-E-VN.PFV FIL だんだん

fadzən-g-eed,

発展する- E-VN.PFV

「ハルノスという姓だよ。書くことができるかね。[...] ハン (韓) 家と書いてしまえば簡単じゃないか。実は今のワン家やジャン家もみんな中国内の土地の人が逃げて出てきたんだよ。この場所に長い間住んで、その、いくつもの時代を長い間住んで、それで、だんだんと発展して…」

(19) [A] *tərə ʊjə-s-də xədənə uruu bæ-san xaa bæ-s=əə?*

あれ 時代-PL-DAT いくつの家 ある-VN.PFV どこ いる-VN.PFV=QUE

「その時代には何戸の家があつて、どこにいたの？」

(20) [C] *ʊdɔɔ ənə gadzar-iin xun tʃiun ʊdɔɔ xjatad xun goŋdzi-iin dalan xɔjər*

FIL これ 場所-GEN 人 少ない FIL 漢 人 給料-GEN 七十の二

⁷注6に同じ。ここでは、「王 (ワン) 、張 (ジャン) 」の二種類の姓が取り上げられている。

xaŋ-ii dagoola-dʒ, ɔdɔɔ gadʒar=n fɔgɔl, xun=n
 ハン-ACC 従える-CVB.IPFV FIL 場所=3:POSS 狭い 人=3:POSS
ərbiid-aad bagda-x-ui-lee. jisi-gən mɔŋgɔl xun-ii
 多くなる-CVB.PFV 少ない-VN.NPST-NEG-MDL 意味-REFL モンゴル 人-GEN
gadʒar-ii iluu dʒanə-n dalan xɔjɔr xaŋ-ii
 場所-ACC かなり 占領する-CVB.MOD 七十の二 ハン-ACC
dagoola-dʒ, ug-dʒee.
 従える-CVB.IPFV 与える-PST

「あの、この土地の人は少ないんだよ。それで、漢人が給料の 72 ハンを従えて、それで、土地は狭いんだよ。人が多くなって少なくなかった。つまりはモンゴル人の土地をかなり占領して 72 ハンを従えてくれた、ということだよ。」

(21) [B] *dalan xɔjɔr waŋ?*

七十の二 ワン

「72 ワンですか？」

(22) [C] *dalan xɔjɔr xaŋ, xaŋ gə-dəg=tʃin.*

七十の二 ハン ハン 言う-VN.HBT=2SG:POSS

「72 ハンだよ、ハンというんだ。」

(23) [B] *aa! tarijatʃin.*

INTJ 農民

「ああ！農民（の話のこと）ですね。」

(24) [C] *tarijatʃin, ʃidzian, mudzian [...]ənə xun=n toŋljao-nii barɔɔn-tee guwaŋ*

農民 石工 大工 [...] これ 人=3:POSS 通遼-GEN 西-PROP グワン

dzia jao gə-dəg, tərə=tʃin lao guwaŋ dzia əxlə-dʒ

家 窯 言う-VN.HBT あれ=2SG:POSS ラオ グワン 家 始める-CVB.IPFV

gartʃir-əəd tendə dəər jao xii-dʒ bæ-dʒee. ɔdɔɔ tərə

出て来る-CVB.PFV そこで 上 窯 する-CVB.IPFV いる-PST FIL あれ

guwaŋ dzia jao toŋljao-nii barɔɔn-tee bæ-n. lao xɔl, matən

グワン 家 窯 通遼-GEN 西-PROP ある-PRS とても 遠い 1PL:EXC:NOM

xur-tʃ ungərə-sən-guə. tərə=tʃin lao guwaŋ dzia

到る-CVB.IPFV 過ぎる-VN.PFV-NEG 3SG:NOM=2SG:POSS ラオ グワン 家

sɔɔ-g-aad jao xii-sən xun. mətərə nə-r-əər-əə guwaŋ

住む-E-CVB.PFV 窯 する-VN.PFV 人 まさにそれ 名前-INS-REFL グワン

dzia jao gə-dʒə, guwan ɔbɔg-tee xun jao xii-g-əəd guwan
 家 窯 言う-CVB.IPFV グワン 姓-PROP 人 窯 する-E-CVB.PFV グワン
dzia jao bəl-dʒee.
 家 窯 なる-PST

「農民、石工、大工（などのことだね）。[...]この人は通遼の西にいて、グワン家の窯というんだ。その人はグワン家と（名乗り）始めて、出て来て、そこで窯元をしていたんだ。あの一、そのグワン家の窯というのは通遼の西にあるんだ。とても遠くて、われらは行ったことがない。その人はグワン家として住んで窯元をしていた人だよ。まさにその名前でグワン家の窯って（いうようになったんだ）。グワン姓の人が窯元をして、グワン家の窯になったんだよ。」

(25) [D] *ənə xun xaf tuor-tf-na.*

これ 人 やはり わかる-CVB.IPFV-PRS

「（メモを取る筆者に対して）この子はやっぱりわかっているね。」

(26) [C] *tfingis xaan-ii ujə-s-də umnə bala=n dutfin jis xɔfʊʊ,*
 チンギス ハン-GEN 時代-PL-DAT 前 半分=3:POSS 四十の 九 ホショー
xɔjidə bala-gən tawin dɔləʊ xɔfʊʊ, ix mɔŋgɔl gadzar
 後 半分-REFL 五十の 七 ホショー 大きい モンゴル 場所
edʒel-dʒ bæ-sən=fuu. ənə xədii ʊdʒim=dee.

占有する-CVB.IPFV いる-VN.PFV=PCL これ いくらか 広い=PCL

「チンギス・ハンの時代には、前半は 49 ホショー、後半は 57 ホショーという大きなモンゴルの土地を占有していたんだよ。これほどに広がったんだ。」

(27) [B] *mɔŋgɔl gadzar-nii xədii-g-əəd edʒel-dʒ bæ-dʒee gə-nə,*
 モンゴル 場所-GEN いくらか-E-REFL 占有する-CVB.IPFV いる-PST 言う-PRS
jeje.

おじいさん

「モンゴルの土地のいくらかを占有していたということですね、おじいさん。」

(28) [C] *ɔdəʊ xagasl-aad xəl-əəl ʊridə bala dutfin jis*
 FIL わける-CVB.PFV 言う-CVB.COND 以前 半分 四十の 九 ホショー 後
xɔfʊʊ xɔjidə bala-gən bəl tawin dɔləʊ xɔfʊʊ, ənə=tfɪn
 ホショー 後 半分-REFL TOP 五十の 七 ホショー これ=2SG:POSS
xʊʊ mɔŋgɔl-iin edʒel-dʒ bæ-sən gadzar, ənə xədii
 全て モンゴル-GEN 占有する-CVB.IPFV いる-VN.PFV 場所 これ いくらか

ʊʊdʒuu! jag utlā-sən ʊʊʊs-d xutʃə-gən ʃen'jaŋ xur-nə.

広い 実に 老いる-VN.PFV 人々-PL 力-REFL 瀋陽 到る-PRS

「あの、分けて言えば、前半は 49 ホシヨー、後半は 57 ホシヨー、これが全モンゴルの占有していた土地なんだ。そのなんと広いことか！本当に先祖たちの力が瀋陽にも到っているんだよ。」

(29)[B] *tee, tee! ʊʊʊʊ bas ʃen'jaŋ-də bas mɔŋgɔl-tʃəəd bæ-nə=ʃii.*

そう そう FIL また 瀋陽-DAT また モンゴル-PL いる-PRS=PCL

「そうです、そうです！あの、瀋陽にもモンゴル人がいるんですよ。」

(30)[C] *bæ-nə, bæ-nə. dɔtɔr gadʒar xʊʊ bæ-na. tʃiŋgis xaan-ii uʃə-s*

いる-PRS いる-PRS 中 外 全ている-PRS チンギス ハン-GEN 時代-PL

alə ʊʊʊʊ-ii ʃɔxj-ʊʊd tərə ʊʊʊʊ-ii diilə-lə tendə nɔʃən

どの 人々-ACC 打つ-CVB.PFV あれ 人々-ACC 勝つ-ASS そこで 役人

sʊʊlgəx-nə. əŋg-əəd jirtəŋ-ii ʊʊʊʊ munuu-əər-əə

置いてしまう-PRS こうする-CVB.PFV 世界-ACC 今⁸ 今-INS-REFL

xel-əəl dziefəŋ xəməə-gəd jum bæ-x=tʃin

言う-CVB.COND 解放 言う-CVB.PFV もの ある-VN.NPST=2SG:POSS

sajin-d-əə mɔŋgɔl xun dɔtɔr gadʒar-guə bæ-x=tʃin

よい-DAT-REFL モンゴル人 中 外-NEG いる-VN.NPST=2SG:POSS

ʊʊʊʊ ʃensan-aad,

FIL 分散する-CVB.PFV

「いるさ、いるさ。内にも外にも全ている。チンギス・ハンの時代はどの人々をも打ってその人々に勝つと、そこに役人を置くんだよ。こうして世界を今現在について言えば、解放ということになっているんだ。良いことに、モンゴル人は内外関係なくいる、その、分散して、」

(31)[A] *tani bəgə-n uʃə-s əndə tɔlə jɔxəd tɔlə-dʒ*

2SG:HON:GEN 小さい-GEN 時代-PL ここで 戦争 など 戦う-CVB.IPFV

jæ-dʒ=ʊʊ? ugle=ba.

いる-CVB.IPFV=QUE 話す=IMP

「あなたの小さい時にここで戦争などはしていましたか？話してください。」

⁸ 「ʊʊʊʊ」はフィラーとして用いられることが多いが、「ʊʊʊʊ (今) + munuu (今)」のように、同様の意味の語を重ねて用いる熟語表現では、原義の「現在、今」の意味で用いられることもある。

- (32) [C] *mana baga-nə ujə-s-də bəl xəŋxəs ərwən bæ-dʒee. [...]*
 1PL:EXC:GEN 小さい-GEN 時代-PL-DAT TOP 土賊 多い いる-PST [...]
xəŋxəs=tfɪn xun-ii jum-ii boala-na. xun-ii ala-n
 土賊=2SG:POSS 人-GEN もの-ACC 奪う-PRS 人-ACC 殺す-PRS
gə-əəl ala-n, pʊʊ məŋj-tee. [...] kəŋri dʒandʒəŋ əndə
 言う-CVB.COND 殺す-PRS 銃 馬-PROP [...] 抗日 戦争 ここに
ir-sən-guə, tola dʊʊ ir-sən-guə. [...] xəŋxəs gə-dʒ
 来る-VN.PFV-NEG 戦争 全て 来る-VN.PFV-NEG [...] 土賊 言う-CVB.IPFV
bæ-x=tfɪn munuu goŋxudʒiaŋ=tfɪn aŋxan-əər
 いる-VN.NPST=2SG:POSS 今 お手伝いさん=2SG:POSS 以前-INS
xəl-əəl paŋɛəŋ.
 言う-CVB.COND 使用人

「わたらの小さい時には土賊がたくさんいたんだ。[...] 土賊というのは人のものを奪うんだ。人を殺せといえは殺すし、銃や馬を持っている。[...] 抗日戦争はここには来ていない、戦争は何も来ていない。[...] 土賊と言っているのは、今のお手伝いさんというのは昔の言えは、使用人なんだ。」

- (33) [A] *paŋɛəŋ?*

使用人

「使用人？」

- (34) [C] *paŋɛəŋ gə-dəg=tfɪn xun-də goŋxu jabu-na.*
 使用人 言う-VN.HBT=2SG:POSS 人-DAT 手伝い 行く-PRS
əŋgə-əəl ɔdɔɔ ənə dʒil tawin paŋɛəŋ ab-dʒee=ba, gəl
 こうする-CVB.COND FIL これ 年 五十の 使用人 取る-PST=PCL 主な
xəsəg-ii danʒia=n xow-na, uldə-sən tawin-ii=n
 部分-ACC 地主=3:POSS 割り当てる-PRS 残る-VN.PFV 五十の-ACC=3:POSS
paŋɛəŋ xun ɔl-nə. iimeldi. ɔdɔɔ danʒia-d-əə dʒaawal
 使用人 人 見つける-PRS このようだ FIL 地主-DAT-REFL 必ず
tfiifud-əəd naadam naad-aad dʒagʊʊ urt-uud
 いじめられる-CVB.PFV 遊び 遊ぶ-CVB.PFV かなり 困る-CVB.PFV
xʊʊ xəŋxəs danʒələ-na. xun-ii jum dʊra-aar-aa boala-na. xun-ii
 全て 土賊 なる-PRS 人-GEN もの 好み-INS-REFL 奪う-PRS 人-ACC
alə-dʒ xii-x-əər dalee dʒuandʒia ʊlʊs-d xʊʊ jadʊʊ
 殺す-CVB.IPFV する-VN.NPST-INS としても 農民 人々-PL 全て 貧しい
əŋgələ-gan tərə-nii xaa ɔtʃi-j-ɔɔd ərə-x? iim
 こうする-REFL あれ-ACC どこ 行く-E-CVB.PFV 探す-VN.NPST このよう

jɔs-guə. naadam naad-aad ʃugd-əəd xɔŋxɔs dɑŋgələ-na. ɔdɔɔ
 道理-NEG 遊び 遊ぶ-CVB.PFV 負ける-CVB.PFV 土賊 なる-PRS FIL
mao dzuci xaan ɔdɔɔ dzɔŋxuarenmingoŋxəguo-ii bɔsg-əəd gadnə ɔlɔs-d
 毛 主席 王 FIL 中華人民共和国-ACC 起こす-CVB.PFV 外 国-PL
dzɔŋguo-ii tʃinlje-dʒə jæ-sən-ii ʃɔx⁹-ɔd garg-aad,
 中国-ACC 侵略-CVB.IPFV いる-VN.PFV-ACC 打つ-CVB.PFV 出す-CVB.PFV
 「使用人というのは人の手伝いを行う（人のことだよ）。こういう風に、そ
 の、今年 50 人の使用人を雇ったとしてみよう、主な部分は地主が割り当てる、
 残った 50 人が使用人となる、こういう感じなんだよ。それで、地主に必ず苛め
 られて、遊んで、かなり困って、（そういう人たちが）みな土賊になるんだ。
 人のものを好きなように奪うのさ。人を殺したりするといっても、農民たちは
 みな貧しい、だからそれをどこへ行って探す？そうではない。遊んで負けて土
 賊になるんだ。それで、毛主席が、あの、中華人民共和国を起こして、外国が
 中国を侵略していたのを打って出して、」

(35) [B] *mətərə didzu-d-ii tuu-dʒ al-dʒee=ʃidee.*
 まさにそれ 地主-PL-ACC 拾う-CVB.IPFV 殺す-PST=PCL
 「まさにその地主たちを捕まえて殺したんですよね。」

(36) [C] *ərwin paŋɕəŋ ab-dʒ bæ-sən, ɔlɔs-d ərwin ɔnaa*
 多い 使用人 取る-CVB.IPFV いる-VN.PFV 人々-PL 多い 乗り物
mal-tee, ərwin paŋɕəŋ dzarɔ-dʒ bæ-sən didzu tʃəŋfən-əər
 家畜-PROP 多い 使用人 雇う-CVB.IPFV いる-VN.PFV 地主 要素-INS
xua-dʒee.
 分ける-PST

「たくさんの使用人を取っていた人々はたくさんの家畜¹⁰を持っていて、たく
 さんの使用人を雇っていた（そういう人たちが）地主として分類されたんだ。」

(37) [A] *tiim=lv dziuʃi ərwin gadzar-tee ərwin xun-ii dzarɔ-dʒ*
 そう=PCL つまり 多い 場所-PROP 多い 人-ACC 雇う-CVB.IPFV

⁹ (30)では「打つ」は「[ʃɔxj]」であるが、ここでは「[ʃɔx]」と表れており、これも一つのバリエーションであると考えられる。

¹⁰ 「ɔnaa (乗り物) + mal (家畜)」で「家畜」を表している。この表現は牛や馬など大型で運搬などに用いられる役畜を指すこともあるが、ここでは、主に羊などを指しているため、「家畜」と訳している。また、(38)の発話中にある「mal (家畜) + ɔnaa (乗り物)」も同様の表現である。前後を入れ替えても意味の違いは見られず、「家畜」を表している。

bæ-x-ii didzu-əər xua-dzēe.

いる-VN.NPST-ACC 地主-INS 分ける-PST

「そういうことなんだ。つまり、たくさん土地を持っていて、たくさん人を雇っている人を地主と区分した（ってことだね）。」

(38) [D] *munuu bidə əβi əβi-əər-əə mal ɔnaa-tee xun-ii*

今 1PL:INC:NOM 立場 立場-INS-REFL 家畜 乗り物-PROP 人-ACC

dzarɔ-dz-guə, əβi-nə xutf-əər-əə ab-san jum-ii-gən

雇う-CVB.IPFV-NEG 自分-GEN 力-INS-REFL 取る-VN.PFV もの-ACC-REFL

xələ-dz fad-nə=dəə.

言う-CVB.IPFV できる-PRS=PCL

「今、私たちについて言えば、家畜を持っていて、人は雇っていない、自分の力で手に入れたものを言うことができる。」

(39) [C] *ɔdɔɔ bəgə pəŋɕəŋ ab-dz dzə gətəl ɔndɔr-dz*

FIL 少ない 使用人 取る-CVB.IPFV きちんと ほど 生活する-CVB.IPFV

bəgə xun tawən gɔrban xun-ii ab-dz, iiməldi funuŋ

少ない 人 五の 三の 人-ACC 取る-CVB.IPFV このようだ 富農

xua-dzēe. ɔdɔɔ fujudə ɔndɔr-dz gə-sən ug=fdeə.

分ける-PST FIL 豊かに 生活する-CVB.IPFV 言う-VN.PFV 言葉=PCL

「あの、少しの使用人を取って、きちんとした生活をして、少しの5人や3人の人を取って、このように、富農に区分された。それで、豊かに生活しているということだよ。」

(40) [B] *jeje, dzalɔɔ-gən uja-s-də juɔ xii-dz jæ-sən=ɔɔ?*

おじいさん 若い-REFL 時代-PL-DAT 何 する-CVB.IPFV いる-VN.PFV=QUE

「おじいさん、若い時は何をしていましたか？」

(41) [C] *juɔ=βee, dzuəŋdzia! arban xɔjər-tee dzuəŋdzia, ta*

何=QUE 農民 十の 二-PROP 農民 2SG:HON:NOM

itgə-x=mee?

信じる-VN.NPST=QUE

「何って、農民さ！十二歳の時から畑仕事だよ。あんたは信じられるかい？」

(42) [A] *tərə uja-s ɔdɔɔ jamar uil, janmardi, munuu xvɔ dziitei bəl-dzēe.*

あれ 時代-PL FIL どんな 仕事 どのように 今 全て 機械 なる-PST

tedənx-əə xov medə-x-uə. ʊridə uʝə-s gəŋ jaa-dʒ
 その時-REFL 全て わかる-VN.NPST-NEG 以前 時代-PL さらに

jaa-dʒ amjdar-dʒ bæ-sən-ii
 どうする-CVB.IPFV 生活する-CVB.IPFV いる-VN.PFV-ACC
medə-x-uə.

わかる-VN.NPST-NEG

「その時代に、その、どんな仕事をどんな風に、今は全部機械になった。その時のことは何もわからない。昔の時代にはどうやって生活していたのか全然わからない。」

- (43) [C] *ɔdɔɔ xov tugai-j-aad bajən ʊlos-d-iin badaa-ji xov*
 FIL 全て 土地改革する-E-CVB.PFV 金持ち 人々-PL-GEN 食糧-ACC 全て
xov-aad abʝi-x-ləə. tugai-j-aad
 収穫する-CVB.PFV とってしまふ-VN.NPST-MDL 土地改革する-E-CVB.PFV
nigə dʒil nəgɔɔ idə-dʒee.

一 年 野菜 食べる-PST

「あの、全部土地改革が起こって、お金持ちの人たちの食糧をみんな収穫して取ってしまったんだ。土地改革をして一年中野菜を食べていたよ。」

- (44) [A] *xuxə nəgɔɔ idə-dʒee-x=uu?*
 緑 野菜 食べる-PST-E=QUE
 「緑の野菜を食べていたの？」

- (45) [D] *edər nəgɔɔ, balan nəgɔɔ, nil nəgɔɔ, dəər dəər=n*
 ハチジョウナ 野菜 ゴマ 野菜 スミレ 野菜 上 上=3:POSS
faw-aad ɔdɔɔ gʊlir dəər əŋgə-dʒ guludəndʒ-əəd
 しぼる-CVB.PFV FIL 小麦粉 上 こうする-CVB.IPFV 転がす-CVB.PFV
idə-nə.

食べる-PRS

「ハチジョウナ、ゴマ、スミレを上の方からしぼって、あの、小麦粉の上でこうやって転がして食べるんだよ。」

(46) [C] *tuxuuru-n bolga-x-ii xelə-dz-nə. balan*
 準備する-CVB.MOD 作る-VN.NPST-ACC 言う-CVB.IPFV-PRS¹¹ ゴマ
nəgəwə-ji ədəwə munuu xafaa-də bas gar-nə=fii.
 野菜-ACC FIL 今 庭-DAT また 出る-PRS=PCL
 「準備して作る方法を言っているね。ゴマは今は庭にも生えているよ。」

(47) [D] *idə-əəd ir-əəl gədəsə=n bur xuur əŋ-tee*
 食べる-CVB.PFV 来る-CVB.COND おなか=3:POSS 全て 喜び 色-PROP
bəl-nə gə-nə. xuubər ɔr-nə.
 なる-PRS 言う-PRS 腫れ 入る-PRS
 「食べてくるとおなかが本当に幸せいっぱいになるね。膨れてくるね。」

(48) [A] *xuubər ɔr-nə? janmar jisi?*
 腫れ 入る-PRS どんな 意味
 「腫れてくる? どんな意味?」

(49) [C] *xafir=n xuxrə-n uβfin ələ-nə. edər nəgəwə gafiuun*
 顔=3:POSS 青ざめる-CVB.MOD 病気 得る-PRS ゴマ 野菜 苦い
bələ-βf tərə-ii idə-əəl xun dziu xuubər
 なる-CVB.CONC あれ-ACC 食べる-CVB.COND 人 すぐ 腫れ
ɔrə-x-uə. tarja tarja-dz bæ-x=tfin
 入る-VN.NPST-NEG 畑 耕す-CVB.IPFV いる-VN.NPST=2SG:POSS
namər-iin tarja əl-lə badaa-d-aan dzɔriul-dzee. mao dzuei xaan-ii
 秋-GEN 畑 実る-ASS 米-DAT-REFL 献上する-PST 毛 主席 王-GEN
ujə-s ɔlos tɛundi. idə-x badaa tɔw-tee, suuldə-dz
 時代-PL 人々 貧しい 食べる-VN.NPST 米 数-PROP 後になる-CVB.IPFV
ir-əəd durbən xar badaa,
 来る-CVB.PFV 四 黒 米
 「顔が青ざめて病気にかかる。(そんな時に) ゴマは苦いけれど、それを食べれば、人はすぐに腫れがなくなる。畑を耕している、秋の畑に実る時、穀物を献上したんだ、毛主席の時代、人々は貧しかった。食べる穀物は限りがあった、そのあと、四つの黒米、」

¹¹ 「*xelə-dz-nə* (言う-CVB.IPFV-PRS)」は「*xelə-dz-bə-nə* (言う-CVB.IPFV-いる-PRS)」の短縮形である。口語ではしばしば見られる表現の一つである。

- (50) [A] *xar badaa gə-sən=tfɪn* *janmar badaa=βə?*
 黒 米 言う-VN.PFV=2SG:POSS どんな 米=QUE
 「黒米というのはどんな米のこと？」
- (51) [C] *xar badaa gə-sən=tfɪn* *ʃəɔlgas-n-guə* *badaa.məŋgəl*
 黒 米 言う-VN.PFV=2SG:POSS 白くする-CVB.MOD-NEG 米 モンゴル
badaa xaljs-tee=fdee.
 米 皮-PROP=PCL
 「黒米というのは、精米していない米のことだよ。モンゴル米というのも皮つきだろう？」
- (52) [B] *məŋgəl badaa gə-sən=tfɪn* *ʃifee badaa-g-ii dʒari-dʒ=ʊʊ?*
 モンゴル 米 言う-VN.PFV=2SG:POSS 高粱 米-E-ACC 指す-CVB.IPFV=QUE
 「モンゴル米というのは、高粱米を指していますか？」
- (53) [A] *xʊʊree badaa.*
 ホーレイ 米
 「ホーレイ米¹²のことだよ。」
- (54) [C] *xʊʊree badaa gə-sən=tfɪn* *məŋgəl badaa-n-aar*
 ホーレイ 米 言う-VN.PFV=2SG:POSS モンゴル 米-E-INS
xii-dʒ-nə. munuu gər xəl-əəl xaljs-guə,
 する-CVB.IPFV-PRS 今 家 言う-CVB.COND 皮-NEG
 「ホーレイ米というのはモンゴル米で作っているものだよ。今、家では皮のついていない、」
- (55) [A] *xaljs jɔxəd-tee-gən* *xʊʊ idə-nə* *gə-sən* *uɡə.*
 皮 など-PROP-REFL 全て 食べる-PRS 言う-VN.PFV 言葉
 「皮などがついたまま全て食べるということだね。」
- (56) [C] *badaa xagə-tee-gən,* *[...] ʃitaŋxua-nii uʒə-s* *wogətou=n*
 米 むか-PROP-REFL [...] 食堂化-GEN 時代-PL ウォグトウ=3:POSS
ərtən-lə nigə lə, əŋgə-əəl, *əər dawan bəl*
 早い-ASS 一 だけ こうする-CVB.COND 二 どんぶり COND

¹² キビを炒ったモンゴル族の伝統食品。

xəri-əəd *xuaŋdou-nii ful,*
 禁止する-CVB.PFV 大豆-GEN スープ

「米はぬかつきで、[...] 食堂化の時代にウオグトウ¹³を朝に一つだけ、それから、どんぶり二杯は禁じられていて、大豆のスープ、」

(57) [A] *max-guə=ba?*

肉-NEG=PCL

「肉はないの？」

(58) [C] *janmar max bæ-nə=dee, idə-x badaa-d-aa bas dzvəb-guə.*

どんな 肉 ある-PRS=PCL 食べる-VN.NPST 米-DAT-REFL また 耐える-NEG

tarja jənsu-dzə ʃəmɔɔ-gən amsər-aas bəgə nigələ gəlir-əə

畑 除草する-CVB.IPFV 水筒-REFL 蓋-ABL 小さい一 だけ 小麦粉-REFL

xə-əəd bumbulə-dz,

こねる-CVB.PFV 丸める-CVB.IPFV

「どんな肉があるかね？（あるはずがない）食べる米も耐え難いものだった。畑で草取りをして、水筒と、蓋を取って小さい一つの小麦粉をこねて丸めたものだけを、」

(59) [A] *tərə ujə-s tarja=ʃin xov uur-n=uu? bif əə=ba?*

あれ 時代-PL 畑=2SG:POSS 全て 自分-GEN=QUE ちがう INTJ=PCL

「その時代、畑は全部自分のものだったの？ちがうかな？」

(60) [C] *dzuti-dz bæ-dzee. udə-lee xɔjɔr bɔbɔ, tarja*

集団-CVB.IPFV ある-PST 昼間-ASS 二 蒸しパン 畑

jənsu-dzə bæ-nə xun-də guiʃə-nə=dee? nar

除草する-CVB.IPFV いる-PRS 人-DAT 足りる-PRS=PCL 太陽

onə-x ujə-s-d-əə,

落ちる-VN.NPST 時-PL-DAT-REFL

「集団（農業）だった。昼に二つの蒸しパンで、畑の草取りをしている人に足りるものかね？陽が落ちるころには、（腹ペコだったよ）」

¹³ 漢語の「窩个头」。具の入っていない、真ん中に穴のあいた質素な蒸しパン。

略号一覧

- :接辞境界	= :接語境界	1 :1 人称	2 :2 人称	3 :3 人称
ABL :奪格	ACC :対格	ASS :連合格	CONC :譲歩	COND :条件
COPY:複写	CVB :副動詞	DAT :与位格	E :介入音	EXC :除外
FIL :フィルター	GEN :属格	HBT :習慣	HON :敬称	IMP :命令
INC :包括	INS :造格	INTJ :間投詞	IPFV :未完了	MOD :非分離
MDL :モダリティ	NEG :否定	NOM :主格	NPST :非過去	PCL :助詞
PFV :完了	PL :複数	POSS :所属	PROP :所有	PRS :現在
PST :過去	QUE :疑問	REFL :再帰所有	SG :単数	TOP :主題
VN:形動詞				

謝辞

調査をするにあたり、快くインフォーマントになってくださったホルチン方言話者の方々と、書き起こしに協力してくれた調査協力者の方に、末尾ながら心からの謝意を表す。なお本稿に関する調査は、日本学術振興会科学研究費補助金（特別研究員奨励費）課題番号 19J20571 の助成を受けて実施したものである。

参考文献

- 白音朝克图(2002)『科尔沁土语研究』呼和浩特：内蒙古大学出版社
 查干哈达（1996）『蒙古语科尔沁土语研究』北京：社会科学文献出版社
 山越康裕（2015）「モンゴル語ホルチン方言のテキスト：日常会話を題材にした基本文例集」『北方言語研究』5:281-317.

受理日 2020年4月14日

スワヒリ語トゥンバトゥ方言の談話資料

―炒められたマカメの冒険―

古本 真

日本学術振興会／エセックス大学

mf19996@essex.ac.uk

キーワード：スワヒリ語、トゥンバトゥ方言、民話

1 はじめに

本稿では、スワヒリ語トゥンバトゥ方言・ジョンゴウエ変種のある話者が一編の民話を語った際の録音を書き起こしたうえで公開する。

スワヒリ語には、東アフリカ沿岸部におよそ 20 の地域方言が存在するとされており、トゥンバトゥ方言は、そうした方言のひとつとして知られる (Nurse & Hinnebusch 1993: 5-14)。

トゥンバトゥ方言という呼称 (Kitumbatu¹) は、主にタンザニア連合共和国・ザンジバル自治区、ウングジャ島の北に位置する小島、トゥンバトゥ島で話されるスワヒリ語の地域変種を指すために用いられる。トゥンバトゥ島内には、ゴマニ (Gomani) とジョンゴウエ (Jongowe²) という二つの地区があり、本稿で紹介する民話を語ってくれた話者はジョンゴウエ出身である。なお、ウングジャ島北部でも、トゥンバトゥ方言に類似する言語変種が話される地域がある。この類似の理由の一つとしては、トゥンバトゥ島からの人の移住が考えられる (竹村 1999: 120-121, 2012: 212)。

トゥンバトゥ方言の言語特徴については、Stude (1995)、竹村 (1999, 2012, 2014)、Takemura (2008, 2016, 2017)、Baraza la Kiswahili la Zanzibar (2012) などからうかがい知ることができるが、本稿で紹介する民話テキストでは、これらの先行研究で記述されていない特徴が散見される。これは、トゥンバトゥ方言の記述が途上の段階にあるということだけでなく、トゥンバトゥ方言とまとめられる諸変種のなかに差があることによるものと考えられる。その詳細については、別稿に譲るが、本稿の目的のひとつには、トゥンバトゥ方言記述の一貫として、こうした未記述の特徴を含むテキストを書き起こし、広く共有することがある。

以下、2 節では、語り部と録音について紹介する。3 節では、表記について説明する。4 節は、談話本編である。³

¹ *kitumbatu* 「トゥンバトゥ方言」という名詞は接頭辞 *ki-*と語幹 *tumbatu* に分析できる。この *ki-* という接頭辞は、地名などから言語名、方言名を派生させる際に用いられる。

² スワヒリ語正書法では、*Jongowe* と表記されるが、母語話者の発音では、*o* と *w* の間に 3 節で説明する硬口蓋側面接近音が現れる。

³ In section 2 and 3, I provide information about the narrator and the recording situation as well as transcription,

2 語り部と録音について

本稿で公開するテキストは、筆者が録音した音声データを書き起こしたものである。この録音は、2019年7月24日に、ジョンゴウエ地区で行っている。録音は全体で40分程度あるが、本稿で公開するのは冒頭の16分30秒である。語り部は、ムシェンガ・ハジ・シェハ (Mshenga Haji Sheha) という名の77歳の男性である。録音の際は、筆者の調査協力者であるファキ・パンドゥ・マカメ (Faki Pandu Makame) 氏 (40代男性、ゴマニ出身) と、ジョンゴウエ地区に住む10代の少年二人が聞き手として同席している。なお、筆者は、調査の意図と録音する旨を伝えたのちに、民話が終わるまで席を外している。録音の書き起こしは、録音の翌日 (2019年7月25日) に、ファキ・パンドゥ・マカメ氏の協力のもと行っている。

語り部であるムシェンガ・ハジ・シェハ氏は、漁のためタンザニアの大陸沿岸部や、ペンバ島⁴を訪れ、そこに一時的に滞在した経験ももつが、両親ともにトゥンバトゥ島のジョンゴウエ地区出身で、現在までジョンゴウエに居を構えて暮らしている。本稿で紹介する民話は、ともに暮らしていた母方の祖母から、ムシェンガ・ハジ・シェハ氏が幼少期に伝えられたものである。

3 表記について

テキストは、142の部分にわけてある。この分割は、音声的な区切れというよりは、統語的、意味的なまとまりをもとに、筆者が恣意的に行っている。

それぞれの部分は四行からなる。一行目は音転写、二行目はグロス、三行目は日本語訳、四行目は英訳となる。

原則として、音転写には標準スワヒリ語の正書法で用いられるアルファベットを使用する。ただし、本稿では、鼻音の成節性や無声有気音の有気性を、国際音声記号 (IPA) に定められた記号で表記する。標準スワヒリ語の正書法において、これらの素性は表記されない。トゥンバトゥ方言では、ほかの多くのスワヒリ語方言と異なり、(調音点が前よりの) 硬口蓋側面接近音⁵が用いられるが、これは、*l* にアポストロフィーをつけて表記する。また、音形をもたないゼロ接頭辞は \emptyset で表す。なお、スワヒリ語正書法では、文頭や固有名詞の初頭音が大文字で表記され、文末にピリオドが置かれるが、これらは本稿の表記に適用しない。発音が不明瞭で聞き取りにくかったところには (?) を付している。(55)(76)(120)(122) は、音転写全体、あるいは一部が括弧でくくられているが、これは、メインインフォーマント以外の同席者の発話であることを示している。

音転写には、形態素分析を施しているが、この分析は便宜的なもので、ほかの分析の可能性を排除する意図はない。例えば、本稿では、ほとんどの名詞や動詞語幹の内部に形態素境界の切れ目をいれていないが、バントゥ諸語研究の慣例に従えば、名詞の中には接頭辞と語幹に分析できるものがあるだろうし、多くの動詞語幹は語根と末母音、あるいは語根、派生

glossing and translation policy. See appendices for English versions.

⁴ ザンジバル自治区は、主にウングジャ島とペンバ島という二つの島から成り立つ。

⁵ 国際音声記号 (IPA) で定められた表記法に従えば、 $l̪$ と転写すべきものと考えられる。

接尾辞、末母音と分析できるだろう。

それぞれの形態素には、形態素ごとの意味や文法情報を示すためのグロスを付す。グロスの略号については、稿末の略号一覧を参照されたい。文法情報を表すグロスは、概ねそれぞれの形態素の機能的特徴に基づくものだが、その根拠となる分析は暫定的なものにすぎない。なお、スワヒリ語には他の多くのバントゥ諸語と同様に、名詞クラスと呼ばれる名詞分類が存在する。本稿では、標準スワヒリ語の名詞分類番号を援用して (cf. Meinhof 1932)、名詞、名詞と一致する修飾語や動詞の人称標識にグロスをつける。ただし、名詞には、名詞と一致する語や標識がある場合にのみ名詞クラスの情報を明記する。また、名詞と一致する要素の形式から名詞クラスを判別しているため、同じ名詞でも、異なる名詞クラス番号が付されることがある。聞き取りができず、適当なグロスがつけられない部分には、? を付している。それ以外のグロス付けの方針は、Leipzig Glossing Rule に則る。

日本語と英語の訳は、極力、原文で用いられている語の意味や文法構造を反映させて作成しているが、日本語や英語として不自然になるものや、わかりにくくなる部分については、括弧を用いて、原文にはないような語を補うなどしている。

4 談話本編

(1) *mimi jina langu mshenga haji sheha*

PRO.1SG name (CL5) my.CL5 PN PN PN

「わしの名前はムシェンガ・ハジ・シェハという。」

‘As for me, my name is Mshenga Haji Sneha.’

(2) *na-taka ni-kw-ambile-ni nyue wana*

IPFV:1SG.SM-want 1SG.SM-2SG.OM-tell-AL.PL PRO.2PL children

ku-wa vyo kale ku-vu wat^hu wawili

INF-COP DEM.MED.CL8 long_time_ago CL17.SM-COP.PST people (CL2) two.CL2

mmoja hw-itwa makame wa makame mmoja mize wa mize

one.CL1 HAB-call.PASS PN (CL1) CONN.CL1 PN one.CL1 PN (CL1) CONN.CL1 PN

「子供たちよ、わしはお前たちに、かつて、二人の人間がいたことについて話したい一人はマカメのマカメといい、もう一人はミゼのミゼである。」

‘I want to tell you that long time ago, there were two persons. One was called Makeme of Makame, and the other was Mize of Mize.’

- (3) *wa-ka-pata mwana yao ṁmoja*
 CL2.SM-CONS-get child (CL1) their.CL1 one.CL1
 「彼らは、子を一人授かった。」
 ‘They were blessed with a child.’
- (4) *mwana ṁmoja huyo a-ka-itwa makame ivyo~ivyo*
 child (CL1) one.CL1 DEM.MED.CL1 CL1.SM-CONS-call.PASS PN DEM.MED.CL8~RED

makame wa makame kama babi-e
 PN (CL1) CONN.CL1 PN like father-his
 「その子供は、父親同様マカメと呼ばれていた。」
 ‘That child was called Makame just like his father.’
- (5) *i-Ø-po-fika wakati yulya mwana ka-na-kul'a~kul'a*
 CL9.SM-PFV-CL16.REL-reach time DEM.DIST.CL1 child (CL1) CL1.SM-PFV-grow~RED
 「時期が来ると、その子供はどんどんと育っていった。」
 ‘When the time came, the child had grown.’
- (6) *ka-ṅ-cheza~cheza na wezi-we*
 CL1.SM-PFV-play~RED COM friends-his
 「彼は、友達と遊んだ。」
 ‘He played with his friends.’
- (7) *a-ka-ja a-ka-mw-ambiya mami-e*
 CL1.SM-CONS-come CL1.SM-CONS-CL1.OM-tell mother (CL1)-his

mama ni-kal'anga
 mother 1SG.OM-fry.IMP
 「そして（ある日）彼は母のところにやってきて言った。『おっかさん、私のことを炒めてください。』」
 ‘(One day,) He came to his mother and told her.’: “Mum, please fry me.”
- (8) *aka mwana u-kal'angwe vipi*
 INTJ child 2SG.SM-fry.PASS.SBJV how
 『え、（我が）子よ、どんな風にあなを炒めたらいいのでしょうか（どのようにあなは炒められることでしょうか）。』
 “What? (My) son, how are you to be fried?”

- (9) *jika gae po jiko-ni tul'a gae ipo*
 put.IMP pot DEM.MED.CL16 fireplace-LOC put.IMP pot DEM.MED.CL16
- jiko-ni li-ka-kol'a moto miye ni-ngil'e*
 fireplace-LOC CL5 SM-CONS-get heat PRO.1SG 1SG.SM-enter.SBJV
- 『かまどに鍋を置いてください。鍋が熱くなったら、私は(その中に)入ります。』
 “Put the pot on the fireplace. When it gets hot, I shall go inside.”
- (10) *aka huyu mwana si ku-cha-kufwa*
 INTJ DEM.PROX.CL1 child (CL1) NEG 2SG.SM-FUT-die
- 『なんと。お前さん(わが子よ)、(そんなことをして)死んでしまわないのかい。』
 “(But) my son, you will die.”
- (11) *aa si-cha-kufwa mama*
 no NEG:1SG.SM-FUT-die mother
- 『いいえ、おっかさん。私が死ぬことはありません。』
 “No, I will not die, mum.”
- (12) *basi a-ka-m-fanyia hivi*
 so CL1.SM-CONS-CL1.OM-do.APPL DEM.PROX.CL8
- 「母親は、そのように(子供の言う通りに)してやった。」
 ‘So, she did (as her son asked here).’

- (16) *tena hapa ha-pa-ŋ lya ku-ni-pata*
 then DEM.PROX.CL16 NEG-CL16.SM-have CONN.CL5 INF-1SG.OM-get

nda vyangu ha-some
 go:1SG.SM my.CL8 ITV:1SG.SM-study.SBJV

『ここに私を引き留めるものは何もない。私はここを出て、学びに行かなければ。』

‘There is nothing keeping me here. I’m leaving (here) to (go and) study.’

- (17) *a-k-enda zakwe chuo-ni a-ka-soma*
 CL1.SM-CONS-go his.CL10 school-LOC CL1.SM-CONS-study

「彼は学校（マドラサ）に行き、そこで勉強をした。」

‘He went to school (madrasah) and studied.’

- (18) *a-ka-wa ka-na-soma~soma a-ka-ya nahodha*
 CL1.SM-CONS-COP CL1.SM-IPFV-study~RED CL1.SM-CONS-HESIT captain

「彼は勉学を修めたのちに、（ある）ナホザ（船長）の下へとつくことになった。」

‘He studied and then served under a “nahodha” (captain).’

- (19) *mo katika safari zakwe kula mkondo wa-na-kut^ha*
 DEM.MED.CL18 in journey (CL10) his.CL10 every whirlpool CL2.SM-IPFV-meet

jini ka-na-wa-ziriya chombo chao
 monster (CL1) CL1.SM-IPFV-CL2.OM-catch ship (CL7) their.CL7

「その旅の道中、潮が渦巻いているところを通り過ぎるたびに、彼らは、船を捕まえる怪物に出くわした。」

‘During his (their) journey, they encountered a monster in every whirlpool, which would captured their ship.’

- (20) *na ha-ki-l'awa kile chombo ki-ka-safiri mpaka*
 COM NEG-CL7.SM-take_out.PFV DEM.DIST.CL7 ship (CL7) CL7.SM-CONS-travel until

wa-l'avye kit^hu kama chano kama chochosi
 CL2.SM-take_out.SBJV stuff (CL7) like offering (CL7) like any.CL7

wa-li-cho na-cho
 CL2.SM-COP-CL7.REL COM-CL7.PRO

「その船は、もっているものを何か供物として差し出さない限り、その渦を抜け出すことができなかった。」

‘The ship could not continue its journey unless they gave out something from their possessions as an offering.’

- (21) *nahodha a-ka-fikiria kwamba huyu mwana*
 captain (CL1) CL1.SM-CONS-think.APPL COMP DEM.PROX.CL1 child (CL1)

huyu mkondo fulani tu-ta-pata cha ku-l'avya
 DEM.PROX.CL1 whirlpool certain 1PL.SM-FUT-get CONN.CL7 INF-take_out

「ナホザ（船長）はこう思った。『この子供がいるな。渦に巻き込まれたときに、この子を差し出すことができるんじゃないか。』」

“‘Nahodha’ (the captain) thought’: “(when caught,) we can sacrifice this child in the whirlpool.”

- (22) *wa-k-enda zao kwa mfano pemba*
 CL2.SM-CONS-go their.CL10 CONN.CL15 example PN

「彼らは例えばペンバへ向かった。」

‘They sailed, for example, to Pemba.’

- (23) *wa-Ø-po-fika mkondo wa nungwi*
 CL2.SM-PFV-CL16.REL-reach whirlpool (CL3) CONN.CL3 PN

ki-chombo ki-ka-ziriwa ni yule p^hweza nyambo
 DIM (CL7)-ship CL7.SM-CONS-catch.PASS by DEM.DIST.CL1 octopus (CL1) octopus (CL1)

「ヌングイの渦潮に到達したとき、小舟はあのタコにつかまってしまった。」

‘When they arrived at the whirlpool of Nungwi, the small ship was caught by an octopus.’

- (24) *nyambo yule a-ka-pilika mkony-we(?)*
 octopus (CL1) DEM.DIST.CL1 CL1.SM-CONS-send arm-his

a-ka-ziriya chombo ki-ka-wa ha-ki-nda mbele
 CL1.SM-CONS-catch ship (CL7) CL7.SM-CONS-COP NEG-CL7.SM-go front

「あのタコは、その触手を伸ばし、船を捕まえてしまった。船は前に進むことができない。」

‘That octopus stretched out its tentacle, hindering the ship from advancing.’

- (25) *pano tu ndo pepi ko*
 DEM.PROX.CL16 just EMPH near DEM.MED.CL17

mkondo-ni ku-ta-wa vipi
 whirlpool-LOC (CL17) CL17.SM-FUT-COP how

『ここは近くだぞ。(もっと先の) 渦潮ではどうなってしまうんだ。』

“Here, we are only close by. What will happen in the whirlpool?”

- (26) *wa-ka-chukul'a wa-ka-m-chukul'a yule mwana*
 CL2.SM-CONS-take CL2.SM-CONS-CL1.OM-take DEM.DIST.CL1 child (CL1)

wa-ka-m-tosa
 CL2.SM-CONS-CL1.OM-throw_into

「彼らは、あの子供を捕まえて、海に投げ入れた。」

‘They caught the child, and threw him into the water.’

- (27) *wa-Ø-po-m-tosa yulya mwana*
 CL2.SM-PFV-CL16.REL-CL1.OM-throw_into DEM.DIST.CL1 child (CL1)

「彼らが、あの子供を産みに投げ入れたとき、」

‘When they threw the child,’

- (28) *i-na maana a-k-enda a-ka-banwa ni p^hweza*
 CL9.SM-have meaning CL1.SM-CONS-go CL1.SM-CONS-squeeze.PASS by octopus
kwa vifambo vyakwe vile
 CONN.CL15 suckers (CL8) his.CL8 DEM.DIST.CL8

「それは、彼がタコに (あの) 吸盤で捕らえられに行くことを意味している。」

‘This meant that he would go and be caught by the octopus with its suckers.’

- (29) *lakini kumbe yule mwana+kwao⁷ a-Ø-po-uka*
 but INTJ DEM.DIST.CL1 child (CL1)+their.CL17 CL1.SM-PFV-CL16.REL-leave

chuo-ni ka-ŋ kiji-visu mkoba-ni
 school-LOC CL1.SM-have DIM (CL7)-knives bag-LOC

「しかし、なんと、あの彼らの兄弟（マカメ）は、学校を出るときに、かばんの中に、小刀を忍ばせていた（持っていた）。」

‘But their brother (Makame) had hidden a small knife in his bag when had he left the school.’

- (30) *a-Ø-po-fika a-k-anza kazi yakwe*
 CL1.SM-PFV-CL16.REL-reach CL1.SM-CONS-begin work (CL9) his.CL9

「（マカメは、タコに）到達すると、自分の務めにとりかかった。」

‘(So,) When he got to the octopus, he started his work.’

- (31) *ke-sha-banwa uzuri p^hwe*
 CL1.SM-COMPL-squeeze.PASS well HESIT

nyambo ke-sha-nda yake chⁱ
 octopus (CL1) CL1.SM-COMPL-go his.CL9 ground (CL9)

「彼はしっかりと捕まえられてしまった。タコは（海の）底へと行ってしまった。」

‘He was firmly caught, and the octopus went to the seabed.’

- (32) *a-ka-anza ku-m-choma visu⁸ ile nyambo*
 CL1.SM-CONS-begin INF-CL1.OM-pierce knives DEM.DIST.CL9 octopus (CL1)

「彼はあのタコに何度もナイフを突き刺し始めた。」

‘He started to stab the octopus with the knife again and again.’

⁷ 子供を意味する *mwana* と 17 クラスの所有詞からなる複合語は、(年下の) 兄弟・姉妹を表す。所有詞は、所有物だけでなく、所有者の人称に応じて形式を変えるが、この複合語も所有者に対応する人称を変えることにより、誰の兄弟・姉妹であるかを言い分ける。

⁸ *visu* という語形から、このナイフを表す名詞は複数形であると考えられるが、この場面では、ナイフが複数あるわけではなく、動作が複数回繰り返されることが表されている。

- (38) *wa-ka-pata wasiwasi na-vyo lakini aa wengine wa-ka-sema*
 CL2.SM-CONS-get worry COM-PRO.CL8 but FIL other.CL2 CL2.SM-CONS-say
 「彼らは心配をしていた。しかし別のものが言った。」
 ‘They had worries, but someone else said.’
- (39) *ka-cha-tu-fawa kwa mkondo mwingine huyu*
 CL1.SM-FUT-1PL.OM-save CONN.CL15 whirlpool (CL3) other.CL3 DEM.PROX.CL1
 『こいつは、我々のことを他の渦潮でも救ってくれるだろう。』
 “This one (Makame) will save us in another whirlpool.”
- (40) *hapa ke-sha-rudi*
 DEM.PROX.CL16 CL1.SM-COMPL-return
 『ここに彼は戻ってきた。』
 “He has come back here.”
- (41) *tu-cha-pata mkondo mwingine tu-cha-m-tosa tena*
 1PL.SM-FUT-get whirlpool (CL3) other.CL3 1PL.SM-FUT-CL1.OM-throw_into again
 『我々は、別の渦潮に出くわすだろう。我々は、再び彼を投げ入れるだろう。』
 “We will encounter another whirlpool. We will throw him in again.”
- (42) *wa-k-enda na ile mikondo saba*
 CL2.SM-CONS-go COM DEM.DIST.CL4 whirlpool (CL4) seven
 「彼らは、七つの渦潮に出くわすことになる。」
 ‘And then, they went to the seven whirlpools.’
- (43) *sikiliza-ni uzuri-ni wana*
 listen-AL.PL well-AL.PL children
 「子供たちよ、よく聞きなさい。」
 ‘Listen carefully, children.’
- (44) *m-je m-pate cha ku-hadithia wez-enu*
 2PL.SM-come.SBJV 2PL.SM-get.SBJV CONN.CL7 INF-tell_a_story friends-your
 「お前さんたちは、(この物語を) 覚えて仲間に話してやらなければならない。」
 ‘You should learn this tale to tell your friends.’

- (45) *hadithi hii ya ul'ongo na kweli*
 tale (CL9) DEM.PROX.CL9 CONN.CL9 lie COM truth

lakini pakawa paukwa pakawa

but *pakawa paukwa pakawa*

「この話は作り話でもあり本当でもある (かもしれない)。ただ、パウクラ、パカワのお話だ。⁹」

‘This tale might be made up or the truth. But either way, this is one of the tales which start with “paukwa pakawa”.’

- (46) *makame wa makame na mize wa mize*
 PN (CL1) CONN.CL1 PN COM PN (CL1) CONN.CL1 PN

ndo wa-Ø-o-i-anza

hadithi hii

EMPH CL2.SM-PFV-CL2.REL-CL9.OM-begin tale (CL9) DEM.PROX.CL9

「マカメのマカメと、ミゼのミゼこそが、この話の幕を切ったのだ。」

‘It is Makame of Makame and Mize of Mize who began this tale.’

- (47) *wa-k-enda zao wale mpaka mkondo wa katikati*
 CL2.SM-CONS-go their.CL10 DEM.DIST.CL2 up_to whirlpool (CL3) CONN.CL3 central

hapo

DEM.MED.CL16

「あいつらは、あその中間地点にある渦潮へと向かう。」

‘They advanced to the central whirlpool.’

⁹ この民話の冒頭では用いられていないが、スワヒリ語で民話が語られる際は、最初に語り部がパウクラ (*paukwa*) と問いかけ、聴衆がパカワ (*pakawa*) と返したあとに、物語が始まることが多い (cf. Taasisi ya Uchunguzi wa Kiswahili 2001: 256, 261)。パウクラ・パカワというフレーズは、それ以外にも、単にここで語られるような民話を指すために用いられることもある。なお、トゥンバトゥ方言では、パウクラ・パカワの代わりにポウクラ (*poukwa*)・ポクワアレ (*pokwale*) が用いられることもある。

- (48) *we-sha-fika* *we-sha-pita* *mfu+hanuku*¹⁰
 CL2.SM-COMPL-reach CL2.SM-COMPL-pass PN

ki-ka-ziwa *tena mara* *ya* *pili*
 CL7.SM-CONS-catch.PASS again time(CL9) CONN.CL9 second

「彼らは、ムフハヌクと呼ばれる地点にたどり着き、そこを通り過ぎた。(船は)再び航行を妨げられている。二回目だ。」

‘They had arrived at the point called “Mfuhanuku”. Their ship was caught again. This is the second time.’

- (49) *chombo* *ki-na-piga* *kofi* *kwa* *kw-enda* *kumbi*
 ship (CL7) CL7.SM-IPFV-hit palm CONN.CL15 INF-go INTJ

wa-N-fikiri(?) *labda* *ki-na-kwenda*
 CL2.SM-PFV-think maybe CL7.SM-IPFV-go

「船は前進するために、水を打っている。彼らは、おそらく船は進むだろうと思った。」

‘The ship rowed the water to advance. They thought the ship would probably go on.’

- (50) *ndo* *ki-sha-ziwa*
 EMPH CL7.SM-COMPL-catch.PASS

「結局 (船は) 捕まってしまった。」

‘(But) After all, it was caught.’

- (51) *chombo* *ha-ki-nda* *poposi* *hiki* *jamaa-ni*
 ship (CL7) NEG-CL7.SM-go any.CL16 DEM.PROX.CL16 mate-AL.PL

ki-sha-ziwa
 CL7.SM-COMPL-catch.PASS

『お前たち、この船はどこにも行かない。捕まえられてしまった。』

“This ship doesn’t go anywhere. It has been caught.”

¹⁰ *mfu+hanuku* は、実際に存在する海域を指す言葉だが、*mfu*「死体」と *hanuku*「臭わない」からなる複合語として分析できる。調査協力者のファキ・パンドゥ・マカメ氏によれば、この名前は、この海域に死体を捨てても臭いが漂わないことに由来するとのことである。なお、*mfu* は更に名詞接頭辞 *m-*と動詞-*fwa*「死ぬ」に分析できる。また、*hanuku* は、否定と 1 クラス名詞主語との一致を示す接頭辞 *ha-*と、動詞-*nuka*「臭う」の完結語幹に分解できる。

- (52) *a-ka-chukuligwa makame wa makame makame kikal'ange*
 CL1.SM-CONS-take.PASS PN (CL1) CONN.CL1 PN PN PN
 「そして、マカメのマカメこと、マカメ・キカランゲはとらえられた。」
 ‘Makame of Makame, otherwise known as Makame Kikal’ange, was caught.’
- (53) *a-Ø-po-chukuligwa makame kikal'ange a-ka-toswa*
 CL1.SM-PFV-CL16.REL-take.PASS PN (CL1) PN (CL1) CL1.SM-CONS-throw_into.PASS
 「マカメ・キカランゲはとらえられると、海に投げ入れられた。」
 ‘When Makame Kikal’ange was caught, he was thrown into the water.’
- (54) *a-Ø-po-kwenda kwa mkunga mkubwa sana*
 CL1.SM-PFV-CL16.REL-go CONN.CL15 eel (CL3) big.CL3 very
 「彼が大ウナギのところに向かうと、」
 ‘When he went to the place of the very big eel,’
- (55) (*na ile mikony-we y-endelee vipi*)¹¹
 COM DEM.DIST.CL4 arms (CL4)-his CL4.SM-go.APPL.PFV how
 「ところで、あの (タコの) 足はどうなったの。」
 ‘By the way, what had happened to those tentacles (of the octopus)?’
- (56) *ile tena wa-piki*
 DEM.DIST.CL4 then CL2.SM-cook.PFV

wa-kat^ha~kat^ha wa-ka-njika wale
 CL2.SM-cut.PFV~RED CL2.SM-CONS-cook DEM.DIST.CL2

wa-Ø-po-kwisha-njika wa-ka-lia mtama wao
 CL2.SM-PFV-CL16.REL-finish-cook CL2.SM-CONS-eat.APPL millet (CL3) their.CL3
 「あれは、その後彼らが料理した。彼らは、細かく切って、料理をした。料理をし終わると、もろこしのおかずにして食べた。」
 ‘They had cooked (the tentacles). They had chopped them into small pieces, then cooked them. When they were done, they ate them with millet.’

¹¹ (55) は、この民話を聞いていた 10 代の少年のうちの一の発話である。

- (57) *wat^{hu} wa-k-enda na safari zao*
 people (CL2) CL2.SM-CONS-go COM journey (CL10) their.CL10
 「そして、人々は旅にでた。」
 ‘The people went on with their journey.’

- (58) *wa-Ø-po-kwenda kwa kal'ale mwingi tu*
 CL2.SM-PFV-CL16.REL-go CONN.CL17 eel (CL3) many.CL3 just

k-acha kinywa wazi
 CL1.SM-keep.PFV mouth open

「彼らが、大ウナギのところに着くと、それは口を開けて待ち構えていた。」
 ‘When they came to the place that was filled with an eel, the eel was waiting, with its mouth open.’

- (59) *lakini yule mwana wa ku-la k-endesewa*
 but DEM.DIST.CL1 child (CL1) CONN.CL1 INF-eat CL1.SM-go.CAUS.PASS.PFV

kinywa-ni hu-zongezwa yule
 mouth-LOC CONS:CL1.SM-roll.PASS DEM.DIST.CL1

halafu tena ka-ŋ-taka-ligwa
 then then CL1.SM-PFV-want-eat.PASS

「しかし、あの子供は、(その) 口の中へと、(入って) 行くことを余儀なくされる。彼は(ウナギに) 巻き付かれて、食べられようとしていた。」
 ‘But the child was forced into go to the eel’s mouth, where he was entangled and about to be eaten.’

- (60) *basi tena hu-ŋ-chinja kwa hu-mw-acha*
 so then CONS:CL1.SM-CL1.OM-butcher CONN.CL15 CONS:CL1.SM-CL1.OM-release
 「彼はウナギを屠りにかかっている。ウナギは彼を解放してしまった。」
 ‘He butchered the eel, who released (its grip on) the child.’

- (61) *hu-mw-acha* *yule* *a-ka-wa*
 CONS:CL1.SM-CL1.OM-release DEM.DIST.CL1 CL1.SM-CONS-COP

wa-na-zingushana *pale* *mpaka a-ka-ŋ-weza*
 CL2.SM-IPFV-unroll.CAUS.REC DEM.DIST.CL16 until CL1.SM-CONS-CL1.OM-be_able

yule
 DEM.DIST.CL1
 「(ウナギが) 彼を解放すると、そこで彼らはもみ合っている。(鬪いは、マカメが
 ウナギに) とどめを刺すことができるようになるまで続いた。」
 ‘After releasing the child, they struggled until the child finished (the eel) off.’
- (62) *makame kikal'ange a-ka-l'awa* *na pande*
 PN (CL1) PN (CL1) CL1.SM-CONS-come_out COM portion
 「マカメ・キカランゲは、(ウナギの) 一部分とともに現れた。」
 ‘Makame Kikal’ange came up (to the surface of the water) with a portion of the eel.’
- (63) *a-ka-ŋ-kat^{ha}* *kwa* *ki-visu* *chakwe kile(?)*
 CL1.SM-CONS-CL1.OM-cut CONN.CL15 DIM (CL7)-knives his.CL7 DEM.DIST.CL7

a-ka-ja *zakwe jul'u*
 CL1.SM-CONS-come his.CL10 up
 「彼は (ウナギを) あの彼の小刀で切り刻み、浮かび上がってきたのである。」
 ‘He had cut the eel with his small knife and then come up (to the surface of the water).’
- (64) *a-Ø-po-ja* *zakwe jul'u ku(?) chombo-ni*
 CL1.SM-PFV-CL16.REL-come his.CL10 up HESIT? ship-LOC

a-ka-ŋgiya *chombo~chombo* *ki-ka-safiri*
 CL1.SM-CONS-enter ship (CL7)~RED CL7.SM-CONS-travel
 「彼は海面に戻ってくると、船に乗り込んだ。そして、船は旅に出た。」
 ‘He came up and got into the ship. Then the ship went on with its journey.’
- (65) *wa-k-enda* *zao* *mkondo* *wa t^hatu wa-nda pemba*
 CL2.SM-CONS-go their.CL10 whirlpool (CL3) CONN.CL3 three CL2.SM-go PN
 「彼らは、3 番目の渦潮へと向かった。彼らはペンバに行く道中にある。」
 ‘They went to the third whirlpool. They were going to Pemba.’

- (66) *huko pemba ni mfano tu lakini bahari k^hul'u zaidi*
 DEM.MED.CL17 PN COP example just but ocean (CL9) big.CL9 more

yao pemba
 their.CL9 PN

「ペンバというのは、たとえに過ぎない。ただ、(その海というのは、) ペンバ沖より
 り広大である。」

‘Pemba is just an example. (But)) It was a bigger ocean than that of Pemba.’

- (67) *wa-Ø-po-kwenda ki-ka-ziwa tena kile chombo*
 CL2.SM-PFV-CL16.REL-go CL7.SM-CONS-catch.PASS again DEM.DIST.CL7 ship (CL7)

mkondo wa t^hatu
 whirlpool (CL3) CONN.CL3 three

「(そこに) 行くと、あの船は再びとらえられた。3 番目の海でのことである。」

‘When they went (there), the ship was caught again in the third whirlpool.’

- (68) *wa-ka-wa tena wat^hu wa chombo-ni ha-wa-na wasiwasi*
 CL2.SM-CONS-COP then people (CL2) CONN.CL2 ship-LOC NEG-CL2.SM-have worry

tu-ṁ-pilike-ni makame
 1PL.SM-CL1.OM-send-AL.PL PN

「そこで、船上の人達に不安はなかった。『マカメを遣わそう。』」

‘The people on the ship had no worries.’ “Let’s send Makame.”

- (69) *a-pilikwe makame*
 CL1.SM-send.PASS.SBJV PN

「マカメは遣わされざるほかない。」

‘Makame had to be sent.’

- (70) *a-k-enda zao a-Ø-po-kwenda kwa ch^hewa*
 CL1.SM-CONS-go their.CL10 CL1.SM-PFV-CL16.REL-go CONN.CL17 grouper (CL1)

mkubwa sana ha-weza ku-pita tu
 big.CL1 very NEG:CL1.SM-be_able INF-pass just

ch^hewa a-ka-m-tia tumbo-ni makame
 grouper (CL1) CL1.SM-CONS-CL1.OM-put stomach-LOC PN (CL1)

「巨大なハタのところに行って、通り過ぎることなどできやしない。ハタは、彼（マカメ）を腹の中に飲み込んでしまった。」

‘When he went to the place of the very big grouper, he couldn’t get through. The grouper put Makame in its stomach.’

- (71) *he-m-tafuna ka-m-meze tu*
 NEG:PFV:CL1.SM-CL1.OM-bite CL1.SM-CL1.OM-swallow.PFV just

「(ハタはマカメを) 噛み千切ることなく丸呑みにしたのである。」

‘The grouper didn’t bite Makame. It just swallowed him.’

- (72) *lakini na makame a-ka-sema miye huku si-ta-kal'a*
 but COM PN (CL1) CL1.SM-CONS-say PRO.1SG DEM.PROX.CL1 NEG:1SG.SM-FUT-stay

a-ka-aza ku-cho ku-chimba tumbo-ni iko kati
 CL1.SM-CONS-begin INF-HESIT INF-dig stomach-LOC DEM.MED.CL17 inside

mpaka a-ka-l'awa huko hapa
 until CL1.SM-CONS-come_out DEM.MED.CL17 DEM.PROX.CL16

「マカメは言った。『こんなところでは生きていけない。』(そう言うと、ハタの腹の中で穴を掘り始め、外に出てきたのである。)

‘Makame said: “I will not stay here.” He started to dig inside of the stomach until he got out (of there).’

- (73) *na yule ch^hewa a-ka-wa ka-ŋ-kufwa*
 COM DEM.DIST.CL1 grouper (CL1) CL1.SM-CONS-COP CL1.SM-PFV-die

「そして、あのハタは死んでしまった。」

‘Then the grouper died.’

- (74) *a-ka-kat^ha* *ki-pande* *a-ka-ja* *na-cho* *ushahidi* *chombo-ni*
 CL1.SM-CONS-cut DIM (CL7)-portion CL1-CONS-come COM-PRO.CL7 testimony ship-LOC
 「彼はハタを切り刻み、その断片と勝利の雄たけびとともに、船に戻ってきた。」
 ‘He cut the grouper into pieces and came back to the ship with a cry of triumph.’

- (75) *chombo* *ki-k-enda* *mbele*
 ship (CL7) CL7.SM-CONS-go front
 「船は前進した。」
 ‘The ship went on.’

- (76) (*tena* *vyovyote* *vya-ŋ-pikwa* *tena*)¹²
 then any.CL8 CL8.SM-PFV-cook.PASS then
 「ところで、(ウナギやハタの肉は) すべて料理されたの。」
 ‘By the way, were any portions cooked?’

- (77) *tena* *kula* *ki-na-cho-kuja* *wat^hu* *we-sha-pata*
 then every CL7.SM-IPFV-CL7.REL-come people (CL2) CL2.SM-COMPL-get

posho *kitoweo*

portion dish

「みんなおかずになる分け前を手に入れた。」

‘People got their share of everything that came for their plates.’

- (78) *lakini* *a-k-enda* *ŋkondo* *wa* *nne*
 but CL1.SM-CONS-go whirlpool (CL3) CONN.CL3 four
 「そして、彼は4番目の海へと向かった。」
 ‘He (they) went to the fourth whirlpool.’

- (79) *a-Ø-po-ja-kwenda* *ha-ku-na* *samaki wala* *ha-ku-na*
 CL1.SM-PFV-CL16.REL-come-go NEG-CL17.SM-have fish nor NEG-CL17.SM-have

ŋkungu *wala* *ni* *ku-wa* *ŋt^hu* *ŋkul'u* *sana* *ŋke*
 eel nor what CL17.SM-COP.PFV person (CL1) big.CL1 very female.CL1

「そこには魚もいなければウナギもない。そこには巨人がいる。女だ。」

‘When he went there, there were no fish, no eels. There was a big person, who was female.’

¹² (76) は、この民話を聞いていた10代の少年のうちの一の発話である。

- (80) *yule m̥tʰu m̥ke hu-m-pilikiya m̥kono*
 DEM.DIST.CL1 person (CL1) female.CL1 CONS:CL1.SM-CL1.OM-send.APPL arm

makame mara mbili tʰatu
 PN (CL1) times (CL9) CL9.two CL9.three

「あの女は、マカメに何度も腕を伸ばした。」

‘That lady reached her arm out to Makame several times.’

- (81) *hu-wa a-ka-m̥kwepa yule*
 CONS:CL1.SM-COP CL1.SM-CONS-CL1.OM-dodge DEM.DIST.CL1

lakini mara ya nne a-ka-m̥baka
 but time (CL9) CONN.CL9 four CL1.SM-CONS-CL1.OM-catch

「あいつ (マカメ) はよけ続けていた。しかし四度目にして、とうとう (女はマカメを) 捕まえた。」

‘He dodged her, but on the fourth try, she caught him.’

- (82) *a-Ø-po-m̥baka a-ka-m̥chomeka ja hapa*
 CL1.SM-PFV-CL16.REL-CL1.OM-catch CL1.SM-CONS-CL1.OM-put like DEM.PROX.CL16

sidiria-ni

brassiere-LOC

「彼女は (マカメを) 捕まえると、こんな風に、ブラジャーの中に入れた。」

‘When she caught him, she put him in her brassiere.’

- (83) *a-ka-anza ku-m̥chonga sasa huko a-li-ko*
 CL1.SM-CONS-begin INF-CL1.OM-cut now DEM.MED.CL17 CL1.SM-COP-CL17.REL

huko a-ka-anza ku-katʰa
 DEM.MED.CL17 CL1.SM-CONS-begin INF-cut

「彼は、その自分がいるところで、彼女に切りかかった。そこで切り始めたのである。」

‘From there, he started to chop (her). He started to cut (her).’

- (84) *a-Ø-po-ṁ-kat^ha* *yule~yule* *mwanamke na-ye*
 CL1.SM-PFV-CL16.REL-CL1.OM-cut DEM.DIST.CL1~RED lady (CL1) COM-PRO.CL1

a-ka *a-ka-lewegwa* *ni damu*
 CL1.SM-CONS.HESIT CL1.SM-CONS-intoxicate.PASS by blood (CL9)

pe-sha-jaa *damu ya ṁt^hu*
 CL16.SM-COMPL-fill blood (CL9) CONN.CL9 person

「あの女を切ると、彼は血に酔っていた。そこには人間の血が満ちていた。」

‘When he cut the lady, he was intoxicated by her blood. That place was filled with the person’s blood.’

- (85) *makame a-ka-zuka* *ha-ṅ* *kit^hu kwa sababu*
 PN (CL1) CL1.SM-CONS-rise NEG:CL1.SM-have thing CONN.CL17 reason

yule ṁt^hu jini wat^hu wa-k-enda mbele
 DEM.DIST.CL1 person (CL1) monster people (CL2) CL2.SM-CONS-go front

「マカメが、(海面に) 上がってきたが、何も手にしていない。その理由は、怪物が(魚ではなく) 人だったためである。人々は前進した。」

‘Makame came up to the surface of the water. He had nothing. This is because the monster was a person. The people advanced.’

- (86) *wa-Ø-po-kwenda* *kule mbele a-ka-fika ṁkondo*
 CL2.SM-PFV-CL16.REL-go DEM.DIST.CL17 front CL1.SM-CONS-reach whirlpool (CL3)

wa nne wa tano
 CONN.CL3 four CONN.CL3 five

「彼らはそこを前進して、四番目、もとい、五番目の渦潮へとたどり着いた。」

‘When they advance, they arrived at the fourth, no, the fifth whirlpool.’

- (87) *ṁkondo wa tano a-Ø-po-kwenda*
 whirlpool (CL3) CONN.CL3 five CL1.SM-PFV-CL16.REL-go

ku-na j-oka na bahari-ni kubwa
 CL17.SM-have AUG (CL5)-snake COM ocean-LOC big. CL5

「五番目の渦潮に行くと、そこでは、巨大なへビ、それと海が待ち構えていた。」

‘When he went to the fifth whirlpool, there were a big snake and an ocean.’

- (88) *nyoka ya bahari yule ndo hii*
 snake (CL9) CONN.CL9 ocean DEM.DIST.CL1 EMPH DEM.PROX.CL9

ka-na kwa mfano ja mkunga yule
 CL1.SM-have CONN.CL15 example like eel (CL1) DEM.DIST.CL1

「その海のヘビというのは、あれだ。あのウナギのようなものだ。」

‘The sea snake was kind of like that eel.’

- (89) *ka-na-taka a-ŋ-l'ye makame lakini nyoka*
 CL1.SM-IPFV-want CL1.SM-CL1.OM-eat.SBJV PN (CL1) but snake (CL1)

ndo ka-na tabia ya ja ile ku-zonga~zonga
 EMPH CL1.SM-have character (CL9) CONN.CL9 like DEM.DIST.CL9 INF-coil~RED

「ヘビは、マカメを食べようとしている。しかし、ヘビというのは、とぐろを巻く習性をもっている。」

‘The snake wanted to eat Makame but it had a habit of coiling (to crushing its pray).’

- (90) *makame hu-wa ka-na-sokotwa ni yule*
 PN (CL1) CONS:CL1.SM-COP CL1.SM-IPFV-twist.PASS by DEM.DIST.CL1

lakini na veye ka-na-chomeka visu mpaka
 but COM PRO.CL1 CL1.SM-IPFV-stab knives until

yule nyoka na-ye a-ka a-ka-lainika
 DEM.DIST.CL1 snake (CL1) COM-PRO.CL1 CL1.SM-CONS.HESIT CL1.SM-CONS-soften

「マカメは、あのヘビに締め付けられたが、あのヘビがのびるまで小刀を何度も突き刺した。」

‘Makame was twisted by it (the snake). But he also stabbed that snake again and again until it got softened up.’

- (91) *a-ka-m-kat^ha* *ki-pande* *a-ka-ji-zongeza*
 CL1.SM-CONS-CL1.OM-cut DIM (CL7)-portion CL1.SM-CONS-REFL-wrap
- ki-pande* *cha* *m̄kia* *mwingine* *a-ka-zuka* *na-cho*
 DIM (CL7)-portion CONN.CL7 tail (CL3) other.CL3 CL1.SM-CONS-rise COM-PRO.CL7
- kwenye chombo makame iyo* *ke-sha-kuja*
 with ship PN (CL1) DEM.MED.CL1 CL1.SM-COMPL-come
- 「彼は、ヘビの一部を切り取り、自分自身に巻き付け、(ヘビの) 他方の尾の一部
 分を切り取り、それをもって海面に上がってきた。船があるところにマカメは
 戻ってきたのである。」
- ‘He cut one side (of the snake) and wrap it around himself. He came back to the ship with
 a chunk of the other side of the tail. Makame was back.’
- (92) *tw-enze* *tena ka-ta-kuwa* *safari* *ya* *mwisho*
 1PL.SM-go.SBJV.HESIT then CL1.SM-FUT-COP journey (CL9) CONN.CL9 end
- iyo* *m̄kondo* *wa* *saba*
 DEM.MED.CL9 whirlpool (CL3) CONN.CL3 seven
- 「行こう (話を続けよう)。彼は、七番目の渦潮へ向かって、最後の旅路についた。」
- ‘Let’s go on (with the tale). He set out on the final journey to the seventh whirlpool.’
- (93) *m̄kondo* *wa* *saba* *a-Ø-po-kwenda*
 whirlpool (CL3) CONN.CL3 seven CL1.SM-PFV-CL16.REL-go
- a-ka-telemshwa* *yule* *makame*
 CL1.SM-CONS-let_off.PASS DEM.DIST.CL1 PN (CL1)
- 「七番目の渦潮についたとき、マカメは (再び) 放り出された。」
- ‘When he went to the seventh whirlpool, Makame was let off.’
- (94) *a-Ø-po-ja-kwenda* *kule* *kwa* *jini* *kubwa*
 CL1.SM-PFV-CL16.REL-come-go DEM.DIST.CL17 CONN.CL17 monster (CL5) big.CL5
- la* *ki-ume*
 CONN.CL5 DIM (CL5)-male
- 「男の巨大な怪物がいるところに着いたとき、」
- ‘When he went to the big male monster’s place.’

(95) *tu-fanye je ja hapa*

1PL.SM-do.SBJV Q like DEM.PROX.CL16

『我々はこんなところでどうすべきだろうか。』

“What should we do here?”

(96) *makame hu-tuza yule a-ka-ngoja*

PN (CL1) CONS:CL1.SM-stay_calm DEM.DIST.CL1 CL1.SM-CONS-wait

a-ka-pelekewa mkono

CL1.SM-CONS-send.APPL.PASS arm

「マカメは落ち着いて待ち構え、そして（怪物の）腕へ連れて行かれた。」

‘Makame stayed calm and was waiting (for the monster). Then he was sent to the (monster’s) arm.’

(97) *a-Ø-ko-ja-fisiwa mkono*

CL1.SM-PFV-CL17.REL-come-reach.APPL.PASS arm (CL3)

a-ka-u-chomeka kisu

CL1.SM-CONS-CL3.OM-stab knife

「（怪物の）腕に到達すると、その腕に小刀を突き刺した。」

‘He stabbed monster’s arm, where he was made to arrive.’

(98) *jini hata ha-na habari kwa ku-chomekwa*

monster (CL1) even NEG:CL1.SM-have news CONN.CL15 INF-stab.PASS

kiji-visu ja icho tu

DIM (CL7)-knives like DEM.MED.CL7 just

a-ka-pelekewa mkono mwingine

CL1.SM-CONS-send.APPL.PASS arm (CL3) other.CL3

「怪物は、そんな小刀で刺されたことに特に反応は示さない。彼（マカメ）は、もう一方の（怪物の）腕へと送られた。」

‘The monster didn’t react though he was stabbed with the small knife like that. He (Makame) was sent to another arm.’

- (99) *lakini nyoka sasa hivi nani jini yule*
 but snake now DEM.PROX.CL8 who monster (CL1) DEM.DIST.CL1

a-ka-wa tena ka-na-chamul'a mdomo ku-m-fata yule
 CL1.SM-CONS-COP then CL1.SM-IPFV-open mouth INF-CL1.OM-follow DEM.DIST.CL1

「まさに今、へビ、いや、あの怪物は、あいつ（マカメ）を捕まえるために、口を開けている。」

‘But the snake, no, the monster was leaving its mouth open, following the child.’

- (100) *ka-na-m-kwama makame wa makame makame kikal'ange*
 CL1.SM-IPFV-CL1.OM-squeeze PN (CL1) CONN.CL1 PN PN PN

「怪物は、マカメのマカメこと、マカメ・キカランゲの動きを封じ込めている。」

‘He was squeezing Makame of Makame, Makame Kikal’ange.’

- (101) *makame kikal'ange na-ye a-ka-sema*
 PN (CL1) PN (CL1) COM-PRO.CL1 CL1.SM-CONS-say

na miye leo hu-cha-ni-pata
 COM PRO.1SG today NEG:2SG.SM-FUT-1SG.OM-get

「マカメ・キカランゲは言った。『今日、お前は俺を捕まえることはできないだろう。』」

‘Makame Kikal’ange said’: “You won’t catch me today”.

- (102) *sa-rudiya ko kwetu kuko wazee wangu*
 FUT:1SG.SM-return.APPL DEM.MED.CL17 our.CL17 DEM.MED.CL17 elders (CL2) my.CL2

chombo-ni kwetu tw-ende ze tu-malize
 ship-LOC (CL17) our.CL17 1PL.SM-go.SBJV our.CL10.HESIT 1PL.SM-finish.SBJV

safari zetu
 journey (CL10) our.CL10

『俺は、両親のもと、あるいは我々の船へと戻るだろう。進もう。我々の旅を終わらせよう。』

“I will be back to my parents’ place and our ship. Let’s go. Let’s finish our journey.”

- (103) *basi pale a-ka-wa ka-na-vamiwa ni yule*
 INTJ DEM.DIST.CL16 CL1.SM-CONS-COP CL1.SM-IPFV-catch.PASS by DEM.DIST.CL1

kwa mikono yote miwili a-ka-shikwa
 CONN.CL15 arms (CL4) all.CL4 two.CL4 CL1.SM-CONS-catch.PASS

a-Ø-po-shikwa a-ka-vatwa
 CL1.SM-PFV-CL16.REL-catch.PASS CL1.SM-CONS-swallow.PASS

「そこで、彼はあいつに捕まった。彼は両手を捕まれている。つかまれると、彼は、飲み込まれた。」

‘Then, he was taken by both of his arms and caught. When he was caught, he was swallowed.’

- (104) *tena jini ka-na-taka a-fanye kazi yakwe*
 then monster (CL1) CL1.SM-IPFV-want CL1.SM-do.SBJV work (CL9) his.CL9

pale a-fyonje
 DEM.DIST.CL16 CL1.SM-slurp.SBJV

「そして、怪物は自分の目的を果たそうとしている、そこで (マカメを) 啜りこもうとしている。」

‘The monster wanted to accomplish his task, wanted to slurp (Makame) up there.’

- (105) *a-ka-m-chomeka kisu*
 CL1.SM-CONS-CL1.OM-stab knife

「(マカメは、) 小刀を (怪物に) 突き刺した。」

‘He stabbed the knife into the monster.’

- (106) *a-Ø-po-ja-ki-l’avya*
 CL1.SM-PFV-CL16.REL-come-CL7.OM-take_out

a-ka-tia na upande mwingine
 CL1.SM-CONS-put COM side (CL11) other.CL11

「小刀を取り出すと、反対側にも刃を入れた。」

‘When he pulled the knife out, he stabbed it on the other side.’

- (107) *a-ka-ki-l'avya* *a-ka-tia* *na upande* *mwingine*
 CL1.SM-CONS-CL7.OM-take_out CL1.SM-CONS-put COM side (CL11) other.CL11

ta (?) hamaki jini *la* *ki-shetani na-lyo*
 ? anger monster (CL5) CONN.CL5 DIM-spirit COM-PRO.CL5

li-sha-choka *li-na-mwagika* *madamu tu*
 CL5.SM-COMPL-get_tired CL5.SM-IPFV-bleed.NEU blood just

「小刀を取り出すと、反対側にも刃を入れた。怪物は、怒りに狂ったが、困憊し
 きて、血を垂れ流すだけだった。」

‘He pulled out the knife, stabbing on another side. The monster got angry, but was already
 exhausted, and just kept bleeding.’

- (108) *li-ka-fwa* *a-ka-rudi* *wa-ka-maliza* *safari* *zao*
 CL5.SM-CONS-die CL2.SM-CONS-return CL2.SM-CONS-finish journey (CL10) their.CL10

mpaka pemba kwa *tajiri*
 up_to PN CONN.CL17 rich

「(怪物は) くだばり、彼は (船に) 戻った。そして、彼らは、ペンバの長者のと
 ころで、彼らの旅を終えたのである。」

‘Then, the monster died. He went back. They finished their journey at a rich man’s place.’

- (109) *makame wa* *makame makame kikal'ange*
 PN (CL1) CONN.CL1 PN PN PN

a-ka-chelezwa *chombo-ni* *a-ka-wikwa* *ja palya*
 CL1.SM-CONS-put_off.PASS ship-LOC CL1.SM-CONS-put.PASS like DEM.DIST.CL16

mahaa a-k-endeswa *kwa* *tajiri*
 place CL1.SM-CONS-go.CAUS.PASS CONN.CL17 rich

「マカメのマカメことマカメ・キカランゲは、船から降ろされ、長者のところ
 へと連れて行かれた。」

‘Makame of Makame, Makame Kikal’ange was put off the ship and made to go to the rich
 man(’s place).’

(110) *huyu ndo mw-e-tu-okoa maana*

DEM.PROX.CL1 EMPH CL1.SM.REL-PFV-1PL.OM-save reason

『このものこそが、我々を救ってくれたのです。』

“It is this child that saved us.”

(111) *mbona u-ma-kuja haraka leo*

why 2SG.SM-PRF-come quickly today

『どうして今日はそんなに急いできたのだ。』

“Why did you come (here) so quickly today?”

(112) *huyu ndo mw-e-tu-okoa*

DEM.PROX.CL1 EMPH CL1.SM.REL-PFV-1PL.OM-save

『このものこそが、我々を救ってくれたのです。』

“It is this child that saved us.”

(113) *ki-toto kidugu hiki lakini ndo ki-ma-cho-tu-okoa*

DIM (CL7)-child small.CL7 DEM.PROX.CL7 but EMPH CL7.SM-PRF-CL7.REL-1PL.OM-save

bahari nzima tu-ma-pata ku-fika himahima

ocean (CL9/10) whole.CL9/10 1PL.SM-PRF-get INF-reach quickly

『このものは小さな子供にすぎませんが、彼こそが我々を守り抜いたのです。すべての海域をわれわれは難なく進むことができました。』

“This child is very small but it is he that saved us in the whole ocean. So we have advanced rapidly.”

(114) *ki-ka-rudi ki-ka-ru tiwa chombo-ni*

CL7.SM-CONS-return CL7.SM-CONS-HESIT put.PASS ship-LOC

「それ（マカメ）は戻ると、船に乗せられた。」

‘He came back and was put on the ship.’

(115) *wat^hu wa-ka-fanya kazi ya ku-pakiya*

people (CL2) CL2.SM-CONS-do work (CL9) CONN.CL9 INF-load

「人々は荷積みの仕事をしていた。」

‘The people (on the ship) were loading (the ship).’

- (116) *wa-Ø-po-rudi* *ki-ka-pewa* *halasa*
 CL2.SM-PFV-CL16.REL-return CL7.SM-CONS-give.PASS wage (CL9)

ya *ubahariya* *ya* *usarahangi*
 CONN.CL9 boatswain CONN.CL9 second_chief

「彼らが戻ると、彼（マカメ）は、ウバハリヤ（掌帆長）もとい、ウサラハンギ（副船長）と同等の報奨金が与えられた。」

‘When they were back, he was given the wage of the “ubahariya” (boatswain), no, that of the “usarahangi” (second chief).’

- (117) *chombo-ni hu-wa nahodha hu-wa uredi hu-wa ubahariya*
 ship-LOC HAB-COP captain HAB-COP seaman HAB-COP boatswain

hu-wa na usarahangi lakini huyu usarahangi
 HAB-COP COM second_chief but DEM.PROX.CL1 second_chief

ndo ch'ini ya nahodha
 EMPH bottom (CL9) CONN.CL9 captain

「船には、ナホザ（船長）、ウレディ（水夫）、ウバハリヤ（掌帆長）、ウサラハンギ（副船長）がいるが、ウサラハンギというのは、ナホザのすぐ下の階級だよ。」

‘On the ship, there are a “nahodha” (captain), an “uredi” (ordinary seaman), and an “ubahariya” (a second chief). This “usarahangi” is ranked just under the “nahodha”.’

- (118) *ye a-ka-pangiwa* *halasa* *ya* *usarahangi*
 PRO.CL1 CL1.SM-CONS-arrange.APPL.PASS wage (CL9) CONN.CL9 second_chief

「彼（マカメ）は、ウサラハンギ（副船長）と同等の報奨金が与えられた。」

‘He was rewarded with the wage of the “usarahangi” (second chief).’

- (119) *mu-N-vi-tambul'a* *lakini*
 2PL.SM-PFV-CL8.OM-understand but

「お前たち分かったか。」

‘Have you understood?’

- (120) *(kwani uo usarahangi wa-w-ijua nini)*¹³
 by_the_way DEM.MED.CL11 second_chief(CL11) CL2.SM-CL11.OM-know what
 「ところで、そのウサラハンギ (副船長) が何かについて、こいつら (昔話を聞いている子供たち) は知っているの。」
 ‘By the way, do they know what “usarahangi” (second chief) is?’

- (121) *ha-wa-w-iji usarahangi miye kwa mfano*
 NEG-CL2.SM-CL2.OM-know.PFV second_chief PRO.1SG CONN.CL15 example

ndo nahodha ch^hini yakwe pa-wa usarahangi
 EMPH captain bottom (CL9) his.CL9 CL16.SM-COP.PFV second_chief
 「彼らはウサラハンギについて知らない。私が、例えばナホザだとしたら、その下にいるのがウサラハンギだ。」
 ‘They don’t know about “usarahangi” (second chief). For example, I’m a “nahodha” (captain). Just below me, there is an “usarahangi”.’

- (122) *mt^hu wa ku-fanya kazi za jul'u~jul'u*
 person (CL1) CONN.CL1 INF-do work (CL10) CONN.CL10 above~RED

*pengine hata (kazi ndugu~ndugu)*¹⁴
 probably even work (CL9) small.CL9~RED
 「上の仕事をする人。(つまり小さな (労苦を伴わない) 仕事)」
 ‘A person who with a higher position, probably (doing easy jobs).’

- (123) *bahariya ndo wa-na-o kazi k^hul'u na uredi*
 boatswain EMPH CL2.SM-have-CL2.REL work (CL9) big.CL9 COM seaman
 「バハリヤというのが大変な仕事を担う人。それとウレディも。」
 ‘It is the “bahariya” (boatswain) who did most of the labour, together with the “uredi” (seaman).’

¹³ (120) は、同席していたファキ・パンドゥ・マカメ氏の発話である。

¹⁴ (122) の括弧でくくった部分は、同席していたファキ・パンドゥ・マカメ氏の発話である。

- (124) *nahodha veye ka-wa-po tu ka-na-elekeza*
 captain (CL1) PRO.CL1 CL1.SM-COP.PFV-PRO.CL16 just CL1.SM-IPFV-direct.CAUS

ka-na-shauri ka-na-tuma lakini sasa ch^hini yakwe
 CL1.SM-IPFV-consult CL1.SM-IPFV-order but now bottom (CL9) his.CL9

ndo pa-wa hiyo sarahangi
 EMPH CL16.SM-COP.PFV DEM.MED.CL9 second_chief (CL9)

「ナホザ、彼はいるだけ。指示を出し、助言を与え、(人を) つかう。その下にいるのが、サラハンギというわけだ。」

‘The “nahodha” (captain) is just there. He decides the direction, gives advice, and commands. Ranked just below him, is the “sarahangi”.’

- (125) *a-Ø-po-rudi nahodha a-ka-m-chukul'a*
 CL1.SM-PFV-CL16.REL-return captain (CL1) CL1.SM-CONS-CL1.OM-take

yule mwana a-k-enda na-ye kwao
 DEM.DIST.CL1 child (CL1) CL1.SM-CONS-go COM-PRO.CL1 their.CL17

「戻ると、ナホザはその子供を連れて、彼ら(マカメの両親の)ところを訪れた。」

‘When the “nahodha” (captain) was back, he took the child, and went to their (Makame’s parents’) place together with him.’

- (126) *a-ka-sema mwana huyu ka-na-ni-fawa uzuri*
 CL1.SM-CONS-say child (CL1) DEM.PROX.CL1 CL1.SM-IPFV-1SG.OM-save well

maana yuno mo m-tende je
 reason DEM.PROX.CL1 DEM.MED.CL18 2PL.SM-do.PFV Q

「彼(ナホザ)は言った。『この子供は、私たちをよく助けてくれる。あなたたちは何をしたのですか。』」

‘(The captain) He told them’: “This child saves us well. What did you do (for him)?”

- (127) *ka-ta-ni-fawa huyu katika chombo*
 CL1.SM-FUT-1SG.OM-save DEM.PROX.CL1 in ship

『彼は、船上で私をよく助けてくれるでしょう。』

“This one (child) will save me on the ship.”

- (128) *a-ka-uzwa ni mama*
 CL1.SM-CONS-ask.PASS by mother
 「彼 (ナホザ) は母親に尋ねられた。」
 ‘He was asked by (Makame’s) mother.’
- (129) *kwani pale u-Ø-po-ja-ṁ-chukul'a*
 why DEM.DIST.CL16 2SG.SM-PFV-CL16.REL-come-CL1.OM-take

ku-vu ku-ṁ-chukulili haja gani
 2SG.SM-COP.PST 2SG.SM-CL1.OM-take.APPL.PFV reason what_kind_of
 『あなたが (マカメを) 召し抱えたとき、あなたは、どんな仕事を与えようと雇い
 入れたのでしょうか。』
 “When you employed him (Makame), with what kind of reason did you employ him?”
- (130) *ni-vu ni-ṁ-chukul'u kama yaani uredi wangu*
 1SG.SM-COP.PST 1SG.SM-CL1.OM-take.APPL.PFV like that_is seaman (CL11) my.CL.11
 『(一番位が下の) ウレディ (水夫) として雇いました。』
 “I employed him as an “uredi” (seaman).”
- (131) *tena mbona ku-ṁ-ny-ambiya ka-cha-ku-fawa*
 then why 2SG.SM-PFV-tell CL1.SM-FUT-2SG.OM-save
 『それでは、あなたが私に彼があなたを助けるだろうといったのはなぜでしょう。』
 “Why did you tell me that he would save you?”
- (132) *ee ka-na-fawa uzuri sana maana huyu sababu yako*
 FIL CL1.SM-IPFV-save well very reason DEM.PROX.CL1 reason (CL9) your.CL9

ku-uza we ku mu-N-fanya je
 INF-ask PRO.2SG HESIT 2PL.SM-PFV-do Q
 『ええ、彼はよく助けてくれます。あなたたちはいったい何をしたのですか。』
 “Yes, he saves (us) very well. I was wondering what you did (for him).”

(133) *maana tu-na-vyo-m-tambul'a huyu kwa jina*
 reason 1PL.SM-IPFV-CL8.REL-CL1.OM-understand DEM.PROX.CL1 CONN.CL15 name

makame wa makame lakini kulya chombo-ni
 PN (CL1) CONN.CL1 PN but DEM.DIST.CL17 ship-LOC (CL17)

ka-tw-ambili veye makame kikal'ange makame kikal'ange huyu
 CL1.SM-1PL.OM-tell.PFV PRO.CL1 PN PN PN PN DEM.PROX.CL1

『というのも、我々がこの子についてその名前から理解していることは、(彼が)マカメのマカメであるということです。しかし船上で、彼は我々に、彼がマカメ・キカランゲであると言いました。マカメ・キカランゲです、この子は。』
 “We know about him from his name that he is Makame of Makame, but he told us on the ship that he was Makame Kikal’ange. This is Makame Kikal’ange.”

(134) *vi-vu je mpaka a-ka-itwa makame kikal'ange*
 CL8.SM-COP.PST Q until CL1.SM-CONS-call.PASS PN PN

na babi-e makame wa makame na veye ndo makame
 COM father-his PN (CL1) CONN.CL1 PN COM PRO.CL1 EMPH PN

a-we makame wa makame papo
 CL1.SM-COP.SBJV PN (CL1) CONN.CL1 PN DEM.MED.CL16

『彼がマカメ・キカランゲと呼ばれるようになるまでに、いったいどんなことがあったのでしょうか。彼の父は、マカメのマカメであり、彼もまた、マカメのマカメではありませんか。』

“What happened until he started to be called Makame Kikal’ange His father was called Makame of Makame. So he should also have been called Makame of Makame.”

- (135) *huyu mwana huyu katika utoto wakwe*
 DEM.PROX.CL1 child (CL1) DEM.PROX.CL1 in childhood (CL11) his.CL11

ka-ni-ambili ni-m-njikile ki-gae
 CL1.SM-1SG.OM-tell.PFV 1SG.SM-CL1.OM-cook.APPL.SBJV DIM-pot

ni-m-kal'ange

1SG.SM-CL1.OM-fry.SBJV

『この子供は、幼いころ、私に、鍋で彼のことを料理するように、彼を炒めるように言いました。』

“This child, in his childhood, told me that I should cook him in the small pot, that I should fry him.”

- (136) *ha-njika ki-gae lakini ka-ngili mwenyewe*
 CONS:1SG.SM-cook DIM-pot but CL1.SM-enter himself

he-ngoja ha-m-kal'anga a-ka-ngiya mwenyewe
 NEG:CL1.SM:PFV-wait CONS:1SG.SM-CL1.OM-fry CL1.SM-CONS-enter himself

mlya ki-gae-ni mwa moto
 DEM.DIST.CL18 DIM-pot-LOC (CL18) CONN.CL18 fire

『私が鍋を用意すると、彼は自分から鍋に入りました。待たなかったのです。そして私は彼を炒めました。彼は自分自身で、熱い鍋の中に入ったのです。』

“I was about to cook him in the small pot, but he dove in by himself. He didn’t wait for me to fry him. He dove into the pot in the fire.”

- (137) *a-ka-ji-virusa~virusa a-Ø-po-kwisha a-ka-j-ita*
 CL1.SM-CONS-REFL-roll~RED CL1.SM-PFV-CL16.REL-finish CL1.SM-CONS-REFL-call

makame kikal'ange

PN PN

『彼は（鍋のなかで）ゴロゴロと転がり、それを終わると、マカメ・キカランゲを自称するようになりました。』

“He rolled himself from side to side in the pot. When he was done, he called himself Makame Kikal’ange.”

- (138) *kwa* *hivyo* *tena*
 CONN.CL15 DEM.MED.CL8 then

miye *hu-wa* *na-m-chuza* *tu* *ukaidi* *wakwe*
 PRO.1SG CONS:1SG.SM-COP IPFV:1SG.SM-CL1.OM-look just obstinacy (CL11) his.CL11

utundu *wakwe* *na* *mimi* *lakini* *si-na* *vya* *ku-m-tenda*
 slyness (CL11) his.CL11 COM PRO.1SG but NEG:1SG.SM-have CONN.CL8 INF-CL1.OM-do

『それからというもの、私は彼の強情さ、頑固さを見守るばかりです。私が彼を
 どうこうするということはありません。』

“Since then, I just look at him. I have nothing to do with his obstinacy and slyness.”

- (139) *kama* *jambo* *ha-ly-ebu*
 if matter (CL5) NEG:CL1.SM-CL5.OM-want

basi *hu-wa* *ndo* *ha-ly-ebu*
 then HAB-COP EMPH NEG:CL1.SM-CL5.OM-want

『もし、彼がいらないというのであれば、それはいらないということです。』

“If he doesn’t want something, he never changes his mind.”

- (140) *hu-na* *vya* *ku-mw-ima* *kwa* *hivyo*
 NEG:2SG.SM-have CONN.CL8 INF-CL1.OM-stop CONN.CL15 DEM.MED.CL8

ndo *ivyo~ivyo* *u-Ø-vyo-m-gundul'a* *iko*
 EMPH DEM.MED.CL8~RED 2SG.SM-PFV-CL8.REL-CL1.OM-observe DEM.MED.CL17

chombo-ni *kwenu*
 ship-LOC (CL17) your.CL17

『あなたは、彼を止める術などもっていません。それは、あなたたちの船の中で
 見た通りです。』

“There is nothing to stop him as you observed in your ship.

(141) *ka-na-sema huyu ka-ta-ni-fawa wala tena ha-nda*
 CL1.SM-IPFV-say DEM.PROX.CL1 CL1.SM-FUT-save nor again NEG:CL1.SM-go

chuo-ni na-m-chukul'a nahodha na-m-chukul'a
 school-LOC IPFV:1SG.SM-CL1.OM-take captain IPFV:1SG.SM-CL1.OM-take

a-we sarahangi wangu hata si bahariya
 CL1.SM-COP.SBJV second_chief (CL1) my.CL1 even NEG boatswain

「ナホザは言った。『この子は、再び学校（マドラサ）に行くことはなく、私を助けるでしょう。私は彼を雇い入れます。彼はバハリヤではなく、私のサラハンギとなるべきです。』」

‘The “nahodha” (captain) said: “This child will save me, he will no longer go to school (madrasah). I recruit him. He should be my “sarahangi” (second chief) rather than “bahariya” (boatswain).’

(142) *hapo hadithi i-ka-koma*
 DEM.MED.CL16 tale (CL9) CL9.SM-CONS-conclude

「物語はここで終わりだ。」

‘The tale is over here.’

付録 1 : 録音について (英語) (Appendix 1: Information on the recording)

The recoding was conducted on 24th June 2019 in Jongowe ward on Tumbatu. While I recorded for nearly 40 minutes, I only transcribe the initial part of 16:30 minutes, where the folktale is told. In addition to the main speaker, called Mshenga Haji Sheha, there were three participants. One is Faki Pandu Makame, who is in his forties and from Gomani, Tumbatu, whereas the others are teenage boys from Jongowe. I was not in front of the main speaker while he was telling the tale, although before he started speaking, I explained that I would record. The transcription was carried out on 25th June 2019 in cooperation with Faki Pandu Makame.

Mshenga Haji Sheha, the main speaker, is 77 years old. While he has been to the coastal areas of Tanzania mainland and Pemba Island for fishing, he has lived in Jongowe since he was born. His parents, who raised him, are also from Jongowe. The tale he told was handed down to him from his maternal grandmother, who also lived with him in his childhood.

付録 2 : 表記について (英語) (Appendix 2: Transcription, glossing and translation policy)

The transcribed data is segmented into 142 passages. Each passage roughly forms a syntactic (and/or semantic) unit, but not always corresponds to a phonetic phrase or block in terms of pronunciation.

For transcription, I use the orthography of Standard Swahili with the following modifications:

- Aspiration and nasal syllabicity are marked with the IPA symbols assigned for them.
- The advanced palatal lateral approximant, which is peculiar to Kitumbatu, is represented with *l* and an apostrophe.
- \emptyset is used for the prefix without phonological form.
- The first characters of passages and proper nouns are written in lowercase, and periods are not added at the end of passages.
- The parenthesised question mark (?) shows that pronunciation is unclear and thus transcription is uncertain.
- When an utterance is made by another participant than the main speaker, the passage is parenthesised.

Functional morphemes are glossed with the abbreviations listed at the end of the article, although the question mark is used when it was difficult to decide on an appropriate gloss because of the uncertain pronunciation. Note that I follow the standard noun classification of Swahili, which differentiates noun classes numbered from 1 to 18 (12–14 are missing) (cf. Meinhof 1932). The noun class of nouns is glossed in parentheses, and that of modifiers is noted after the lexical meaning without parenthesis. When there is no constituent agreeing with the noun or modifier in question, the noun class information is omitted. As for other glossing conventions, I follow the Leipzig Glossing Rules.

While Japanese and English translations correspond to the original Kitumbatu text in terms of

lexical meanings and grammatical constructions as closely as possible (for comprehension), complementary words can be parenthesised for ease of interpretation.

略号一覧 (Abbreviations)

1	1 人称 (first person)	ITV	行格 (itive)
2	2 人称 (second person)	HESIT	言い淀み (hesitation)
AL	聞き手活用 (allocutive)	LOC	所格 (locative)
APPL	適用 (applicative)	MED	中称 (medial)
AUG	指大 (augmentative)	NEG	否定 (negative)
CL	名詞クラス (noun class e.g. CL1 = class 1)	NEU	中間 (態) (neuter)
COM	共格 (comitative)	OM	目的語標識 (object marker)
COMP	補文標識 (complementiser)	PASS	受動 (passive)
COMPL	終結 (completive)	PFV	完結 (perfective)
CONN	属辞 (connective)	PN	固有名詞 (proper noun)
CONS	継起 (consecutive)	PL	複数 (plural)
COP	コピュラ (copula)	PRF	完了 (perfect)
CAUS	使役 (causative)	PRO	代名詞 (pronoun)
DEM	指示詞 (demonstrative)	PROX	近称 (proximal)
DIM	指小 (diminutive)	PST	過去 (past)
DIST	遠称 (distal)	Q	疑問 (question)
EMPH	強調 (emphatic)	REC	相互 (reciprocal)
FUT	未来 (future)	RED	重複 (reduplication)
HAB	習慣 (habitual)	REFL	再帰 (reflexive)
IMP	命令 (imperative)	REL	関係節 (relative clause)
INTJ	間投詞 (interjection)	SG	単数 (singular)
INF	不定形 (infinitive)	SM	主語標識 (subject marker)
IPFV	未完結 (imperfective)	SBJV	接続 (法) (subjunctive)

謝辞 (Acknowledgements)

本研究はアジア・アフリカ言語文化研究所の共同利用・共同研究課題「スワヒリ語諸変種にみられる多様性とダイナミズムへのアプローチ」及び「バントゥ諸語のマイクロ・バリエーションの類型的研究 (2)」の研究成果の一部である。調査に協力してくれたすべての人々、特に民話を語ってくれたムシェンガ・ハジ・シェハ氏、筆者のトゥンバトゥ島での調査を常日頃から支えてくれるファキ・パンドゥ・マカメ氏、また本稿執筆に際して有益な助言を与えてくれた鈴木博之氏、千田俊太郎氏、ルーカス・リーザ氏にはここに記して謝意を表す。

参考文献 (References)

- Baraza la Kiswahili la Zanzibar. (2012) *Kamusi la lahaja ya Kitumbatu*. Zanzibar: Baraza la Kiswahili la Zanzibar.
- Meinhof, Carl. (1932) *Introduction to the phonology of the Bantu languages (translated by N. J. van Waremelo)*. Berlin: Dietrich Reimer Verlag.
- Nurse, Derek, & Hinnebusch, Thomas J. (1993) *Swahili and Sabaki: A linguistic history*. Berkeley: University of California Press.
- Stude, Traute. (1995) Language change and language maintenance in the island of Tumbatu. In Shaaban A.K. Mlacha & Arvi Hurskainen (Eds.), *Lugha, utmaduni na fasihi simulizi ya Kiswahili* (pp. 83-117) Dar es Salaam: Taasisi ya Uchunguzi wa Kiswahili, Chuo Kikuu cha Dar es Salaam.
- Taasisi ya Uchunguzi wa Kiswahili. (2001) *Kamusi ya Kiswahili-Kiingereza*. Dar es Salaam: Taasisi ya Uchunguzi wa Kiswahili, Chuo Kikuu cha Dar es Salaam.
- Takemura, Keiko. (2008) Ripoti juu ya utafiti wa Kiswahili wa 2007-2008 nchini Tanzania -Msamiati na sarufi ya Kichaani, Kaskazini ya Unguja. *Swahili & African Studies* 19, 49-62.
- . (2016) Miundo ya sentensi zenye kitenzi '-wa' katika Kichaani - Kulinganisha na Kiswahili Sanifu. *Swahili & African Studies* 27, 53-63.
- . (2017) Miundo ya sentensi za njeo iliyopita katika Kitumbatu-Gomani - Kwa kulinganisha na Kichaani na Kiswahili Sanifu. *Swahili & African Studies* 28, 109-121.
- 竹村景子. (1999) 「スワヒリ語チャアニ方言について—音韻および時制を中心に—」『スワヒリ&アフリカ研究』 9: 118-129.
- . (2012) 「スワヒリ語諸変種記述調査報告(1)—チャアニ変種基礎語彙 600 語—」『スワヒリ&アフリカ研究』 27: 64-82.
- . (2014) 「スワヒリ語トゥンバトゥ方言 (G43)」 塩田勝彦 (編) 『アフリカ諸語文法要覧』 211-226. 広島: 溪水社.

受理日 2020 年 4 月 15 日

A narrated folktale in Kitumbatu

The adventures of Makame the Fried

Makoto Furumoto

JSPS/University of Essex (mf19996@essex.ac.uk)

Abstract

In this article, I transcribe recorded material, in which, for the most part, a folktale is told in the Kitumbatu dialect of Swahili. In the coastal areas of Eastern Africa, there are several language varieties regarded as local dialects of Swahili (cf. Nurse & Hinnebusch 1993). Kitumbatu is one of these, spoken by people on Tumbatu Island, off the northwest tip of Unguja, as well as the ancestors of Tumbatu immigrants in some part of northern Unguja. There are two wards on Tumbatu, Gomani and Jongowe, and the main speaker of the narrative is from the latter.

In this narrative material, there are a number of linguistic features which have previously not been described (cf. Stude 1995, Takemura 1999, 2008, 2012, 2014, 2016, 2017, Baraza la Kiswahili la Zanzibar 2012). These features suggest not only that the description of Kitumbatu is incomplete as of yet, but also that there is dialectal variation within the varieties summarised as ‘Kitumbatu’. The main purpose of this article is to share primary linguistic data which contributes to advancing the description of Kitumbatu.

台湾華語における助動詞「yǒu(有)」をもつ文の時間的解釈

鄭 雅云 (テイ ヤユン)

京都大学大学院・teoznanazcatl@gmail.com

キーワード：臺灣華語、中国語、閩南語、有+VP

1 はじめに

本稿の目的は、台湾で話されている漢語共通語の地域変種である台湾華語に見られる助動詞「yǒu(有)」が、どのような動詞と共起するときに、文全体がどのような時間的意味を表しうるかを明らかにすることである。この助動詞「yǒu(有)」は、漢語共通語の規範にそぐわないものとされているが、台湾華語では、口語レベルでも文章レベルでも頻繁にその使用が観察される。同様の助動詞は、閩語、客家語などをはじめとする漢語南方諸語でも広く見られる。(他の漢語共通語変種と同様に) 漢語北方方言を基盤とした台湾華語では、この助動詞が使用されているのは、漢語南方諸語に属する閩南語との長期にわたる言語接触によると考えられている (cf. Kubler 1985)¹。

台湾華語の助動詞「yǒu(有)」は、形容詞、状態動詞 (stative verb)、動態動詞 (dynamic verb) のいずれにも先行するが、本稿では「yǒu(有)」が動態動詞に先行する場合のみを扱う。助動詞「yǒu(有)」は、動態動詞 (dynamic verb) と共起した場合、文の時間的意味に寄与することがある。(1) に示す通り、「yǒu(有)」の生起によって発話時以前に起きた特定の出来事が表される (便宜上、これを過去解釈と呼ぶ)。

- (1) *Ta yǒu chī wǔcān.*²
他 有 吃 午餐。
3SG [有] 食べる 昼ご飯
‘彼は昼ごはんを食べた。’ (過去解釈)

また、(2) のように、過去の解釈に加え複数の解釈が可能な場合がある。

¹ 漢語共通語が、それまでの日本語に代わって国語として台湾に導入された 1945 年以前、台湾での閩南語話者数は全体の 7~8 割以上を占めていたと考えられる (cf. 黄 1993: 20-1)。現在は、話者数の多い順で言えば、台湾華語、閩南語、客家語、台湾オーストロネシア諸語である。前三者はいずれも漢語系の言語であるが相互理解が困難である。こうした背景のもとで形成された台湾華語は、台湾と中国のそれぞれの言語規範とも、各地域で見られる漢語共通語変種とも、音声韻・語彙・文法などさまざまな面で相違がある。助動詞「yǒu」以外の台湾華語の特異な特徴については、Kubler (1987) や有働 (2009) などを参照されたい。

² 台湾華語のローマ字表記は、便宜上「漢語拼音」を用いる。各例の漢字表記は二行目に示す。

- (2) *Ta yǒu chou yān.*
 他 有 抽 煙。
 3SG [有] 吸う 煙草
 ‘彼は煙草を吸った。’ (過去解釈)
 ‘彼は煙草を吸う。’ (習慣解釈)

以上のように、「yǒu(有)」をもつ文（以下、単に「yǒu」/「yǒu」文と表記することがある）は、共起する動詞句（が表す事象）によって、異なる時間的解釈が可能である。そのため、「yǒu」はかつてテンス・アスペクトを表す形式と考えられていた。近年では、この見方は不適切であるということが多くの研究者の間で共通の見解となっているが（3.1 節で後述）、「yǒu」の中核的な機能や用法は依然として明らかになっていない点が多い。

上記で見た時間的解釈を可能にする「yǒu」の機能とは何かという問題を解明するためには、「yǒu」をもつ文がどのような意味を持っているかを詳細に観察し、記述する必要がある。本稿では、その一環として「yǒu」文の時間的解釈に着目し、閩南語の先行研究における記述を踏まえつつ、以下の2点を示す。

- (i) まず、「yǒu」文は「過去」に加え「習慣」解釈も持つ場合があることについて、共起動詞句の *telicity* との関連から論じられることが多いが、むしろ動詞句の表す事象に対する話者の世界知識が決定的な役割を担っていることを示す。
- (ii) 次に、台湾華語の形成において多大な影響を与えた閩南語では、「yǒu」の閩南語対応形式をもつ文は、(1) (2) で見た「過去」や「習慣」のほかに、「結果状態」や「未来予定」の解釈も許しうることを示唆する記述がある。台湾華語の「yǒu」文でも、後二者の解釈が可能であることと、そのふるまいを示す。

以下、2 節では助動詞「yǒu」の統語的特徴を紹介する。3 節では、先行研究の中でも特に閩南語の対応形式に関するものを中心に概観する。4 節では、台湾華語の実例と作例を挙げながら、上記の2点について考察する。5 節では結論と今後の課題を述べる。

本稿で提示する台湾華語のデータは、断りのない限り台湾華語母語話者である筆者（30代、台北出身、閩南語能力は日常会話以下）の作例と、下記2名の話者の内省による。それぞれ、話者 A にはすべての例、話者 B には一部の例の判断を仰いだ。

表 1：調査協力者の基本情報

話者	性別	年齢	出身	閩南語能力
A	女	30代	台北	話せるが流暢ではない
B	女	20代	台中	流暢

2 助動詞「yǒu(有)」の統語的特徴について

本節では、助動詞「yǒu」の統語的特徴を紹介する。まず最初に、「yǒu」は単独で本動詞として使用されうることについて述べておきたい。(3) に示す通り、本動詞として用いられる場合の「yǒu」は、名詞的要素を後続させ、存在・所有を表す。

- (3) *Zhuō shàng yǒu yì běn shū.*
 桌 上 有 一 本 書。
 机 上 ある 1 CL 本
 ‘机の上に一冊の本がある’

一方で、助動詞として用いられる場合の「yǒu」は、基本的には動詞句の後続なしに単独で使用することができない。ただし、動詞が既知の場合は省略可能である (cf. Li & Thompson 1981: 173)。また、既に触れたように、助動詞としての「yǒu」は形容詞と状態動詞を後続させることもできる。本稿ではこの用法は扱わないが、下記の (4) に助動詞「yǒu」と形容詞との共起例を示しておく。

- (4) *Nǐ nán péngyǒu yǒu shuài yē!*
 你 男 朋友 有 帥 耶!
 2SG 男 友達 [有] ハンサム SFP
 ‘彼氏さん、かっこいいね! (悪くないね!)’

助動詞「yǒu」と同じ位置に生起可能な要素には、他に「huì(會)‘能力・可能・習慣」、*kěyǐ*(可以)‘許可」、*néng*(能)‘可能」、*kěn*(肯)‘～する意思がある」、*gǎn*(敢)‘～する勇気がある’などの、モダリティを表す助動詞がある。(5) に「huì(會)」の用例を示す。

- (5) *Nǐ zhǐ chuān zhèyàng huì gǎnmào o!*
 你 只 穿 這樣 會 感冒 喔!
 2SG ただ 着る この様 (可能) 風邪を引く SFP
 ‘これだけを着るなんて風邪を引くよ!’

「yǒu」を含めた台湾華語の助動詞に共通する統語的特徴として、次の 4 点を挙げるができる。第一に、台湾華語では、動詞句を後続させることができる一部の動詞や準助動詞は、後続動詞 (あるいは形容詞) と異なる主語をとることができるが、助動詞はそれができる。第二に、副詞や前置詞句が、助動詞の前や助動詞と動詞の間に生起しうる。(6) に「yǒu」と動詞の間に前置詞句が生起している例を示す。

- (6) *Wǒ jīntiān yǒu gēn tā chūqù chīfàn.*
 我 今天 有 跟 他 出去 吃飯。
 1SG 今日 [有] 共に 3SG 出かける 食事する
 ‘今日は彼と一緒に外食をした。’

第三に、助動詞を用いた場合の疑問文の作り方については、動詞・形容詞と同様に、肯定形と否定形を並べて極性疑問文を形成できる。返答の際は、(a) 助動詞のみの形、(b) (主語+) 助動詞+動詞の形、(c) 主語+助動詞のみの形、という 3 つのパターンが可能である。(7) に「yǒu」を用いた極性疑問文とそれに対する返答文 (パターン a+b) の例を挙げる。

- (7) Q: *Nǐ jīntiān yǒu méi yǒu chī zǎocān?*
 你 今天 有 沒 有 吃 早餐?
 2SG 今日 [有] NEG [有] 食べる 朝食
 ‘(あなたは) 今日朝ごはん食べた?’
 A: *Yǒu a. (Wǒ) yǒu chī.*
 有 啊。(我) 有 吃。
 [有] SFP 1SG [有] 食べる
 ‘うん。(私) 食べた。’

また、極性疑問文は疑問助詞を文末に付加することによっても形成することができる。(8) はその例である。

- (8) *Nǐ jīntiān yǒu chī zǎocān ma?*
 你 今天 有 吃 早餐 嗎?
 3SG 今日 [有] 食べる 朝食 Q
 ‘(あなたは) 今日朝ごはん食べた?’

最後に、助動詞とアスペクト形式の共起関係について述べる。助動詞自体はアスペクト形式を伴うことはできないが、後続動詞の前には「zài(在)‘進行」、後には「le(了)‘完結」、
 「guò(過)‘経験」、
 「zhe(著)‘持続」といったアスペクト形式が生起しうる。ただし、これらの 4 形式全てと共起可能なのは、「yǒu」と「huì(會)」のみである。これら以外の助動詞は、4 つのうちの「le(了)」と「zhe(著)」としか共起しない。(9) の通り、「yǒu」とアスペクト形式が共起した場合、文全体の時間的意味は、基本的にはアスペクト形式によって決まる³。本稿の目的から外れるため、本稿では、アスペクト形式が現れる「yǒu」文については扱わない。

³ 「yǒu」と進行を表す「zài(在)」と共起する場合、文は進行のほかにある種の「習慣」も表すことができる。この現象については今後の課題としたい。

- (9) *Xiǎoyīng yǒu qù guò rìběn.*
 小英 有 去 過 日本。
 (人名) [有] 行く EXP (国名)
 ‘英ちゃんは日本に行ったことがある。’

3 先行研究

本節では、台湾閩南語（以下、閩南語）を対象とした研究を中心に紹介するが、台湾客家語（以下、客家語）と台湾華語を対象とした研究にも触れる。本稿が問題とする助動詞の音形がこの 3 つの言語で異なるため、以降、台湾華語の当該形式のみを指す場合は「yǒu」と表記、閩南語や客家語の当該形式を指す場合は「有」と表記する。

以下、3.1 節では、先行研究で提案されている助動詞「yǒu/有」の意味機能を確認し、3.2 節では「yǒu/有」文の時間的解釈に関する先行研究を紹介する。

3.1 「yǒu」または「有」の意味機能

本稿では、「yǒu」または「有」の中核的な意味機能については考察しないが、これまで先行研究では、以下のようなことが指摘されている。

「yǒu/有」は、かつてテンス・アスペクトを示す機能があるとされていたが、「yǒu/有」が現在と過去のどちらの文脈にも現れるうえに、すべてのアスペクト形式と共起できることから、その説が退けられ、現在は *realis marker* 説が有力のようである (cf. 曹 1998、遠藤 2014、蔡 2010 など)。しかし、鄭 (2019) で指摘されているように、「yǒu/有」が条件節や極性疑問文に生起しうることを考慮すると、*realis marker* 説にも再考の余地があると考えられる。

「yǒu/有」の意味については、これまでに多くの見解があるが、代表的なものとしては「ある状態・出来事の確かな存在あるいは発生を表す」(閩南語研究：曹 1998: 329) や、「已然」(台湾華語研究：蔡 2010) や、「話者がある事態が実現済み (*realis*) であると判断していることを表す」(客家語研究：遠藤 2014: 89) などが挙げられる。

以上が、「yǒu/有」の意味機能に関する先行研究の要点である。次節では閩南語・台湾華語・客家語の先行研究で記述されている「有」文の時間的解釈について紹介する。

3.2 先行研究で記述されている「有」文の時間的解釈

3.2.1 閩南語を対象とした研究

ここでは、主に中嶋 (1979)、村上 (1990)、曹 (1998)、Wu & Zheng (2018) の記述を取り上げる。閩南語の「有」が動態動詞と共起したときに文全体で可能な解釈について、4 つの研究の記述を表 2 にまとめた。また、それぞれの研究が主張する「有」の機能も最後の列に示しておく。

表 2: 先行研究における閩南語「有」文の時間的解釈

先行研究	解釈 1	解釈 2	解釈 3	「有」の機能
中嶋 (1979)	現在あるいは過去の 長期間の習慣的動作	現在あるいは過去 の継続的状态	—	aspect (imperfective)
村上 (1990)	規則的反復	過去性	未来	存在動詞
曹 (1998)	確実に発生・実現 (完整貌)	習慣	—	modality (realis)
Wu & Zheng (2018)	Past reading	Characterizing reading (a characteristic or a habit of the subjects)	—	epistemic necessity modal

それぞれの研究での用語は異なるが、おおむね「過去」「習慣」「(結果)状態」「未来(予定)」の4つの解釈にまとめられよう。以下、それぞれについて詳しく見ていく。

■過去解釈

まず、過去解釈について述べる。この解釈についての記述は、初期の辞書から最近の辞書まで一貫して確認できる。例えば、台湾総督府 (1931) では、(10) の例とともに「過去」という意味が記されている。また、2011 年に正式公開されたオンライン辞書「教育部臺灣閩南語常用詞辭典」でも、「有」の一つの意味に「過去に発生したことを表す」がある。

- (10) *lí ū khi --bô?*⁴
 2SG [有] 行く NEG/Q
 ‘汝 (おまへ) は行ったか?’

(台湾総督府 1931: 107)

曹 (1998) の記述によれば、過去解釈は、ほとんどどのような動態動詞が用いられても可能である。(10) では変化動詞が用いられているが、下記に動作動詞が用いられている「有」文の例も示しておく。ただし、非限界的動詞が用いられている場合について、曹 (1998: 322-3) は「事態が発話時以前に発生・実現したことを表すが、必ずしも事態が完成・終了したことを意味しない」と述べている ((12) を参照)。

⁴ 閩南語の例は、グロスとローマ字表記を統一するため、一部改変している。ローマ字表記は「臺灣閩南語羅馬字拼音方案」に沿って行う。断りのない限り、日本語訳あるいは英語訳は引用先そのままである。なお、引用先では漢字表記となっているものについては、筆者が「教育部臺灣閩南語常用詞辭典」に基づいてローマ字表記を付した。

- (11) *Guá ū siá tsit pún tshéh.*
 1SG [有] 書く 1 CL 本
 ‘I indeed wrote a book.’

(Wu & Zheng 2018: 414)

- (12) *Tâi-tâi guā-bûn hē tsit hâk-kî khai-sí ā ū khui Tâi-gí khò.*
 (学校名) 外国語 学科 この 学期 開始 も [有] 開く 台湾語 授業
 ‘台湾大学の外国語学科は今学期から台湾語授業も開講した (している)’

(曹 1998: 322、日本語訳は筆者)

■習慣解釈

次に、4つの先行研究に共通して見られる習慣解釈について述べる。習慣解釈は過去解釈に次いで先行研究で多く取り上げられてきた解釈である。(13)の通り、1節に示した台湾華語の例(2)と同様に、閩南語の「有」文でも過去解釈のほかに習慣解釈も可能な場合がある。

- (13) *I ū tsiah gû-bah.*
 3SG [有] 食べる 牛肉
 ‘He is a beef-eater.’ (習慣解釈)
 ‘He ate the beef.’ (過去解釈)

(曹 1998: 326)

どのような場合に「有」文が習慣解釈を許すかについては、「有」に後続する動詞句の *telicity* との関連から論じられることが多い。例えば、Wu & Zheng (2018) では、「有」文が過去と習慣のどちらとも解釈されうるのは、動詞句の表す事態が *dynamic* かつ *atelic* な場合であると主張されている。ただし、(14)の通り、動詞句の表す事態が *dynamic* で *atelic* であっても、それが習慣らしくないものの場合、過去としか解釈されず、習慣を表すためには頻度副詞などの助けが必要である、とも述べられている。

- (14) a. *I ū mā sian-sinn.*
 3SG [有] 罵る 先生
 ‘He scolded the/a teacher.’
 b. *I ū tiānn-tiānn mā sian-sin.*
 3SG [有] よく 罵る 先生
 ‘He often scolds the/a teacher.’

(Wu & Zheng 2018: 417)

しかし、Wu & Zheng (2018) の主張には少なくとも二つの問題点がある。一つは、(14a) の例の存在だけでも、動詞句の *telicity* は「習慣」解釈を予測する上では有効ではないことが明らかであるということである。さらに 4.1 節で詳述するように *telic* な動詞句をもつ「有」文が習慣解釈を許す例が存在する。もう一つは、頻度副詞によって表される「習慣」と、そういった要素を付加しなくても読み取れる「習慣」を区別していないということである。これらを区別する必要性についても、後の 4.1 節で詳述する。

■結果状態解釈と未来予定解釈

最後に「結果状態」と「未来予定」について述べる。これまで見てきた過去解釈と習慣解釈とは異なり、この二つの解釈に言及した研究はわずかしかない。

まずは結果状態解釈の例を示す。中嶋 (1979) では、「有」は動詞の相を継続性のある静止相にシフトさせる機能を持つと主張されており、(15) は「現在あるいは過去の一定期間にわたる状態」を表すとされている。

(15) a. *I ũ tŋg--lái --bó?*
 3SG [有] 帰ってくる NEG/Q
 ‘彼(彼女)は 帰ってきている／帰ってきていた か?’

b. *I ũ kiat-hun --bó?*
 3SG [有] 結婚 NEG/Q
 ‘彼(あるいは彼女)は 結婚している／結婚していた のですか?’

(中嶋 1979: 79-80)

中嶋 (1979) の説明やそれぞれの例に付された日本語訳を参考にすると中嶋 (1979) の言う「状態」とは「結果状態」のことと考えられる。中嶋 (1979) は動詞の種類についての言及はないが、そこで挙げられている同様の例は、すべて変化局面をもつ動詞である。

次に未来予定解釈の例を示す。このような例について、村上 (1990) は「今までも規則的反复の動作が行われていたというような条件があれば、“未来”の表現が可能になる」と説明している。

(16) *I bŋn-á-tsài ũ lái.*
 3SG 明日 [有] 来る
 ‘彼(彼女)は明日来ることになっている。’

(村上 1990: 6、日本語訳は (17) を参考した)

同様の例は王 (1957) でも見られるが、これについての詳細な説明はない。その例を (17) に示す。王 (1957) が (17) に与えた例を考慮すると、村上 (1990) の言う「未来」とは「未来予定」のことと考えたほうが適切かもしれない。そして、二例とも移動に関する動

詞が用いられていることに注目されたい。台湾華語でも「yǒu」文で未来予定を述べられるが、(16) (17) のような例は容認されない。これについては 4.3 節で後述する。

- (17) *I bîn-á-tsài ū lái.*
 3SG 明日 [有] 来る
 ‘彼（彼女）は明日来ることになっている。’

(王 1957: 295)

3.2.2 客家語・台湾華語を対象とした研究

本節では、客家語の研究として遠藤 (2014) の記述、台湾華語の研究として蔡 (2010) の記述をそれぞれ紹介する。

遠藤 (2014) では、台湾客家語の海陸方言の「有」が発話時以前に起きた事態を表す場合（過去解釈）と、未来時間を示す副詞との共起可否について述べられている。(18) の通り、客家語海陸方言の「有」は、認識モダリティを示す要素との共起があれば、未来時間を示す副詞と共起可能のようである。習慣解釈については、「毎日」のような頻度副詞と共起できるとしか述べられておらず、(2) (13) のような用法があるかどうかは不明である。

- (18) a. **thien53koŋ53ŋit5 lia55 kai21 ji55tsiet5 ki55 ziu53 to21 thoi55pet5*
 明日 これ CL とき 3SG [有] 着く (地名)
 b. *thien53koŋ53ŋit5 lia55 kai21 ji55tsiet5 ki55 zin21koi53 ziu53 to21 thoi55pet5*
 明日 これ CL とき 3SG はずだ [有] 着く (地名)
 ‘明日の今ごろ彼／彼女は台北に着いているはずだ。’

(遠藤 2014: 99、グロス一部改変)

最後に、本稿の対象言語である台湾華語を扱った先行研究を取り上げる。表 3 にまとめるように、蔡 (2010) は、台湾華語の「yǒu」文の時間的解釈として「過去」と「習慣」を挙げている。Wu & Zheng (2018) と同様に、ここでも動詞句の telicity の観点から説明がなされている。

表 3 : 先行研究における「yǒu」文の時間的解釈 (蔡 2010: 70-1)

動詞句の指し示す事態	「yǒu」をもつ文の時間的解釈
終結点を伴う動的事態 (Accomplishment, Achievement)	a. 発話時以前に動作が発生した (そして、完成あるいは終了した)
終結点を伴わない動的事態 (Activity)	b. 習慣、断続的な持続 (文脈があれば a の解釈を可能)

また、蔡 (2010: 89) では、「yǒu」文では未来を示す時間副詞を用いられないという記述があったが、これは本稿 4.3 節で提示する言語事実に即さないものとなっている。そして、一部の閩南語研究で記述されている結果状態解釈については触れられていない。

3.2.3 小括

以上、閩南語・台湾華語・客家語の先行研究で記述された「yǒu/有」文の時間的解釈を「過去」「習慣」「結果状態」「未来予定」の 4 つに分けて見てきた。上記の先行研究に共通していた記述は、「過去」と「習慣」の解釈についてである。そして、どのような場合に「yǒu/有」文が「習慣」と解釈されうるかに関しては、動詞句の *telicity* の観点から説明されていた。閩南語と客家語では、「有」文の可能な解釈として、さらに「結果状態」と「未来予定」も挙げられているが、台湾華語の先行研究では後者については不可とされており、前者については言及されていなかった。

また、前述から、「yǒu/有」文の基本的な解釈は「過去」と言っても良いと考えられる。そのため、次の 4 節では「過去」以外に、「yǒu/有」が表し得る「習慣」「結果状態」「未来予定」に着目し、「過去」を除くこれら 3 つを中心とした考察を行う。

4 台湾華語の「yǒu」文の時間的解釈について

4.1 習慣解釈をめぐって

4.1 節では、台湾華語の「yǒu」文が「どのような場合に習慣と解釈されうるか」について、先行研究の主張を問題視しながら考察する。

4.1.1 二種類の「習慣」：「反復」と「属性」

まず、本稿で扱う「yǒu」文の「習慣」解釈について述べる。下記 (19) のような例は、過去だけでなく習慣も表しうる「yǒu」文の典型的な例として、多くの先行研究で取り上げられてきた (蔡 2010、cf. 曹 1998、Wu & Zheng 2018 など)。1 節の (2) も同様の例である。

- (19) *Tā yǒu chī niúròu.*
 他 有 吃 牛肉。
 3SG [有] 食べる 牛肉
 ‘彼は牛肉を食べる。’ (習慣解釈)
 ‘彼は牛肉を食べた。’ (過去解釈)

そして、(20a) のように頻度を表す量化副詞と共起している例も、先行研究では習慣を表すとされている (cf. Wu & Zheng 2018、蔡 2010)。しかし、このような例は、頻度副詞を外すと、(20b) のように過去解釈に限られる場合がある。なお、(20) は、3.2 節に示した Wu & Zheng (2018) の閩南語の例 (14) に対応している。

(20) a. *Tā yǒu chángcháng mà lǎoshī.* (= (14b) に相当する台湾華語の例)
 他 有 常常 罵 老師。
 3SG [有] よく 罵る 先生
 ‘彼はよく先生を罵る。’ (習慣解釈)

b. *Tā yǒu mà lǎoshī.* (= (14a) に相当する台湾華語の例)
 他 有 罵 老師。
 3SG [有] 罵る 先生
 ‘*彼は先生を罵る。’
 ‘彼は先生を罵った。’ (過去解釈)

つまり、先行研究は (19) と (20a) のどちらも「習慣」を表すとしているが、この二例で表される「習慣」の性質は異なると考えられる。両者の違いは、下記の (21) で確認できる。(21) では、(19) (20a) に事態の反復を否定するような文脈を後続させている。(21a) は自然であるのに対し、頻度副詞が用いられている (21b) は容認不可である。

(21) a. *Wǒ yǒu chī niúròu. Dànshì jīběn shàng bù chī.*
 我 有 吃 牛肉。 但是 基本 上 不 吃。
 1SG [有] 食べる 牛肉 然し 基本 上 NEG 食べる
 ‘私は牛肉を食べるが、基本的には食べない。’

b. *??Tā yǒu chángcháng mà lǎoshī. Dànshì jīběn shàng bú mà.*
 ???他 有 常常 罵 老師。 但是 基本 上 不 罵。
 3SG [有] よく 罵る 先生 然し 基本 上 NEG 罵る
 ‘彼はよく先生を罵るが、基本的には罵らない。’

(21) から、頻度副詞を伴わない「yǒu」文で表されている「習慣」は、事態の複数事例 (instance) の存在を示唆するが、「事態の規則的な多数回生起 (つまり、一般語彙として理解される習慣)」を含意しないことが分かる。

このように、先行研究で用いられてきた「習慣」という用語には、次のような区別すべき二種類の異なる概念が含まれていると考えられる。まず、頻度副詞の付加によって表される (20a) の「習慣」は「異なる複数の場面にわたる事態の(規則的な)繰り返し (反復)」と言い換えられよう。それに対し、頻度副詞を必要としない (19) や (2) の「習慣」は「異なる複数の場面にわたってどの時点においても確認できる主体の特徴や行動パターン (属性)」として記述したほうが適切と思われる。反復の叙述では、個々の事例が文の叙述する対象となるのに対し、属性の叙述では、実際の事例に基づき主体の一般化や特徴付けが行われるが、具体的な個別事例は直接言及されない。

本節では、頻度副詞が生起しない「yǒu」文が表す「習慣」は属性と記述することができ、反復という意味での「習慣」とは区別されるべきものであるということを指摘した。次節

より、頻度副詞が生起する「yǒu」文を議論の対象外とし、属性解釈をもつ「yǒu」文を議論の中心とする。

4.1.2 「yǒu」文の属性解釈と動詞句の telicity

既に 3.2 節で述べたように、先行研究は、属性解釈が持ちうるのは atelic な動詞句が用いられている「yǒu」文であると主張していた (Wu & Zheng 2018、蔡 2010)。下記の二例だけを見れば、確かに atelic な動詞句をもつ (22) は属性解釈を許すのに対し、telic な動詞句をもつ (23) は属性解釈を許さない。

- (22) *Ta yǒu chou yān.*
 他 有 抽 煙。
 3SG [有] 吸う 煙草
 ‘彼は煙草を吸う (人だ) 。’ (属性解釈)
 ‘彼は煙草を吸った。’ (過去解釈)

- (23) *Ta yǒu chou yì gēn yān.*
 他 有 抽 一 根 煙。
 3SG [有] 吸う 1 CL 煙草
 ‘*彼は一本の煙草を吸う (人だ) 。’
 ‘彼は一本の煙草を吸った。’ (過去解釈)

しかし、Wu & Zheng (2018) 自身も指摘している通り、動詞句が atelic であることは、必ずしも「yǒu」文の属性解釈を保証できない ((14) を参照)。さらに、(24) に示す通り、telic な動詞句をもつにも関わらず属性解釈が可能な例が存在する。なお、この例は異なる文脈を設定すれば、発話時以前に起きた特定の出来事を尋ねる解釈 (過去解釈) も可能である。

- (24) [Context: 自分がどれほどの声優ファンかという話題の中で聞かれて]⁵
Nà nǐ yǒu mǎi shēngyōu zázhì ma?
 那 你 有 買 聲優 雜誌 嗎?
 では 2SG [有] 買う 声優 雜誌 Q
 ‘じゃ、あなたは声優雑誌を買う (人) ?’

⁵ 調査協力者 B はこの例を容認しなかったが、たまたまその場に居合わせた別の母語話者が容認可能とした。調査協力者 B が容認不可とした理由については、(声優) ファンの生態に対する理解度が影響しているのではないかと推測している。なお、次のホームページに、似た文脈で使用されている実例が見られる：<https://www.ptt.cc/bbs/seiyuu/M.1097779316.A.F66.html>。そこでは「声優雑誌を購読している」という日本語を「有買聲優雜誌嗎？」に訳している。

そして、次に示す (25) も、telic な動詞句が用いられているが、特定の出来事を述べるのではないことから属性を表すことが分かる。

- (25) *Liùsì hào gōngchē yǒu dào táiběi chēzhàn ma?*⁶
 644 號 公車 有 到 台北 車站 嗎?
 644 号 バス [有] 至る (地名) 駅 Q
 ‘644号バスは、台北駅に行く(バス)?’

以上のことを考慮すると、「yǒu」文で属性解釈が可能となる要因を動詞句の telicity に求めることは適切ではないと言える。本稿では、「yǒu」文の属性解釈の成立可否には、動詞句の表す事態の telicity ではなく、その事態が「異なる複数場面での生起が想定されやすいものかどうか」が関わっていると考えられる。

ここまで見てきた属性解釈が可能な例は、動詞句の表す事態はすべて「目的語（位置に現れる語）が指し示すものに（異なる場面にまたがって）何度も働きかけられる」という性質をもつものである。このような性質こそが、ある事態を「主体の特徴や行動パターン」として叙述することを可能にしていると考えられる。例えば、(25) の「特定の駅に行く」という事態は、異なる場面で何度も起こり得るものである。同様に、(19) (22) (24) の動詞句は、いずれも「○○という種類のもの⁷への働きかけ（食べる・吸う・買う）」という何度も起こり得る事態を表している。このように考えると、(23) が過去解釈しか持たないのは、「ある特定の一本の煙草を吸う」という事態は、通常は、何度も起こることができないため（吸い終わった煙草をもう一度吸うことができないため）ということになる。

ただし、複数場面での生起が可能であっても非日常性、偶発性が高い事態の場合（例えば「Mac を買う」「友人の家に行く」など）、過去解釈が優先され、属性と解釈されにくいことがある。それは、主体の行動パターンとして叙述する文脈より、具体的な特定の出来事として叙述する文脈のほうが想起されやすいためであると考えられる。Wu & Zheng (2018) で取り上げた (14a) や (20b) もこのような例に該当する。

4.2 結果状態解釈をめぐって

閩南語の「有」文では、変化動詞が用いられる場合、結果状態が表されることが報告されているが（中嶋 1979）、台湾華語の「yǒu」文でもそのような解釈が可能かどうかに関しては、従来ほとんど議論されてこなかった。この節では、「yǒu」文の結果状態解釈について考察し、

⁶ この例では過去解釈が難しいが、それはバスに関する話者の世界知識に起因すると思われる。

⁷ (19) (22) (24) の目的語名詞句はいずれも裸の形をとっている。漢語（共通語）の裸名詞は、特定の個体を問題にせず、各々の個体が属するより上位概念的なカテゴリーとしての「類 (kind)」を指示すると言われている (cf. 刘 2002)。また、照応的に用いられる場合は、定名詞句として働く（大河内 1985: 8）。一方で、後述する (23) で見る「(数詞+)類別詞」がついた名詞句は、典型的には個別的・具体的な特定「個体 (specific individual)」を指示する (cf. 大河内 1985)。

「*yǒu*」文は、共起する変化動詞によって、結果状態を表すと考えられる場合があるものの、過去解釈しか持たないと見るべき場合が多い」ことを示していく。

まず、言語事実として、変化動詞が用いられている「*yǒu*」文は、変化の結果としての状態が存在している状況にも用いられるし、結果状態が存在していない状況にも用いられる。このことは、(26) の a の質問の答えとして、b 文も c 文も用いられることから分かる。

- (26) a. Q : *Nimen lǎobǎn yǒu lái ma?*
 你們 老闆 有 來 嗎?
 2PL ボス [有] 来る Q
 ‘あなたたちの店長は来た (／来ている) ?’
- b. A : *Yǒu a. Yǒu lái a. Wǒ qù jiào tā.*
 有 啊。有 來 啊。我 去 叫 他。
 [有] SFP [有] 来る SFP 1SG 行く 呼ぶ 3SG
 ‘はい。来た (／来ている) よ。呼んであげるね。’
- c. A' : *Yǒu lái a. Dàn yǐjīng zǒu le ye.*
 有 來 啊。但 已經 走 了 耶。
 [有] 来る SFP 然し もう 離れる PFV SFP
 ‘はい。来たよ。しかしもう帰ったんだよ。’

仮に、(26b) のような場合の「*yǒu*」文が、過去の変化ではなく結果状態を表すのであれば、「まだ」を表す「*hái*(還)」との共起は許されるはずである⁸が、(27) の通り、実際には共起できないことから、少なくとも「来る」という動詞を用いた「*yǒu*」文は、結果状態解釈を持たないと考えられる。なお、(27) の容認性は主体を人間に変えても変わらない。

- (27) #*Xiànzài táifēng hái yǒu lái. Suǒyǐ bù néng chūmén.*
 #現在 颱風 還 有 來。(所以 不 能 出門。)
 今 台風 まだ [有] 来る だから NEG (可能) 出かける
 ‘(intended for) 今はまだ台風が来ている。(だから外には出かけられない。)’⁹

(28) から (31) には、他の変化動詞を用いた「*yǒu*」文の例を示す。

⁸ Nedjalkov & Jaxontov (1988: 15) では、「まだ」を表す副詞は、一時的状態を表す結果相 (resultative) と自由に共起できることが指摘されている。

⁹ 「今でも来ることがある」のような反復の意味ならば容認可能である。このことは次に述べる (28b) も同様である。

- (28) a. *Xiǎofàn yǒu qù gōngsī.*
 小范 有 去 公司。
 (人名) [有] 行く 会社
 ‘彼は会社に行った。’
- b. #*Xiǎofàn (xiànzài) hái yǒu qù gōngsī.*
 #小范 (現在) 還 有 去 公司。
 (人名) 今 まだ [有] 行く 会社
 ‘(intended for) 彼は (今) まだ会社に行っている。(そこにいる)’
- (29) a. *Tāmen yǒu jiéhūn.*
 他們 有 結婚。
 3PL [有] 結婚
 ‘彼らは結婚した (／結婚している) 。”
- b. *??tāmen (xiànzài) hái yǒu jiéhūn.*
 ???他們 (現在) 還 有 結婚。
 3PL 今 まだ [有] 結婚
 ‘(intended for) 彼らは (今) まだ結婚している。’
- (30) a. *Sùshè chuānghù yǒu pò ma?*
 宿舍 窗戶 有 破 嗎?
 寮 窓 [有] 破れる/割れる Q
 ‘寮の窓は割れた (／割れている) ?’
- b. *?Sùshè chuānghù (xiànzài) hái yǒu pò ma?*
 ?宿舍 窗戶 (現在) 還 有 破 嗎?
 寮 窓 今 まだ [有] 破れる/割れる Q
 ‘(intended for) 寮の窓は (今) まだ割れている?’
- (31) a. *Yángmíngshān shàngmiàn de huā yǒu kāi o.*
 陽明山 上面 的 花 有 開 喔。
 (地名) 上 の 花 [有] 咲く SFP
 ‘陽明山の花は咲いた (／咲いている) よ。’
- b. *Yángmíngshān shàngmiàn de huā (xiànzài) hái yǒu kāi o.*
 陽明山 上面 的 花 (現在) 還 有 開 喔。
 (地名) 上 の 花 今 まだ [有] 咲く SFP
 ‘陽明山の花は (今) まだ咲いているよ。’

上記各例の b 文から、共起する変化動詞によって、「yǒu」文と「hái(還)‘まだ’」との共起のしやすさが少しずつ異なることが分かる。まず、この共起が最も不自然と判断されているのは「来る」と「行く」のような移動に関する動詞が用いられた場合である。一方で、「hái(還)‘まだ’」との共起が自然な表現として容認される例は、現時点では「咲く」という動詞を用いた 1 例のみで確認できた。そして、(30b) に示した「破れる／割れる」という動詞を用いた「yǒu」文は、「hái(還)‘まだ’」とはやや共起しにくいことから、過去変化のほうがより自然な解釈と考えられるが、(32) の通り、過去の特定時点を表す表現と共起する場合、過去（変化）解釈も、結果状態解釈も許しうる。

(32) a. [Context: バスの事故で鞆をなくした乗客へのインタビュー]

Nǐ fāxiàn de shíhòu, nǐ chuānghù yǒu pòdiào ma?
 你 發 現 的 時 候, 你 窗 戶 有 破 掉 嗎?
 2SG 気づく の 時 2SG 窓 [有] 割れてしまう Q

‘あなたが（鞆がなくなっていたと）気づいた時、（横）の窓は割れていたか?’
 （結果状態解釈の例）

(<https://www.youtube.com/watch?v=ZO81-lSe5gk>より)

2020年2月29日最終確認)

b. [Context: 心理学的実験において事故の映像を見た後に聞かれた質問]

Liǎng liàng chē zhuàngshàng shí, dǎngfēngbōli yǒu méi yǒu pò?
 兩 輛 車 撞 上 時, 擋 風 玻 璃 有 沒 有 破 ?
 2 CL 車 ぶつかる 時 フロントガラス [有] NEG [有] 割れる

‘二台の車が衝突した時、フロントガラスは割れたか?’

（過去解釈の例）

(https://www.books.com.tw/web/sys_serialtext/?item=0010776847&page=2より)

2020年2月29日最終確認)

(32a) は、主体が気づいた時に、すでに窓が割れている状態だったかを尋ねていると解釈されることから、結果状態を表すと言える。それに対し、(32b) は、その時に窓が破れていない状態から割れた状態になったかを尋ねていることから、過去の変化を表すことがわかる。つまり、(32b) には、車が衝突した時にすでに窓が割れている状態だったかを尋ねている、とは解釈されないであろう。

以上から、台湾華語の「yǒu」文では、変化動詞が用いられている場合、結果状態解釈が可能な場合があるということが分かる。ただし、変化動詞によってその解釈のしやすさは一律ではない。ここで挙げた例を見る限り、「yǒu」文では、「咲く」「割れる／破れる」のようにモノの状態変化を表す動詞が用いられる場合、結果状態解釈を許しやすいかもしれない。

4.3 未来予定解釈をめぐって

この節では「未来の予定」を述べる「yǒu」文について記述する。閩南語と客家語の「有」文には未来を示す副詞が生起可能ということは、先行研究で報告されている(3.2節を参照)。しかし管見の限り、台湾華語の「yǒu」文に関しては、ほとんど記述が見られない。

台湾華語では、未来に起きる事態を述べるのに助動詞「hui」などを用いるのが一般的であるが、以下の通り、「yǒu」を用いて未来の予定を述べることがある。

(33) *Míngtiān yǒu fang táifēng jià¹⁰ ma?*

明天 有 放 颱風 假 嗎?

明日 [有] 放す 台風 休み Q

‘明日は台風休みになっている?’

(34) *Lín yīshēng hòutiān yǒu kànzhěn ma?*

林 醫生 後天 有 看診 嗎?

(姓) 医者 明後日 [有] 診察 Q

‘林先生は明後日は診察しますか?’

(35) *Qǐng wèn míngtiān qù chōngshéng de bānjī yǒu fēi ma?*

請 問 明天 去 沖繩 的 班機 有 飛 嗎?

請う 問う 明日 行く (地名) の フライト [有] 飛ぶ Q

‘すみません。明日の沖繩行きのフライトは飛びますか?’

上記の例の他に、「kāi(開)‘開く’」という動詞を用いて店の営業予定を、「chūlái(出來)‘出る’」という動詞を用いて屋台の出店予定などを述べる際にも「yǒu」文がよく用いられる。

「yǒu」文によって述べられる未来の予定の特徴として、i.) カレンダー上の既決事項であること、ii.) 話者や聞き手などの意思によって容易には変更されないことが挙げられる。よって、「yǒu」文で述べられている未来の予定は個人に関わる事柄よりも会社、公的な機関などの団体に関わる事柄の方が多い。したがって(36)の通り、実現が不確実の事態や個人的な予定を述べる場合、「yǒu」文は用いられない。この2つの特徴は、どちらも閩南語と客家語の先行研究で見た記述とは異なる。さらに、(36b)が容認されないことから、閩南語・客家語と台湾華語では、「yǒu/有」文によって述べられる未来予定の範囲や、共起しやすい動詞が異なるかもしれない。

¹⁰ 台湾では、一定以上に強い台風が通過すると予想される際、政府機関の判断により、台風の通過地区が休業休校となる制度がある。この休暇のことを一般には「颱風假(台風休み)」と呼ばれている。

(36) a. ^{??}*Míngtiān yǒu xià yǔ ma?*

^{??}明天 有 下 雨 嗎?

明日 [有] 降る 雨 Q

‘(intended for) 明日、雨が降る?’

b. ^{???}*Lǎobǎn míngtiān yǒu lái gōngsī ma?*

^{???}老闆 明天 有 來 公司 嗎?

ボス 明日 [有] 来る 会社 Q

‘(intended for) 社長は明日、会社に来ることになっている?’

この節では、台湾華語では、発話時において確認できている未来の予定を述べるのに、「yǒu」文を用いる場合があることを見た。そして、「yǒu」文で述べられる未来の予定には、閩南語・客家語の先行研究の記述とは異なる特徴が見られることを示した。

5 結論と課題

本稿では、閩南語の先行研究で記述された「有」の時間的解釈のうちの「習慣」「結果状態」「未来予定」を中心として、先行研究の記述を参考に、台湾華語の「yǒu」文の時間的解釈について考察した。本稿の結論は次の通りである。

まず、「yǒu」文の習慣解釈について、頻度副詞が現れず「yǒu」のみで表される習慣は「属性」である。したがって本稿では、頻度副詞が現れる「yǒu」文で表される「反復」としての習慣とは区別するべきであると考えた。また本稿では、「yǒu」文で属性解釈が可能となる要因を動詞句の *telicity* に求めた先行研究の主張に対する反例を提示した。さらに、属性解釈の成立可否には、動詞句の表す事態が「異なる複数場面での生起が想定されやすいものかどうか」が関わっているということを主張する。

次に記述に関して、結果状態解釈と未来予定解釈について、台湾華語の先行研究では記述が見られなかったが、本稿では、台湾華語の「yǒu」文においてもこの二つの解釈が可能であることを、具体例とともに記述した。さらに、未来解釈の「yǒu」文の使用について、閩南語・客家語の記述にはなかった特徴や使用条件があることを記述した。

最後に、本稿では、「yǒu」をもつ文のみを扱ったが、なかには「yǒu」を外しても意味が大きく変わらないものと、意味を大きく変えずに他の表現と言い換えられるものがある。後者は、「yǒu」の機能とは何かという問題に直結しているが、前者に関しては、スタイルの差の問題にも関係すると考えられる。これらの問題の解明は今後の課題としたい。

略号一覧

1: 一人称、2: 二人称、3: 三人称、CL: 類別詞、EXP: 経験、NEG: 否定詞、PFV: 完了、PL: 複数、Q: 疑問助詞、SFP: 終助詞、SG: 単数

参考文献

- 有働彰子 (2009) 「「国語」教科書の中の「台湾国語」－台湾における「国語」規範の歴史」『東アジア学会』 11: 22-33.
- 遠藤雅裕 (1956) 「南方漢語のモダリティ標識「有」について：臺灣海陸客家語を中心に」『中國文學研究』 40: 89-113.
- 大河内康憲 (1985) 「量詞の個体化機能」『中国語学』 232: 1-13.
- 鄭雅云 (2019) 「台湾華語における助動詞「有」と「了」の用法の違いについて」『日本中国語学会第 69 回全国大会予稿集』, 302-306
- 黃宣範 (1993) 『語言, 社會與族群意識』台北：文鶴出版公司.
- Kubler, Cornelius C. (1985) *The Development of Mandarin in Taiwan: A Case Study of Language Contact*. Taipei: Student Book Co. Ltd.
- Li, C. N. & Thompson, S. A. (1981) *Mandarin Chinese: A Functional Reference Grammar*. Berkeley: University of California Press.
- 刘丹青 (2002) 「汉语类指成分的语义属性和句法属性」『中国语文』 5: 411-422.
- 村上之伸 (1990) 「閩南語「有/無」と動詞の分類」『中国文化：研究と教育：漢文学会会報』 48: 1-15.
- 中嶋幹起 (1971) 「福建語における“有”“無”の語法範疇について」『アジア・アフリカ言語文化研究』 4: 75-85.
- Nedjalkov, Vladimir P. & Jaxontov, Sergej Je. (1988) The typology of resultative constructions. In Vladimir P. Nedjalkov (ed.), *Typology of resultative constructions*, 3-62. Amsterdam: John Benjamins.
- 台湾総督府 (編) (1931) 『台日大辞典 上巻』台湾総督府.
- 蔡雅雯 (2010) 「台湾華語 [有字句] 的語法及語義」政治大學華語文教學碩士學位學程學位論文.
- 曹逢甫 (1998) 「台湾閩南語中與時貌有關的語詞“有”、“Ø”和“啊”試析」『清華學報』 28-3: 299-334.
- 王育徳 (1957) 『台湾語常用語彙』東京：永和語学社.
- Wu, Jiun-Shiung & Zheng, Zhi-Ren. 2018. Toward a Unified Semantics for \bar{U} in \bar{U} + Situation in Taiwan Southern Min: A Modal-Aspectual Account. *CLSW 2018*: 408-422.

受理日 2020 年 4 月 15 日

モーラン・カドゥー語の民話「金持ちと貧乏人の息子」

藤原敬介

京都大学

主要語句：モーラン・カドゥー語、カドゥー語、民話

1 はじめに

1.1 資料について

本稿ではビルマ・ザガイン管区ピンレーブー県ではなされるモーラン・カドゥー語 (Molang Kadu: チベット・ビルマ語派ルイ語群) の民話を語釈をつけて紹介する。この民話は、ピンレーブー県のミャウツモー村で 30 代男性である KA さんから 2020 年 3 月にきかせていただいたものである。かきおこしについても、KA さんにご協力いただいた。民話には題名がついていないので、内容に即して「金持ちと貧乏人の息子」という題名を筆者がつけた^{注1}。録音には Roland 社の R-09 を使用し、16bit・44.1kHz で録音した。民話本文は 3 分 30 秒ほどである。

1.2 モーラン・カドゥー語と先行研究

モーラン・カドゥー語とは、カドゥー語 (Kadu: ISO 639-3 zkd) における三つの主要な方言のひとつである。三つの主要な方言とは、セッター・カドゥー語 (Setto Kadu)、モーラン・カドゥー語、モークワン・カドゥー語 (Mokhwang Kadu) である^{注2}。カドゥー語の研究といえば、

^{注1} 倉部慶太氏によると、この民話と類似した民話がビルマ・カチン州の諸民族のあいだでいられている。たとえばジンポー語 (Jingpho: ISO 639-3 kac) では “Jahkrai ma hte Lalaw ma” 「孤児といじめっ子」という題名であり、非常に有名な民話であるとのことである。両者の類似点は以下のとおりであるという。

- 木の上に金持ち (カチンではいじめっ子たち) が、木の下に貧乏人 (カチンでは孤児) が罾をしかけた点。
- 孤児の罾に鹿がかかった点 (カチンの民話ではいじめっ子の罾には鳥やオオサイチョウがかかったとされる)。
- いじめっ子が先に来て木の上の罾に鹿を付け替えた点。
- 裁判官 (カチンでは裁判官・うさぎ・ふくろうなどいくつかの変種がある) が遅れてきて、来る途中で砂地が燃えているのを見たと言った点。
- 砂地が燃えるのはありえないと言った人々に対して、木の上に鹿がかかるのはありえないと言り返した点。

このジンポー語の民話は、オーストラリアの危機文化アーカイブ PARADISEC にある Kurabe [2013] のなかで KK1-0001 として公開されており、音声、書き起こし、英語による概要が参照可能である。また、音声と書き起こしのみであるけれども、KK1-0042、KK1-0086、KK1-0095、KK1-0261、KK1-0372 にも同様の民話が公開されている [倉部慶太直談・2019-04-03]。

^{注2} セッター・カドゥー語については、さらにセッター・カドゥー語とモーテイッ・カドゥー語 (Moteik Kadu) とにわけることができる。ただし、モーテイッ・カドゥー語については、まだ筆者の手元にまとまった資料がない。モーラン・カドゥー語については、さらにモーラン・カドゥー語とモーカー・カドゥー語 (Mokha Kadu) とにわけることができる。両者は一部の語彙や音対応に若干の相違があるけれども、おおむね相互理解可能である。

実質的にはセッター・カドゥー語の研究であり、初期の報告である Houghton [1893] や Brown [1920]、Grierson [1921]、文法を包括的に記述した Sangdong [2012]、音韻論をあつかった藤原 [2013] と Khin Moe Moe [2014] などがある。モークワン・カドゥー語については、ガナン語 (Ganan: ISO 639-3 zkn) をふくむカドゥー諸語 (Kadu languages) における位置を考察した藤原 [2015] や、モークワン・カドゥー語東部方言の音声学をあつかった藤原 [2019] がある。モーラン・カドゥー語については基礎語彙を提示した Luce [1985]、初歩的な音韻論をあつかった Huziwara [2019] がある。

1.3 モーラン・カドゥー語の言語状況

モーラン・カドゥー語地域は、西端のシュウェヘンダー村とコーター村ではビルマ人との共住がすすみ、ビルマ語化が進行し、若年層ではカドゥー語が継承されなくなってきている。しかし、他の地域では、日常的にモーラン・カドゥー語が使用されている。ただし、それらの地域でも、モーラン・カドゥー語の話者は、ほぼ全員がビルマ語との二言語使用者である。したがって、ビルマ語からの借用語が多用される。ビルマ語からの借用語はもっぱら内容語である。他方、赤タイ語 (Tai Naing: ISO 639-3 tjl) からの借用語もある。赤タイ語からの借用語では、内容語のみならず機能語も散見されるものの、モーラン・カドゥー語話者で赤タイ語にも堪能である人はいないとおもわれる。

ところで、モーラン・カドゥー語地域では、カドゥー語を表記する文字として作成された「ウルシ文字」^{注3}が子どもたちに対して教育されており、若年層は「ウルシ文字」で読み書きができる。ウルシ文字表記によるカドゥー語の看板がミャウツモー村などにみられる。

2 表記上の注意

2.1 音素表記

本稿におけるモーラン・カドゥー語は筆者による音素表記である。

モーラン・カドゥー語の音素は /p*, ph, b, t*, th, d, c [tɕ], ch [tɕʰ], j [dʒ], k, kh, g, ʔ*, s, sh [sʰ], z, ɕ, h, m*, n*, ŋ*, l, w**, y**, i, e, ɛ, a, ɔ, o, u, ə/ である。*は末子音としてもあらわれうるものを、**は子音連続の第二要素としてあらわれるものをしめす。このほか、閉音節でのみあらわれる二重母音として /ai, ou/ がある。声調としては低声調 (重アクセント記号 でしめす)、中声調 (アクセント記号なし)、高声調 (鋭アクセント記号 でしめす)、下降調 ^{注4} (曲アクセント記号 でしめす) が弁別的である。このうち、下降調は原則としては中声調に後続する低声調が変調したものであり、二次的なものである。

^{注3} 「ウルシ」とはカドゥー語で「星」を意味する *ʔuluɕi* に由来する。この文字を考案した人の愛称が「星」であることから、考案した文字に「星」*ʔuluɕi* と名づけたという。ウルシ文字はインド系文字の一種であるといえる。カドゥー語を表記できるように工夫されているけれども、カドゥー語にある四種類の声調のすべてをかきわけるとはできないようである。ウルシ文字の見本として看板の写真を本稿末尾に附録として掲載した。

^{注4} 下降調において母音は緊喉母音となる。

モーラン・カドゥー語は、標準的なカドゥー語であるセッター・カドゥー語と比較して、文法的にはほとんどおなじであるといつてよい。ただし、音声的には、有声阻害音が音素的であるという点において、音素的ではないセッター・カドゥー語と異なる [藤原 2019, Huziwarra 2019]。

2.2 連声

2.2.1 有声交替

筆者の観察によれば、モーラン・カドゥー語では有声交替 (voicing alternation) が観察される。モーラン・カドゥー語における有声交替は、同一音韻語において、声門閉鎖音以外の音に後続する無声阻害音が対応する有声阻害音に交替するというものである。具体的には、 $p > b$ 、 $c > j$ 、 $t > d$ 、 $k > g$ 、 $s > z$ といった有声交替が観察される。典型的には、複合語における後部要素の初頭子音や、附属語である機能語の初頭子音が有声交替をおこす。ただし、確認されている範囲では、方向格標識の $=pà$ と複数形標識の $=te$ は、有声交替しうる環境にあっても有声交替しない^{注5}。

2.2.2 変調

筆者の観察によれば、セッター・カドゥー語にみられるものと同様の変調がモーラン・カドゥー語にもみられる。主要な変調は、以下にしめすとおりである。これらのうち、1、2、3 はほぼ例外なく適用される。4、5、6 はおなじ話者でも発話速度や状況により、適用されることもあれば、されないこともあるようである^{注6}。

1. 高声調に後続する中声調は低声調となる ($M \rightarrow L/H_$)
2. 中声調に後続する低声調は下降調となる ($L \rightarrow F/M_$)
3. 中声調と高声調とが連続するあとに中声調があるとき、縮約して全体が中声調・中声調・下降調となる ($MH+M \rightarrow MMF$)
4. 高声調と低声調が連続するとき、縮約して全体が中声調と下降調になる ($HL \rightarrow MF$)
5. 多音節語において、中声調に先行または後続する高声調が中声調になる ($HM/MH \rightarrow MM$; 多音節語のとき)
6. 機能語において、低声調に後続する高声調は低声調となる ($H \rightarrow L/L_$; 機能語のとき)

^{注5} なお、セッター・カドゥー語において有声阻害音は音素的ではないけれども、音声的にはきかれうる。すなわち、有声交替しうる環境にあれば、セッター・カドゥー語でも有声阻害音がきかれうる。そして、方向格標識の $=pà$ や複数形標識の $=te$ も、有声交替しうる環境にあれば、セッター・カドゥー語では音声的には対応する有声音できかれうる。この点で、モーラン・カドゥー語とは異なっている。

^{注6} おなじ語であっても声調が異なって表記される理由は変調による。また、ビルマ語などからの借用語であっても、変調が適用される。したがって、たとえばビルマ語では高声調である語が本稿におけるモーラン・カドゥー語では中声調で表記されていることがあるのは、変調の影響による。なお、カドゥー語にみられる変調についてくわしくは、セッター・カドゥー語の音韻論をあつかった藤原 [2013] を参照。

2.3 その他

ルイ祖語における*-m と*-n が-n に、*-p と*-t が-t に合流する傾向が、特に 50 代以下の若年層において顕著にみられる。この傾向は、モーラン・カドゥー語だけでなく、セッター・カドゥー語やモークワン・カドゥー語においてもよくみられる特徴である。

3 民話本文と語釈

以下に民話本文に語釈をつけたものを提示する。日本語としては不自然であっても、直訳にちかい形式で訳をつけている。また、同一形態素が文中の位置によって機能が異なることがあっても、おなじ語釈で統一している。典型的には、完了をあらわす=*pán*/*bán* は、継起あるいは条件の標識としても使用されうるけれども、いずれの場合でも PRF とのみ語釈をつけている。また、名詞化標識の=*pén*/*bén* は、属格や名詞修飾節の標識としても使用されるけれども、本稿では一貫して NMLS とのみ語釈をつけている。

- (1) *ʔəsàʔ+pouŋbyen =gá, məʔédouŋ, shwaŋ+sha =yauʔ=nâ sháŋŋéshà+sha,*
Kadu+story =TOP long.ago rich.man+son =COM=EMPH poor.man+son
pəháŋcháj thà -jí =mədàʔ.

friend happen -VPL =RLS.HS

カドゥーのお話は、昔々、金持ちの息子と貧乏人の息子が、友人になったそうです。

注 *-jí=mədàʔ* < *-jí=ma=dáʔ* ‘-VPL=RLS=HS’ である。このように、=*ma=dáʔ* はしばしば縮約して=*mədáʔ* となる。声調は、おおむね、=*mədáʔ* の直前に高声調があれば=*mədàʔ* と変調し、それ以外の環境では変調しないようである。

- (2) *ʔàndaʔ pəháŋcháj yàʔ-ʔà =má=dè tòuŋ -jí =məshà=gà, kəsì+hám*
3PL friend CL:day-one =time=OBJ meet -VPL =time.EMPH=TOP trap+entrap
pyaiŋ-də -ji -thâ =mà=nyè ŋó -jí =mədàʔ.

compete-LBV -VPL -must =RLS =QUOT say -VPL =RLS.HS

彼ら友人は、ある日、出会った時、罫をしかける競争をしようと言いつつあったそうです。

注 1 目的格標識の=*te*/*de* は、時をあらわす場合にも使用されうる。

注 2 *tòuŋ* は *kətòuŋ* という形式が一般的である。

注 3 =*məshà* < =*má=shà* < =*má=sha* ‘=time=EMPH’ である。

注 4 *pyaiŋ* はビルマ語からの借用語。カドゥー語においては、動詞が借用されると、「つなぎ」要素として *-də*/*-tə* (< *-dó*/*-tó*) という語源不明の形式があらわれる。

- (3) *kəleiŋ-hú dəbɔ tu-də =ban =nâ=ʔà, kəsì+hám [hám-thà=mà=nyè]*
two-CL:man opinion be.same-LBV =PRF =EMPH=TOP trap+entrap entrap-must=RLS=QUOT
kəya=be laŋ -ji =mədàʔ.

mountain=LOC go -VPL =RLS.HS

二人は同意して、罫を [しかけるために] 山へ行ったそうです。

注 1 *kəleij* ‘two’ は、接中辞として *-əl-* が挿入されている形式である。接中辞の存在は、筆者が調査したかぎりのカドゥー諸語ではどこでも観察される改新である。

注 2 *=ban=nâ=?à < =bán=na=gá* ‘=PRF=EMPH=TOP’ ではないかとおもわれる。このように、[g] が脱落する現象は現代口語ビルマ語にも確認される [Jenny & San San Hnin Tun 2016: 25]。

注 3 [*hám-thà=mà=nyε*] は、いいわすれていたもの。

注 4 *laŋ* ‘go’ はモーラン・カドゥー語に特徴的な形式である。ほかのカドゥー語では一般に *naŋ* である。なお、チャック語では *laŋ* であることから、モーラン・カドゥー語の形式が古形ではないかとおもわれる。

(4) *shwaŋ+sha =gá phónkòn =sáu?=pè kəsì hám-màŋ =mədə?*

rich+son =TOP tree =place.above=LOC trap entrap-CMPL =RLS.HS

金持ちの息子は、木の上に罾をしかけたそうです。

(5) *shaŋŋeŋsha+sha =gá ka+pəla?=pè hám-màŋ =mədə?*

poor.man+son =TOP ground+be.level=LOC entrap-CMPL =RLS.HS

貧乏人の息子は、平らな地面に罾をしかけたそうです。

注 *shaŋŋeŋsha+sha* は、(1) のように、*sháŋŋéshà+sha* と同音される。

(6) *?eiŋ =ban=nâ ŋó =bán =gò, ma? =má=gà kəsì be ha -já*

this =PRF=EMPH say =PRF =EMPH elapse =time=TOP trap make.clear walk -VPL.ANDV =mədə?

=RLS.HS

それから、しばらく経過してから、(二人は) 罾を見に行ったそうです。

注 *-já < -jí-yà* ‘-VPL-ANDV’ である。

(7) *kəsì be ha -ja =məshâ =gà, shwaŋ+sha ?əyâŋ laŋ -phaŋ*

trap make.clear walk -VPL.ANDV =time.EMPH =TOP rich+son first go -do.in.advance =mədə?

=RLS.HS

(二人が) 罾をみにいったとき、金持ちの息子がまず最初に行ったそうです。

(8) *shwaŋ+sha ?əyâŋ laŋ -pháŋ =bán =gò, heij+kəsì=de yu-wa =má=gà,*

rich+son first go -do.in.advance =PRF =EMPH 3SG+trap=OBJ watch-ANDV =time=TOP hámàŋ =gəzè lù=wá.

what =even NEG.get-NEG.PRD

金持ちの息子がまず行ったところ、彼の罾を見に行ったところ、何も得ませんでした。

注 1 *heij+kəsì < heij+kəsì* である。なお、所有者と被所有物を標識なしに並列してもよいし、属格標識として *=bén* を介在させて *heij=bén kəsì* ‘3SG=GEN trap’ といってもよい。

注 2 *lù < ?ə-lù < ?ə-lu* ‘NEG-get’ である。否定接頭辞のあとで中声調の動詞は低声調に

変調する。ここでは、接頭辞があらわれていないけれども、低声調になっていることで、否定であることがわかる。

- (9) **shaŋŋeŋsha+sha kəsi=pà yu-wa =məshâ=gà, ?əchí nu-wa lu-nem**
 poor.man+son trap=ALL watch-ANDV =time.EMPH=TOP barking.deer CL:animal-one get-CONT
=mədà?

=RLS.HS

貧乏人の息子の罾の方へいってみると、ほえ鹿が一頭得られていたそうです。

注 有声交替 (2.2.1) でのべたように、方向格=pàは、有声交替しうる環境にあっても有声交替しない。

- (10) **?eiŋ =ban=nâ ŋó=bán=gò, heij=gá ʃouŋ-də =bán=dá, ŋó=bán=nà=?à,**

this =PRF=EMPH say=PRF=EMPH 3SG=TOP lose-LBV =PRF=EMPH say=PRF=EMPH=TOP

それから、彼（金持ちの息子）は負けてしまう、ということ

- (11) **shaŋŋeŋsha+sha =ben=nâ kəsi=be lu-ném =bén=nà ?əchí=dè ?á**
 poor.man+son =NMLS=EMPH trap=LOC get-CONT =NMLS=EMPH barking.deer=OBJ loosen
=bán=nə=?à, heij phónkòn =sáu?=pè hám-pé =bén=nà kəsi=be laŋ
 =NMLS=EMPH=TOP 3SG tree =place.above=LOC entrap-put =NMLS=EMPH trap=LOC go
=ban=nâ=?à, ?óm-pé-yàŋ =mədá?

=PRF=EMPH=TOP hold-put-CMPL =RLS.HS

貧乏人の罾のところに得られていたほえ鹿をはずして、彼が木の上にした罾のところへ行って、搦んでおいたそうです

注 名詞化標識の=pén/=bénは属格標識としても使用される。これは、チャック語やガナン語にもみられる、ルイ語群の特徴といえる。なお、名詞化標識として=pén/=bénをもちいるのは、セッター・カドゥー語とモーラン・カドゥー語における改新である。モークワン・カドゥー語やガナン語では=kaという形式が使用され、ルイ祖語にもさかのぼる。=pén/=bén ‘=NMLS’は、赤タイ語のコピュラである pen⁴ [Marseille 2019: 65] から借用されているものとおもわれる。

- (12) **?eiŋ=ban=nâ ŋó=bán=gò, ?àn=nái?=mà tàŋ=de ma? =məshâ=dè=gá,**
 this=PRF=EMPH say=PRF=EMPH this=EMPH=time morning=OBJ elapse =time.EMPH=OBJ=TOP
shaŋŋeŋsha+sha =gá kəsi=be ji-ya?-khaŋ =mədà?

poor.man+son =TOP trap=LOC come-AUX-again =RLS.HS

それから、その時の朝に、貧乏人の息子は罾のところにまた来たそうです。

注 1 *ji* は *di* ‘come’ の異形態。なお、*di* ‘come’ はモーラン・カドゥー語に特徴的な形式である。ほかのカドゥー語では一般に *li* であることから、モーラン・カドゥー語の形式が改新であるとおもわれる。

注 2 *-ya?* はなんらかの移動にかかわる助動詞であるけれども、意味はよくわかっていない。

- (13) **heij+kəsí=be yu-win =məshâ=gà, heij+kəsí=be ?əchí lu=bén=gà**
 3SG+trap=LOC watch-VEN =time.EMPH=TOP 3SG+trap=LOC barking.deer get=NMLS=TOP
mínshəhà =mədə?

understand =RLS.HS

彼の罾のところに来てみると、彼の罾のところにほえ鹿が得られたということがわかったそうです。

- (14) **?eij=záj ɲó=dídà, ?əchí=gá ?ə-bò=bàn.**

this=EMPH say=even barking.deer=TOP NEG-exist=PRF

そうはいつでも、ほえ鹿はすでにありませんでした。

注 ?ə-bò ‘NEG-exist’ は否定のみで使用される存在動詞である。

- (15) **?ənèij ɲó=bán=nà ɲó=bán=gò, shway+sha ham-pɛ=bên kəsí=pà=be**
 like.this say=PRF=EMPH say=PRF=EMPH rich+son entrap-put=NMLS trap=ALL=LOC
yu-win =mədə?

watch-VEN =RLS.HS

そうしてからという、金持ちの息子がしかけておいた罾の方へ来てみたそうです。

注 ?ənèij < ?àn=nèij ‘this=ESS’ である。なお、?àn は赤タイ語で名詞化標識である *an*² [Marseille 2019: 81] からの借用語であるとおもわれる。

- (16) **?ənái?məshà shway+sha =yau?=ná tòuy-jí =mədə?**

at.that.time rich+son =COM=EMPH meet-VPL =RLS.HS

そのとき、金持ちの息子と出会ったそうです。

注 ?ənái?məshà < ?àn=nái?məshà ‘this=EMPH=time.EMPH’

- (17) **shwáj+shà =hèt ɲó =mədə?**

rich+son =ABL say =RLS.HS

金持ちの息子から言ったそうです。

注 =hèt < =hét ‘=ABL’ は赤タイ語の *het*¹ ‘do’ [Marseille 2019: 145] から借用されているかもしれない。

- (18) **“ɲa+kəsí=be=gá ?əchí lu=bán.**

1SG+trap=LOC=TOP barking.deer get=PRF

「私の罾に、ほえ鹿をすでに得た。」

- (19) **ɲa=gá naɲ=de ná=bán, ɲa=gá ?əchí lu=bén =təwá?”, ɲó =mədə?**

1SG=TOP 2SG=OBJ win=PRF 1SG=TOP barking.deer get=NMLS =because say =RLS.HS

私はお前にすでに勝った、私はほえ鹿を得たので」といったそうです。

- (20) **?eiŋ=ban=nâ ŋó=bán=gò, sháŋgěshà+sha =gá “?àn=bén=nà=gà ?ə-chì**
 this=PRF=EMPH say=PRF=EMPH poor.man+son =TOP this=NMLS=EMPH=TOP NEG-be.right
-du =wá.

-be.possible =NEG.PRD

すると、貧乏人の息子は、「それは正しくない。

注 -du ‘-be.possible’ は、du ‘get’ が文法化した形式である。‘get’ には *lu* という異形態もあり、むしろそちらのほうが普通である。du という形式は、モーラン・カドゥー語の中でも、本資料の話者がいるミャウツモー村特有の形式であるかもしれない。モーラン・カドゥー語の中でもモーラン村や、ほかのカドゥー語では助動詞としても *-lu* ‘-be.possible’ である。なお、本動詞の ‘get’ が助動詞として ‘be.possible’ になるのは、チャック語やガナン語にもみられるルイ語群の特徴といえる。ただし、このような文法化自体は、ジンポー語やビルマ語など周辺言語にもみられるものである。

- (21) **phónkòn =sáu?=pè ŋó=bén=gà, ?əchí=gá ?ə-lù-wa-yan=ná.**
 tree =place.above=LOC say=NMLS=TOP barking.deer=TOP NEG-get-ANDV-can=NEG.PRD
 木の上というなら、ほえ鹿は、行って得られない。

- (22) **naŋ ŋa+?əchi=dê ?á=bán=nà, ?àn=bén=bè bə-pé-yìn-nyà-thà**
 2SG 1SG+barking.deer=OBJ loosen=PRF=EMPH this=NMLS=LOC put.upward-put-VEN-seem-happen
=gu.
 =FUT

あなたは、私のほえ鹿をほどいてから、そこで上においてきたにちがいない。

- (23) **?om-pé-yìn-nyà-thà=gu”, ŋó =mədà?**
 hold-put-VEN-seem-happen=FUT say =RLS.HS
 掴んでおいてきたにちがいない」と言ったそうです。

- (24) **?eiŋ=ban=nâ ŋó=bán=gò, ?ànda? pəhájcháj kəleŋ-hú ?àn=bén=bè tú=tè**
 this=PRF=EMPH say=PRF=EMPH 3PL friend two-CL:man this=NMLS=LOC word=PL
nyáj-də-jí =mədà?.

quarrel-LBV-VPL =RLS.HS

すると、彼ら友人二人は、そこで、ことばを言い争ったそうです。

注 有声交替 (2.2.1) でのべたように、複数標識=*te* は、有声交替しうる環境にあっても有声交替しない。

- (25) **nyip-cí =mədà?.**
 quarrel-VPL =RLS.HS
 言い争ったそうです。

(26) **?eiŋ=ban=nâ ɲó=bán=gò, náu?=tè=gà, shwáj+cén=bè, palá+cén=bè**

this=PRF=EMPH say=PRF=EMPH later=OBJ=TOP rich+house=LOC village.master+house=LOC
təyá swé-də-jí =mədà?

trial judge-LBV-VPL =RLS.HS

すると、あとで、金持ちの家で、村長の家で、裁判になったそうです。

注 1 この「金持ちの家」における「金持ち」とは「村長」のことをさす。すなわち、「金持ちの家」と「村長の家」は同格である。なお、「金持ちの家」の「金持ち」と、貧乏人の息子をだました「金持ちの息子」とは関係がない。

注 2 *təyá swé* はビルマ語からの借用語。

(27) **təyá swé-jí =məshà=gà, təyá swé-jí =mə mányà?=te=gá, shwáj+shà=pà**

trial judge-VPL =time.EMPH=TOP trial judge-LBV =time day=OBJ=TOP rich+son=ALL
=bén=nà təmisha=te, theiŋ+pala=tê, təyátùjì=tè=gà souŋ-də -ném-jí
 =NMLS=EMPH man=PL village+village.master=PL judge=PL=TOP gather-LBV -CONT-VPL
=bán=dá?

=PRF=HS

裁判するとき、裁判する日に、金持ちの息子の（ところの）人々、村の長老たち、裁判官たちがそろっていました。

注 *təyátùjì*, *souŋ* はビルマ語からの借用語。

(28) **?àn=nái?=məshà=de, təyátùjì hò-wa =gá ?ə-jì-yà?=nùn=dà?**

this=EMPH=time.EMPH=OBJ judge CL:man-one =TOP NEG-come-AUX=still=HS
 そのとき、裁判官の一人がまだきていなかったそうです。

(29) **?eiŋ =məshà, ?əchèiŋ lun-dâŋ =məshà, təyátùjì hò-wa thou?-?in**

this =time.EMPH time excess-LBV.CMPL =time.EMPH judge CL:man-one arrive-VEN
=mədà?

=RLS.HS

それから、時間がたってから、裁判官一人がやってきたそうです。

注 *lun-dâŋ* < *lun-də-?àŋ* < *lun-dó-?aŋ* ‘excess-LBV-CMPL’ である。*lun* はビルマ語からの借用語。

(30) **?àn=nái?=məshà=gà, ɲó-jí =mədà?**

this=EMPH=time.EMPH=TOP say-VPL =RLS.HS

そのとき、（人々は）言ったそうです

- (31) **pəháŋ, pəháŋ+təyátùjǐ=tè=gà, “màŋ=ga ʔom-nem-mâŋ=là, təyátùjǐ+pəháŋ”,**
 friend friend+judge=PL=TOP what=CQ work-CONT-CMPL=CQ judge+friend
ŋó-jǐ=mà=dàʔ.
 say-VPL=RLS=HS
 友人は、友人たる裁判官たちは、「何をしていたのか、友人たる裁判官よ」と言ったそうです。
- (32) **ʔàn=náiʔ=məshà=de, təyátùjǐ+pəháŋ hò-wa =hét=ká, “ʔé, shaŋbyaŋ+dóuŋ**
 this=EMPH=time.EMPH=OBJ judge+friend CL:man-one =ABL=TOP ITJ shoal+big
wan khu-nem-mâŋ=ma.
 fire burn-CONT-CMPL=RLS
 そのとき、友人たる裁判官は「えー、大きな砂州で火事がありました。
 注 *khu* ‘burn’ はモーラン・カドゥー語の中でもミャウツモー村に特有の形式である。ほかのカドゥー語では *hu* である。一般に、他のカドゥー語における *hu* は、モーラン・カドゥー語ミャウツモー方言においては *khu* で対応する。
- (33) **ʔàn=bén=nà shaŋbyaŋ+dóuŋ wan khu-nem-mâŋ=bén=nà=de ŋa=gá**
 this=NMLS=EMPH shoal+big fire burn-CONT-CMPL=NMLS=EMPH=OBJ 1SG=TOP
báŋká +mǐʔtù+wáʔ =yáuʔ=nà wə thi=bán=nà=ʔà wan=sáuʔ met-ném
 basket +eye+wide =COM=EMPH water lave=PRF=EMPH=TOP fire=place.above extinguish-CONT
-màŋ -tha=ma,” nyè ŋó =mədàʔ.
 -CMPL -must=RLS QUOT say =RLS.HS
 その大きな砂州が燃えているのを、私は目の粗い籠で水を汲んで、火の上に（注いで）消してしまっていなければならなかった」と言ったそうです。
- (34) **ʔàn=náiʔ=məshà=de, pəháŋ+təyátùjǐ=tè=gà, ʔo, ʔə-chì-yan=ná.**
 this=EMPH=time.EMPH=OBJ friend+judge=PL=TOP ITJ NEG-be.right-can=NEG.PRD
 そのとき、友人たる裁判官たちは、「おー、ありえない。
- (35) **naŋ, shaŋbyaŋ=de=gá wan=gá ʔə-khù=há.**
 2SG shoal=OBJ=TOP fire=TOP NEG-burn=be.able.to.NEG.PRD
 お前、砂州は火が燃やせないぞ。
 注 *ʔə-khù=há* < *ʔə-khù-ha=ʔá* ‘NEG-burn-be.able.to=NEG.PRD’ である。
- (36) **shaŋbyaŋ=de wan khu-ha=ma, pé,**
 shoal=OBJ fire burn-be.able.to=RLS put
 砂州を火が燃やせる、というのはさておき、
 注 *pé* の原義は「置く」という意味である。ここでは「それはさておき」という意味でもちいられている。

(37) **báunká+ mí?tù+wá? =ká wé=gá mà=nèiŋ ?om=bán=nà sun=bán thà-ha**

basket+eye+wide=TOP water=TOP what=ESS work=PRF=EMPH lave=PRF happen-be.able.to
=gəwá?

=FUT.CQ

目の粗い籠が、水はどのようにして、汲んでしまうことができるのか。

注 =gəwá? < =gu=wá? ‘=FUT=CQ’ である。gəlá? ‘=FUT.CQ というほうが普通である。

(38) **naŋ ?ə-chì-ha=bén tú=dè təbáú? =mà”, nyè ŋó =mədà?.**

2SG NEG-be.right-be.able.to=NMLS story=OBJ speak=RLS QUOT say =RLS.HS

お前は、ありえない話をしている」と言ったそうです。

(39) **?àn=nái? =məshà=de, təyátùjì hò-wa =hét=ká ŋó =mədà?.**

this=EMPH=time.EMPH=OBJ judge CL:man-one =ABL=TOP say =RLS.HS

そのとき、裁判官一人から言ったそうです。

(40) “**?é, ŋa ŋó=bén=nà ?ə-chì=yá ŋó=bán=gò, həneiŋ yà?mà? təyá=bè,**

ITJ 1SG say=NMLS=EMPH NEG-be.right=NEG.PRD say=PRF=EMPH 2PL today trial=LOC
yóuy=bè, taŋ-də pé=bén=nà ?əmú=yí=dá ?ə-thà, ?ə-chì-yan=ná.

office=LOC put.above-LBV put=NMLS=EMPH affair=too=even NEG-happen NEG-be.right-can=NEG.PRD

「えー、私が言ったことが正しくないというなら、あなたたちが今日、裁判で、事務所で、あげておいている事案さえも、ありえ、正しくありえない。

注 1 yóuy、?əmúはビルマ語からの借用語。

注 2 ?ə-thàは、いいよどみである。

(41) **?ə-thà-yan=ná.**

NEG-happen-can=NEG.PRD

ありえない。

(42) **mà=nèiŋ ?om=ban=nâ=?à phónkòn =sáú?=pè ?əchí lu-wa-ha**

what=ESS work=PRF=EMPH=TOP tree =place.above=LOC barking.deer get-ANDV-be.able.to
=gəwá?”

=FUT.CQ

どのようにしたら、木の上でほえ鹿がえられるのか。」

(43) **?eiŋ=nyɛ ŋó =mədà?.**

this=ESS say =RLS.HS

そのように言ったそうです。

(44) **?àn=nái?=yáú?=nà, sháŋŋéshà+sha=pâ=be=?á ná=lá? ?i-yaŋ=mədá?.**

this=EMPH=COM=EMPH poor.man+son=ALL=LOC=EMPH win=so.as.to give-CMPL=RLS.HS

それでもって、貧乏人の息子において勝つようにしてあげたそうです。

記号・略号一覧

/A/	A は音素表記
A B	A と B は条件変異
A < B	A は B に由来する
A > B	A は B に変化する
+	複合語境界
-	接辞境界
=	接語境界
1, 2	人称 (それぞれ 1 人称、2 人称)
ABL (ABLative)	奪格
ALL (ALLative)	方向格
ANDV (ANDative)	去辞
AUX (AUXiliary verb)	助動詞
CL (CLassifier)	類別詞
CMPL (CoMPLetive)	完遂
COM (COMmitative)	共同格
CONT (CONTinuous)	継続
CQ (Content Question marker)	補足疑問標識
EMPH (EMPHatic)	強意
ESS (ESSive)	様態格
FUT (FUTure)	未来
HS (Hear Say)	伝聞
ITJ (InTerJection)	間投詞
LBV (Linker for Borrowed Verbs)	借用語動詞のつなぎ小辞
LOC (LOCative)	場所格
NEG (NEGative)	否定
NMLS (NoMinaLiSer)	名詞化標識
OBJ (OBJective)	目的格
PRD (PReDicate marker)	述部標識
PL (PLural)	複数
PRF (PeRFect)	完了
QUOT (QUOTation)	引用

RLS (ReaLis)	現実法
SG (SinGular)	単数
TOP (TOPic)	主題
VEN (VENitive)	来辞
VPL (Verbal PLural marker)	動詞複数標識

附録・ウルシ文字見本



ビルマ文字（上三行）とウルシ文字（下三行）の看板
（シュウェヘンダー村にて・2015年2月・藤原敬介撮影^{注7}）

^{注7} 2020年3月現在、シュウェヘンダー村においてこの看板はなくなっている。

参考文献

- 藤原敬介. 2013. 「カドゥー語音韻論」『東南アジア研究』 51(1): 3-33.
- 藤原敬介. 2015. 「カドゥー語諸方言におけるモークワン・カドゥー語の位置について」『日本言語学会第 150 回大会予稿集』: 326-331.
- 藤原敬介. 2019. 「モークワン・カドゥー語東部方言における有声阻害音」『音声研究』 23(1): 83-90.
- ခင်မိုးမိုး (Khin Moe Moe). 2004. ကတူးစကားသံဖွဲ့ပုံလေ့လာချက်၊ မြန်မာစာဌာန၊ ရန်ကုန် တက္ကသိုလ်။ (A study of the phonology of the Kadu language, Ph.D dissertation, Yangon University)
- Brown, R. Grant. 1920. The Kadus of Burma. *Bulletin of the School of Oriental Studies* 1(3): 1-28.
- Grierson, George A. 1921. Kadu and its relatives. *Bulletin of the School of Oriental Studies* 2(1): 39-42.
- Houghton, Bernard. 1893. The Kudos of Katha and their Vocabulary. *Indian Antiquary* 22: 129-136.
- Huziwaru, Keisuke. 2019. A preliminary report on the Molang Kadu phonology. SEALS#29. KFC Hall, Ryogoku, Tokyo.
- Jenny, Mathias and San San Hnin Tun. 2016. *Burmese: A Comprehensive Grammar*. London and New York: Routledge.
- Kurabe, Keita. 2013. *Recordings of Jinghpaw folktales (KK1)*, Digital collection managed by PARADISEC. [Open Access] DOI: 10.4225/72/59888e8ab2122
- Luce, G. H. 1985. *Phases of Pre-Pagán Burma: Languages and History*, vol. I, II. Oxford: Oxford University Press.
- Marseille, Carmen Eva. 2019. Shan-Ni grammar and process of linguistic change. Research Master Linguistics Thesis, Leiden University.
- Sangdong, David. 2012. A grammar of the Kadu (Asak) language. Ph.D. dissertation, La Trobe University.

(附記) 本稿は科学研究費補助金（課題番号 16K02691）による研究成果の一部である。

受理日 2020 年 4 月 15 日

ドム語の「一」を表はす形式とその用法について

——同一性、唯一性、非現実性、個々別々性、不定性、特定性——

千田俊太郎

京都大学大学院・tida.syuntaro.3e@kyoto-u.ac.jp

キーワード：ドム語、パプア諸語、数量、非現実性、定不定

1 はじめに

ドム語はパプア・ニューギニアのシンプー州のグミネ地区及びシネシネ地区の一部で話される言語である¹。ドム語には「一」を表はす形式が複数ある。まず、最も中性的に、「一」を表はす表現が(1)である。

(1) *ʌtenan*=「*ta*」 「一」

この形式は自立語 *ʌtenan* と接語=「*ta*」の二つの形式の組み合わせからなつてみると考えられる。この複合形式全体の特徴は、本論の最後に論じることにする。複合形式の要素になつてゐる二つの形式は、それぞれ他の環境にも現はれ、ある種の「一」を表はす。以下は名詞 *ʌpapal* 「女」を「一」が修飾する構文の例である。どれも形容詞と同様後ろから名詞を修飾する。

(2) *ʌpapal ʌtenan* 「たった一人の女、同じ女、女だけ」

(3) a. *ʌpapal*=「*ta*」 「一人の女、ある女」

b. *ʌpapal* 「*ta*」 「一人の女、別の女」

本稿ではこれらの表現の形式と用法を扱ふ。本稿は「一」を表はす表現を特別に聞き出し調査した結果を示すものではなく、主にテキストに見られる表現から、各形式に特徴的と思はれるものを集めて整理したものである。「一」を表はす複数の形式に、どのような用法上の使ひ分けがあるのか、なかでも複合形式 *ʌtenan*=「*ta*」が何なのか、明らかにするために必要な言語事実と用法の確認手続きを示すことにする。

¹ ドム語には母音音素が五つ: /i, e, a, o, u/, 子音音素が十三個: /p, ^mb, m, t, ⁿd, n, k, ^ɠg, s, l, r, w, j/ ある。限られた環境で /a/ と /a:/ などの母音の長短の対立が見られる。閉鎖音は有聲前鼻音化子音と無聲非前鼻音化子音の二系列が區別される。本稿では長母音 /a:/ を *aa*、有聲前鼻音化子音 /^mb, ⁿd, ^ɠg/ を *b, d, g*、硬口蓋接近音 /j/ を *y* と表記する。超分節音素の語聲調: 高平 (Γ)、下降 (N)、上昇 (V) があり、語頭に記號を付して示す。サンディーが起きる場合に基底の語聲調の記號は丸括弧に入れる。發話において脱落してゐた母音を上付きで示す。

以下、§2 では同一・唯一・僅少の含みをもちうる $\Lambda tenan$ 「一つ」の用法、§3 では非現実を表はす Γta の用法、§4 では Γta の「個々別々」や「不定」を表はす用法、§5 では複合表現 $\Lambda tenan = \Gamma ta$ による用法を順に見る。§6 は結語である。

譯語は可讀性のために文脈に即した表現を時に使ふが、文レベルの譯ではドム語の表現に即して理解できるやうな直譯を括弧内に補つたり、その他のことばを補つたりした。

2 同一・唯一・僅少の「一つ」: $\Lambda tenan$

$\Lambda tenan$ は同一性、唯一性、僅少性の含みをもちうる「一つ」表現だと考へられる。自由變異に $\Lambda teran$ がある。

次の (4, 5) は $\Lambda tenan$ 「一つ」が「同じ一つ」と解釋されうる文脈に現はれる用法である。

(4) $\Gamma na \ \Lambda yopal \ \Lambda tenan.$

我 人 同一

私の一族である。

(5) $Vene \ \Lambda maket \ \Lambda i \ \Gamma ki \ \Lambda kor-e \ \Lambda daa \ \Lambda i \ \Gamma er^e \ \Lambda vim^e \ \Gamma p \ \Gamma yokau = \Gamma ta$ さて 市場 DEM 離-CONJ(SS) 坂 DEM DEST 下方. その 行.INF 少=INDEF

$Vgeu-gwa-l \ \Lambda im^e \ \Gamma p-re \ \Lambda kan \ \Gamma nule \ \Lambda er-pgi \ \Lambda nl$

曲-3SG.SRD-LOC 下方. あの 行-CONJ(SS) 見.INF 川 向-1PL.SRD.DEM 川

$\Gamma ta \ \Lambda vama \ \Lambda ya-gwi \ \Lambda kaa \ \Lambda i \ \Gamma Gurau/Wa = (\Gamma) Nul^e = (\Lambda) we$

一 亦 流-3SG.SRD.DEM 名.3SG.POSS DEM [河川名]=川=PF

$\Lambda Kopa \ \Gamma Klawa = (\Gamma) Nul^e = \Lambda we \ \Lambda nl \ \Lambda i \ \Lambda tenan \ \Lambda ya-m = (\Lambda) ba \ \Lambda kaa \ \Lambda i$

[河川名]=川=PF 川 DEM 同一 流-3SG=ADVRS 名.3SG.POSS DEM

$\Lambda vama \ \Lambda su \ \Lambda yo-pge.$

亦 二 稱-1PL.DEC

さて市場から坂を少し降りてゆき、下の少し曲がつたところに行つて、川側を向いて見ると、もう一つ川が流れてゐるのだけれど、その名前はグラウ・ワ川、コパ・クラワ川と、この川は一つなのだが、その名前はやはり二つ付いてゐる（我々は付けてゐる）。

複数の成員からなる單位がまとまりをなし「一つ」、「一體」であることを表現する際にも、 $\Lambda tenan$ がしばしば使はれる。次の (6) では複数の支族を抱へる氏族が本來は一つのまとまりであることを表現する中に、 $\Lambda tenan$ が現はれてゐる。

(6) $VKurpi \ \Lambda main \ \Lambda tenan = \Lambda iba \ \Lambda kore \ \Gamma i \ \Lambda vne \ \Lambda ne-m \ \Gamma ta \ \Lambda kul \ \Lambda yo-gwa$ [族名] 部族 一=ADVRS ADVRS DEM 自 父-3SG.POSS 別.SG 産.INF 慰-3SG.SRD

ʌklen ʌkepl=(ʌ)ta ʌkaa ʌyo-gwi ʌNuul=(ʌ)Gauma=(ʌ)we
 氏族 小=INDEF 名.3SG.POSS 命名-3SG.SRD.DEM [族名]=[支族標識]=PF
ʌdu-gwa ʌmol-gwa ʌO#ʌNul^e ʌel ʌil^e (ʌ)ke ʌpa-gwe.
 言-3SG.SRD 居-3SG.SRD [地名] 邊 水平.あの 建.INF 寐-3SG.DEC

クルピは一つの部族 (氏族) だが、他と異なる親の産んだ小さな氏族 (支族) にそれ自體固有の名を付けてヌール・ガウマといふのがゐて、あちらの地域のオー・ヌレに住んでゐる。

複数の物事が一體になる時、*ʌtenan* が「なる」を表はす構文 ʌu X ʌp- (來.INF X 行-) の X として使はれて「一つになる、一緒になる、仲良くなる」と表現することが頻繁にある。

- (7) *ʌkomuniti*=ʌla ʌi ʌmai ʌs-r^e ʌu ʌtenan ʌp ʌkomna ʌkepa
 コミュニティー=LOC DEM 集 (VN) LV-CONJ(SS) 來.INF 一 行.INF 野菜 薩摩芋
 ʌs ʌi ʌp ʌer^e ʌari ʌiki ʌyo-gwa-l ʌi=ʌwe ʌke ʌne-re
 採.INF 取.INF 行.INF 木 葉 家 有-3SG.SRD-LOC DEM=PF 蒸.INF 食-CONJ(SS)
ʌmol-igwa
 居-2/3PL.SRD

コミュニティーの中で集まって一緒になつて種々の食料を収穫して持つて行つて、木の葉の家 (といふ儀禮的な建物) のあるところで料理して食べてゐて...

- (8) *ʌkura* ʌi ʌstop ʌe-pga ʌelmai ʌyu ʌmo-pn+(ʌ)a. ʌna ʌkol^e ʌkole ʌu
 戦 DEM 停止 する-1PL.SRD 今 只 居-1PL+EXPL 我 側 側 來.INF
ʌtenan ʌp-re ʌelmai ʌyu ʌmo-pn+(ʌ)a.
 一 行-CONJ(SS) 今 只 居-1PL+EXPL

戦争は停止して今は普通に暮らしてゐる。我々は雙方一つになつて (對立せずに) 普通に暮らしてゐる。

ʌtenan が唯一性 (「一つだけ」、「～だけ」の意味) を表はす場合もある。この場合、對比される對象が別途表現されることがよくある。次の例 (9, 10) では對比される對象が *ʌtau* 「その他」で表はされてゐる。

- (9) ʌgn ʌtau ʌkui ʌta ʌne+(ʌ)k-pg^e. ʌmekon ʌtenan ʌkui ʌno-pg^e.
 茸 別.NSG 生 IRR 食 +NEG-1PL.DEC メコン (茸名) 唯一 生 食-1PL.DEC

ほかの茸は生では食べない。メコンだけは生でも食べる。

- (10) $\Gamma ka/Vkopa$ $Vtau$ Λi $\Gamma para$ $\Gamma para$ $\Lambda no-pge.$ $\Lambda torkui$ $\Lambda tenan$ Γta
 鳥 別.NSG DEM 全 全 食-1PL.DEC トルクイ (鳥名) 唯一 IRR
 $\Gamma ne+(V)k-pg^e.$ $\Gamma ka/Vkopa$ $Vtau$ Λi Λgiu Γta $\Gamma e+V/k-gw^e.$ Λwai
 食 +NEG-1PL.DEC 鳥 別.NSG DEM 苦 (VN) IRR LV+NEG-3SG.DEC 良
 $Vpa-gwa$ Γs $\Lambda no-pn=\Lambda ba$ $\Lambda torkui$ $\Lambda tenan$ Λgiu
 性質である-3SG.SRD 打.INF 食-1PL=ADVRS トルクイ (鳥名) 唯一 苦 (VN)
 $\Lambda el-gwa$ Γta $\Gamma ne+(V)k-pg^e.$
 LV-3SG.SRD IRR 食 +NEG-1PL.DEC

ほかの鳥は全て食べられる。トルクイ*だけは食べない。ほかの鳥は匂ぐい味はしない。美味しいので射て食べるのだがトルクイだけは匂ぐくて (毒があつて) 食べない。
 (*ニューギニアには世界で稀な有毒の鳥が数種知られてゐる。トルクイはおそらく頭黒森百舌 ^{づぐもりもぎ} *Pitohui dichrous* のことを指すと思はれる。)

次の例 (11) でも「一度きり」で「次がない」ことを表現してゐる。

- (11) Λa $\Gamma kl^e=(\Gamma)d$ $\Gamma mol-o.$ $\Lambda giul$ $\Lambda elma$ Λek $\Lambda teran$ Λi $\Gamma yoko=(\Gamma)ta$ $gol-V/a-n=(\Lambda)wa.$
 ああ 静=ADV 居-IMP 痛 今 回 唯一 DEM 少=INDEF 感-FUT-2SG=CF
 Λkui Γta $\Gamma go+V/kl-a-n=(\Lambda)wa.$ $\Lambda du-gwe.$
 再 IRR 感 +NEG-FUT-2SG=CF 言-3SG.DEC

「ああもう、静かにしなさい。痛いのは今この一度きり、少し感じることはなる。次また痛くなるわけぢやないんだから」と (看護婦は) 言つた。

$\Lambda tenan$ に關聯し、形式と意味作用域のミスマッチが見られることがある。次の例 (12) を見られたい。

- (12) $Vkola$ Λi $\Lambda kor-a-pn=\Lambda ba$ $\Lambda no-pga$ Λwai
 コラの木 (*Ficus copiosa*) DEM 放棄-FUT-1PL=ADVRS 食-1PL.SRD 良
 $Vpa-gwa$ $\Lambda pl-e$ Vau Vgi $\Lambda du-pge.$ $Vkola$ $Vmne$
 性質である-3SG.SRD 思-CONJ(SS) 握.INF 緊 (VN) LV-1PL.DEC コラの木 嫩葉
 $\Lambda i=\Lambda ya$ $Vmle$ $\Lambda tenan$ $\Lambda no-pge.$ $Vwe-re$ $Viki$ Γta $Vke+(V)kl-a-pdae.$
 DEM=と 實 唯一 食-1PL.DEC 伐-CONJ(SS) 家 IRR 建 +NEG-FUT-1PL.SRD.MK
 Γura $\Lambda du-gwa$ Γere $Vyo-gwe.$ Γi $Vnene$ Γd Γp Λgil Λgol
 軟 (VN) LV-3SG.SRD 木 である-3SG.DEC DEM 自身 存在.INF 行.INF 乾 枯.INF
 $\Lambda kor-gwe.$ Λgil $\Lambda gol-gwa$ Γere Λi Vsu $gal-V/a-pdae.$ $Vkola$
 COMPL-3SG.DEC 乾 枯-3SG.SRD 木 DEM 收.INF 燃-FUT-1PL.DEC コラの木
 Γer^e Λi $\Lambda konan$ Γta Γta $Vpai+(V)k-gw^e.$ $\Lambda komna=\Gamma mere$ $\Lambda du-gwa$
 木 DEM 用 別.SG IRR 存在 +NEG-3SG.DEC 野菜=如 有-3SG.SRD

ʋml^e=(ʌ)ya ʋmne ʌno-pge.

實=と 嫩葉 食-1PL.DEC

コラの木はやめたくても食べたなら美味しいので、そのために大事にしてゐる（しつかり握つてゐる）。コラの木は葉の新芽と實だけを食べるものだ。伐つて家を建てることはできない。軟らかい木なのだ。ひとりでに生えてゆき、枯れてゆき、それで終はりである（材木として伐られずに枯れ木になつて一生を終へる）。（コラの）枯れた木は柴刈りで集めて燃やす。コラの木には他の用途はない。野菜みたいなもので實と葉の新芽を食べる。

(12) では、二つの対象「葉の新芽」と「實」に對して *ʌtenan* が後置され、「葉の新芽と實だけ」といふ構成素を作つてゐる。しかし、後の文脈も合はせられて觀察すると、「食用するだけ（で木材にするなど他の用途のない木）だ」と、この木の唯一の有用な特徴を表現するものである。このやうな意味作用域のミスマッチは、日本語などの取立詞にもしばしば見られる。*ʌtenan* が意味的に述部と關係をもつ際、専用の出現位置がないため、述部と近い關係をもつ部分に後續して現はれるのだと考へられる。

ʌtenan の關與する唯一性の含み「他を措いてそればかり」が、「最も」に近づく場合がある。

(13) 文脈: 木麻黃の木は建築材料として大切であり、世にこの木がなければ家を建てることができずに困つてしまふことだらう。

ʋna ʋiki ʋama ʋta (ʋ)ke ʋpai+(ʋ)kl-a-pn=(ʌ)ba ʌkolwa ʌdu-gwa ʋd-re
我 家 亦 IRR 建.INF 寐 +NEG-FUT-1PL=ADVRS 木麻黃 有-3SG.SRD 有-CONJ(SS)

ʋna ʌyal=ʋkan^e ʌi (ʋ)au ʋpl ʌdu-go ʌelma ʋiki (ʋ)ke
我 男=達 DEM 握.INF 助 (VN) LV-3SG.CONJ(DS) 今 家 建

ʋpa-pgi=(ʋ)kene ʌkolwa ʌelma ʋkepa ʌyal ʌno-pga-l=ʌya
寐-1PL.SRD.DEM=後 木麻黃 今 薩摩芋 植 (自給作物).INF 食-1PL.SRD-LOC=と

ʌkopi ʌkul ʌno-pga-l=ʌya ʋi kan-ʋa-gi ʌkolwa
コーヒー 植 (換金作物).INF 食-1PL.SRD-LOC=と DEM 見-FUT-2SG.SRD.DEM 木麻黃

ʌi ʌtenan ʌtenan=ʋd ʋd ʋer^e ʌna-wdae ʌkolwa ʋere ʌwai
DEM 少 少=ADV 有.INF DEST 行.FUT-3SG.SRD.MK 木麻黃 木 良

ʋyo-gwa ʌpl-e (ʌ)ʌtenan ʌwone (ʋ)au ʋgi ʌdu-pge.
有-3SG.SRD 感-CONJ(SS) 唯一 INTENS 握 緊 (VN) LV-1PL.DEC

(この木がなければ) 我々は家も建てて寐られないところだが、(實際には) 木麻黃があつて、我々を助けてくれて、今我々は家を建てて寐てをり、今、木麻黃は我々の所有する薩摩芋畑や我々の所有するコーヒー畑をあなたが見れば、木麻黃の木が少しづつずつと向ふまで生えてゐるはずだが、(それは) 木麻黃の木が良いものである (と考へる) ために我々が全くこればかり大切にしてゐる (きつく握つてゐる) からなのだ。

ここまで、*ʌtenan* 「一つ」が同一性や唯一性を表現する意圖と矛盾しない例を見た。*ʌtenan* が同一性や唯一性を「意味する」のかどうかは、ここでは態度を保留しておきたい。単一性を「意味する」言語表現が同一性や唯一性を表現する意圖の下に使用されてみると見ることもできさうだからである。

ʌtenan には僅少を表はす表現の中で使はれる用法もある。反復させて、分配的な意味で使ふ *ʌtenan ʌtenan* 「一つ一つ、一つづつ」は「少しづつ」の意味も持つし、*ʌsu ʌtenan* (二一) 「一二、一つ二つ」といふ慣用句は並列された形式が小さな数の概数表現を形成するものである。これらは時に副詞化の=「d」を伴ふ。次の (14) は反復させて副詞化の=「d」を後置させた例、(15) は慣用句 *ʌsu ʌtenan* に副詞化の=「d」が付いた例である。

- (14) ʌta ʌi ʌmle ʌtenan ʌtenan=ʌd ʌkol-gw^e.
別.SG DEM 實 一 一=ADV 結-3SG.DEC

別の(種類の大葉赤榕の木)は實が少しづつしかつかない。

- (15) ʌyopal ʌsu ʌtenan=ʌd ʌmol-igwa
人 二 一=ADV 居-2/3PL.SRD

一人二人しかをらず...

(14, 15)において、*ʌtenan* は僅少を表はす複合的な表現に参加してゐる。これも、*ʌtenan* 自體が僅少を「意味する」といふべきではないかもしれない。ただ、「少しある」といふ含みではなく、「少ししかない」といふ含みで使はれることに注意すべきだと考へる。

ʌtenan は同じものであることを表現する文脈で使はれたり、「一つしかない」ことを取り立てて問題にする場合に使はれたり、「少ししかない」ことを表現する形式に参加したりするもので、中立的に「一」を表はさないやうなところがある。

3 非現実を示す用法

「一」の意味から最も遠いのが ʌta の非現実を示す用法である。しかし他の用法と區別する必要があり、また頻出する。これまでの例文にも何度も出て来てゐるので先に見ておくことにする。非現實用法の ʌta は、否定の接語 +ʌk(l)- (以下形態素の代表形を +ʌkl-と示す) のついた動詞とほぼ義務的に共起する。このやうな ʌta の基本的な出現位置は +ʌkl-のついた動詞の直前である。次に既出の例文を一つ再掲しておく。

- (16) ʌgn ʌtau ʌkui ʌta ʌne+(ʌ)k-pg^e. ʌmekon ʌtenan ʌkui ʌno-pg^e. =(9)
茸 別.NSG 生 IRR 食+NEG-1PL.DEC メコン(茸名) 唯一 生 食-1PL.DEC

ほかの茸は生では食べない。メコンだけは生でも食べる。

このように、否定の接語 +/kl-のついた動詞の直前に現はれる「ta」は +/kl-とともに複合的な否定表現を作るものである。上の文では、主語は一人称複数、目的語は二つ以上の葺であり、純粹な単一性の意味が關與する餘値はない。

否定文における「ta」の出現いかんと出現位置について、条件をもう少し正確に特定しておきたい (cf. Tida 2006: 133, 160-162)。まづ、年長者の發話において、稀に、否定文に「ta」が現はれないことがある。次の例では二語目の「あげる」の前に「ta」が現はれてゐない。

- (17) 「en 「te+(V)kl-a-gi 「en ʌyopal 「en ʌd-na-m=ʌua; ʌgar-n ʌkai
 汝 與 +NEG-FUT-2SG.DEM 汝 人 汝 言-FUT-3SG=CF 體-2SG.POSS 呪 (VN)
 ʌs-na-m=ʌua ʌdu-gw^e.
 LV-FUT-3SG=CF 言-3SG.DEC

お前が (人に柴を) あげなければ、人はお前のことを論ふ; 陰口をきく (「身を呪ふ」と (昔の人は) 言つた。

次に、否定命令文では、世代に拘はらず、このはたらきにおける「ta」は出現しない。自發的な發話に決して出現しないばかりでなく、聞き出し調査でも「ta」を付加すると容認されない。

- (18) 「en ʌkuni ʌi 「ne+(V)kl-o ʌdu-gw^e.
 汝 盜 DEM 食 +NEG-IMP 言-3SG.DEC

「盗みはするな」と言つた。

以上のことから、否定自體は +/kl-が表はしてゐると考へる。否定と共起する「ta」の用法は否定ではなく非現實と名付けておきたい理由の一つである。この用法が個々別々の「ta」と關はるとすれば、否定對極表現として「一つも〜ない」といふ意味に由來する可能性がある。しかし、後述するやうに別の可能性もある。いづれにせよ、すでに述べたやうに、上のスタイル上の例外と構文的な例外を除けば、「ta」は共時的には否定文に義務的に現はれるものであるから、現在のドム語では「ta」は強い否定を表はすものではない。

出現位置についても例外をいくつか見ておきたい。動詞連用形が次の動詞と動詞連續を構成すると要素同士が固く結び付く。「ta」はその間に割り込まず、次のやうにその前に現はれる。

- (19) 「ta ʌkul ʌye+(V)k-ike.
 IRR 産.INF 慰 +NEG-1SG.DEC

産まなかつた。(産んであやさなかつた。)

目的語人稱・數標識も動詞の前に現はれることがあるが、最も普通の語順においては「ta」より動詞に近い位置に現はれる。つまり「ta」は次のやうに目的語人稱・數標識よりも前に現はれる。

- (20) $\lambda gaman$ V_{top} Γta Γne $\Gamma te+(V)kl-gw^e$.
 政府 俸 IRR 1NSG 與 +NEG-3SG.DEC

國は我々に給料をくれなかつた。

述語性名詞と輕動詞からなる述語では、(21) のやうに輕動詞の直前に Γta が置かれるのが普通だが、(22) の下線部のやうに述語性名詞の前に Γta が現はれることもある。

- (21) $\Gamma ka/Vkopa$ V_{tau} λi λgiu Γta $\Gamma e+V/k-gw^e$. = (10) の一部
 鳥 別.NSG DEM 苦 (VN) IRR LV+NEG-3SG.DEC

ほかの鳥はゑぐい味はしない。

- (22) λi Γta $\Gamma mo+V/kl-a-gwa$ Γen $\lambda bola$ λi Γta V_{top} Γs
 DEM IRR 居 +NEG-FUT-3SG.SRD 汝 豚 DEM IRR 買 (VN) LV.INF
 $\Gamma ku+V/kl-a-ga$ Γen $\lambda bola$ V_{kal} λkan Γta $V_{ye+(V)kl-a-gwa}$ Γen
 飼 +NEG-FUT-2SG.SRD 汝 豚 物 種 IRR 有 +NEG-FUT-3SG.SRD 汝
 $\lambda d-na-n$ Γen V_{kan} Γml^e λi $\lambda er-go$ V_{kamn} V_{kawa}
 言-FUT-3SG.CONJ(DS) 汝 見.INF 上 DEM AUX-2SG.CONJ(DS) 天 雲
 λip^e $\lambda d-na-m=\lambda ua$ $\lambda du-gw^e$.
 上方. あの 有-FUT-3SG=節末 言-3SG.DEC

これ (豚) がゐなければ、お前が豚を買つて飼はなければ、お前に豚や財産がなければ、(人は) お前のことを論ふが、お前が見上げてても空 (雲) がある (ばかりだ) と言つた。

その他、複合的な述語や有標な語順をもつ文において、 Γta の現はれる位置が不安定であつたり、二回出たりすることもある。次の例を見てみよう。

- (23) Γta $\Gamma ba+V/kl-e$ $\Gamma nl^e=(\lambda)ya$ λi Γta V_{du} $\lambda er-e$ λgal $\lambda er-e$
 IRR 削 +NEG-CONJ(SS) 液=と DEM IRR 絞.INF 除-CONJ(SS) 炙.INF 除-CONJ(SS)
 a. b. c. d.
 Γta $\Gamma e+V/kl-a-pgi$ λyu V_{ke} $ne-V_{ra-pga}$ $\lambda aral$
 IRR LV+NEG-FUT-1PL.SRD.DEM 只 蒸.INF 食-FUT-1PL.SRD 狂亂 (VN)
 e.
 $kul-V_{a-pdae}$
 LV-FUT-1PL.SRD.MK

(トプラム・カルといふ茸の皮を) 削らず、また (もし) 液などを搾り取つたり煮こぼしたりしない場合、そのまま調理して食べた場合、狂亂状態に陥る。

(23) には a. から e. の五つの動詞からなる複合的な述語が含まれる。『*ta*』は a. の前と e. の前の両方に現はれてゐる。なほ、a. と c. は連用形で、それぞれ次の動詞 b. と d. に連なつて固い動詞連続をなしてゐる。これらの動詞連続が構文 A-CONJ(SS) B-CONJ(SS) *e(l)*- (A-したり B-したりする) の A と B の要素としてはたらいてゐる。

次は有標な語順に關はり『*ta*』が二度現はれてゐると考へられる例である。

- (24) *Vene* \wedge *Bil* \uparrow *i*=(\uparrow)*rae* \wedge *yopal* \wedge *pl-gwi* \wedge *Bil* \wedge *win* \wedge *s-na-m*= \uparrow *d*
 さて [人名] DEM=MK 人 思-3SG.SRD.DEM [人名] 勝 (VN) LV-FUT-3SG=QUOT
 \wedge *pl-wdae* \wedge *kore*=(\wedge)*we* \wedge *membra*= \uparrow *rae* \wedge *win* \uparrow *ta* \wedge *Bil* \uparrow *ta*
 思-3SG.SRD.MK ADVRS=PF 議員=MK 勝 (VN) IRR [人名] IRR
 \uparrow *s*+(*V*)*kl-gwe*.
 LV+NEG-3SG.DEC

さて、ビルについては、人々が思ふに、ビルが勝つだらうと思つてゐたのだが、議員（議席）のことは勝ち取りはビルはしなかつた。

(24) では、無標な語順 \wedge *Bil* \wedge *membra* \wedge *win* \uparrow *s*- (ビル 議員 勝ち取り する-) であれば、否定文では述語性名詞の \wedge *win* と輕動詞の \uparrow *s*-との間に『*ta*』が一度現はれるだけだつたと考へられる。ここでの有標な語順 \wedge *membra* \wedge *win* \wedge *Bil* \uparrow *s*- (議員 勝ち取り ビル する-) では、述語性名詞の \wedge *win* の後ろと輕動詞の \uparrow *s*-の直前の二つの位置に『*ta*』が現はれてゐる。

4 個々別々・不定の「一つ」

この節ではまづ、§4.1 で『*ta*』、= \uparrow *ta*』の語聲調の振る舞ひについて觸れ、次に、『*ta*』、= \uparrow *ta*』の「非現實」以外の用法について紹介する。『*ta*』、= \uparrow *ta*』の用法は多岐に亙り、本稿で網羅することはできないが、大まかに個々別々 (§4.2)、不定 (§4.3) に分けて、特徴的な振る舞ひを見ながら、個々別々の用法と不定の用法の分類のための手續きについて考察する。

4.1 自立語・接語と語聲調

自立語『*ta*』は單獨で現はれるのに對し、接語= \uparrow *ta*』は必ず前の自立語に付いて現はれる。それだけではなく、二つは語聲調の實現様式に異なるところがある。ドム語の語聲調の振る舞ひ (cf. Tida 2006: 23-42) について、ここでは述べる。

ドム語では、一つの語に對して三つのピッチ・メロディー、高平 (\uparrow)、下降 (\wedge)、上昇 (*V*) が指定されてゐる。辨別的な語聲調システムがあるわけである。三つの語聲調のうち、上昇型の上がり具合には幅があり、音聲的にはあまりピッチの上昇が見られない時もあれば、語末がそれなりに高いピッチで實現する時もある。

- (25) a. \wedge *kal* 「物」: [\wedge ka \uparrow]~ [ka \uparrow]~ [ka \uparrow]
 b. \wedge *kepa* 「薩摩芋」: [\wedge ke \uparrow pa \uparrow]~ [ke \uparrow pa \uparrow]~ [ke \uparrow pa \uparrow]

c. *Vapal* 「女」: [a|pal-] ~ [a|pal+] ~ [a|pal]

ドム語には自立語の後ろにつく接語がいくつか存在する。接語にも独自の語聲調が指定されてゐる。ただし、接語の語聲調は、下降型語聲調の語に後続するといふ、特定の環境にしか現はれない。

- (26) a. *ʌka=ʌta* 「名=において」: [ka:ʌ ta]
- b. *ʌyal=ʌkope* 「男=たち」: [jaʌ koʌpe]
- c. *ʌbola=ʌmo* 「豚=か」: [ʌboʌla mo:ʌ]

下降型以外の語聲調をもつ語に後続すると、接語は自身の語聲調を失ふことが非常に多い。その場合、接語は前の語の語末より低いピッチで始まり、音節ごとにピッチがさらに低くなる、特有のメロディーで現はれる。このメロディーは接語の前の語が下降型の時にも見られなくはないが、稀である。

接語は複数連なることがあり、次の接語に移るたびにさらにピッチは低くなつてゆく。これまでのピッチの表示は語内の相対的なピッチのレベルと動きを表示するものだが、接語が始まるたびにキー・ピッチ自体が低くなる現象を表記する必要がある。キー・ピッチの低下を音聲表記では↓で表はすことにする。次は高平型の語に接語が後続する例である。

- (27) a. *ʌge=ʌkope* 「少女=たち」 [ʌge] ↓koʌpe+
- b. *ʌepi=ʌmere* 「火食鳥=のやうに」 [eʌpi] ↓meʌre+
- c. *ʌyopla=ʌta=ʌya* 「骨=のところ=と」 [yopʌla] ↓la] ↓ja:ʌ]

上昇型の語に接語が後続する場合、接語が自身の語聲調を失ふのは上と同様であるが、ホストの語のメロディーの上昇具合が必ず大きくなる。

- (28) a. *ʌkal=ʌta* (物=或) 「あるもの」: [kaʌ] ↓ta]
- b. *ʌkepa=ʌya* 「薩摩芋=と」: [keʌpa] ↓ja:ʌ]
- c. *ʌvapal=ʌkope* 「女」: [aʌpal] ↓koʌpe+

以上に見たことから、自立語 *ʌta* と接語 =*ʌta* を区別する目安になる形式的特徴は、次の二点である。

- (29) a. 自立語は單獨で現はれるのに對し、接語は必ず前の自立語に付いて現はれる。
- b. 自立語は常に独自の語聲調を實現させるのに對し、接語は高平形及び上昇型の語の後ろで独自の語聲調を失ふことが多い。

Tida (2006) では、接語 =*ʌta* が存在する可能性を検討してゐないが、自立語 *ʌta* と接語 =*ʌta* を区別すると用法の違いが見えてくる。

以下では接語に特有の、本來的でないメロディーが観察された場合、接語の本來の語彙的聲調を丸括弧でくくって表示する。次の (30) と (31) では、= $\uparrow ta$ と $\uparrow ta$ の違いは多くの場合音形の違いに反映され、= $\uparrow ta$ の場合「ある」の意味・含みが、 $\uparrow ta$ の場合「別の」の意味・含みが見られる。

(30) a. $\downarrow apal$ =($\uparrow ta$) 「一人の女、ある女」 cf. (3)
[a \downarrow pal \uparrow $\downarrow ta$]

b. $\downarrow apal$ $\uparrow ta$ 「一人の女、別の女」
[a \downarrow pal \uparrow ta]

(31) a. $\uparrow ge$ =($\uparrow ta$) 「一人の少女、ある少女」
[ge \uparrow $\downarrow ta$]

b. $\uparrow ge$ $\uparrow ta$ 「一人の少女、別の少女」
[ge \uparrow (\uparrow)ta]

(31b) では $\uparrow ge$ と $\uparrow ta$ の間で随意的にキー・ピッチが上がる。そのことを音聲表記では「(\uparrow)」で示した。一般に、高平型の語が連続する場合にキー・ピッチが上がる場合がある。

以上のやうに、接語は下降型以外の聲調をもつ自立語の後で頻繁に独自の語聲調を失ふが、この過程は随意的であり、稀に独自の聲調が保たれる場合がある。しかも、下降型聲調の自立語のあとに $\uparrow ta$ 、= $\uparrow ta$ が生起する場合には、それが自立語なのか接語なのか、形式的な特徴によつては區別できない。このやうなことが、自立語 $\uparrow ta$ 「一/別」と接語 = $\uparrow ta$ 「一/或」との區別を困難にする要因になる。例へば、下降型の $\downarrow yal$ 「男」に $\uparrow ta$ が後続した場合は、ピッチの實現は必ず [ja \downarrow N ta] であり、「一人の男」～「ある男」～「別の男」と譯せるやうな意味をもつ。ここで、上の (30) と (31) の振る舞ひとの平行性を假定すれば、次の (32) のやうに、= $\uparrow ta$ 「一/或」と $\uparrow ta$ 「一/別」といふ二つの形式があると言へるのではないか。

(32) a. $\downarrow yal$ = $\uparrow ta$ 「一人の男、ある男」
[ja \downarrow N ta]

b. $\downarrow yal$ $\uparrow ta$ 「一人の男、別の男」
[ja \downarrow N ta]

以上に見たやうに、= $\uparrow ta$ と $\uparrow ta$ はどちらも名詞に後続することができる点で、分布がよく似通つてゐる。ただし、= $\uparrow ta$ も $\uparrow ta$ も派生的な用法を多く持つてをり、必ず名詞に後続するわけではない。また、どちらの形式にも「一人の」と譯しても良ささうな場合があることが問題になる。しかし、自立語が $\uparrow ta$ 「一/別」つまり個々別々、接語が = $\uparrow ta$ 「一/或」つまり不定を表はす傾向があり、実際に、概ね分布上の棲み分けが見られるやうであるから、次にこれらの用法を精しく見てゆくことにする。

4.2 個々別々

自立語 Γta の用法の、最も基本的なものに、例へば、次のような例がある。

- (33) $Va\Gamma weke$ $Vkola\ Val^e\ \Gamma ta\ \Lambda du-gwe.$
 ア・ウェケ (*Ficus* sp.) コラ 兄弟 一個 有-3SG.DEC

ア・ウェケの木はコラの木の間の一つである。

(33) は、複数のもののうちの一項目を Γta が示してゐる。この例は比較的中立的に「一つ」であることを意味してゐるやうに見えるが、 Γta に特有の出現環境もありさうである。以下では、各項目が列挙される場合や Γta が「別個」の意味で用ゐられる場合などに分けて用例を見てゆく。結論を先に述べると、 $\Lambda tenan$ が「ほか全てと対立する一つ」を表現する側面があるのに対し、 Γta の用法は「ほかの個々と並ぶ一つ」、「個々別々」といふ含みをもつ表現群としてまとめられる。

4.2.1 対比的な項目

複数のもののうちのそれぞれを取り上げる場合、取り上げる個々の対象を Γta 「一つ」で指して表現することができる。ここでは複数のものが対比的に示される場合を見る。

- (34) 文脈: $\Lambda taip\ Vsuta\ \Lambda kol-gwe.$
 タイプ 三 生-3SG.DEC

(モルモルと呼ばれる茸には) 三種類ある。

- a. $\Gamma ta\ Ni\ \Lambda yu\ Vul^e\ Vke\ \Lambda no-pge.$
 → DEM 只 摘-CONJ(SS) 蒸-INF 食-1PL.DEC
一つはそのまま、もいだら火を通して食べる。
- b. $\Gamma ta\ Ni\ Vul^e\ \Gamma kl\ Vpuul\ \Lambda kor-e\ Vke\ \Lambda no-pge.$
 → DEM 摘-CONJ(SS) 皮 剥-INF COMPL-CONJ(SS) 蒸-INF 食-1PL.DEC
一つはもいだら皮を完全に剥いて火を通して食べる。
- c. $\Gamma ta\ \Gamma ta\ \Gamma ne+(V)k-pge.\ \Lambda giu\ \Lambda el-gwe.$
 → IRR 食 +NEG-1PL.DEC 苦 (VN) LV-3SG.DEC
一つは食べない。ゑぐい (毒がある) のである。

上の用例とよく似てゐるのが、 $Vtau$ を使つた次のような表現である。

- (35) *ʋtau* *ʌte-gwe.* *ʋtau* *ʋta* *ʋte+(ʋ)kl-igwe.*
 いくつか 與-2/3PL.DEC いくつか IRR 與 +NEG-2/3PL.DEC

(候補者から投票を依頼されお金をもらつた人の中にはその候補者に票を) 投じる人も いくらかある。投じない人も いくらかある。

列挙される項目が一つの場合に *ʋta*、二つ以上の場合に *ʋtau* を使ふ、数の對立があると考へてもよいのではないか。

ただし、上とよく似た表現で、*ʋtau* の代わりに *ʋta* が使へないわけではない。

- (36) *ʋta* *ʌpl-^e* *ʌto-gwi* *ʋta* *ʌi* *ʋs* *ʌy-ugwi* *ʋi-re*
 或 聞-CONJ(SS) 與-3SG.SRD.DEM 或 DEM 勝.INF 得-3SG.SRD.DEM 得-CONJ(SS)
 a. b.

- ʌel-gwe.* *ʋta* *ʌi* *ʋta* *ʋe+ʋkl-igwe.*
 作-3SG.DEC 或 DEM IRR 作 +NEG-2/3PL.DEC
 c. d. e.

(有権者の) ある人が (政治演説を) 聞いて (票を) 投じてみると、(候補者の) ある人は (議席を) 勝ち得てから (公約を) 実行する。ある人は実行しない。(実行する人も実行しない人もある。)

ここでは、場合を二つに分けてそのうちの一つづつについて状況を説明する中で、*ʋta* (a., d.) が使はれてゐる。一つづつの状況は多くの事例にあてはまる。そして、a. の *ʋta* は動詞に現はれる主語人稱・數標識 (b., c.) が單數で對應してゐるが、次の d. の *ʋta* は複數標識 (e.) が對應してゐる。これは、ドム語の動詞の主語人稱・數標識が形式間の一致の原理に従ふものではなく、獨自の意味表現であることと關係するやうに思はれる (cf. Tida 2006: 125, 219)。たしかに表現に首尾一貫してゐないところが認められるが、表現 *ʋta* が單數だと分析することを完全に阻むものではない。

ところで、ドム語の動詞に現はれる主語人稱・數標識においては、數が單 (1)・雙 (2)・複 (3 以上) の三項の鼎立が見られるのに對し、名詞に現はれる所有者人稱・數標識などにおいては 1 か 2 以上かの二項對立も見られる。「複數」といふ用語をルーズに使ふと無用の混亂を起こしかねないので、三項鼎立システムにおける 3 以上を複數と呼び、二項對立システムにおける 2 以上を非單數と呼ぶ (Tida 2006: 100)。この節で見た、對比的に列挙された個々の項目を取り上げる形式に、數對立を認める場合、單數 (*ʋta*)・非單數 (*ʋtau*) が對立することになる。

4.2.2 別個

ʋta には「別」であることを示すはたらきがある。すでに本稿で示した例文に該當する用例があるので、二つを再掲する。

- (37) *ʋkola ʔer^e ʎi ʎkonan ʔta ʔta ʋpai+(ʋ)k-gw^e.* = (12) 中の一文
 コラの木 木 DEM 用 別.SG IRR 存在 +NEG-3SG.DEC

コラの木には他の用途はない。

- (38) *ʔta ʎi ʋmle ʎtenan ʎtenan=ʔd ʎkol-gw^e.* = (14)
 別.SG DEM 實 一 一=ADV 結-3SG.DEC

別の (種類の大葉赤榕の木) は實が少しづつしかつかない。

ʔta 「別」には、補助動詞 *ʎer-* と組み合はせる用例が一定数ある。この補助動詞は文に場所、属性表現などを持ち込み移動、変化、状態などを表す。次の例は、「票を投じる」先である場所が「別」であることを補助動詞とともに表現してゐる。

- (39) *ʋtau ʎyu ʔne-re ʎaik=ʔla ʎkui ʔte ʔba ʔta ʎer-e*
 いくつか 只 食-CONJ(SS) 好=LOC 新 與.INF 場 別.SG AUX-CONJ(SS)
ʎel-igwe.
 作-2/3PL.DEC

(投票を依頼されてもらった金を恩に報いず) ただ使つて、好き勝手に今度は (票を)
別のところ (候補者) に投じたりする人もいくらかゐる。

(40) のように、補助動詞 *ʎer-* と組み合はせて「異なる、別である、變はる」の意味を表はすことも多い。

- (40) *ʎelmagia ʔna ʎmol ʎu-pga-l ʎi ʎkui ʋpai ʔta ʎer-gwa*
 近頃 我 居.INF 來-1PL.SRD-LOC DEM また 性質である.INF 別.SG AUX-3SG.SRD

(親の世代の暮らし方と比べると) 近頃我々が暮らしてゐるところはまた異なるため...

この際、單獨で、あるいは補助動詞とともに反復表現を形成して「別々、様々、千變萬化」を表現することも見られる。(41, 42) はそのような例である。

- (41) *ʎgar-i ʎkol ʔta ʔta ʎer-gwe.*
 色-3SG.POSS 持.INF 別.SG 別.SG AUX-3SG.DEC

色がそれぞれ異なる。(色を持つこと別々である。)

- (42) *ʔmukal^e ʔba ʋber ʋye-re ʔkle=(ʔ)d ʔi ʔp*
 竹 長いものの部分 穿.INF RES-CONJ(SS) 静=ADV 持.INF 行.INF
ʌgla=ʔla ʋpaal ʋpu ʌdu-gwa ʔbe ʔd ʔta
 口.3SG.POSS=LOC 附.INF 吹 (VN) LV-3SG.SRD 鳴 (VN) LV.INF 別.SG
ʌer-e ʔta ʌer-e ʔta ʌer-e ʌel-gwi
 AUX-CONJ(SS) 別.SG AUX-CONJ(SS) 別.SG AUX-CONJ(SS) LV-3SG.SRD.DEM

(適当な長さに切つた) 竹のなかほどに孔を開けておき、そつと持つていつて、口に當てて吹くと様々な音が鳴る (音が鳴ること 別になり また別になり また別になる) のが...

「別」を表はす用法においても、単數で *ʔta*、非單數で *ʋtau* と表現する、數の對立があるやうに思はれる。非單數の *ʋtau* 「別」の例はすでに挙げたものでは (9, 10) に見られるが、次に二つの例文を加へておく。

- (43) *ʌdoon ʌel ʔer^e ʌkomn^e ʌo-gwe. ʔgn ʋtau ʌdoon ʋyel ʔta*
 美味 (VN) LV.INF DEST 最初 行-3SG.DEC 茸 別.NSG 美味 (VN) 如是 IRR
ʔe+ʋk-gw^e.
 LV+NEG-3SG.DEC

(この茸が) 最も美味しい (この茸が美味しいことはトップに行く)。他の茸はこれほど美味しくない。

- (44) *ʋke-pgi ʔde ʌkunal ʔta ʔs+(ʋ)k-gwe. ʔgn ʋtau*
 蒸-1PL.SRD.DEM 火が通る.INF とろける (VN) IRR LV+NEG-3SG.DEC 茸 別.NSG
ʔde ʌkunal ʌsu-gwe.
 火が通る.INF とろける (VN) LV-3SG.DEC

(この茸は) 煮ても煮崩れしない。ほかの茸は煮崩れする。

非單數の *ʋtau* 「別」と、*ʔpara* 「全て、皆」が共起する例も多い。

- (45) *ʔgn ʋtau ʔpara ʌwon^e ʔkepl ʌkol-gwa ʔkamʌtai ʔgn ʋtau ʌpor ʌkol-gw^e.*
 茸 別.NSG 全 INTENS 小 生-3SG.SRD 落雷 茸 稍 巨 生-3SG.DEC
ほかの茸はみな小さくて、(小さい茸の中では) 雷茸がやや大きい。

以上のやうに、非單數の *ʋtau* 「別」の用例は、「特定のもの (典型的には一つ) を除いたほかの全て」を表はすものばかりだといふ點が特徴的である。文脈を追ふと、焦點になる情報は (43) では「美味しい茸」、(44) では「煮崩れしない茸」、(45) では「雷茸」の話であり、それとの對比で *ʋtau* 「その他 (全て)」が持ち出されてゐる。また、非單數の *ʋtau* 「別」は、單數の *ʔta*

「別」と違ひ、補助動詞 λer -と組み合はせる用例は見られないし、反復されて「別々、様々」のやうな意味を表はすこともない。

4.2.3 累加される項目

各項目に Γta が付いた列挙表現でも、§4.2.1 で見たやうに複数のものを對比的に示すのではなく、同様のものを累加的に列挙する場合がある。この時、表現の含みは數へ上げに近くなる。實際に $\Gamma ta, \Gamma ta, \Gamma ta...$ と數へることがある。二つ目以降の提示では、「もう一つ」の「もう」の表はすやうな、追加の含みをもつと言ふべきかもしれない。次の例を見よう。

- (46) $(\lambda)bl\lambda mala \lambda bo-ka$ $(\lambda)nm\lambda bona \lambda do-gwe.$ $\Gamma ta \lambda bo-ki.$ Γta
 棒 刺さる-1SG.SRD 傷 (VN) LV-3SG.DEC 一 刺さる-1SG.SRD.DEM 一
 $\lambda bo-ki.$...
 刺さる-1SG.SRD.DEM

棒が(足に)刺さつて傷ができた。ほら一つはここに刺さつた。ほら(もう) 一つはここに刺さつた。

- (47) $\Gamma ka \lambda kipi \Gamma d-re$ $\lambda kenedeit \Gamma ta \lambda mol-gwa$ Γp Γta $\lambda mol-gwa$ Γp
 語 嘘 言-CONJ(SS) 候補 一 居-3SG.SRD 行.INF 更なる一 居-3SG.SRD 行.INF
 Γta $\lambda mol-gwa$ Γp $\lambda moni \lambda kunai \lambda gur$ $\Gamma ne-re$ $(\lambda)paul \lambda paul$
 更なる一 居-3SG.SRD 行.INF 錢 など 引.INF 食-CONJ(SS) 不貞 不貞
 λel $\lambda wan-e$ $\Gamma ka \lambda kipi \Gamma muru \Gamma d$ $\lambda wan-igwe.$
 作.INF 巡-CONJ(SS) 語 嘘 ばかり 言.INF 巡-2/3PL.DEC

(酒食金品を受け取らうとして、投票を約束すると)嘘については、一人の候補者のところに行き、また別の候補者のところに行き、また別の候補者のところに行き、お金を奪つて使ひ、裏切りを重ねて廻り、嘘ばかりついて廻る。

- (48) $\Gamma na \Gamma na \lambda to.$ $\Gamma na \Gamma na \lambda to.$ $\lambda yal \Gamma ta (\lambda)i$ $\Gamma ki=(\lambda)we.$ $\lambda yal \Gamma ta (\lambda)i$ $\Gamma ki=(\lambda)we.$
 我 我 與.IMP 我 我 與.IMP 男 一 DEM 悪=PF 男 一 DEM 悪=PF
 $\Gamma na \Gamma na \lambda to.$ $\lambda wai=\lambda we \Gamma d-re...$
 我 我 與.IMP 善=PF 言-CONJ(SS)

私に(票を)くれ。私に(票を)くれ。一人目のこの男は悪いやつだ。次のこの男も悪いやつだ。私に(票を)くれ。私は良い(男だ)と言つて...

以上のやうな、同様のものを列挙する用法は、複数の λtau 「いくつか」には見られないやうである。

Γta が追加の含みをもつ場合、 λama 「～も亦、もう～」と共起することも多い。

- (49) $\Gamma kom \wedge bl \quad \wedge i \quad \wedge kar \quad \wedge i \quad \Gamma ta \quad \wedge u-gwa \quad \Gamma ta \quad \wedge vama \quad \wedge u-gwa \quad \Gamma ta \quad \wedge vama$
 道 DEM 車 DEM 一 来-3SG.SRD 更なる一 亦 来-3SG.SRD 更なる一 亦
 $\wedge vama \quad \wedge u-gwa \quad \wedge mel \quad \Gamma ki \quad \wedge wan-igwe.$
 亦 来-3SG.SRD 多 INTENS 巡-2/3PL.DEC

この道に車つてのが一つ来て、また一つ来て、またもう一つ来て（といふ具合にどんどん来て）、たくさん通った。

複数の $\wedge tau$ 「いくつか」も $\wedge vama$ と共起し、 $\wedge tau \wedge vama$ 「もういくつか、もう少し」の表現が全く問題なくできる。ただし、 $\wedge vama$ なしでは「もう～」の含みは出ない。

4.2.4 その他

Γta は異常、非常、特別、格別などを表はす強調語としても働く。これは「別個」の意味の特別な場合と言へるかもしれない。次の (50a) は補助動詞 $\wedge er-$ が Γta を導入して特別に大きい程度を表はす例である。 Γta による強調がない表現 (50b) を参考のため添へる。

- (50) a. $\wedge knan \quad \wedge gol \quad \Gamma ta \quad \wedge er-ke.$
 飢 感.INF 非常 AUX-1SG.DEC
 腹が非常に減った（腹の減ることが甚だしかった）。
 b. $\wedge knan \quad \wedge go-ke.$
 飢 感-1SG.DEC
 腹が減った。

長く、複数の話にまたがる談話の中で、話題のまとまった一つの話の単位を Γta で指すこともある。例へば、千田 (2019) に見える訓話の思ひ出し語りでは、初めに「盗むな」、「人に疑はれるやうな行爲をするな」といふ教への内容について一通り (千田 2019: (6-31)) 話したあと、次のやうに締め括つてゐる。

- (51) $\Gamma ta \quad \wedge yel \quad \Gamma du-gw^e.$
 一 如是 言-3SG.DEC
 一つはさういふことを言つた。

そして、直後に次の話題に移る際には次のやうに切り出してゐる。

- (52) $\Gamma ta, \quad \wedge al-n \quad \wedge komn^e \quad \wedge vik^e \quad (\wedge V)ke \quad pai-\wedge na-gwa \quad \wedge ai$
 他 兄弟-2SG.POSS 初 家 建.INF 泊-FUT-3SG.SRD 所
 ほかには (第二に)、お前の兄さんの住む家に...

「*ta*「一」が複合語の要素になつてゐる場合が少なくとも一つある。*vsu*「二」と「*ta*「一」からなることが明らかな、*vsuta*「三」といふ表現である。同じ「二」と「一」からなる *vsu* *ntenan*「一二、一つ二つ」が僅少概数表現を形成するのに對し、*vsu*「二」に對し「*ta*「もう一つ」が加算されると「三」になるわけである。*ntenan*と「*ta*の違いはこのやうなところにも反映されるやうに見える。

4.3 不定用法

4.3.1 純粹な不定

トーンの振る舞ひから接語だと言へる=*ta*は基本的に不定を表はすやうである。まづ、談話に初めて導入される対象などにつく。次は、=*ta*が特定の、しかし不定の対象についてゐる例である。

(53) 文脈: 昔話の語り出し

lyal *ʋapal* *ʌmapn* *ʋsu*=(*ʔ*)*ta* *ʋme-pka*=(*ʌ*)*we*,
男 女 老 二=INDEF 居-2/3DU.SRD=PF

お爺さんとお婆さんの (ある) 二人がみたのですが、

この例では、二人の対象に對し=*ta*がついてゐる點も個々別々の「*ta*と異なる。なほ、この例に現はれる *vsu*=(*ʔ*)*ta*「ある二つ」は音聲的には [*ʃu:ʌ* ↓*ta*], *vsuta*「三」は音聲的には [*ʃu:ʌ* |*ta*] であり、ピッチの實現様式の違ひは大きい。

次に、対象が不特定である場合にも=*ta*がつくものがある。

(54) *ʌpran* *ʋpa-gwa* *lyal* *mol-ʋa-gwa-l* *ʌna-gi*
氣前良い (VN) LV-3SG.SRD 男 居-FUT-3SG.SRD-LOC 行.FUT-2SG.SRD.DEM
ʋkal=(*ʔ*)*ta* *ʔne* *mol-ʋa-gwa* *ʌna-dae* *ʌorpl*=(*d*) *ʔen*
物=INDEF 食.INF 居-FUT-3SG.SRD 行.FUT-2SG.SRD.MK 急=ADV 汝
ʌte-na-wdae.
與-FUT-3SG.SRD.MK

氣前の良い男のところに行く場合、(その人が) なにか物を食べてゐる時に行つても、すぐにお前に分けてくれる。

下降型の語の後に來てゐる場合は、聲調の上では自立語か接語か確かめられないが、次のやうなものは、意味的な特徴から上の接語と同じものと見るのが良いやうに思はれる。

(55) *ʌba* *ʋKaupa* *ʔeku* *ʌu-gwa* *ʌkui* *lyal* *ʌdraiwa*=(*ʔ*)*ta* *ʌGelwa*=*ʌwe* *ʌdu-pga*
しかし [人名] 後 來-3SG.SRD 今度は 男 運轉手=INDEF [人名]=PF 言-1PL.SRD

λ amblans λ kar ν au-re ν wan-gwa λ yal= Γ rae, λ Nera Γ Gaima λ amblans λ kar
 救急車 車 運轉-CONJ(SS) 巡-3SG.SRD 男=MK [地名] 救急車 車
 ν au-gwa λ yal= Γ rae λ u-gwa ν ama λ s-igwe.
 運轉-3SG.SRD 男=MK 來-3SG.SRD 亦 打-2/3PL.DEC

しかし、カウパは後から来てみたのだが（その前に）、今度はある男の運轉手、ゲルワといふ名前で救急車を運轉して廻るあの男が、ネラ・ガイマ（地区）の救急車を運轉するあの男が来たところを、やはり（暴漢たちが）襲った。

(56) λ taim= Γ ta ν na-pl+(Γ)a.
 時=INDEF 行.FUT-1DU+EXPL

そのうちいつか（或る時点で）二人で行かう。

(55) は初めて導入される人物に、(56) は特定されない時間に= Γ ta がついてゐる。

= λ mo 「～か（選擇）」、= Γ mere 「～のやうに、～程」、 ν yel 「このやうに、この程度」のやうな例示や選言の表現の最後に= Γ ta を用ゐる場合がある (Tida 2006: 230)。「そのうちの一つ」、「そのやうなもの一つ」と譯せる場合もあるので、個々別々の Γ ta の用法にも類似した意味を表はしてゐるとも取れる。しかし、例示や選言と組み合わせる用法を見ると、これは自立語 Γ ta ではなく、全てが接語= Γ ta といへるやうである。また、日本語で「一つ」と譯せない場合も多く見つかる。そもそも數へられる対象でないものに= Γ ta が付いてゐる場合もある。以下では、日本語に譯すことがほとんど無理な場合も含め、假の譯語を全てつけて表現のどのあたりに= Γ ta があるのか示すことにする。

次の (57) の例は最初の文 (57a) の二つの= Γ ta に接語特有の独自の語聲調を失つて低くなるメロディーが觀察されるが、續く文 (57b) に現はれた= Γ ta は独自の聲調を保つてゐる。しかし、非常に似た表現の中に現はれるので、同じものと見るべきであらう。

(57) a. λ kot (λ)tri λ ias= λ mo ν yel=(Γ)mere=(Γ)ta (λ)po λ ias= Γ mer^e ν yel=(Γ)ta
 裁判 三 年=か 如是=程度=INDEF 四 年=程度 如是=INDEF
 λ d-ipke.
 LV-2/3DU.DEC

(二人は) 裁判を三年かそんなぐらゐ(ばかり)、四年ほどそこら、した。

b. λ d-ipka (λ)wan λ ia= Γ mere=(λ)mo ν yel= Γ ta ν pa-gwa λ Nik ν Kuman
 LV-2/3DU.SRD 一 年=程度=か 如是=INDEF 有-3SG.SRD [人名] [人名]
 Γ para λ membra λ win λ su-m= λ ua λ du-gwa λ Nik ν Kuman λ mol-gwe.
 充分 議員 勝 (VN) LV-3SG=CF 言-3SG.SRD [人名] [人名] 居-3SG.DEC

そして一年ほどか、そのくらゐ(ばかり)して、ニク・クマンが（選挙に）勝つたものとしてよろしいと（判決に）言ふので、（議員は）ニク・クマンになつた。

次の (58-60) は下降型の語のあとに=「*ta* が現はれ、基底の語聲調が保たれてゐるが、みな、類例であるから、接語の=「*ta* だと考へる。

- (58) $\lambda al = \lambda mo$ $\lambda bola = \lambda mo$ 「*ka*/*kopa*=(λ)*mo* 「*ka* λkan =「*ta* $\lambda u-gwi$
 犬=か 豚=か 鳥=か いろいろなもの=INDEF 来-3SG.SRD.DEM
 犬か豚か鳥かいろいろなもののどれかが来た時...

- (59) (λ)*wan* $\lambda ia = \lambda mo$ (λ)*tu* $\lambda ia =$ 「*ta* $\lambda pa-gwa$ λikn λi λkui λNik $\lambda Kuman$ $\lambda memba$
 一 年=か 二 年=INDEF 有-3SG.SRD 時 DEM 再 [人名] [人名] 議員
 $\lambda mol-gw^e$.
 居-3SG.DEC
 一年か二年かそこら経つてから再びニク・クマンが議員になつた。

- (60) $\lambda vene$ λapl λile $\lambda Suwawe$ 「*Wera* $\lambda Mori = \lambda mo$ λyel $\lambda du-gwa =$ 「*ta* $\lambda mol-m$
 さて 奥 水平. あの [地名] [人名] [人名]=か 如是 言-3SG.SRD=INDEF 居-3SG
 $\lambda du-gwe$.
 言-3SG.DEC
 さて、向ふの奥のスワウエにウエラ・モリとかそんな風にいふの人がゐるのださうだ。

次の (61) では、二つ目の=「*ta* はこれまでに見たものと同様、=「*mere* 「～のやうな」と共起してをり、また接語特有のメロディーで現はれてゐる。一つ目の=「*ta* は例示や選言の文脈にはなく、接語特有のピッチが現はれる環境にないが、明らかにそれと平行する表現である。

- (61) 「*na* 「*el* λi $\lambda mo-ka$ $\lambda kore = (\lambda)we$ $\lambda oo-na$ $\lambda gaal^e = (\Gamma)la$ $\lambda i = \Gamma ra = (\lambda)we$
 我 附近 DEM 居-1SG.SRD ADVRS=PF 手-1SG.POSS 仔=LOC DEM=MK=PF
 $\lambda doon =$ 「*ta* $\lambda el-gwa$ $\lambda oo-na$ $\lambda gaal^e$ $\lambda sula = (\Gamma)la$ λi
 痒 (VN)=INDEF LV-3SG.SRD 手-1SG.POSS 仔 掌=LOC DEM
 $\lambda doon = \Gamma mere = (\Gamma)ta$ $\lambda el-gwa$
 痒 (VN)=如=INDEF LV-3SG.SRD

私がここにゐた時だが、この手の小指がだな、なにか痒くて、この手の小指の掌側がなにか痒いやうだつたので...

以上のやうに、不定の=「*ta* を同定する手続きとして、形式面の特徴を押しへた上で平行する出現環境を辿ることを認めれば、用法の擴がりを確認することができよう。英語に譯すと *some*,

someone, sometime, somewhat のような意味領域を中心に使はれてゐる點で、接語= Γta の機能のラベルとしては不定を選んでも問題なささうである。

しかし、不定を表はすやうに見えるもののなかには、自立語に附着してゐない Γta がある。次の例では Γta 文頭にあり、先行する自立語に附着してゐない。

- (62) \sqrt{dam}^e λgua λgua Γta $\Gamma ko + \sqrt{k-gwe}$. Γta
 ニューギニア・オーク 出鱈目 出鱈目 IRR 生 +NEG-3SG.DEC INDEF
 $\lambda kol-gwa-l$ λai $\lambda kol-gwe$.
 生-3SG.SRD-LOC 所 生-3SG.DEC

(ダラダラといふ茸は) ニューギニア・オーク*に出鱈目に生えるものではない。
どこか/ある、生えるやうな場所に生えるのだ。

(*ニューギニア・オークとは *Castanopsis acuminatissima* のことである。)

不定を表はす自立語の Γta が存在し、直前に別の自立語があれば接語化して= Γta で現はれるものだと考へておきたい。

接語的な振る舞ひを示すものの中には、次のやうなものが含まれる。

- (63) \sqrt{gaal} \sqrt{su} λkul $\sqrt{yo-gwi}$ $\Gamma wa-m=(\Gamma)ta$ λkul $\sqrt{ye-re}$
 兒 二 産.INF 慰-3SG.SRD.DEM 息子-3SG.POSS=INDEF 産.INF 慰-CONJ(SS)
 $\lambda apl=(\Gamma)ta$ λkul $\sqrt{ye-re}$ $\lambda el-m$ $\lambda du-gwe$.
 女兒.3SG.POSS=INDEF 産.INF 慰-CONJ(SS) LV-3SG 言-3SG.DEC

子供を二人産んだが、一人(目)は息子を産み、(もう)一人は娘を産んだと言ふ。

(63) の例は、用法としては複数のうちの各項目になる「個々別々」と似てをり、判別が難しい。強ひて言へば、(63) の= Γta は對比的あるいは累加的な強い含みを持たず、比較的中立的な列挙表現を構成してゐる。

4.3.2 可能性提示

明らかに接語の振る舞ひを示す= Γta が現はれる表現の中には、次のやうな例がある。

- (64) Γila λwau $ye-\sqrt{na-n}=(\Gamma)kene$ Γen $\Gamma er^e=(\Gamma)ta$ \sqrt{su} λop λel
 内 空 (VN) LV-FUT-3SG.CONJ(DS)=後 (DS) 汝 柴=INDEF 刈.INF 把手 作.INF
 \sqrt{kn} $\lambda i-na-dae$ \sqrt{kn} Γyu $\lambda mena$ λi
 肩にかける.INF 取-FUT-2SG.SRD.MK 肩にかける.INF 持つて来る.INF 外 DEM
 λer $\lambda kor^e=\sqrt{pare}$ Γen Γere λyal \sqrt{vik}^e $\lambda p-o$ $\lambda du-gw^e$.
 移.INF COMPL-CONJ(SS)=後 (SS) 汝 DEST 男 家 行-IMP 言-3SG.DEC

家が留守の時に、お前が柴刈をして(括つて)把つ手をつけて肩にかけて行く場合は、肩にかけて運んで來たら(その家の)外に下ろしてしまつてお前は男の家に歸れと言つた。

上の例では文脈からも、柴は當然一本ではありえない。形式的にも内容的にも個々別々の用法でないことは確かである。そして、これまでの議論から、形式的には不定が想定される。ただ、不定であることを示す表現意圖が明確ではない。

このやうに、「一つ」の意味が表現されてをらず、条件節の中にしばしば出現する接語=*ɽta* が存在する。このやうなものを、なんらかの「場合」を假定する節に特有に現はれるものと見ることができるかもしれない。ここではそのことを可能性提示と呼ぶ。

次の例 (65) では=*ɽta* が一匹を示してゐるとしても、論理的には矛盾はない。ただ、「一匹飼ふなら一匹飼へ」と表現してゐるとするのは不自然である。

- (65) *ɽbola* *ɽtop* *ɽs-na-gi* *ɽbola* *ɽi* *ɽapal* *ɽbola* *ɽi* *ɽsu* *ɽtop* *ɽs-o*
 豚 買 (VN) LV-FUT-2SG.DEM 豚 DEM 女 豚 DEM 二 買 (VN) LV-IMP
ɽdu-gw^e. *ɽyal* *ɽbola=ɽta* *kul-ɽa-gi* *ɽtenan=ɽta* *ɽkul-o* *ɽdu-gw^e*.
 言-3SG.DEC 男 豚=INDEF 飼-FUT-2SG-DEM 一=INDEF 飼-IMP 言-3SG.DEC

豚を買ふときには、豚は雌豚なら二匹買へと言つた。雄豚を (一匹?) 飼ふなら一匹 (だけ) 飼へと言つた。

(65) では=*ɽta* は下降型の語に後續してをり、ピッチの實現様式から接語かどうかを決めることもできない。しかし、不定の一種であり、なかでも可能性提示の類例だとすれば理解できる。

可能性提示の用法でも、接語だけではなく、自立語 *ɽta* があるやうである。次の (66) は茸が一個であることを表現してゐるものと見ても矛盾はないが、一個であることを表現する必要はなく、上と同様のものである可能性がある。

- (66) *ɽta* *ɽul-e* *ɽau* *ɽbeke* *ɽd-na-wdae* *ɽkama* *ɽorpl=ɽd*
 INDEF 摘-CONJ(SS) 握-INF 折 (VN) LV-FUT-3SG.SRD.MK 黒 (VN) 急=ADV
ɽs-na-wdae.
 LV-FUT-3SG.SRD.MK

もし (トプラム・カルといふ茸を) もいで、手で折つた場合、すぐに黒くなる。

以上のやうに、不定の一種として、可能性提示の=*ɽta*、*ɽta* が存在するやうに思はれる。しかし、可能性提示の=*ɽta*、*ɽta* としたのは便宜的な解釋で、まだはつきりした認定基準はないので積極的に認めてゆくことはできない。次の (67) を見てみよう。

- (67) *ɽta* *ɽna* *kar-ɽa-l=(ɽ)d* *ɽu-na-ga* *ɽna* *ɽDom* *ɽkamn* *ɽmol=ɽua*.
 INDEF 我 見-FUT-1SG=QUOT 來-FUT-2SG.SRD 我 ドム 界 居.1SG=CF

(あなたが) もし私に逢ひに來たければ、私はドム地域にゐる。

(67) は個々別々の用法として「あなたたちのうち一人」あるいは不定の用法として「あなたたちのうち誰か」と解釋もできる。もう一つの可能性として、「ある場合」を示す節に可能性提示

の「*ta*」が現はれてみると見ることもできるかもしれない。しかし、解釋の可能性ばかり増えて判断は定まらない。

すでに見た次の例の下線部は、否定との組み合わせで「*ta*」が出てきてゐるものと考えた。

- (68) *ni ta mo+Vkl-a-gwa en Nbola ni ta Vtop s*
 DEM IRR 居 +NEG-FUT-3SG.SRD 汝 豚 DEM IRR 買 (VN) LV.INF
ku+Vkl-a-ga en Nbola Vkal Nkan ta Vye+(V)kl-a-gwa en
 飼 +NEG-FUT-2SG.SRD 汝 豚 物 種 IRR 有 +NEG-FUT-3SG.SRD 汝
nd-na-n en Vkan ml^e ni ler-go vkamn kawa
 言-FUT-3SG.CONJ(DS) 汝 見.INF 上 DEM 移-2SG.CONJ(DS) 天 雲
lip^e nd-na-m=lua ndu-gw^e. = (22)
 上方. あの 有-FUT-3SG=節末 言-3SG.DEC

これ (豚) がみなければ、お前が豚を買って飼はなければ、お前に豚や他の財産がなければ、(人は) お前のことを論ぶが、お前が見上げてても空 (雲) がある (ばかりだ) と言った。

可能性提示の「*ta*」を積極的に認めるとすれば、(68)において、否定との組み合わせの「*ta*」が存在せず、可能性提示の「*ta*」が出てきてゐるといふ解釋も検討しなければいけなくなる。

また、これもすでに見た次の例の場合、複合述語に對して、「*ta*」が二回出てきてゐる。複合述語の否定だから二回出てきてゐるのか、「*ta*」の一つが可能性提示としてはたらいてゐるのか、判断ができない。

- (69) *ta b^a+Vkl-e nl^e=(λ)ya ni ta Vdu ler-e gal ler-e*
 IRR 削 +NEG-CONJ(SS) 液=と DEM IRR 絞.INF 除-CONJ(SS) 炙.INF 除-CONJ(SS)
ta e+Vkl-a-pgi yu Vke ne-Vra-pga laral
 IRR LV+NEG-FUT-1PL.SRD.DEM 只 蒸.INF 食-FUT-1PL.SRD 狂亂 (VN)
kul-Va-pdae = (23)
 LV-FUT-1PL.SRD.MK

(トプラム・カルといふ茸の皮を) 削らず、また (もし) 液などを搾り取つたり煮こぼしたりしない場合、そのまま調理して食べた場合、狂亂状態に陥る。

以上に見たやうに、可能性提示の「*ta*」、*ta* は、あくまで、限定的に認めるにとどめる方が良ささうである。この点、千田 (2019) は可能性提示を非現實の一種と考へて、多くの「*ta*」に對して非現實の機能を認めすぎてゐる。

ただ、「一個」を必ずしも表はさず接語の音調を持つといふ不定的な振る舞ひが確認できるものの中に、条件節に出現し、その機能を特定しにくいものがある。それがここで可能性提示の用法としたものである。そして、ドム語において、不定の用法が非現實の用法となんらかのつながりをもつかどうか、引き続き検討する価値はありさうである。ここに見た問題は、可能性

提示の文脈と否定の文脈が重なることがあるといふ問題である。§3 では、非現実の「*ta*」が否定対極表現に端を發する可能性を述べたが、不定の用法が擴張する道筋を辿り非現実の用法へと發達した可能性がある。

5 複合表現による「一つ」

聞き出し (elicitation) 調査で「一」に該当する表現を求めると、眞つ先に教へてくれる表現が *ʌtenan=ʌta* である。しかし、テキストの中で探してみると、用例の数は多くはない。

ʌtenan=ʌta の用法は、*ʌtenan* の用法に近いところがある。まづ、同一の含みを持つ場合がある。次の (70) は (5) と同じテキストに含まれ、(5) と同様、一つの、同一の川に二つの名前がついてゐることを説明する表現である。

- (70) *ʌpeldm=(ʌ)Nule ʌAu=ʌNule ʌi ʌnl ʌtenan=ʌta ʌdu-gwe. ʌdu-m=ʌba ʌkaa*
 [河川名] [河川名] DEM 川 一=INDEF 有-3SG.DEC 有-3SG=ADVRS 名
ʌi ʌsu ʌyo-pge.
 DEM 二 稱-1PL.DEC

(今言つた) このペルディム川とアウ川は一つの川です。けれど、名前は二つ付いてゐます (我々は付けてゐます)。

川の単一性あるいは同一性は (5) では *ʌtenan* で表現されてゐるが、(70) では *ʌtenan=ʌta* で表現されてゐる。

次の (71) は「同時」、「同日」とも理解できるやうな「ひと時」、「一日」が *ʌtenan=ʌta* で表現されてゐる例である。

- (71) *ʌma-m ʌekʰ ʌtenan=ʌta ʌkamn ʌtenan=ʌta ʌta-gwi ʌgaal ʌsu ʌkul*
 母-3SG.POSS 時 一=INDEF 天 一=INDEF 明-3SG.SRD.DEM 兒 二 産.INF
ʌyo-gwi
 慰-3SG.SRD.DEM

母親がひと時に、一日のうちに (日が出てゐるうちに)、子供を二人産んだ (産んであやした) のだが...

次のやうに、*ʌtenan=ʌta* が唯一の含みを持つやうに見える場合がある。

- (72) *ʌbola ʌtop ʌs-na-gi ʌbola ʌi ʌpapal ʌbola ʌi ʌsu ʌtop ʌs-o*
 豚 買 (VN) LV-FUT-2SG.DEM 豚 DEM 女 豚 DEM 二 買 (VN) LV-IMP
ʌdu-gw^e. ʌyal ʌbola=ʌta kul-ʌa-gi ʌtenan=ʌta ʌkul-o ʌdu-gw^e.
 言-3SG.DEC 男 豚=INDEF 飼-FUT-2SG-DEM 一=INDEF 飼-IMP 言-3SG.DEC
 =(65)

豚を買ふときには、豚は雌豚なら二匹買へと言つた。雄豚を飼ふなら一匹 (だけ)飼へと言つた。

ただ、*ʌtenan=ʌta* に唯一の含みを持たせて使ふ時には、次のやうに=*ʌgra* 「～だけ」を後續させるのが普通である。

- (73) *ʌgaal ʌapl ʌteran=ʌta=(ʌ)gra ʌkul ʌyogwe.*
 兒 女兒.3SG.POSS 一=INDEF=だけ 産.INF 慰-3SG.DEC

子供は娘を一人だけ産んだ。

ʌtenan が唯一性の含みを持つて使はれる時、=*ʌgra* 「～だけ」の付いた例が見当たらない。すると、*ʌtenan* は=*ʌgra* に頼らずとも唯一性の表現を十分に構成しうるのに對し、*ʌtenan=ʌta* は唯一性の強い含みを持つてゐない可能性が高い。

次のやうな例における *ʌtenan=ʌta* も、唯一の含みに通じるところがある。

- (74) *ʌmekon ʌi ʌai ʌgua ʌgua ʌta ʌko+ʌk-gw^e. ʌer^e*
 メコン (茸名) DEM 所 出鱈目 出鱈目 IRR 生 +NEG-3SG.DEC 木
ʌdam ʌmel ʌki ʌdu-m=ʌba ʌgua ʌgua ʌta
 ニューギニア・オーク 多 INTENS 有-3SG=ADVRS 出鱈目 出鱈目 IRR
ʌko+ʌk-gw^e. ʌai ʌtenan=ʌta ʌkol-gwa-l ʌi ʌkol-gw^e.
 生 +NEG-3SG.DEC 所 一=INDEF 生-3SG.SRD-LOC DEM 生-3SG.DEC
ʌdam ʌwai ʌdu-gwa ʌai ʌmapn=ʌta ʌi ʌkol-gw^e.
 ニューギニア・オーク 良 有-3SG.SRD 所 根本=LOC DEM 生-3SG.DEC

メコンは出鱈目なところには生えない。ニューギニア・オークの木はたくさんあるが、(どのニューギニア・オークでもよくはなく) 出鱈目には生えない。ある特定の、生えるところに生える。良いニューギニア・オークのあるところの根本に生える。

(74) の表現全體が次の例と酷似することに注意しなければならない。

- (75) *ʌdam^e ʌgua ʌgua ʌta ʌko+ʌk-gwe. ʌta ʌkol-gwa-l*
 ニューギニア・オーク 出鱈目 出鱈目 IRR 生 +NEG-3SG.DEC INDEF 生-3SG.SRD-LOC
ʌai ʌkol-gwe. = (62)
 所 生-3SG.DEC

(ダラダラといふ茸は) ニューギニア・オークに出鱈目に生えるものではない。
どこか/ある、生えるやうな場所に生えるのだ。

(74) では *ʌtenan=ʌta* が、(75) では *=ʌta* が、特定の不定 (a certain) の対象を表現するために使はれてゐる。不定の *=ʌta*、*ʌta* は特定の対象も不特定の対象も指すことがあることを指摘した。それに對し、*ʌtenan=ʌta* は主に特定の対象を指すために使はれるやうである。その點が兩者の違いになる。

もう一つ、注目すべきなのは、中立的な列挙表現に *ʌtenan=ʌta* が不定の *=ʌta* と同列に扱はれてゐる例があるといふことである。

- (76) *ʌgaal ʌi ʌtenan=ʌta ʌkul ʌyo-gwi ʌyal ʌgaal ʌtenan=ʌta ʌkul*
 兒 DEM 一=INDEF 産.INF 慰-3SG.SRD.DEM 男 兒 一=INDEF 産.INF
ʌye-re ʌpap ʌgaal=ʌta ʌkul ʌye-re ʌel-gwa
 慰-CONJ(SS) 女 兒=INDEF 産.INF 慰-CONJ(SS) LV-3SG.SRD

子供を一人産んだが、一人 (目) は男の子を産み、(もう) 一人は女の子を産んだのだが...

(76) では *ʌtenan=ʌta* と不定の *=ʌta* が列挙される項目の修飾部に同様に現はれてゐる。この文はすでに示した次の文と、構造的・内容的に酷似してゐる。

- (77) *ʌgaal ʌsu ʌkul ʌyo-gwi ʌwa-m=ʌta ʌkul ʌye-re*
 兒 二 産.INF 慰-3SG.SRD.DEM 息子-3SG.POSS=INDEF 産.INF 慰-CONJ(SS)
ʌapl=ʌta ʌkul ʌye-re ʌel-m ʌdu-gwe. = (63)
 女兒.3SG.POSS=INDEF 産.INF 慰-CONJ(SS) LV-3SG 言-3SG.DEC

子供を二人産んだが、一人 (目) は息子を産み、(もう) 一人は娘を産んだと言ふ。

以上に見たやうに、*ʌtenan=ʌta* は、*ʌtenan* と似て、同一性を表はす文脈や、唯一性を表はす文脈で使はれる。ただし、単一でない少量を表はす場合は見つからず、唯一性の含みは強いとはいへない。また、*ʌtenan=ʌta* は不定の *ʌta* や中立的列挙の一項目を指す不定の *=ʌta* と同様の環境に現はれることがある。ただし、不定の用法で見たやうな、単一でない対象や不特定の対象に使はれた例が見当たらない。つまり、*ʌtenan=ʌta* は、形式に見える通り、*ʌtenan* と *=ʌta* の両方の側面を持ち合はせる、「同一」あるいは「特定かつ不定」の含みを持ちうる「一つ」だといふことが言へる。

さて、 $\lambda\text{tenan}=\text{ʔta}$ の第一の要素である λtenan は下降型の聲調を持つため、後続の $=\text{ʔta}$ が自立語なのか、接語なのか、ピッチの振る舞いだけから特定することはできない。しかし、 $\lambda\text{tenan}=\text{ʔta}$ の第二要素は、不定を表はす $=\text{ʔta}$ 、 ʔta が多く接語で現はれるのと同様、どうやら、接語のやうである。といふのも、數量を主に表はす表現の中に、 $=\text{ʔta}$ を要素として含む複合形式があるからである。次の四項目が見付かつてゐる。

- (78) a. $\text{ʔyokau}=(\text{ʔ})\text{ta}$ 「少し」
 b. $\lambda\text{slau}=\text{ʔta}$ 「少し」
 c. $\lambda\text{mapn}=\text{ʔta}$ 「たくさん、ひどく」
 d. $\lambda\text{wena}=\text{ʔta}$ 「たくさん、ひどく、遠く」

(78)のうち、韻律上、接語のパターンを明らかに示してゐるのは (78a) のみである。しかし、形式的な平行性を捉へるならば、(78b-78d) もみな $=\text{ʔta}$ を含む數量表現だと考へるのが適當ではないだらうか。そして、 $\lambda\text{tenan}=\text{ʔta}$ をこのやうなものの一つとして位置づけることには無理がないやうに思はれる。

これらの數量表現は、強調語の置き方に特徴がある。通常の形容詞 (例へば λwai 「良い」) は強調語を後ろに従へる (例へば $\lambda\text{wai} \lambda\text{wone}$ (良 眞) 「とても良い」) のに對し、これらの數量表現を強調する場合には λwone 「とても、眞に」が第一要素の後ろに添へられ、次のやうな構成を取る。

- (79) a. $\text{ʔyokau} \lambda\text{wone}=\text{ʔta}$ 「とても少し」
 b. $\lambda\text{mapn} \lambda\text{wone}=\text{ʔta}$ 「とてもたくさん、とてもひどく」

$\lambda\text{tenan}=\text{ʔta}$ もこれらと同じ振る舞いを示す。

- (80) $\lambda\text{tenan} \lambda\text{wone}=\text{ʔta}$ 「たつた一つ」

また、 ʔyokau については $=\text{ʔta}$ を伴はない單獨表現 ʔyokau 「少しだけ」や、反復表現 $\text{ʔyokau} \text{ʔyokau}$ 「少しづつ」をも持つ。 $\lambda\text{tenan}=\text{ʔta}$ に對して、 λtenan 「一つだけ」や、 $\lambda\text{tenan} \lambda\text{tenan}$ 「一つづつ」があるのと形式的・意味的に平行性が認められる。それだけではなく、會話の中で聞いた表現に次のやうな例がある。

- (81) $\lambda\text{kipi} \text{ʔyoko} \lambda\text{d-o}$
 嘘 少 言-SG.IMP

嘘もほどほどにしろ。(嘘をつくのは少しにとどめてくれ。)

ここで、 ʔyoko は ʔyokau の自由變異である。 $\text{ʔyoko}=(\text{ʔ})\text{ta} \lambda\text{do}$ 「少し言へ」と言つたらどうなるといふ問ひに、話者は吹き出した。 $=\text{ʔta}$ のつかない ʔyokau は時に否定に、あるいは「無」に

近づく僅少であるのに對し、 $\text{ʔyokau}=\text{ʔta}$ は少しなりとも存在することを主張する表現になるわけである。このコントラストが、 ʔtenan と $\text{ʔtenan}=\text{ʔta}$ にもある程度平行的に見られると言へる。 $\text{ʔtenan}=\text{ʔta}$ は同一性の含みをもちうるが、僅少を表はす用法がなく、唯一性を表はす用法は ʔtenan ほど顯著ではない。

少し似てゐるのが英語の *a few/few*、フランス語の *un peu/peu*、ドイツ語の *ein wenig/wenig* の違ひ (Jespersen 1924: 324) だが、ドム語でこれほど綺麗に對應すると認められるか、といふ點については今後さらなる検討が必要である。ただ、この對立が少量・少数にのみ認められることは、西洋語と一致する。また、多量・多数について英語の *a lot* に對應するやうに $\text{ʔmapn}=\text{ʔta}$ 「たくさん」、 $\text{ʔwena}=\text{ʔta}$ 「たくさん」があることも興味深い。

6 をはりに

既存の電子化テキストには本稿で注目した韻律の情報が不足してゐたため、フィールドノートと録音資料から、電子化せずに眠つてゐたテキストを新たに打ち込みながらデータを示した。本稿にみえる用例の多くが明らかに茸關聯、選舉關聯のテキストから採られてゐることは、作業の對象にしえたデータ量がまだ少ないことを端的に示してゐる。一方で、自然發話の中に類似の表現を集めることが觀察・分析の手續きの有効であるといふ感觸も得ることができた。そのため敢へて分野を限つた作業を續けた。

今後の課題が多く残つてゐる。韻律情報を含むデータの擴充が第一である。なかでも、本稿では非現實の ʔta の韻律的振る舞ひを検討できてゐない。「一」を表はす形式の品詞としての位置付けや、數量詞の意味・内容面でのさらなる検討も必要である。

ドム語には數を表はすことを主たる任務とする語根は三つしかない (cf. Tida 2006: 58)。 ʔtenan 「同一、唯一」と ʔta 「一個」と ʔsu 「二」である。そして、數を主として表はす語は、この三つに複合語の ʔsuta 「三」を加へた四つしかない。その他の數表現については Tida (2006) を参照されたいが、全てある種の複合的な表現であり、一語ではない。限りある數語根のうち二つを「一」のために充てるのは、どこか無駄遣ひのやうにも見える。しかも二つの「一」では飽き足らず $\text{ʔtenan}=\text{ʔta}$ といふ複合形式を創つたり、自立語 ʔta と接語 ʔta との區別をしたりする。そして表現が複數ある以上、使ひ分けが存在する。

泉井 (1978: 190) よると、印歐祖語にも「一」を表はす語根が二つ (*sem-, *ei-/ei-no-) 指定される。二つの「一」のうち、一つ (*sem-) は「一つにまとめる、集める」、もう一つ (*ei-/ei-no-) は「いくつかのなかから特に一つを抜き出して示す」意味を持つてゐたといふ。ドム語の ʔtenan と ʔta の意味的な違ひを髣髴させるものがある。

今、ドム語にはトク・ピシンからの借用語が大量に流入してゐる。數表現も例外ではない。すでに固有語による「四」以上の數表現が日常的に使はれることはないし、傳統的な「二」や「三」もすでに危ふいところにさしかかつてゐる。唯一本稿で扱つた「一」は、固有語の諸形式が非常に元氣である。完全に對應するトク・ピシン表現がないからであらう。ドム語の「一」を表はす諸形式は、その意味で極めてドム的な表現世界の一つを示してくれてゐる。

略號

=	接語境界	DEM	指示詞	MK	共有知識
+	結び付きの強い接語境界	DEST	目的地	NEG	否定
1	一人稱	DS	異主語	NSG	非單數
2	二人稱	DU	雙數	PF	句末
3	三人稱	EXPL	説明	PL	複數
ADV	副詞化	FUT	未來	POSS	所有者
ADVRS	逆接	IMP	命令形	RES	結果
AUX	助動詞	INDEF	不定	QUOT	引用
CF	節末	INF	連用形	SG	單數
CONJ	連結	INTENS	強調	SRD	從屬法
COMPL	完結	IRR	非現實	SS	同主語
DEC	平叙	LOC	場所化	VN	述語性名詞
		LV	輕動詞		

謝辭

本稿は JSPS 科研費 17H02333, 18K00533, 19KK0012 の成果の一部を含む。本稿にコメントを下された鈴木博之さん、古本真さんに感謝する。編輯擔當の藤原敬介さんにもお世話になった。

参考文献

- 泉井久之助 (1978) 『印欧語における数の現象』 大修館書店.
 Jespersen, Otto (1924) *The philosophy of grammar*. Unwin Brothers, (reprinted in 1963).
 Tida, Syuntarô (2006) *A Grammar of the Dom Language*. Ph.D. dissertation, Kyoto University.
 千田俊太郎 (2019) 「ドム語の訓話」『ありあけ 熊本大学言語学論集』 18、1-28.

受理日 2020 年 4 月 15 日

ハイスラ語の語彙的接尾辞について

－ 身体部位接尾辞の使用に関する諸観察 －

ワットゥクンプ テロ

(Tero Vattukumpu)

京都大学大学院 (日本学術振興会特別研究員) ・ terova@gmail.com

キーワード: ハイスラ語、語彙的接尾辞、身体部位接尾辞、意味役割

1 はじめに

本稿では、最近のフィールド調査で集めたデータに基づいて、ハイスラ語 (Haisla) で見られる語彙的接辞 (lexical affix) という派生接辞の一種である身体部位接尾辞の使用に関して現段階で観察できたことについて論じる。身体部位接尾辞は述語に付き、身体の各部位の意味をもたらす接尾辞のことである。ハイスラ語には、身体部位を表す自由形態素もある¹。身体部位接尾辞の例を集めている目的は次の通りである:

- A) 先行研究で挙げられている身体部位接尾辞が実際に使われているかどうかの確認。
- B) 身体部位接尾辞は先行研究で指摘されているような形態音韻論的变化 (いわゆる end effect) を引き起こすかどうかの確認。
- C) 身体部位接尾辞はどのような意味で使えるのかなどの確認。

前述のデータ採取目的を踏まえて、本稿では次の4つを明らかにすることを目的とする:

- D) 先行研究で挙げられている身体部位接尾辞は全て筆者のインフォーマントが使えるわけではないこと、先行研究の記述と違う意味で使う場合があること、先行研究で見ていない身体部位接尾辞を使っていること。また、その理由についての私見も述べる。
- E) インフォーマントが一部の身体部位接尾辞を使った際に、先行研究の記述と違う形態音韻論的变化が生じる例があること。
- F) ハイスラ語の身体部位接尾辞が担う意味役割は道具 (instrument) が不可能なようであること。
- G) 先行研究では、変化を伴う他動詞に身体部位接尾辞が付いた時に再帰的な使い方しかないと言われているにも関わらず、実際には非再帰的な使い方もあること。

本稿の内容は次の流れで進めていく:

- ・ 先ず第2章では、ハイスラ語の概要を紹介し、本稿で使われる語彙的接辞と end effect という用語について説明する。
- ・ 第3章では、本稿のテーマの背景と先行研究及び本稿で扱うデータなどについて述べる。
- ・ 第4章では集めたデータを示し、第5章では、データについての考察を行う。
- ・ 第6章で考察をまとめ、第7章では、残る問題点と今後の課題について述べる。

¹ 本稿で示すデータでも分かるように、身体部位接尾辞は身体部位を表す自由形態素よりジェネリックな意味を持っている。

2 ハイスラ語について

ハイスラ語は、カナダのブリティッシュ・コロンビア州でハイスラ族という先住民に話されている危機言語であり、ワカッシュ語族の北ワカッシュ語派に属している。2018年8月の時点で、ハイスラ語の話者数は、87人であった (Vattukumpu 2018: 42)。話者は全員ハイスラ語と英語のバイリンガルで、ほとんどブリティッシュ・コロンビア州の中央部に所在しているキタマート村 (Kitamaat Village) に在住している (地図1)。



地図1: キタマート村の所在地

ハイスラ語は、基本語順が述語—主語—目的語であり、音韻論的・形態論的な体系が複雑で、複統合的な言語であると記述されたことがある (Bach 1995: 13)。

ハイスラ語の音韻体系や人称接語及び本稿で採用されている表記法については、本稿末尾に付属参照資料を添付している。次に、本稿での議論を進めるにあたり、説明しておくべき特徴として、語彙的接尾辞といわゆる *end effect* という形態音韻論的現象について示す。

2.1 語彙的接辞について

語彙的接辞は、具体的で、且つ、語彙的な意味をもつ拘束形態素 (Muro 2008: 6, Kazama 2011: 56 など) であり、Mithun (1997: 357) によって「語根のような接辞」とも呼ばれている接辞のことである。ハイスラ語の語彙的接辞は全て接尾辞であり、意味的に動詞や名詞に相当するものもあれば、副詞的表現などに相当するものもある。身体部位接尾辞は、語彙的接尾辞の1種類である。語彙的接尾辞は、本稿のグロスで LS と表記している。

また、ハイスラ語の接尾辞には、最初の音素が脱落する異形態をもつものがある (Bach 1990b: 63, Bach 2001a: 55-56)。このような接尾辞の最初の音素は、先行研究 (Bach 1990b: 63) に倣って、ブラケット ([]) の中に入れている。

2.2 *end effect* について

ハイスラ語の接尾辞は、普通接尾辞 (*plain suffixes*)、有声化接尾辞 (*voicing suffixes*) と声門化接尾辞 (*glottalizing suffixes*) の3種類に分けることができる (Bach 2001a: 57-60)。有声化接尾辞と声門化接尾辞は、それらが付く語基 (*base*) の末子音を一定のパターンに従って別の子音に変えることがある。語基の末子音がこのように接尾辞によって変わることを先行研究では *end effect* と呼んでいる (Bach 2001a: 57)。これに対して、普通接尾辞は *end effect* を生じさせることがない。*end effect* によって変わる子音は、無声の破裂音と破擦音及び幾つかのその他の子音である。

本稿では、先行研究でも使われている記号 (Bach 2001a: 57-58) を採用し、普通接尾辞をハイフン (例: -t PAST) で、有声化接尾辞をイコール (例: =il ‘室内で’) で、声門化接尾辞をハイフンとビックリマークの組み合わせ (例: -liχd DES) で表示する。Bach (2001a: 58) は、有声化接尾辞と声門化接尾辞による *end effect* を次の表1のようにまとめている。

表 1: Bach (2001a: 58) による end effect のまとめ

語基末の子音	有声化接尾辞の end effect	声門化接尾辞の end effect	
無 声 破 裂 ・ 破 擦 音	-p	-b	$-\dot{p}$
	-t	-d	$-\dot{t}$
	-k	-g	$-\dot{k}$
	$-k^w$	$-g^w$	$-\dot{k}^w$
	-q	$-\bar{g}$	$-\dot{q}$
	$-q^w$	$-\bar{g}^w$	$-\dot{q}^w$
	-c	-z	$-\dot{c}$
	$-\lambda$	$-\lambda$	$-\dot{\lambda}$
そ の 他 の 子 音	-s	-y / -z	$-\dot{y} / -\dot{c}$
	-x	-n	$-\dot{n}$
	$-x^w$	-w	$-\dot{w}$
	$-\bar{x}^w$	同上	同上
	-l	-l	$-\dot{l}$
	-l	$-\dot{l}$	$-\dot{l}$
	-m	$-\dot{m}$	$-\dot{m}$
	-n	$-\dot{n}$	$-\dot{n}$

表 1 で見て取れるように、無声破裂音と無声破擦音は、有声化接尾辞によって有声化され、声門化接尾辞によって声門化される。これに対して、その他の end effect を受ける子音は多少異なる変化のパターンに従う。Vink (1977: 13) によれば、Bach (1990: 58) が挙げていない幾つかの子音も end effect を受ける。この子音とその end effect は次の表 2 にまとめている：

表 2: Vink (1977: 13) による更なる end effect を受ける子音

語基末の子音	有声化接尾辞の end effect	声門化接尾辞の end effect
$-\bar{x}$	$-\bar{x}$	$-\bar{x}?$
-w	-w	例無し
-y	-y	$-\dot{y}$

筆者がこれまでに集めてきたデータの中で出てきた普通接尾辞と end effect の例を出す：

- (1) a. húsa + $-\lambda$ ⇒ húsa λ
 ‘読む’ FUT ‘読む (未来形)’
 b. húsa + -t ⇒ húsat
 ‘読む’ PAST ‘読んだ’
- (2) a. wáp- + =ad ⇒ wábád
 ‘水’ ‘持つ’ ‘水を持つ’

- b. gux^w- + $=ad$ \Rightarrow $gug^wád$
 ‘家’ ‘持つ’ ‘家を持つ’
- (3) a. $yus-$ + $-li\bar{x}d$ \Rightarrow $yúci\bar{x}d$
 ‘飲む’ DES ‘飲みたい’
- b. $ká\bar{t}-$ + $-li\bar{x}d$ \Rightarrow $káli\bar{x}d$
 ‘寝る’ DES ‘寝たい’/‘眠い’

(2b) で end effect の対象となっているのは、 gux^w の基底形である $//guk^w//$ である。ハイヌラ語の無声の軟口蓋破裂音と口蓋垂破裂音 ($/k/, /k^w/, /q/, /q^w/$) は、語末と子音の前で同器官的摩擦音 ($/x/, /x^w/, /\bar{x}/, /x^w/$) に変わる。

3 研究目的とデータ及び先行研究について

最終的にはハイヌラ語の記述文法を作成することが課題であるが、その一環として、ハイヌラ語の語彙的接尾辞の目録を作成することを目的としている。この目的のために、語彙的接尾辞のデータの体系的な採取を最近のフィールド調査で始めている。第一段階としては、身体部位接尾辞のデータを集め、分析する。現段階では、集められた身体部位接尾辞のデータを一先ず整理しており、今後の分析や調査の方向性を考えているところである。

本稿で示すデータは全て、2019年11月にキタマート村で聞き出し (elicitation) によって集め、1人のインフォーマントから得たものである。このインフォーマントはハイヌラ語を第一言語 (の1つ) として習得している。

管見の限りでは、出版されたハイヌラ語の先行研究の中には、身体部位接尾辞を網羅的にまとめたものはないが、未出版の先行研究で唯一身体部位接尾辞のリストが見つかるのは、表3に示す Bach (1990: 114-115) である：

表 3 : Bach (1990: 114-115) によるハイヌラ語の身体部位接尾辞のリスト (基底形)

身体部位	接尾辞	身体部位	接尾辞
頭	$-\acute{c}uaqia/-qia/-s\acute{g}em/-sem/-zem$	手/腕	$-kana$
顔	$-em/-s\acute{g}em/-sem/-zem$	手/手の指	$-[s]kana$
額	$-[g]iu$	腹	$-\lambda ems$
目	$-sdu$	腰/体の真ん中	$-u\acute{y}u$
耳	$=atu$	股間/性器	$=a\acute{g}i/=aq$
鼻	$=isba$	陰茎	$-se\acute{g}u$
頬	$=m\acute{y}a/-biu$	尻	$-!x\bar{d}$
口	$-\bar{x}d$	膝 (knee/lap)	$-\bar{x}da\acute{m}ua$
歯	$-ksi'a$	脛	$-\acute{p}ig/-\acute{p}ik$
顎	$-!x\lambda aks\acute{i}$	足 (foot)	$-[k]sis/-[x]zis/-sis$
首	$-!x\bar{u}$	足の指	$-sis$
襟首	$-sge\acute{n}i/-sen(i)$	体(全体)	$-sen/-[g]it/-ken$
胸	$=bu$	体の一側面	$-kut$
肩/腕	$-\bar{x}ina/-xena$		

その他、ハイスラ語の身体部位接尾辞を含む語の例は、例えば幾つかの辞書 (Lincoln & Rath 1986a, 1986b; Bach 2001b) や論文 (Vink 1977, Bach 1995) に所々見られる。本稿では、表 3 に挙げている接尾辞以外に、身体部位接尾辞があるかどうかを確認する目的で、Bach (1990: 114-115) 以外の先行研究を参照していないが、Bach (1990: 114-115) が挙げしていない身体部位接尾辞の例として、以下の 1 例が挙げられる：

- (4) λυρ̑es
 ‘burn one’s tongue’ (Bach 2001b: 25)

(4) の例では、λυρ- (‘火傷する’) という語根 (Lincoln & Rath 1986b: 493) に、普通接尾辞である身体部位接尾辞 -q̑es (‘舌’) が付いていると考えられる。この例については、インフォーマントに尋ねた。インフォーマントによれば、(4) の -q̑es は、‘舌’ だけではなく、口の中全体を表す接尾辞である。-q̑es の詳細な記述については今後の課題である。

表 3 で示した身体部位接尾辞に関して、実際に文の中で使われる例は、先行研究からは観察されない。そのため、身体部位接尾辞を実際に使う時の詳細については不明瞭な点が多い。これもまた、第 1 章の最初に述べた目的 (A-C) でデータを集める理由である。

しかし、先行研究における身体部位接尾辞を含む語の例から、身体部位接尾辞について全く何も言えないわけではなく、少なくとも次のことが言えるかと思われる。表 4 にそれを示す。

表 4：先行研究に基づくハイスラ語の身体部位接尾辞の特徴

特徴	そう考えられる理由
1. 他動詞にも自動詞 (状態動詞) にも付く。	⇒ 次のような例があるから： a) mex̑uaqia ‘to punch in the head’ (Bach 1995: 19) b) k̑wénciu ‘to have a wrinkled forehead’ (Lincoln & Rath 1986a: 239)
2. 身体部位接尾辞が付いた変化を伴う他動詞は再帰的にしか使えなさそうである。	⇒ a) 英訳にはよく one’s / oneself が含まれている。(他の例: kúpebu ‘to break one’s collar bone or ribs’ (Lincoln & Rath 1986a: 215)) b) Lincoln & Rath (1986a, 1986b) の辞書では、再帰的にしか使えないかどうかについてかなり明確に記述されている。そこで挙げられている身体部位接尾辞を含む他動詞のうち、再帰的以外の使い方があるとされたものは、q̑weq̑wȇl̑emsá (‘to scratch an itchy belly (one’s own or sb. else’s)’ (Lincoln & Rath 1986b: 325) のような変化を伴わないものばかりである。

4 採取したデータ

身体部位接尾辞の全パラダイムのデータを集めるためには、表 3 で挙げられている身体部位接尾辞と、yes- (‘(何かで) ~ を叩く’) という語根との組み合わせが容認可能かどうかをインフォーマントに聞いてみた。さらに、各身体部位接尾辞との組み合わせについては聞けなか

ったが、身体部位接尾辞が付いた他の語根の例も集められた。全ての語根を (基底形で) 表 5 に示す :

表 5 : 身体部位接尾辞が付くことを確認できた語根 (筆者データに基づく)

語根	意味	語根	意味
<i>yes-</i>	‘叩く’	<i>q^wet-</i>	‘くっ付く’
<i>mex-</i>	‘(拳で)殴る’	<i>muk^w-</i>	‘結び付ける’
<i>demk^w-</i>	‘蹴る’	<i>λup-</i>	‘火傷する’
<i>cem-</i>	‘指す/刺す’	<i>kup-</i>	‘細長い物を切る/ 折る/壊す’
<i>duq^w-</i>	‘見る’		
<i>q^wet-</i>	‘痒い’		

yes- と身体部位接尾辞の組み合わせの例は、=*u* (3.MED.SBJ)と =*enλ* (1SG.OBJ) という人称接語を使って、‘彼(女)(MED)が(何かで)私の~(身体部位)~を叩いた’という文の形で、表 3 に挙げられている身体部位毎にそれぞれの接尾辞を聞いて集めたが、人称接語無しの語基またはそれ以外の形で出てきたものもある。表 6 にそれを示す。

表 6 : インフォーマントから得た *yes-* (‘(何かで)~を叩く’) と身体部位接尾辞の例

身体部位	例	身体部位	例
頭	<i>yezánúduenλ / yeçúauduenλ</i>	手/腕	<i>yeçkánauduenλ / yeskánauduenλ</i>
顔	<i>yesemduenλ</i>	手/手の指	<i>yeçkánauduenλ / yeskánauduenλ</i>
額	無し	腹	<i>yesixlemduenλ</i>
目	<i>yecdúduenλz k^waλáuaλxú</i>	腰/体の真ん中	<i>yesúyuienλ</i>
耳	無し	股間/性器	<i>yezági- / yezağuduenλ</i>
鼻	<i>yezisbúenλ</i>	陰茎	<i>yeceğú-</i>
頬	<i>yezemya-</i>	尻	<i>yeçexdúduenλ</i>
口	<i>yeságamduenλ</i>	膝 (knee/lap)	無し
歯	<i>yeseksgenduenλ</i>	脛	<i>yespig-</i>
顎	<i>yezeλáksi-</i>	足 (foot)	<i>yecisduenλ</i>
首	<i>yezeχuduenλ</i>	足の指	無し
襟首	無し	体(全体)	無し
胸	<i>yezebúduenλ / yeçesganuduenλ</i>	体の一側面	無し
肩/腕	<i>yeçesganuduenλ</i>		

先行研究も参考にしながら、表 6 に出ているデータとインフォーマントから得たコメントからは、幾つかの観察ができる。これらの観察を詳しく見ていく前に、身体部位の自由形態素について集められた例文を参考まで以下の表 7 に示し、表 6 のデータについての説明を幾つか加える :

表 7: インフォーマントから得た *yes-* (‘(何かで)~を叩く’) と身体部位の自由形態素の例

身体部位	例 ²
頭	<p>yesáu híxtia'enc / híxtigenc yes -a =u híxti -a'enc / híxti -genc 叩く -FORM =3.MED.SBJ 頭 -1SG.POSS.MED 頭 -1SG.POSS.PROX ‘彼(女)(MED)は私の頭を叩いた。’</p>
顔	<p>yesáu gūg'wemía'enc / gūg'wemígenerc yes -a =u gūg'wemí -a'enc / gūg'wemí -genc 叩く -FORM =3.MED.SBJ 顔 -1SG.POSS.MED 顔 -1SG.POSS.PROX ‘彼(女)(MED)は私の顔を叩いた。’</p>
目	<p>yesáu gēgesgenc yes -a =u gēges -genc 叩く -FORM =3.MED.SBJ 目 -1SG.POSS.PROX ‘彼(女)(MED)は私の目を叩いた。’</p>
耳	<p>yesáu pispíua'enc / pispíugenc yes -a =u pispíu -a'enc / pispíu -genc 叩く -FORM =3.MED.SBJ 耳 -1SG.POSS.MED 耳 -1SG.POSS.PROX ‘彼(女)(MED)は私の耳を叩いた。’</p>
鼻	<p>yesáu xumáxgenc yes -a =u xumáx -genc 叩く -FORM =3.MED.SBJ 鼻 -1SG.POSS.PROX ‘彼(女)(MED)は私の鼻を叩いた。’</p>
頬	<p>yesáu 'umiagenc yes -a =u 'umia -genc 叩く -FORM =3.MED.SBJ 頬 -1SG.POSS.PROX ‘彼(女)(MED)は私の頬を叩いた。’</p>
口	<p>yesáu sémsa'enc / sémsgenc yes -a =u séms -a'enc / séms -genc 叩く -FORM =3.MED.SBJ 口 -1SG.POSS.MED 口 -1SG.POSS.PROX ‘彼(女)(MED)は私の口を叩いた。’</p>
歯	<p>yesáu gígegenc yes -a =u gíg -e -genc 叩く -FORM =3.MED.SBJ 歯 -EP -1SG.POSS.PROX ‘彼(女)(MED)は私の歯を叩いた。’</p>

² ハイスラ語の所有接尾辞は所有者の人称以外に、所有されているものの位置に関するダイキシス情報を含んでいる。表 7 に示してある例文において身体部位を表す自由形態素に付いている所有接尾辞は、所有者が 1 人称単数で所有物 (=身体部位) のダイキシスが近称 (PROX) と中称 (MED) の両方が出ている。話し手の身体部位のダイキシスが必然的に近称であると考えられるにも関わらず、インフォーマントは両方が使えると述べた。また、訳し方の違いとしては、近称の方を「my ~」と訳し、中称の方を「me in/on the ~」と訳す必要があるとインフォーマントに強く指摘された。片方の例文しか出ていない場合にもう一方が言えるかどうかは不明である。「膝」の例では、中称の方が自然な言い方に聞こえるとの報告があった。

顎	yesáu kuáx̄genc yes -a =u kuáx̄ -genc 叩く -FORM =3.MED.SBJ 顎 -1SG.POSS.PROX ‘彼(女)(MED)は私の顎を叩いた。’
首	yesáu qūq̄w̄enigenc yes -a =u qūq̄w̄eni -genc 叩く -FORM =3.MED.SBJ 首 -1SG.POSS.PROX ‘彼(女)(MED)は私の首を叩いた。’
襟首 ³	yesáu ’uáskanigenc yes -a =u ’uáskani -genc 叩く -FORM =3.MED.SBJ 襟首 -1SG.POSS.PROX ‘彼(女)(MED)は私の襟首を叩いた。’
胸	yesáu teq̄ebuáa’enc / teq̄ebuágenc yes -a =u teq̄ebuá -a’enc / teq̄ebuá -genc 叩く -FORM =3.MED.SBJ 胸 -1SG.POSS.MED 胸 -1SG.POSS.PROX ‘彼(女)(MED)は私の胸を叩いた。’
肩	yesáu ’ukinágenc yes -a =u ’ukiná -genc 叩く -FORM =3.MED.SBJ 肩 -1SG.POSS.PROX ‘彼(女)(MED)は私の肩を叩いた。’
手/腕	yesáu há’isua’enc / há’isugenc yes -a =u há’isu -a’enc / há’isu -genc 叩く -FORM =3.MED.SBJ 手/腕 -1SG.POSS.MED 手/腕 -1SG.POSS.PROX ‘彼(女)(MED)は私の手/腕を叩いた。’
手の指	yesáu x̄ix̄ekskania’enc / x̄ix̄ekskanigenc yes -a =u x̄ix̄eksكاني -a’enc / x̄ix̄eksكاني -genc 叩く -FORM =3.MED.SBJ 手の指 -1SG.POSS.MED 手の指 -1SG.POSS.PROX ‘彼(女)(MED)は私の手の指を叩いた。’
腰	yesáu tikibuágenc yes -a =u tikibuá -genc 叩く -FORM =3.MED.SBJ 腰 -1SG.POSS.PROX ‘彼(女)(MED)は私の腰を叩いた。’
女性器	yesáu ’úaḡaia’enc / ’úaḡaigenc yes -a =u ’úaḡai -a’enc / ’úaḡai -genc 叩く -FORM =3.MED.SBJ 女性器 -1SG.POSS.MED 女性器 -1SG.POSS.PROX ‘彼(女)(MED)は私の女性器を叩いた。’
睾丸	yesáu muḡw̄delígenc yes -a =u muḡw̄delí -genc 叩く -FORM =3.MED.SBJ 睾丸 -1SG.POSS.PROX ‘彼(女)(MED)は私の睾丸を叩いた。’

³ 表7の身体部位を表す自由形態素の例文は原則として、所有接尾辞のみを伴う名詞句として直接目的語の位置に生起するが、「襟首」の例文においてのみ、’uáskanigenc (‘私の襟首’) の前に位置や場所などを表す前置詞である *la* を置いても言えるとインフォーマントから報告があった。

尻	yesáu mengačígenc yes -a =u mengačí -genc 叩く -FORM =3.MED.SBJ 尻 -1SG.POSS.PROX ‘彼(女)(MED)は私の尻を叩いた。’
膝 (knee)	yesáu ’uǎdámua’enc / ’uǎdámugenc yes -a =u ’uǎdámu -a’enc / ’uǎdámu -genc 叩く -FORM =3.MED.SBJ 膝 -1SG.POSS.MED 膝 -1SG.POSS.PROX ‘彼(女)(MED)は私の膝を叩いた。’
脛	yesáu ’upigaa’enc yes -a =u ’upiga -a’enc 叩く -FORM =3.MED.SBJ 脛 -1SG.POSS.MED ‘彼(女)(MED)は私の脛を叩いた。’
足 (foot)	yesáu gúg’wia’enc yes -a =u gúg’wi -a’enc 叩く -FORM =3.MED.SBJ 足 -1SG.POSS.MED ‘彼(女)(MED)は私の足を叩いた。’

次に表 6 のデータに関して、幾つかの追加説明を指摘する：

追加説明 1：

yes- の語根末の /s/ が別の子音に変わっているものはほとんど end effect による変化であるが、中には /s/ + /s/ → /c/ という別の規則 (Bach 2001a: 55) による変化もある。(例えば、yes- + -sdu → yecdu-)。また、「鼻」の身体部位接尾辞の例では、接尾辞の最後の /a/ が主語人称接語 =u の前で脱落していると考えられる。(形態素境界で生じ得る現象である (Vink 1977: 128)。) その他にも、同じ現象により母音が脱落しているものがある可能性があると考えられる (例えば、「目」の身体部位接尾辞である -sdu の最後の /u/⁴)。

追加説明 2：

「目」の身体部位接尾辞の例では、叩く道具が出ている：

- (5) yecdúduenǎz k’wǎǎláuaǎu
yes -sdú -d⁵ =u =enǎ =s k’wǎǎláu -aǎu
叩く -LS.目 -INCH =3.MED.SBJ =1SG.OBJ =PREP 木棒 -DEIX.MED
‘彼(女)(MED)は木棒で私の目を指した。’

道具を表す名詞句を先行する前置詞 *his* は、// =s // という前接語 (enclitic) に接語化しており、

⁴ 「目」の身体部位接尾辞の例で -sdu の後ろには、本稿で起動動詞 (inchoative suffix) としている接尾辞 -[u]d が付いている (cf. 観察 2)。「目」の身体部位接尾辞の中の「-sdúd-」の部分においては、起動接尾辞が -d という異形態で出現しているのか、起動接尾辞が -ud という異形態で出現し、且つ、-sdu の最後の /u/ が脱落しているのかが不明である (cf. 追加説明 2 の脚注 5)。

⁵ 脚注 4 で述べたように、(5) の「-sdú-d」の部分で「-sd-úd」とも分析できるという可能性を除外できないが、Bach (2001a: 56) によれば、ハイスラ語で冒頭の母音が脱落する異形態を持つ接尾辞の場合に、母音が脱落した異形態は原則として母音及び生節共鳴音の後で出現する。そのため、(5) の逐語訳において「-sdú-d」という分析の方が正しいという可能性が高いと判断しており、そのように分析している。以下の例でもこの原則に従って起動接尾辞の異形態を分析している。

/s/ が 阻害側面音の後で /z/ に変わるという規則 (Vink 1977: 129) に従って、/=z/として述語に付いている。

追加説明 3 :

「腰」の身体部位接尾辞の例で、主語人称接語は他の例と違って、=*u* (3.MED.SBJ) ではなく、=*i* (3.DIS.SBJ) となっている。

次に身体部位接尾辞の使用に関する 6 つの観察を示す :

観察 1 :

インフォーマントは全ての身体部位接尾辞を運用できるわけではない。インフォーマントは、「『身体部位に関する言葉』があまり得意ではない」と述べ、「より年上の話者ならば、もっと知っているだろう」と報告した。表 6 の中で、語基の形で出てきている *yezemýa*- ('頬を叩く')、*yezeḗláksi*- ('顎を叩く')、*yespig*- ('脛を叩く') については、「聞いたことがあると思うが、意味は分からない」と述べた。

観察 2 :

多くの身体部位接尾辞の後ろには、-[*u*]d という接尾辞が付いている。Bach (1990: 117,119) と Vink (1977: 130) は、-*d* と -*ud* の 2 つを起動接尾辞 (inchoative suffix) として挙げている。表 6 の中で -[*u*]d が付いた形で出てきた例は全て -[*u*]d なしでは言えないとインフォーマントに判断された。本稿では、この接尾辞を起動接尾辞 (INCH) として扱うことにしている。

観察 3 :

一部の身体部位接尾辞の end effect が先行研究の記述と異なっている。*yezeḗláksi*- ('顎を叩く')と *yezeḗduenḗ* ('彼(女)は私の首を叩いた') では、身体部位接尾辞は有声化接尾辞かのように語根末の /s/ を /z/ に変えている。*yečkanauduenḗ* ('彼(女)が私の腕/手/手の指を叩いた') では、身体部位接尾辞は声門化接尾辞かのように語根末の /s/ を /c/ に変えている。インフォーマントは、*yečkanauduenḗ* と *yeskanauduenḗ* の両方とも言えると判断したが、*yečkanauduenḗ* の方が許容性に自信があると報告した。

観察 4 :

表 3 で観察されなかった、または表 3 と多少違う形で観察された身体部位接尾辞がある :

頭 : =an(u) と -!ua	胸/肩/腕 : =!sgan(u)	腹 : -ixlem
口 : -aḡam	股間/性器 : =aḡ	歯 : -ksgen

インフォーマントは、胸/肩/腕の =!sgan(u) が「上半身」という意味でも使えると報告した。

観察 5 :

表 3 に出ていた一部の身体部位接尾辞は違う意味で使われており、インフォーマントは一部の接尾辞の意味に関して多少の揺れがあることを報告した。例えば、「鼻」の =*isba* は、最初に '足' という意味であると述べたが、後で '鼻' という意味であると報告し、最終的には、どちらかと言えば '足' を意味していると述べた。また、「股間/性器」の =*aḡi* は '女性器' で、=*aḡ* は男女を問わず '股間/性器' であり、「陰茎」の -*seḡu* は '男性の股間/男性器全体' であると報告した。

観察 6 :

インフォーマントは、集めた文の英訳について、「my ~」は不自然であるため、「me in/on the ~」と訳す必要があると何度も強く指摘した。

最後に、インフォーマントが *yes-* と共起した際、未知であった表 3 の接尾辞をまとめる :

表 8 : インフォーマントが未知であった表 3 の身体部位接尾辞

身体部位	接尾辞	身体部位	接尾辞
頭	-čuaqia/-qia/-sġem/-sem/-zem	襟首	-sġeni/-sen(i)
顔	-sġem/-sem/-zem	肩/腕	-xina/-xena
額	-[g]iu	腹	-λems
耳	=atu	股間/性器	-aq
頬	-biu	膝 (knee/lap)	-x̄damua
口	-x̄d	体(全体)	-sen/-[g]it/-ken
歯	-ksi'a	体の一側面	-kut

さらに、*yes-* の例は、例えば次のような文も出た :

- (6) sas yesémdiġde'u ha
 sa =s yes -ém -d -iġd -e ='u ha
 AUX.PQ =2.SBJ 叩く -LS.顔 -INCH -DES -EP =3.MED.OBJ QP
 ‘貴方は彼(女)(MED)の顔を叩きたいのか?’

- (7) yesémden saġλ
 yes -ém -d -e =n saġλ
 叩く -LS.顔 -INCH -EP =1SG.SBJ PN.REFL
 ‘私は自分の顔を叩い(てしまっ)た’

また、次の文は、‘彼(女)(MED)は手で私を叩いた’ という意味で言えないと判断された :

- (8) yeċkanaudentλ
 yes -skana -ud =u =enλ
 叩く -LS.手 -INCH =3.MED.SBJ =1SG.OBJ
 * ‘彼(女)(MED)は手で私を叩いた。’

そして、次の 2 つの文に関しては、(9a) は言えるが、(9b) は、言えないと判断された :

(9)⁶ a. $\dot{q}ácuk^w su$ $yíyese md$ $bíbeg^w anema \bar{x}u$
 $\dot{q}ácuk^w$ =su $yí-$ -yes -em -d $bí-$ -beg^wanem -a $\bar{x}u$
 AUX.好き =3.MED.SBJ PRED -叩く -LS.顔 -INCH PRED -人 -DEIX.MED
 ‘彼(女)(MED)はあの人たちの顔を叩くのが好きだ。’

b. * $\dot{q}ácuk^w su$ $yíyese md$
 $\dot{q}ácuk^w$ =su $yí-$ -yes -em -d
 AUX.好き =3.MED.SBJ PRED -叩く -LS.顔 -INCH
 ‘彼(女)(MED)は顔を叩くのが好きだ。’

(9b) が言えない理由としては、「誰の顔か分からないから」との報告があった⁷。次に、yes-以外の語根の例を見ていく。

4.1 yes- 以外の語根の例

表 5 に載っている yes- 以外の語根は、語根によって一例しか出ていないものもあれば、幾つかの例が出たものもある。次の表には、語根毎に最低限 1 例を載せ、後の考察にとって重要な例を全て載せる：

表 9 : yes- (‘(何かで)~を叩く’) 以外の語根の例

語根	例文
<i>mex-</i> ‘(拳で)殴る’	(10) $meks d \acute{u} duen \lambda$ mex -sdú -d =u =en λ 殴る -LS.目 -INCH =3.MED.SBJ =1SG.OBJ ‘彼(女)(MED)は私の目を殴った。’
<i>demk^w-</i> ‘蹴る’	(11) $démk^w e \bar{x} d u d i \bar{x} d a n u g^w a ' u$ $démk^w$ -e - $\bar{x}d$ -ud -i $\bar{x}d$ -a =nug ^w a ='u 蹴る -EP -LS.尻 -INCH -DES -FORM =1SG.SBJ =3.MED.OBJ ‘私は彼(女)(MED)の尻を蹴りたい。’
<i>čem-</i> ‘指す/刺す’	(12) $čems d \acute{u} duen \lambda$ $čem$ -sdú -d =u =en λ 指す -LS.目 -INCH =3.MED.SBJ =1SG.OBJ ‘彼(女)(MED)は私の目を刺した。’
<i>duq^w-</i> ‘見る’	(13) $d \acute{u} \bar{x}^w s d u d u ' u$ $d \acute{u} q^w$ -sdu -d =u ='u 見る -LS.目 -INCH =3.MED.SBJ =3.MED.OBJ ‘彼(女)(MED)は彼(女)(MED)の目を見つめている。’
<i>q^wet-</i> ‘痒い’	(14) $'apá ns \dot{q}^w e \acute{t} s k a n a$ $'apá$ =n =s $\dot{q}^w e \acute{t}$ -skana AUX.とても =1SG.SBJ =PREP 痒い -LS.手 ‘私の手はとても痒い。’

⁶ (9a-b)では言い間違えとして、3人称中称の直接目的語人称接語である =u の代わりに、3人称中称の間接目的語人称接語である =su が使われていると考えられる。

⁷ (9b) が許容されなかった理由としては、本動詞の方で(部分重複により形成された)複数形を使ってしまったことも考えられる。

<p><i>q^wet-</i> ‘くっ付く’</p>	<p>(15) <i>q^weckanasu</i> <i>q^wet</i> <i>-skana</i> =su くっ付く -LS.手 =2.SBJ ‘貴方の手には何かがかくっ付いている。’</p> <p>(16) <i>q^weieṅd-</i> <i>q^wet</i> <i>-e</i> <i>-ṅd</i> くっ付く -EP -LS.尻 ‘(パンツなどが) 尻にくっ付く’</p>
<p><i>muk^w-</i> ‘結び付ける’</p>	<p>(17) <i>múk^weṅu-</i> <i>múk^w</i> <i>-e</i> <i>-ṅu</i> 結び付ける -EP -LS.首 ‘首の回りに(ネクタイなどを)結び付ける’/‘首吊りで自殺する’</p>
<p><i>ḷup-</i> ‘火傷する’</p>	<p>(18) <i>ḷúpskanu</i> <i>ḷúp</i> <i>-skana</i> =u 火傷する -LS.手 =3.MED.SBJ ‘彼(女)(MED)は(自分の)手を火傷させた。’</p> <p>(19) <i>ḷúpskanatuenḷ</i> <i>ḷúp</i> <i>-skana</i> <i>-t</i> =u =enḷ 火傷する -LS.手 -PAST =3.MED.SBJ =1SG.OBJ ‘彼(女)(MED)は私の手を火傷させた。’</p>
<p><i>kup-</i> ‘細長い物を切る/折る/壊す’</p>	<p>(20) <i>silí kúpeṅu ha</i> <i>sil</i> =i <i>kúp</i> <i>-e</i> <i>-ṅu</i> <i>ha</i> AUX.PQ =3.DIS.SBJ 折る -EP -LS.首 QP ‘彼(女)(DIS)は(自分の)首(の骨)を折ったのか?’</p> <p>(21) <i>sas kúpeṅut’i ha</i> <i>sa</i> =s <i>kúp</i> <i>-e</i> <i>-ṅu</i> <i>-t</i> =’i <i>ha</i> AUX.PQ =2.SBJ 折る -EP -LS.首 -PAST =3.DIS.OBJ QP ‘貴方は彼(女)(DIS)の首(の骨)を折ったのか?’</p> <p>(22) <i>kúpeṅutnug^wa’u</i> <i>kúp</i> <i>-e</i> <i>-ṅu</i> <i>-t</i> =nug^wa =’u 折る -EP -LS.首 -PAST =1SG.SBJ =3.MED.OBJ ‘私は彼(女)(MED)の首(の骨)を折った。’</p>

5 データについての考察

本稿では、第4章で提示したデータについて考察を行う。

5.1 インフォーマントが運用している身体部位接尾辞について

前述したように、インフォーマントが表3に載っていた身体部位接尾辞を全て知っているわけではなく、多少違う意味で使う場合がある。さらに、先行研究で観察されなかった接尾辞も観察された。これらの接尾辞について次のことを指摘したい：

- I) インフォーマントが使っていた =aḡ (‘女性の股間/性器’) と -ixlem (‘腹’) は、表 3 の =aq (‘股間/性器’) と -ləms (‘腹’) と意味上も形式上もとても似ているため、何らかの異形態であることなどで説明できるかもしれない。また、-ixlem (‘腹’) の冒頭の *i* について更に探ってみれば、後の口蓋化した子音である *x* ([x]) の影響を受けて [i] の音色を持った挿入母音である可能性もあると考えられる。
- II) インフォーマントが使っていた =!sgan(u) (‘胸/肩/腕/上半身’) は、-sgeṇi (‘襟首’) とは意味的に少し離れてはいるが、この場合も形式が似ている。
- III) インフォーマントが「頭」の身体部位接尾辞として使っていた -lua という形は、語根の方で end effect 或いはその他の規則的な形態音韻論的な変化しか生じていない前提で考えたが、仮に yes- の語根末の /s/ が何らかの理由でなくなったと想定すれば、先行研究の -ćuaqia (‘頭’) の前半部分に近い -ćua (end effect が不明) という形として分析できる。
- IV) インフォーマントが「口」の身体部位接尾辞として使っていた -aḡam は、先行研究で見つかる -ḡem (‘前に/で’ 英: ‘in front’ Bach 1990: 115) と似ているが、関係があるかどうかは現時点で分からない。

インフォーマントは、自身は「身体部位に関する言葉」に詳しくないと何度も報告した。本人の報告によれば、自身と前の世代の話者とは話しているハイヌラ語が大きく異なり、前の世代の話者の方が「身体部位に関する言葉」により精通している。このようなコメントはハイヌラ語の別の文法現象である複数性に関しても、同じインフォーマントから得られた (Vattukumpu 2018: 57)。従って、知らない身体部位接尾辞があることは、言葉遣いに関する世代差の現れの 1 つかもしれない。

5.2 end effect について

観察 3 で示したように、表 6 の中には、end effect が先行研究通りに生じない例があった。yezeḡuduenḡ (‘彼(女)(MED)は私の首を叩いた’) の例で、‘首’を表す身体接尾辞は、語根末の子音で先行研究の記述と違って有声化の end effect を生じさせているが、(17)、(20)、(21)、(22) の例で、同じ接尾辞は先行研究通りに声門化の end effect を生じさせているため、インフォーマントはほとんどの場合に、-!x̣u (‘首’) を声門化接尾辞として使っていると言えよう。

‘手’を表す身体接尾辞 (-[s]ḳana) は、表 6 に載っている例以外に、声門化を生じさせている例がないため、この場合もほとんど先行研究通りに end effect が生じていると言えよう。yezeḡlaksi- (‘顎を叩く’) に関して言えば、意味は分からないが聞いたことはあるとの報告があったため、言い間違いの可能性も否定できないだろう。end effect に関する多少の不統一性も話者世代差によるものである可能性があると考えられる。

5.3 身体部位接尾辞の意味役割及び変化を伴う他動詞について

身体部位接尾辞が担える意味役割に関して言えば、(8) で見たように、身体部位接尾辞が表す身体部位の意味役割が道具 (instrument) であると解釈される文は非文となるため、ハイヌラ語の身体部位接尾辞は道具の意味役割を担うことができないということが示唆される。このような非文の例はもう 1 つある。この例は、‘彼(女)(MED)は手で私を殴った’ という意味で言えず、‘彼(女)(MED)は私の手を殴った’ という解釈しかできない：

(23) mekskanaudentλ

mex -skana -ud =u =enλ
 殴る -LS.手 -INCH =3.MED.SBJ =1SG.OBJ

* '彼(女)(MED)が手で私を殴った'

また、前に述べたように、先行研究における身体部位接尾辞の例は、身体部位接尾辞が付いた変化を伴う他動詞は再帰的にしか使えないことを示唆している。要するに、先行研究からは、身体部位接尾辞が表す身体部位の所有者の意味役割が被動者 (patient) でありながら、動作主 (agent) と同一人物ではないという使い方もあるということが読み取れない。しかし、(19)、(21)、(22) の例文から分かるように、そのような身体部位接尾辞の使い方は実際にできるのである。

6 まとめ

前述のデータに関する観察・考察を次のようにまとめる：

- ① インフォーマントは先行研究から参照した表 3 の身体部位接尾辞のほとんどを知っている。また、先行研究で観察されなかった身体部位接尾辞を使っているが、先行研究で観察された接尾辞と似ているものがあることが分かった。未知の身体部位接尾辞があることについては、話者の世代差によるかもしれない。
- ② インフォーマントが表 3 の身体部位接尾辞を使う時に end effect は概ね先行研究の記述通りに生じるが、違う例も多少ある。
- ③ 身体部位接尾辞が表す身体部位の意味役割としては、道具が不可能である可能性があると考えている。また、先行研究から予想できなかった観察としては、身体部位接尾辞が付いた変化を伴う他動詞は非再帰的にも使えることが分かった。

7 問題点と今後の課題

現時点残っている問題点としては、例えば次のものが挙げられる：

- ① 起動接尾辞として扱ってきた **-[u]d** と身体部位接尾辞の関係はまだ把握できていない。この接尾辞と共起せずに生じた身体部位接尾辞もあるため、共起する場合としない場合の両方あり得るが、規則性については不明である。
- ② 本稿は、身体部位接尾辞と動詞の関係性にのみ着目したが、名詞に付くこともあるかもしれない。
- ③ 先行研究 (特に辞書) から観察される身体部位接尾辞の例は網羅できていない。今後、反例を含めた網羅的な調査が必要である。
- ④ データは 1 名のインフォーマントから得たものであり、実例数が少ない。

今後の課題としては、第一に先行研究が報告する身体部位接尾辞の例を徹底的に調べることである。これまで見た限りでは、先行研究の辞書の中では、例えば **-[u]d** を伴う身体部位接尾辞を含む見出し語が多く見られるため、参考資料として期待できる。また、身体部位接尾辞が付いた名詞も出てくる可能性がある。

略号一覧

-	形態素境界	LS	語彙的接尾辞
=	接語境界 / 有声化接尾辞	MED	中称
-!	声門化接尾辞	OBJ	目的語
1	一人称	PAST	過去
2	二人称	POSS	所有接尾辞
3	三人称	PQ	極性疑問
AUX	助動詞	PROX	近称
DEIX	直示	PN	代名詞
DES	希望法	PRED	部分重複
DIS	遠称	PREP	前置詞
EP	挿入音	QP	疑問小辞
FORM	形式的形態素	REFL	再帰
FUT	未来	SBJ	主語
INCH	起動	SG	単数

謝辞

本稿の言語データを提供して下さったインフォーマントである Nelson Grant 氏に心より感謝を申し上げます。また、本稿にコメントを下さった鴨井修平氏 (同志社大学) と鄭雅云氏 (京都大学) にも感謝しております。なお、本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金 (#19J14298) から助成を受けています。

参考文献・資料

- Bach, Emmon (1990) *A Haisla book*. Unpublished draft.
- Bach, Emmon (1995) A note on quantification and blankets in Haisla. In: Emmon Bach, Eloise Jelinek, Angelika Kratzer and Barbara H. Partee (eds.) *Quantification in Natural Languages* 13-20. Dordrecht: Kluwer.
- Bach, Emmon (2001a) Building words in Haisla. *University of Massachusetts Occasional Publications* 20: 51-73.
- Bach, Emmon (2001b) *English – Haisla Dictionary*. Unpublished draft.
- Kazama, Shinjiro (2011) Are there lexical affixes in Tungusic, or what is the lexical affix? *Linguistic Typology of the North* 2: 55-66.
- Lincoln, Neville J. and Rath, John C. (1986a) *Phonology, Dictionary and Listing of Roots and Lexical Derivates of the Haisla Language of Kitlope and Kitimaat [sic], B.C. Volume 1. Canadian Ethnology Service Paper* 103. Ottawa, ON: National Museum of Canada.
- Lincoln, Neville J. and Rath, John C. (1986b) *Phonology, Dictionary and Listing of Roots and Lexical Derivates of the Haisla Language of Kitlope and Kitimaat [sic], B.C. Volume 2. Canadian Ethnology Service Paper* 103. Ottawa, ON: National Museum of Canada.
- Mithun, Marianne (1997) Lexical affixes and morphological typology. In: J. Bybee, J. Haiman and S. Thompson (eds.) *Essays on language function and language type* 357-372. Amsterdam: Benjamins.

- Muro, Alessio (2008) Lexical Affixation in Salish and Wakashan and its Relevance for a Theory of Polysynthesis. *Padua Working Papers in Linguistics* 2: 1-28.
 Vattukumpu, Tero (2018) Notes on reduplication in the Haisla language — Partial reduplication of the negative auxiliary verb. *Kyoto University Linguistic Research* 37: 41-60.
 Vink, Hein (1977) A Haisla phonology. *International Conference on Salish Languages* 12: 111-131.

【付属資料】

【本稿の表記法】

子音音素：

/p/:	⟨b⟩	/pʰ/:	⟨p⟩	/pʷ/:	⟨p̰⟩	/k/:	⟨g⟩	/kʰ/:	⟨k⟩	/kʷ/:	⟨k̰⟩	/ʔ/:	⟨ʔ⟩
/t/:	⟨d⟩	/tʰ/:	⟨t⟩	/tʷ/:	⟨t̰⟩	/kʷ/:	⟨gʷ⟩	/kʰʷ/:	⟨kʷ⟩	/kʷʷ/:	⟨k̰ʷ⟩	/h/:	⟨h⟩
/ts/:	⟨z⟩	/tsʰ/:	⟨c⟩	/tsʷ/:	⟨ç̰⟩	/q/:	⟨ḡ⟩	/qʰ/:	⟨q⟩	/qʷ/:	⟨q̰⟩	/s/:	⟨s⟩
/tʰ/:	⟨λ⟩	/tʰʰ/:	⟨λ̰⟩	/tʰʷ/:	⟨λ̰̰⟩	/qʷ/:	⟨ḡʷ⟩	/qʰʷ/:	⟨qʷ⟩	/qʷʷ/:	⟨q̰ʷ⟩	/ʈ/:	⟨ʈ⟩
/m/:	⟨m⟩	/mʷ/:	⟨m̰⟩	/w/:	⟨w⟩	/wʷ/:	⟨w̰⟩	/xj/:	⟨x⟩	/χ/:	⟨x̰⟩	/l/:	⟨l⟩
/n/:	⟨n⟩	/nʷ/:	⟨n̰⟩	/j/:	⟨y⟩	/jʷ/:	⟨y̰⟩	/xʷ/:	⟨xʷ⟩	/χʷ/:	⟨x̰ʷ⟩	/lʷ/:	⟨l̰⟩

※ 子音音素の主な異音変異 (allophonic variation)：

/p/:	[p ~ b]	/t/:	[t ~ d]	/k/:	[kʲ ~ gʲ]	/kʷ/:	[kʷ ~ gʷ]
/q/:	[q ~ ç]	/qʷ/:	[qʷ ~ çʷ]	/ts/:	[ts ~ dʒ]	/tʰ/:	[tʰ ~ dʰ]

母音音素：

/i/:	⟨i⟩	/a/:	⟨a⟩	/u/:	⟨u⟩
------	-----	------	-----	------	-----

※ 母音音素の主な異音変異 (allophonic variation)：

/i/ → [eɪ]	/	[+uvular/glottal] ____	/u/ → [ou]	/	[+uvular/glottal] ____
------------	---	------------------------	------------	---	------------------------

その他：

⟨e⟩ = シュワー ⟨´⟩ = アクセント

【直接法における主語・直接目的語の人称接語】

主語の人称接語

	単数	複数
一人称	=n / =nug ^w a	=nux ^w (除外的) =nis (包括的)
二人称	=su	
三人称 - 近称	=ix	
三人称 - 中称	=u	
三人称 - 遠称	=i	
三人称 - 欠称	=gi	

※ 一人称単数の主語の人称接語は2つの異形態がある。助動詞に付くのは、=nのみであるが、それ以外の環境では自由変異の関係にある。

直接目的語の人称接語

	単数	複数
一人称・除外的	=enλ(a)	=enλanux ^w (除外的) =enλanis (包括的)
二人称	=uλ(a)	
三人称 - 近称	='ix / ='eχg	
三人称 - 中称	='u	
三人称 - 遠称	='i	
三人称 - 欠称	='eχgi	

※ 筆者のデータの中には、三人称・欠称複数の直接目的語の人称接語として、先行研究の記述でこれまでに見えていない -'i'eχgi という生産性が低い接語も見られるが、この接語の振る舞いに関する詳細は不明であるため、表の中に入れていない。

受理日 2020年4月15日

西日本諸方言におけるアスペクト体系のバリエーション

—YORU・TORU・TERU の記述を中心に—

鴨井 修平

同志社大学大学院文化情報学研究科/同志社大学言語生態科学研究センター

1. はじめに

本稿は、統一的枠組みに基づいて記述した 12 地点の方言データより、西日本諸方言におけるアスペクト体系のタイプ分けを提案するものである。

標準語のテイルに相当するアスペクト形式として、東日本側には TERU(-ter-) という 1 形式、西日本側には、YORU(-jor-), TORU(-tor-), TERU という 3 形式が分布している (『方言文法全国地図 第 198 図』(国立国語研究所 1999))¹。

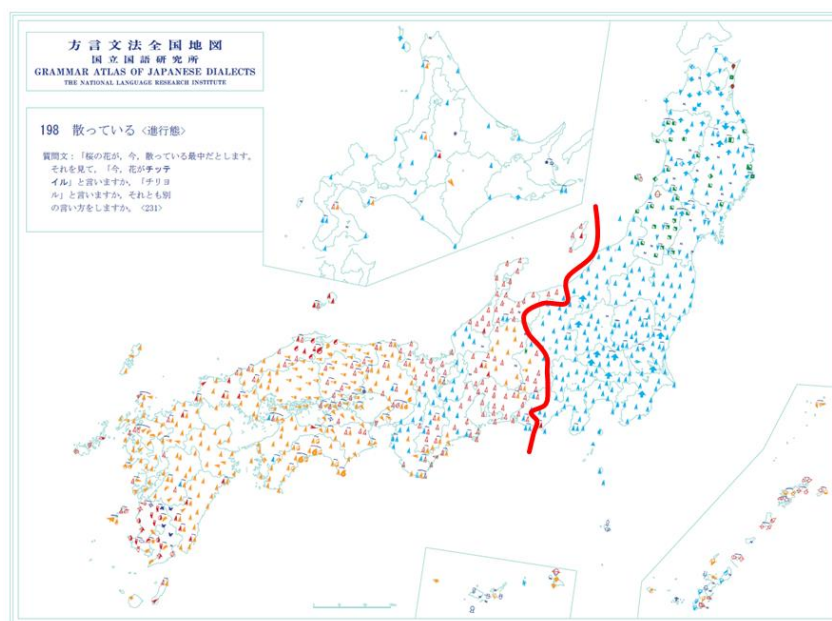


図 1 現在進行中の局面における使用形式の分布²

ある命題が進行中あるいは終了後の局面にあることを標示する際、東日本諸方言は TERU の 1 形式を用いるという点で、テイルの 1 形式を用いる標準語と同様であるの

¹ -ヨルと-トルは音声バリエーションが豊富な形式であり、例えばヨル型には[-joru], [-jo:ru], [-jo:], [-ju:]など、トル型には[-toru], [-teoru], [-to:], [-teu:]などがある (『方言文法全国地図』(国立国語研究所 1999))。本稿では、両形式の意味機能を方言間で対照する便宜上、ヨル型はすべて YORU, トル型はすべて TORU と表記し、それに伴い-テルも TERU と表記する。

² 筆者による分割線の右側(東日本側)は TERU の 1 形式、左側(西日本側)は YORU, TORU, TERU の 3 形式がそれぞれ分布している。

に対し、西日本諸方言は YORU と TORU の 2 形式を用いてアスペクトを区別するという特徴を持つ。YORU が動詞連用形-*e/i* と存在動詞-*or-u* から形成された形式であるのに対し、TORU は動詞テ形-*e/i-te* と存在動詞-*or-u* から形成された形式である。また、TERU は動詞テ形-*e/i-te* と存在動詞-*ir-u* から形成された形式である。

従来の研究では、主に進行相(*progressive*)を標示する YORU と結果相(*resultative*)を標示する TORU のアスペクト対立を前提として、両形式が進行相を標示するというアスペクト機能の重複が問題視されてきた (e.g. 工藤 1999, 丹羽 2005, 津田 2014)³。よって、個別方言における YORU と TORU が標示する意味や、両形式の意味拡張については数多くの報告があるが、各方言のアスペクト体系について、統一的枠組みに基づいた対照研究はほとんど行われていない。

本稿では、YORU, TORU, TERU を中心に、西日本諸方言におけるアスペクト体系をタイプ別に記述し、現状観察される 5 タイプのアスペクト体系の比較対照により、西日本諸方言のアスペクト体系におけるバリエーションの在り方について考察する。

2. 研究方法

本節では、アスペクト体系のタイプ分けを行うための方法論を示す。従来の個別方言における研究から分かるように、YORU, TORU, TERU の生起条件や標示する意味には各方言で差異がある⁴。よって、各方言のアスペクト体系を比較対照するためには、統一的枠組みに基づいて記述されたアスペクト体系を準備する必要がある。

2.1. 統一的枠組みの設定

本研究では、各方言のアスペクト体系を統一的枠組みに基づいて網羅的に記述するために、命題の時間構造を 2 種類設定する。まず、図 2 に示すように、進行相を持つ命題の時間構造は、開始兆候点(*signal of beginning=sb*)、開始点(*beginning=b*)、終了点(*ending=e*)、結果終了点(*result ending=re*)という 4 つの参照点と、将然相(*prospective*)、進行相、結果相という 3 つのアスペクトから構成される。例えば、「A が魚を食べる」という命題は、時間(*time=t*)の経過に伴い、食卓に着く (将然相) > 魚を咀嚼する (進行相) > 魚の骨が残る (結果相) のようなプロセスを経る。このような時間構造を持つ命題を命題 X とする⁵。

³ YORU と TORU の両形式が進行相を標示する現象については、中和 (工藤 1995)、統合 (井上 1998)、併用 (津田 2014) などと呼ばれているが、本研究では、1 つの意味に対して 2 つの形式が重なって対応しているということを強調するため、当該の現象を「重複」と呼ぶ。

⁴ 例えば、愛媛県宇和島方言では、アスペクト形式である YORU と TORU は非結果相 (将然相と進行相) と結果相の対立を区別するが (工藤 1995)、京阪方言では、YORU は卑語であり、アスペクト形式である TORU と TERU は中立待遇と下位待遇の対立を区別する (井上 1998)。

⁵ 金田一(1950)や Vendler(1967)の動詞分類から見れば、「走る」、「食べる」などの継続動詞 (*activities*)や「作る」、「焼く」などの達成動詞 (*accomplishments*)が命題 X の述語となる。

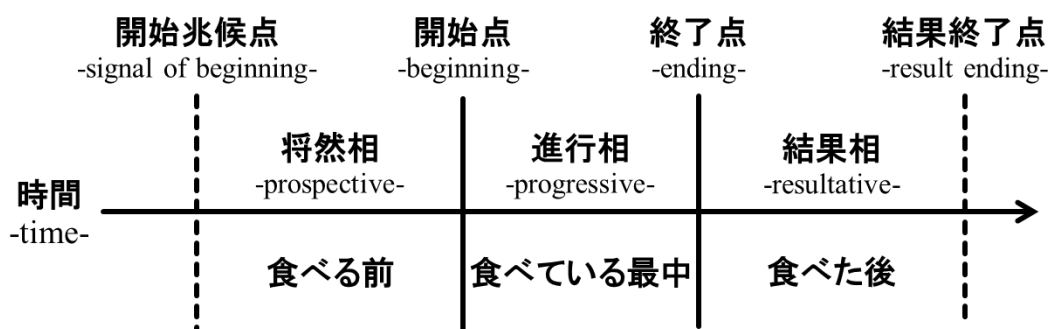


図2 命題 X の時間構造

一方、図3に示すように、進行相を持たない命題の時間構造は、開始兆候点、開始/終了点、結果終了点という3つの参照点と、将然相、結果相という2つのアスペクトから構成される。例えば、「ロウソクの火が消える」という命題は、時間の経過に伴い、火が段々と弱くなる（将然相）>火が消え、細い煙が上がる（結果相）のようなプロセスを経る。このような時間構造を持つ命題を命題 Y とする⁶。

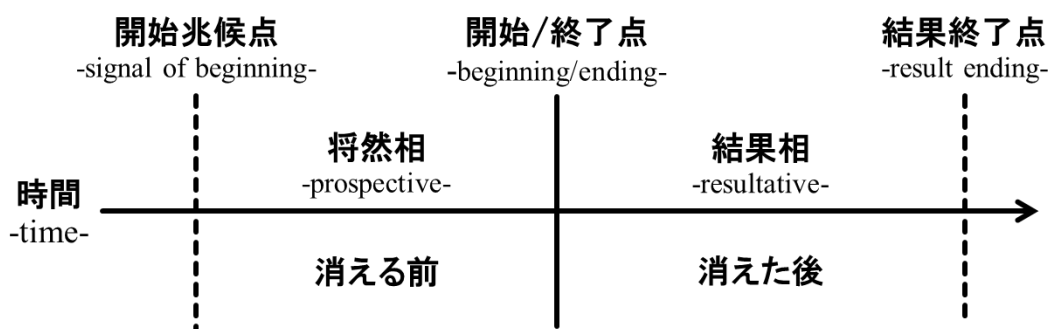


図3 命題 Y の時間構造

本研究では、前述の命題 X と命題 Y において、YORU, TORU, TERU がどのアスペクト上に生起し得るかという統一的枠組みに基づいて各方言のアスペクト体系を記述し、タイプ分けを行った。本稿では、各方言のアスペクト体系の相違点が顕著に観察された命題 X における調査結果のみを報告する。

さらに本研究では、次の2つの仮説に基づき、最大限成立し得るアスペクト体系の11タイプを想定しておく。

⁶ 金田一(1950)や Vendler(1967)の動詞分類から見れば、「死ぬ」、「消える」などの瞬間動詞 (achievements)が命題 Y の述語となる。また、「ある」、「いる」などの状態動詞(states)を述語とする命題は、命題 X、命題 Y のような時間構造を持たない命題とし、本稿では、アスペクト形式との共起関係について割愛する。

- [1] 命題 X の時間構造は、将然相>進行相>結果相という意味の連続によって成立している。よって、1形式が連続的な意味（将然相と進行相もしくは進行相と結果相）を担うということはあるが、非連続的な意味（将然相と結果相）を担うということはないと仮定する。
- [2] 従来の研究において、将然相、進行相、結果相をそれぞれ異なる形式で標示する方は報告されていない。よって、アスペクト上において対立し得る形式は2形式であると仮定する。

前述の仮説に基づけば、次に示す合計 11 タイプのアスペクト体系が想定される。ここでは YORU, TORU, TERU という特定の形式を考えず、アスペクト上において対立し得る 2 形式を a, b とし、対照的枠組みを設定する。まずは、形式 a と形式 b が重複しないタイプ 1-3 を示す。

タイプ 1

将然相	進行相	結果相
a	a	a

タイプ 2

将然相	進行相	結果相
a	a	b

タイプ 3

将然相	進行相	結果相
a	b	b

次に、形式 a と形式 b が 1 つのアスペクト上で重複するタイプ 4-6 を示す。

タイプ 4

将然相	進行相	結果相
a	a	a/b

タイプ 5

将然相	進行相	結果相
a	a/b	b

タイプ 6

将然相	進行相	結果相
a/b	b	b

さらに、形式 a と形式 b が 2 つ以上のアスペクト上で重複するタイプ 7-9 を示す。

タイプ 7

将然相	進行相	結果相
a	a/b	a/b

タイプ 8

将然相	進行相	結果相
a/b	a/b	b

タイプ 9

将然相	進行相	結果相
a/b	a/b	a/b

最後に、1形式が非連続的な意味を担うという意味で仮説[1]の反例となるタイプ 10 と、a, b, c の 3 形式を用いてアスペクトを区別するという意味で仮説[2]の反例となるタイプ 11 を示す。

タイプ 10

将然相	進行相	結果相
a	b	a

タイプ 11

将然相	進行相	結果相
a	b	c

以上の対照的枠組みに基づいて各方言のアスペクト体系を観察する。本稿において報告可能な各方言のアスペクト体系は、前述の 11 タイプのうち、タイプ 2, 3, 5, 8 の 4 タイプの体系を実証している。これについては、第 3 節で詳細に報告する。

2.2. 調査概要

本研究における調査は、『方言文法全国地図』（国立国語研究所 1999）の分布と予備調査の結果を参考に、YORU, TORU, TERU の分布域に位置する次の 12 方言を対象に実施した。これにより、西日本諸方言内におけるアスペクト体系の地理的バリエーションを捉えることが可能であると考えられる。

[中部地方] 岐阜県美濃方言, 岐阜県飛騨方言

[近畿地方] 京都府京都市方言, 兵庫県神戸市方言

滋賀県_湖東方言, 湖西方言, 湖南方言, 湖北方言

[中国地方] 岡山県備前方言

[四国地方] 高知県土佐方言

[九州地方] 熊本県北部方言, 佐賀県鳥栖市方言

また本研究では、各方言のアスペクト体系を統一的枠組みに基づいて網羅的に記述するために、次の基準を満たす若年層 (18-39 歳), 中年層 (40-69 歳), 高年層 (70 歳以上) の話者を方言 X のインフォーマントとし、方言 X につき各年齢層から 5 名ずつ

(計 15 名) のインフォーマントに対して、同様の質問項目を用いてインタビュー調査を行った。これにより、個別方言内におけるアスペクト体系の通時的バリエーションを捉えることが可能であると考えられる。

[1] 1～18 歳までを調査対象の方言区域内で生活した

[2] 方言区域外における外住歴が合計 5 年未満である

インタビュー調査では、各アスペクトと対応する個々の命題を合計 40 例ほど提示し、その命題において使用する形式を [-YORU, -TORU, -TERU, その他] の中から複数選択させ回答を得た。提示する命題の述語となる動詞は、金田一 (1950) や Vendler (1967) の動詞分類を参考に選定している。また、個々の命題においてニュートラルとして使用する形式やアスペクト以外の意味が含意されているか等についても詳細な回答を得た。インタビュー調査に用いた将然相、進行相、結果相に対応する命題の例を次に示す⁷。

[将然] 運動場へ行くと、スタートラインに立ち、手首足首を回す走る直前の A がいた

[選択肢] a. A が、走りヨル / b. A が、走っトル / c. A が、走っテル / d. その他 :

[進行] 運動場へ行くと、走っている最中の A がいた

[選択肢] a. A が、走りヨル / b. A が、走っトル / c. A が、走っテル / d. その他 :

[結果] 運動場へ行くと、既に 10 周走り終えた A が休憩していた

[選択肢] a. A が、走りヨル / b. A が、走っトル / c. A が、走っテル / d. その他 :

また本研究では、図 4 に示すように、方言 X の全体像 (母集団) は、方言 X を母語とする全年齢層の話者 (標本) によって特徴づけられると考える⁸。よって各方言のアスペクト体系の全体像を把握するためには、伝統方言の話者である高年層の方言データのみならず、中年層、若年層の方言データも共に分析対象とする必要がある。

⁷ 調査時間は 1 件につき約 3 時間程度である。調査時期はいずれも 2015-2020 年の間であるが、各方言に対して一定の調査期間を設けたわけではないため詳細を割愛する。また調査の実施場所についても多岐にわたるため詳細を割愛する。

⁸ 母集団と標本は集合と部分集合の関係にあり、標本には母集団の性質が反映されている。本研究における方言データの収集方法は、母集団から抽出した標本を分析することで母集団の性質を明らかにするという統計学の方法論 (標本調査) より着想を得ている。

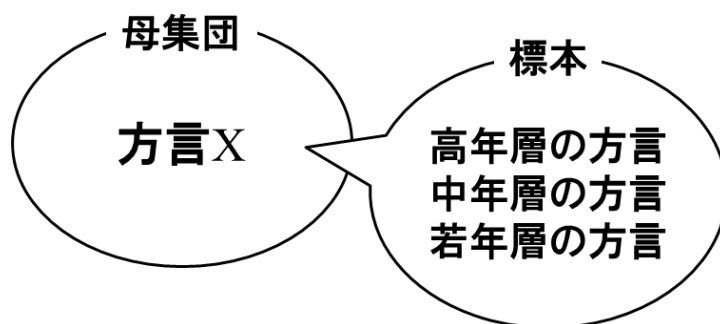


図4 方言 X と年齢層の関係

3. アスペクト体系の各記述

本節では、前述の方法論に基づいて収集した 12 の方言データの分析結果より、命題 X を中心としたアスペクト体系をタイプ別に提示する。例えば、方言 α のアスペクト体系が方言 β のアスペクト体系と同様である場合、方言 α と方言 β は Z タイプのアスペクト体系に属しているということである。各形式の標示するアスペクトについて、年齢層による差異が観察された場合は、補足的にその旨を報告する。

3.1. アスペクト体系 A タイプ

本節では、高知県土佐方言のデータより、アスペクト体系 A タイプを提示する。図 5 に示すように、本稿では、命題 X における非結果相を YORU で標示し、結果相を TORU で標示するというようなアスペクト体系のタイプを A タイプと呼ぶ。

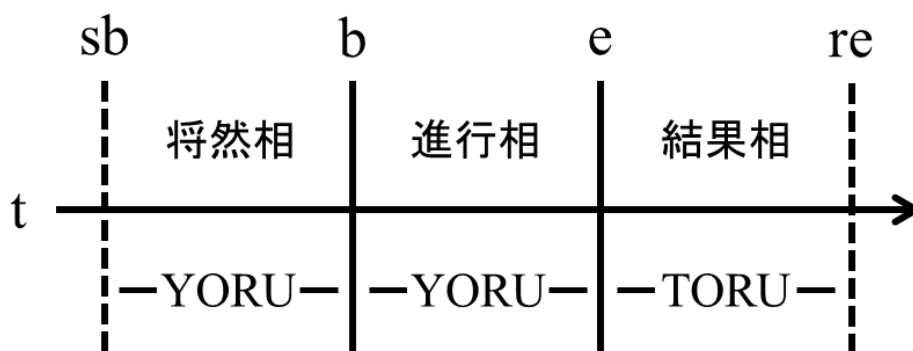


図5 アスペクト体系 A タイプ

図 5 より、A タイプの方言では、命題 X における将然相と進行相に YORU という 1 形式、結果相に TORU という 1 形式が対応しているため、2 形式の形態的な対立が非結果相と結果相のアスペクト対立に対応する。

次に、高知県土佐方言における用例を示す。(1)に示すように、YORU(-ju:)と TORU(-tcu:)が命題 X に生起する場合、YORU は将然相、進行相を標示し、TORU は結

果相を標示するという意味で、非結果相と結果相における両形式のAspect機能の対立が観察される。

- (1) a. 運動場へ行くと、スタートラインに立ち、手首足首を回す走る直前の A がいた
 A が 走りユ-/*走っチュー
 b. 運動場へ行くと、走っている最中の A がいた
 A が 走りユ-/*走っチュー
 c. 運動場へ行くと、既に 10 周走り終えた A が休憩していた
 A が 走っチュー/*走りユ-

「A が運動場を走る」という命題において、(1a)は、A が走る直前であることを標示する場合には YORU が選択されるということを示している。同様に(1b)は、A が走っている最中であることを標示する場合には YORU が選択されるということを示している。一方(1c)は、A が走り終えたことを標示する場合には TORU が選択されるということを示している。

最後に、命題 X における使用形式について、年齢層による大きな差異は観察されなかったが、(1a)においては、若年層では自然な表現として YORU を使用するのに対し、中年層、高年層では YORU を使用することに対する許容度が少し下がるという現象が観察された。

前述の高知県土佐方言が示す事実より、西日本諸方言には、図 5 に示すような A タイプのAspect体系が存在しているということが言える。本研究において報告可能な A タイプの方言は、現状では高知県土佐方言のみであるが、先行研究の記述を参考にすれば、他にも山口県周防大島方言（五十川 1984, 工藤 1999）が挙げられ、西日本諸方言の中でも明確なAspect機能の対立を持つごく少数の方言がこの A タイプに所属すると考えられる。また、前述の想定される 11 タイプのAspect体系のうち、タイプ 2 の体系が本事実により実証される。

3.2. Aspect体系 B タイプ

本節では、兵庫県神戸市方言のデータを中心に、Aspect体系 B タイプを提示する。図 6 に示すように、本稿では、命題 X における非結果相を YORU で標示し、進行相と結果相を TORU で標示するというようなAspect体系のタイプを B タイプと呼ぶ。

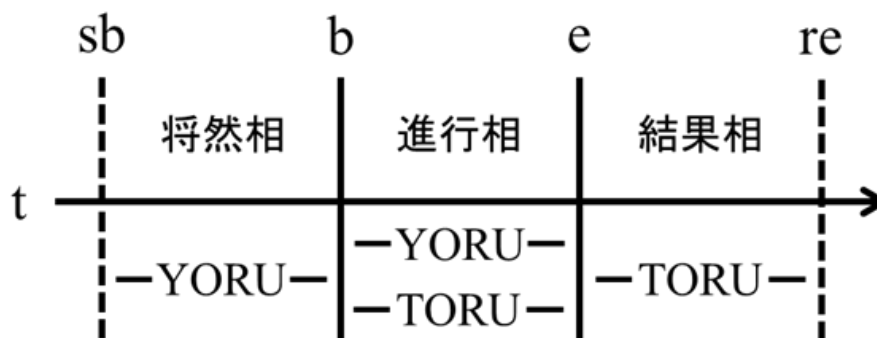


図6 アスペクト体系Bタイプ

図6より、Bタイプの方言では、命題Xにおける将来相にYORUという1形式、進行相にYORU、TORUという2形式、結果相にTORUという1形式が対応しているため、進行相においては2形式のアスペクト機能が重複する。

次に、兵庫県神戸市方言における用例を示す。(2)に示すように、YORU(-jo:)とTORU(-to:)が命題Xに生起する場合、YORUは将来相、進行相を標示し、TORUは進行相、結果相を標示するという意味で、進行相における両形式のアスペクト機能の重複が観察される。

- (2) a. 運動場へ行くと、スタートラインに立ち、手首足首を回す走る直前のAがいた
 Aが 走りヨ-/*走っト-
- b. 運動場へ行くと、走っている最中のAがいた
 Aが 走りヨ-/走っト-
- c. 運動場へ行くと、既に10周走り終えたAが休憩していた
 Aが 走っト-/*走りヨ-

「Aが運動場を走る」という命題において、(2a)は、Aが走る直前であることを標示する場合にはYORUが選択されるということを示している。しかし(2b)は、Aが走っている最中であることを標示する場合にはYORUとTORUの両形式が選択され得るということを示している。一方(2c)は、Aが走り終えたことを標示する場合にはTORUが選択されるということを示している。

最後に、命題Xにおける使用形式について、年齢層による大きな差異は観察されなかった。また(2b)においては、TORUの方がより使用頻度が高いという回答が複数得られた。

前述の兵庫県神戸市方言が示す事実より、西日本諸方言には、図6に示すようなBタイプのアスペクト体系が存在しているということが言える。本研究において報告可能なBタイプの方言は、現状では兵庫県神戸市方言の他に、熊本県北部方言、佐賀県

鳥栖市方言, 岐阜県飛騨方言である。また, 先行研究の記述を参考にすれば, 愛媛県宇和島方言 (工藤 1995), 福岡県福岡市方言 (平塚 2012), 山口県山口市方言 (津田 2014) など, 多くの西日本諸方言がこの B タイプに所属すると考えられる。また, 前述の想定される 11 タイプのアスペクト体系のうち, タイプ 5 の体系が本事実により実証される。

3.3. アスペクト体系 C タイプ

本節では, 岡山県備前方言のデータより, アスペクト体系 C タイプを提示する⁹。図 7 に示すように, 本稿では, 命題 X における非結果相を YORU と TORU で標示し, 結果相を TORU で標示するというようなアスペクト体系のタイプを C タイプと呼ぶ。

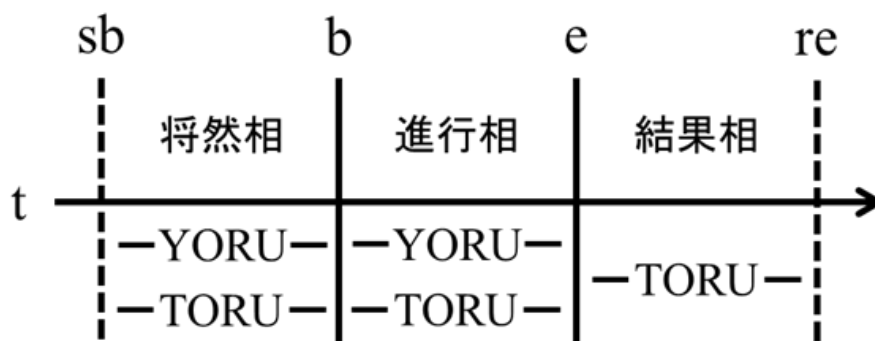


図 7 アスペクト体系 C タイプ

図 7 より, C タイプの方言では, 命題 X における将然相に YORU, TORU という 2 形式, 進行相に YORU, TORU という 2 形式, 結果相に TORU という 1 形式が対応しているため, 将然相, 進行相においては 2 形式のアスペクト機能が重複する。

次に, 岡山県備前方言における用例を示す。(3)に示すように, YORU(-jo:ru)と TORU(-toru)が命題 X に生起する場合, YORU は将然相, 進行相を標示し, TORU は将然相, 進行相, 結果相を標示するという意味で, 将然相, 進行相における両形式のアスペクト機能の重複が観察される。

⁹ 岡山県備前方言は筆者の母語である。客観的に岡山県備前方言を記述するため, インフォーマントに筆者は含まれていないが, 本稿において報告する岡山県備前方言の事実と筆者の内省はすべて一致するものである。岡山県備前方言の詳細については鴨井 (2017)を参照されたい。

- (3) a. 運動場へ行くと、スタートラインに立ち、手首足首を回す走る直前の A がいた
 A が 走りヨール/走っトル
 b. 運動場へ行くと、走っている最中の A がいた
 A が 走りヨール/走っトル
 c. 運動場へ行くと、既に 10 周走り終えた A が休憩していた
 A が 走っトル/*走りヨール

「A が運動場を走る」という命題において、(3a)は、A が走る直前であることを標示する場合には YORU と TORU の両形式が選択され得るということを示している。同様に (3b)は、A が走っている最中であることを標示する場合には YORU と TORU の両形式が選択され得るということを示している。一方(3c)は、A が走り終えたことを標示する場合には TORU が選択されるということを示している。

最後に、命題 X における使用形式について、(3a)、(3b)では、YORU の方がより使用頻度が高いという回答が複数得られた。また、(3a)における TORU の使用は若年層では顕著に観察されたが、高年層では一切観察されなかった。一方、(3b)における TORU の使用は非高年層（若年層と中年層）で顕著に観察され、高年層では TORU を使用することに対する許容度が少し下がるという揺れが観察された。つまり、岡山県備前方言では、非高年層のアスペクト体系 C タイプと図 8 に示すような高年層のアスペクト体系 C'タイプが共存しているということであり、C'タイプ>C タイプへの通時的変化が明確に観察される。

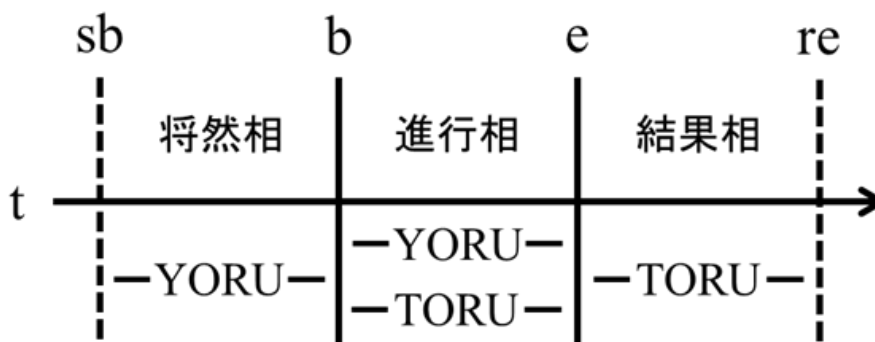


図 8 アスペクト体系 C'タイプ

さらに、岡山県備前方言の高年層における用例を示す。

- (4) a. 運動場へ行くと、スタートラインに立ち、手首足首を回す走る直前の A がいた
A が 走りヨール/*走っトル
- b. 運動場へ行くと、走っている最中の A がいた
A が 走りヨール/走っトル
- c. 運動場へ行くと、既に 10 周走り終えた A が休憩していた
A が 走っトル/*走りヨール

図 8 及び(4)より、C タイプは前述の B タイプと同様のアスペクト体系であることが分かる。よって詳細は割愛するが、C タイプと B タイプの関係性については、各アスペクト体系を比較対照する第 4 節において後述する。

前述の岡山県備前方言が示す事実より、西日本諸方言には、図 7 に示すような C タイプのアスペクト体系が存在しているということが言える。本稿において報告可能な C タイプの方言は、現状では岡山県備前方言のみであり、従来の研究においてもこの C タイプに所属するような方言は報告されていない¹⁰。また、前述の想定される 11 タイプのアスペクト体系のうち、タイプ 8 の体系が本事実により実証される。

3.4. アスペクト体系 D タイプ

本節では、京都府京都市方言のデータを中心に、アスペクト体系 D タイプを提示する。図 9 に示すように、本稿では、命題 X における将然相を YORU、動詞現在形-ルで標示し、進行相、結果相を TORU、TERU で標示するというようなアスペクト体系のタイプを D タイプと呼ぶ¹¹。

¹⁰ 将然相における TORU の使用について、命題 X の将然相では観察されるが、命題 Y の将然相では観察されない現象である。この事実より、岡山県備前方言では、将然相と結果相の間には明確な参照点をとるが、将然相と進行相の間には明確な参照点をとらないということが示唆される。しかし本稿では、これについての詳細な議論を割愛し、A タイプ、B タイプの方言では、命題 X の将然相における TORU の使用が非文法的であると見なされるのに対し、岡山県備前方言では文法的であると見なされるという相違点が生じた事実を重視する。

¹¹ 本稿の議論の中心は YORU、TORU、TERU であるが、A-C タイプの方言は、将然相における主な使用形式が YORU であるのに対し、D タイプと後述する E タイプの方言は、将然相における主な使用形式が標準語と同様、動詞現在形-ルであるという特徴を持つため、D、E タイプにおいては YORU、TORU、TERU に-ルを加えてアスペクト体系を記述する。

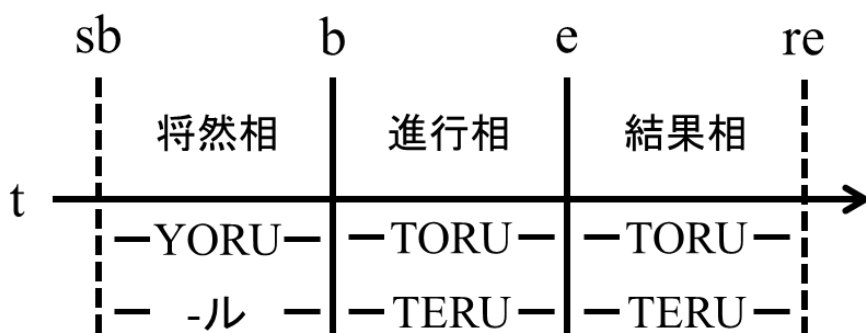


図9 アスペクト体系Dタイプ

図9より、Dタイプの方言では、命題Xにおける将然相にYORU、-ルという2形式、進行相にTORU、TERUという2形式、結果相にTORU、TERUという2形式が対応しているため、いずれのアスペクトにおいても2形式のアスペクト機能が重複する。

次に、京都府京都市方言における用例を示す。(5)に示すように、YORU(-joru)、-ル、TORU(-toru)、TERU(-teru)が命題Xに生起する場合、YORU、-ルは将然相を標示し、TORU、TERUは進行相、結果相を標示するという意味で、いずれのアスペクトにおいても2形式のアスペクト機能の重複が観察される。

- (5) a. 運動場へ行くと、スタートラインに立ち、手首足首を回す走る直前のAがいた
 Aが 走る/走りヨル/*走っトル/*走っテル
 b. 運動場へ行くと、走っている最中のAがいた
 Aが 走っトル/走っテル/*走る/*走りヨル
 c. 運動場へ行くと、既に10周走り終えたAが休憩していた
 Aが 走っトル/走っテル/*走る/*走りヨル

「Aが運動場を走る」という命題において、(5a)は、Aが走る直前であることを標示する場合にはYORUと-ルの両形式が選択され得るということを示している。一方、(5b)は、Aが走っている最中であることを標示する場合にはTORUとTERUの両形式が選択され得るということを示している。同様に(5c)は、Aが走り終えたことを標示する場合にはTORUとTERUの両形式が選択され得るということを示している。

最後に、命題Xにおける使用形式について、年齢層による大きな差異は観察されなかった。また(5a)では、アスペクトから見れば-ル、YORUのいずれも文法的であるが、話し手の態度から見れば-ルはニュートラル、YORUは不満や軽蔑を表すという現象が観察された。さらに、(5b)、(5c)では、アスペクトから見ればTORU、TERUのいずれも文法的であるが、話し手の態度から見ればTERUはニュートラル、TORUは不

満や軽蔑を表すという現象が観察された¹²。

前述の京都府京都市方言が示す事実より、西日本諸方言には、図 9 に示すような D タイプのアスペクト体系が存在しているということが言える。本研究において報告可能な D タイプの方言は、現状では京都府京都市方言の他に、滋賀県湖東方言、滋賀県湖西方言、滋賀県湖南方言、滋賀県湖北方言である。また、井上 (1998) の記述を参考にすれば、西日本諸方言の中でも近畿方言の多くがこの D タイプに所属すると考えられる¹³。また、前述の想定される 11 タイプのアスペクト体系のうち、タイプ 3 の体系が本事実により実証される。

3.5. アスペクト体系 E タイプ

本節では、岐阜県美濃方言のデータを中心に、アスペクト体系 E タイプを提示する。図 10 に示すように、本稿では、命題 X における将然相を動詞現在形-ルで標示し、進行相、結果相を TORU で標示するというようなアスペクト体系のタイプを E タイプと呼ぶ。

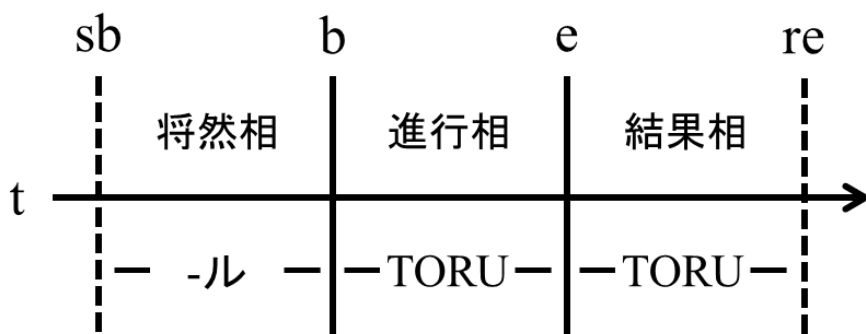


図 10 アスペクト体系 E タイプ

¹² アスペクト形式がアスペクト以外の意味を担う現象については、井上 (1998) や工藤 (2014) でも報告されており、本調査においても、京都府京都市方言を含め、いくつかの個別方言でこの現象を観察した。本稿ではアスペクトのみを対象として議論を進めるが、この現象の解明は本研究の今後の課題である。

¹³ 井上 (1998) や工藤 (2014) の指摘によれば、近畿方言で観察される YORU は、アスペクトを標示するためのアスペクト形式ではなく、話し手の卑罵的態度を標示するための下位待遇形式である。しかし、YORU と待遇的に対立する上位待遇形式の-ハルがアスペクトに関わらず生起可能であるのに対し (e.g. 走らハル, 走ってハル), YORU は進行相と結果相には生起できないという制約がかかっている (e.g. *走ってヨル)。この事実より、近畿方言の YORU を完全な待遇形式と見なすのではなく、あくまで将然相を標示する際に使用される形式として分析し、タイプ D のようなアスペクト体系を仮定する必要があると考える。また本稿では、非過去形を中心に議論しているが、YORU のタ形である-ヨッタが、A-C タイプの方言では「～していた/～するところだった」という意味を標示するのに対し、D タイプの方言では「～した (～しやがった)」という意味を標示するという点で大きな相違点があるため、タ形を含む議論は本研究の今後の課題である。

図 10 より、E タイプの方言では、命題 X における将然相に -ル という 1 形式、進行相に TORU という 1 形式、結果相に TORU という 1 形式が対応する。

次に、岐阜県美濃方言における用例を示す。(6)に示すように、-ル、TORU(-toru)が命題 X に生起する場合、-ルは将然相を標示し、TORU は進行相、結果相を標示するという意味で、将然相と非将然相（進行相と結果相）における両形式のアスペクト機能の対立が観察される。

- (6) a. 運動場へ行くと、スタートラインに立ち、手首足首を回す走る直前の A がいた
 A が 走る/*走っトル
 b. 運動場へ行くと、走っている最中の A がいた
 A が 走っトル/*走る
 c. 運動場へ行くと、既に 10 周走り終えた A が休憩していた
 A が 走っトル/*走る

「A が運動場を走る」という命題において、(6a)は、A が走る直前であることを標示する場合には -ル が選択されるということを示している。一方、(6b)は、A が走っている最中であることを標示する場合には TORU が選択されるということを示している。同様に(6c)は、A が走り終えたことを標示する場合には TORU が選択されるということを示している。

最後に、命題 X における使用形式について、年齢層による大きな差異は観察されなかった。

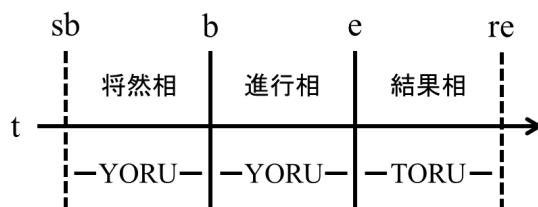
前述の岐阜県美濃方言が示す事実より、西日本諸方言には、図 10 に示すような E タイプのアスペクト体系が存在しているということが言える。本研究において報告可能な E タイプの方言は、現状では岐阜県美濃方言のみであるが、先行研究の記述を参考にすれば、三重県鈴鹿市白子方言（佐藤 1994）、石川県石川郡美川町方言（江端 1994）など、近畿地方以東のいくつかの方言がこの E タイプに所属すると考えられる¹⁴。また、京都府京都市方言の事実と同様、前述の想定される 11 タイプのアスペクト体系のうち、タイプ 3 の体系が本事実によっても実証される。

¹⁴ 工藤 (2014)の記述を参考にすれば、島根県平田方言におけるアスペクト形式は TORU のみであるため、YORU を持たない E タイプの方言は近畿地方以西でも観察される可能性がある。これについては、島根方言を含め、引き続き本研究の研究方法に基づいて調査を行い、アスペクト体系を記述する。また、太田 (1994)の記述を参考にすれば、愛知県名古屋市方言におけるアスペクト形式では、基本的である TORU に加え TERU も使用されているため、図 9 の進行相と結果相に TERU を加えたタイプの方言も存在することが考えられる。これについても、愛知方言を含め、引き続き本研究の研究方法に基づいて調査を行い、アスペクト体系を記述する。

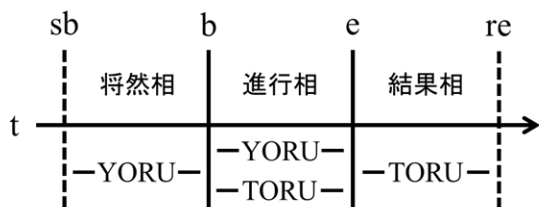
4. アスペクト体系の比較対照

本節では、統一的枠組みに基づいて記述した5タイプのアスペクト体系の比較対照より、西日本諸方言のバリエーションを考察する。5タイプ全てを図11にまとめる。

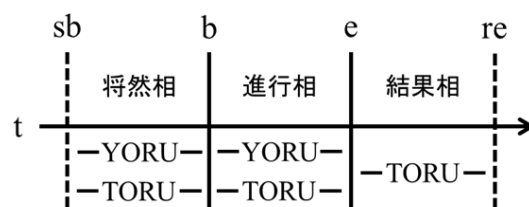
【Aタイプ】



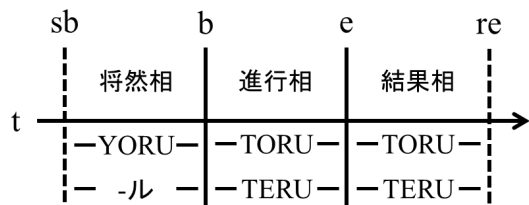
【Bタイプ】



【Cタイプ】



【Dタイプ】



【Eタイプ】

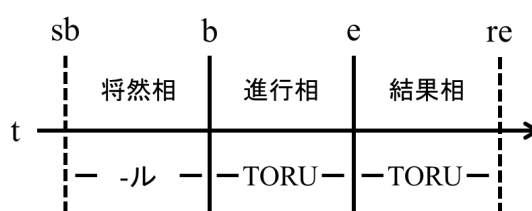


図11 西日本諸方言における5タイプのアスペクト体系

前述の想定される11タイプのアスペクト体系より、形式aとしてYORU、形式bとしてTORUを持つタイプのアスペクト体系に着目すれば、次のような通時的変化のプロセスを提案することができる。

図11より、実際に観察された5タイプのアスペクト体系には、命題Xにおける結果相をTORUで標示するという共通点が観察される。この事実より、西日本諸方言におけるTORUという形式は、元来、Aタイプの方言のように、結果相を標示するためのアスペクト形式であったということが推測される。このことは、形態素の-te-を介する形式(e.g. テアル, テシマウ)が結果の局面を標示することからも推測できる。

また図11より、TORUが元来は結果相を標示するためのアスペクト形式であったと仮定すると、Aタイプの方言を通時的変化の起点に、TORUは結果相>進行相を標示するように意味拡張するという一方向性が観察される。この事実より、多くの西日本諸

方言が所属する B タイプの方言は、少なくとも A タイプ>B タイプの体系変化を遂げてきたと考えられる。同様に、TORU の一方向的な意味拡張から考えれば、C タイプの方言は、A タイプ>B タイプ>C タイプの体系変化を遂げてきたと考えられる¹⁵。このことは、A, B, C タイプの方言における YORU は、非結果相は標示するが、結果相は標示しないという共通点を持っていることから支持される。

最後に図 11 より、5 タイプのアスペクト体系からは、命題 X における非結果相を標示する形式として YORU が生起可能かどうかという点において相違点が観察される。これについて、A, B, C タイプの方言は生起可能であるのに対し、D タイプは将然相のみ、E タイプは生起不可能である。それと並行して、D, E タイプからは、非将然相を標示する形式として TORU が生起可能であるという共通点が観察される。この事実より、多くの西日本諸方言が所属する A, B, C タイプの方言は、非結果相と結果相のアスペクト対立を区別するのに対し、近畿地方以東の方言が所属する D, E タイプの方言は、非将然相と将然相のアスペクト対立を区別するということが考えられる。これについてはさらに網羅的に方言データを収集し、検討する必要がある。

5. おわりに

本稿では、YORU, TORU, TERU を中心に、西日本諸方言におけるアスペクト体系をタイプ別に記述し、現状観察される 5 タイプのアスペクト体系の比較対照により、西日本諸方言のアスペクト体系におけるバリエーションの在り方について考察した。現状では、5 タイプのアスペクト体系が存在しており、アスペクト対立の参照点によっては 2 タイプに大別できると考えられる。近畿地方以西の諸方言が非結果相と結果相のアスペクト対立を区別し、近畿地方以東の諸方言が非将然相と将然相のアスペクト対立を区別しているとする、言語地理学的にも分析を行う必要がある。

最後に、平松 (2017)によれば、奈良県吉野郡天川村洞川方言の YORU は結果相に生起するという現象が報告されているが、同方言に対する筆者の現地調査では、YORU が結果相に生起するという現象は一切観察されなかった¹⁶。しかし、平松 (2017)の報告を考慮し、当該の方言を調査対象として、他の方言と同様、統一的枠組みに基づいたアスペクト体系の記述を行う必要があると考える。今後、観察される個別方言のアスペクト体系によって、西日本諸方言のアスペクト体系がさらに豊富なバリエーションを示すのかについては、引き続き網羅的に記述を続ける。

¹⁵ タイプ C に所属する前述の岡山県備前方言からは、高年層のアスペクト体系タイプ C'>非高年層のアスペクト体系タイプ C という通時的変化が観察された。タイプ C'=タイプ B であるため、タイプ B>タイプ C という体系変化のプロセスは、岡山県備前方言内の通時的変化からも支持される。

¹⁶ 若年層、中年層、高年層から各 2 名の天川村洞川方言母語話者に対して行った調査結果による。

参考文献

- 江端義夫 (1994) 「石川県石川郡美川町方言のAspect」『方言資料叢刊』 4: 79-86.
- 平松美奈 (2017) 「奈良県南部地域方言のシヨル系・シトル系を用いたAspect体系—吉野郡天川村洞川を中心に—」『日本方言研究会第 105 回研究発表会発表原稿集』 (金沢歌劇座 2017 年 11 月 10 日) .
- 平塚雄亮 (2012) 「福岡市方言のAspectマーカにみられる言語変化」『阪大日本語研究』 24: 55-74.
- 五十川緑 (1984) 「周防大島における「シヨール」と「シチヨール」の用法」『国文学 解釈と鑑賞』 49(1): 118-127. 東京: 至文堂.
- 井上文子 (1998) 『日本語方言Aspectの動態—存在型表現形式に焦点をあてて—』 東京: 秋山書店.
- 鴨井修平 (2017) 「方言データから見る持続形式の意味拡張—岡山方言を中心に—」同志社大学大学院文化情報学研究科修士論文.
- 金田一春彦 (1950) 「国語動詞の一分類」『言語研究』 15: 48-63. (金田一春彦 (編) (1976) 『日本語動詞のAspect』 5-26. 東京: むぎ書房に再録) .
- 国立国語研究所 (編) (1999) 『方言文法全国地図 第 4 集 表現法編 1』 東京: 財務省印刷局.
- 工藤真由美 (1995) 『Aspect・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』 東京: ひつじ書房.
- 工藤真由美 (1999) 「西日本諸方言におけるAspect対立の動態」『阪大日本語研究』 11: 1-17.
- 工藤真由美 (2014) 『現代日本語ムード・テンス・Aspect論』 東京: ひつじ書房.
- 丹羽一彌 (2005) 『日本語動詞述語の構造』 東京: 笠間書院.
- 太田有多子 (1994) 「愛知県名古屋方言のAspect」『方言資料叢刊』 4: 135-146.
- 佐藤虎男 (1994) 「三重県鈴鹿市白子方言のAspect」『方言資料叢刊』 4: 147-156.
- 津田智史 (2014) 「方言Aspectを再考する—山口市方言のヨル・トルの表す意味—」『地域言語』 22: 1-16.
- Vendler, Zeno (1967) *Linguistics in Philosophy*. New York: Cornell University Press.

謝辞

本稿を執筆するにあたり、セリック・ケナン氏、外賀葵氏より多くの有益な助言を賜りました。また筆者の指導教員である沈力先生、千田俊太郎先生をはじめとする言語記述研究会の皆様より本研究への重要なご指摘を賜りました。そして多くの各方言母語話者の方々が本調査に快く協力してくださいました。ここに記して心より感謝いたします。

受理日 2020 年 4 月 15 日

言語記述論集 第12号

言語記述研究会

2020年4月30日発行

ISSN 2432-244X